

## 【目次】

第1章 事業の概要	2
1-1 事業名	2
1-2 事業の概要	2
1-3 事業の実施期間	2
1-4 今年度の主な取り組み概要	2
1-5 事業の実施体制	3
第2章 『学びのセーフティーネット』機能に関する実態調査	5
2-1 令和元年度の実態調査に向けて	5
2-2 実態調査アンケート実施状況	7
2-3 実態調査アンケート集計結果	8
I. 就学支援金支給状況・授業料減免・家庭環境・不登校生徒・発達障がい等のある生徒	8
II. 不登校生徒の現状について	14
III. インクルーシブ教育について	15
IV. カウンセリング研修及びカウンセラーの配置等について	16
V. 行政や地域との連携について	19
VI. 学びのセーフティーネット機能の充実強化について	22
VII. 教員の働き方改革について	23
VIII. 自己評価	24
IX. 教育活動情報の公開	28
X. 学校関係者評価	29
2-4 令和元年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」分析と考察	32
I. 高等専修学校におけるインクルーシブ教育と不登校改善の関係	32
II. 『高等専修学校の4つの特徴』から見たアンケート結果の分析と考察	38
第3章 地域振興分科会による地域連携委員会の実施	44
3-1 地域連携委員会のイメージ（東京都の取り組みを例に）	44
3-2 北海道（担当校：北見商科高等専修学校）	45
3-3 茨城県（担当校：細谷高等専修学校）	49
3-4 東京都（担当校：東放学園高等専修学校）	60
3-5 神奈川県【担当校：岩谷学園高等専修学校】	69
3-6 愛知県【担当校：安城生活福祉高等専修学校】	84
3-7 徳島県【担当校：龍昇経理情報専門学校】	93
3-8 山口県【担当校：立修館高等専修学校】	104
3-9 佐賀県【担当校：佐賀星生学園】	114
【参考資料】東京都 高等専修学校認知度アンケート集計結果報告	123
第4章 まとめと最終年度へ向けて	124

# 第1章 事業の概要

## 1-1 事業名

2019年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

学びのセーフティネット機能の充実強化 高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

『高等専修学校の機能高度化に関する調査研究』

## 1-2 事業の概要

全国の高等専修学校では、不登校、高校中退、発達障害のある生徒等の多様な個性の生徒を多数受け入れ、職業教育、更には献身的な生徒指導、人間教育を通して、多くの生徒に目標を獲得させ、企業等実社会、高等教育機関へと送り出しています。

しかし、その教育環境には、様々な問題点が存在し、決して十分な環境下で教育が展開されている訳ではありません。また、地方と都市部では、その問題点には違いがあり、全国すべての高等専修学校がそれぞれ何らかの問題点を抱えながら、教育を継続させているのが実態であります。

特別な支援を必要とする生徒が多く在籍する高等専修学校においては、厳しい経営環境の中で限られた教職員による指導により、教職員の負担が非常に増大している現状にあります。地域での有効なネットワーク作りは、その解決に向けた一助になり、教職員の負担に関する実態を把握し職場環境の改善に努めることは、学びのセーフティネット機能の充実強化を実現するために欠かせない教員の質の向上にも必要不可欠な事項であると考えます。

本事業では、高等専修学校の学びのセーフティネットの現状と課題を精査し、地域差、更には全国共通の課題を明確にし、課題を克服することにより、高等専修学校の機能高度化を目指したいと考えます。

## 1-3 事業の実施期間

令和元年6月28日 ～ 令和2年3月1日

## 1-4 今年度の主な取り組み概要

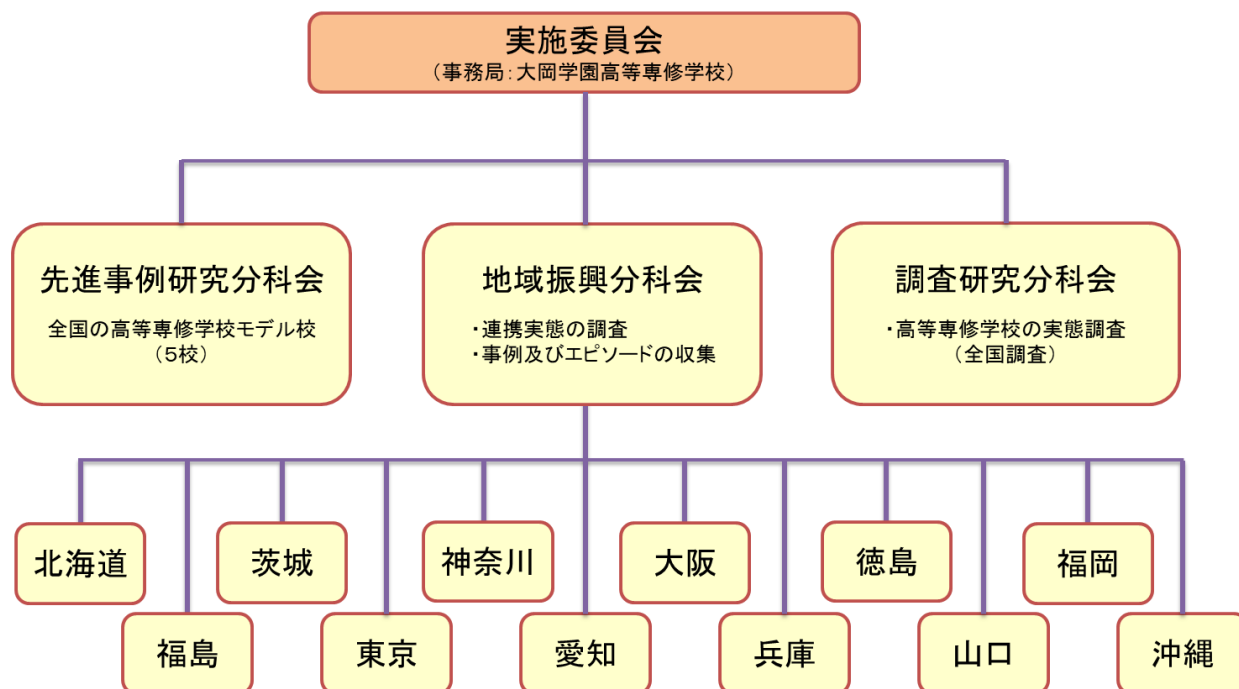
①令和元年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」の実施

- ・全国高等専修学校協会会員校（186校）へアンケート用紙を配布し実施。
- ・調査結果に関する分析と考察をまとめ、報告書を作成。

②地域振興分科会による地域連携委員会の実施

- ・各地域（全国12カ所対象）における地域連携の現状を調査。

## 1-5 事業の実施体制



実施委員会

	氏名	所属	職名	都道府県名
1	清水 信一	全国高等専修学校協会 会長	総括	東京都
2	大岡 豊	大岡学園高等専修学校 理事長	委員長	兵庫県
3	岡部 隆男	郡山学院高等専修学校 理事長	委員	福島県
4	谷 誠	東放学園高等専修学校 理事	委員	東京都
5	関谷 豊	立修館高等専修学校 理事長	委員	山口県
6	柏尾 典秀	北見商科高等専門学校 理事長	委員	北海道
7	細谷 祥之	細谷高等専修学校 事務長	委員	茨城県
8	長森 修三	野田鎌田学園高等専修学校	委員	千葉県
9	福田 潤	東京表現高等学院 MIICA 校長	委員	東京都
10	岩谷 大介	岩谷学園高等専修学校 理事長	委員	神奈川県
11	山岸 建文	豊野高等専修学校 理事長	委員	長野県
12	笹田 栄一	デザインテクノロジー専門学校	委員	静岡県
13	前川 悟	大阪技能専門学校 理事長	委員	大阪府
14	久次米 健一	専修学校龍昇経理情報専門学校 理事長	委員	徳島県
15	角田 朋史	福岡有朋高等専修学校 学校長	委員	福岡県
16	大竹 嘉明	大竹高等専修学校 教諭	委員	東京都

地域振興分科会

	氏名	所属	職名	都道府県名
1	関谷 豊	立修館高等専修学校 理事長	委員長	山口県
2	谷 誠	東放学園高等専修学校 理事	副委員長	東京都

3	柏尾 典秀	北見商科高等専門学校 理事長	委員	北海道
4	細谷 祥之	細谷高等専修学校 事務長	委員	茨城県
5	岩谷 大介	岩谷学園高等専修学校 理事長	委員	神奈川県
6	前川 悟	大阪技能専門学校 理事長	委員	大阪府
7	久次米 健一	専修学校龍昇経理情報専門学校 理事長	委員	徳島県
8	角田 朋史	福岡有朋高等専修学校 学校長	委員	福岡県
9	畑 修	磐城学芸専門学校 理事長	委員	福島県
10	石川 正剛	大育高等専修学校 学園本部長	委員	沖縄県
11	宮治 友也	安城生活福祉高等専修学校 企画部長	委員	愛知県
12	小寺 克一	近畿情報高等専修学校 理事長	委員	大阪府

#### 調査研究分科会

	氏名	所属	職名	都道府県名
1	清水 信一	全国高等専修学校協会 会長	委員長	東京都
2	岡部 隆男	郡山学院高等専修学校 理事長	副委員長	福島県
3	細谷 祥之	細谷高等専修学校 事務長	委員	茨城県
4	福田 潤	東京表現高等学院 MIICA 校長	委員	東京都
5	岩谷 大介	岩谷学園高等専修学校 理事長	委員	神奈川県
6	笹田 栄一	デザインテクノロジー専門学校	委員	静岡県
7	前川 悟	大阪技能専門学校 理事長	委員	大阪府
8	大竹 嘉明	大竹高等専修学校 教諭	委員	東京都
9	大前 繁明	猪名川甲英高等学院 理事長	委員	兵庫県
10	小川 明治	名古屋工学院専門学校 理事長	委員	愛知県
11	堀居 英治	NPO 法人高等専修教育支援協会 理事長	委員	東京都
12	計野 浩一郎	武蔵野東教育センター 所長	委員	東京都
13	吉本 圭一	九州大学人間環境学研究院教育学部門 教授	委員	福岡県
14	稲永 由紀	筑波大学大学研究センター 講師	委員	東京都
15	古田 克利	関西外国語大学英語キャリア学部	委員	大阪府

#### 先進事例研究分科会

	氏名	所属	職名	都道府県名
1	大岡 豊	大岡学園高等専修学校 理事長	委員長	兵庫県
2	渡辺 正司	武蔵野東高等専修学校 校長	副委員長	東京都
3	山岸 建文	豊野高等専修学校 理事長	委員	長野県
4	前川 悟	大阪技能専門学校 理事長	委員	大阪府
5	今村 岳司	猪名川甲英高等学院 文科省委託事業総合 ディレクター	委員	兵庫県
6	堀 糧成	野田鎌田学園高等専修学校 校長	委員	東京都

## 第2章 『学びのセーフティネット』機能に関する実態調査

### 2-1 令和元年度の実態調査に向けて

2年目となる本事業では、昨年度に引き続き全国の高等専修学校の『学びのセーフティネット』機能の実態を把握し、課題点等を抽出することを目的に、「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」を実施した。今年度実施にあたり、昨年度の実態調査結果を踏まえ、専門家の意見を取り入れながら質問の問い方や内容を変えたり、新たな項目を追加したりと、より具体的な実態・エピソードが明らかになる内容へとブラッシュアップを行った。

アンケートの作り方として、やはり普通高校との違いを抽出することを論点に考え、単なる違いを聞くだけの設問か、高等専修学校の特色を抽出しながら違いを見出す設問か、効果的なものを検討した。

普通高校と比較して高等専修学校の特徴としてまず出てくるのは、『インクルーシブ教育』である。この特徴に関する設問としては、昨年度アンケートの結果で出てきた具体例のうち、共通したものを抽出し、上位5つほどを選び、選択して答えてもらう方法を採用した。

また、中学生時代に『不登校を経験した生徒』が、高等専修学校に入学後にどうなったかということ（不登校経験生徒の改善率を調べるための設問）や、卒業後の進路の様子も踏まえた改善の様子などに焦点を当て、不登校経験の生徒に対する具体的な支援策を記入いただく項目も追加した。

さらに継続調査の『カウンセラー』との連携に関する設問も、カウンセリング研修など学校内部での取り組みについての設問を最初に、外部との設問を後に変更した。普通高校等のように、スクールカウンセラーを設置できている高等専修学校は少なく、その現状を把握するためにも必要である。

以上のような検討を踏まえ、昨年度のアンケートデータをもとに、設問の編成を以下の通り変更した。昨年度調査項目の『Ⅱ.自己評価』～『Ⅳ.学校関係者評価』までを後半の設問に、今年度のアンケート調査の特徴である、高等専修学校を特徴付けるキーワード『不登校対策』・『インクルーシブ教育』・『カウンセラー』については、新設された不登校に関する設問はⅡへ、インクルーシブ教育についてはⅢへ、カウンセラーの配置と育成についてはⅣへ移動とした。また、『インターンシップなど地域と連携した教育について』はⅤへ、『学びのセーフティネット機能の充実強化について』はⅥへ、『教員の働き方改革について』Ⅶへと移動になった。一方、昨年度まで設置していた『学校安全等』に関しては、大きく変化もないことから削除された。

**令和元年度 調査項目**

- I. 就学支援金支給状況・授業料減免・家庭環境・不登校生徒・発達障がいのある生徒
- II. 不登校生徒の現状について
- III. インクルーシブ教育について
- IV. カウンセリング研修及びカウンセラーの配置等について
- V. 行政や地域との連携について
- VI. 学びのセーフティネット機能の充実強化について
- VII. 教員の働き方改革について
- VIII. 自己評価
- IX. 教育活動情報の公開
- X. 学校関係者評価

大田学園高等専修学校

## 【参考：学びのセーフティネット機能の充実強化のために取り組むべき具体案】

- 高等専修学校卒業予定者の求人確保。（ハローワークとの連携強化）
  - ・求人確保のための工夫や連携のノウハウを調査。
  - ・企業側からの要望やアプローチに対する対応法。
  - ・継続的な求人の確保につながる取り組み、事例収集。
  - ・業界側が主体となって作成した、求人につながる企業実習（インターンシップ・デュアルシステム）のノウハウの研究。
  - ・業界への認知度向上のための取り組み事例調査。
- 卒業生の再就職支援。（動向調査の実施）
  - ・アフターフォローの実態調査（再就職支援）。
  - ・卒業生の追跡調査（定着率・離職率の割り出し）。
  - ・卒業生の学び直しについての環境整備（専修学校やポリテクセンターの活用）
- 適材適所を見極める教員研修。（職業教育に対する意識・認識の強化）
  - ・進路指導の実態。
  - ・生徒の特性を見抜くカウンセリング力の強化とそのノウハウ。
- 修学支援策として経済的支援の在り方を検討。（インクルーシブ教育システムの実現）
  - ・家庭状況の把握のための実態調査。状況に応じた支援法の検討。
  - ・奨学金支給（利用）の実態。または独自の支援制度（授業料軽減制度等）の有無。
  - ・実際の支援方法を公開。事例収集。
- 地域との繋がりを構築する。（コミュニティでPR 活動を実施）
  - ・各地域の中学校校長会や進路指導研究会との連携状況の確認。
  - ・地域コミュニティとの連携の実態調査と事例の収集
- 高等専修学校の自由度を生かした教育の質保証。（社会の人材ニーズ、学習ニーズに対応）
  - ・各地域の高等専修学校の特色ある取り組みの事例収集。
  - ・インクルーシブ教育の実態と事例の収集。
  - ・社会的認知度の向上と魅力発信の方法検討
  - ・職業教育の成果と効果のまとめ（例：高等専修学校卒業生の活躍事例の収集）
- アクティブラーニングの観点から教育課程の再編成を実施。（学習成果の保証）
  - ・特色ある授業の実施報告と事例の収集。
  - ・高等専修学校独自の学習評価基準の策定。
- カウンセラーの配置と育成。（きめ細かな個人にあったメンタルヘルス支援）
  - ・外部カウンセラーとの連携の実態調査。
  - ・教員のカウンセリング力向上のための職員研修。
- 教育委員会や行政との連携事例の収集。
  - ・学びへの支援、サポート及び、経済的支援の拡充。
- 学びのセーフティネット機能の充実強化により増加する『教員の負担』の軽減につながる方策検討
  - ・生徒一人一人に目が届くよう、業務内容の見直しと役割の分業化。

## 2-2 実態調査アンケート実施状況

アンケートの実施状況については以下の通りである。

**令和元年度高等専修学校の実態に関する  
アンケート調査実施概要**

- **実施期間** 令和元年10月25日～11月22日
- **対 象** 全国高等専修学校協会会員校186校
- **方 法** アンケート用紙の郵送・FAX返信
- **回収率** 54.8%（有効回答数：102校）

【参考】昨年度回収率：57.6%

大田学園高等専修学校

## 2-3 実態調査アンケート集計結果

- ・調査期間：令和元年10月25日～11月22日
- ・調査対象：全国高等専修学校協会会員校186校に調査票を郵送。102校から回答（回収率54.8%）

### I. 就学支援金支給状況・授業料減免・家庭環境・不登校生徒・発達障がい等のある生徒

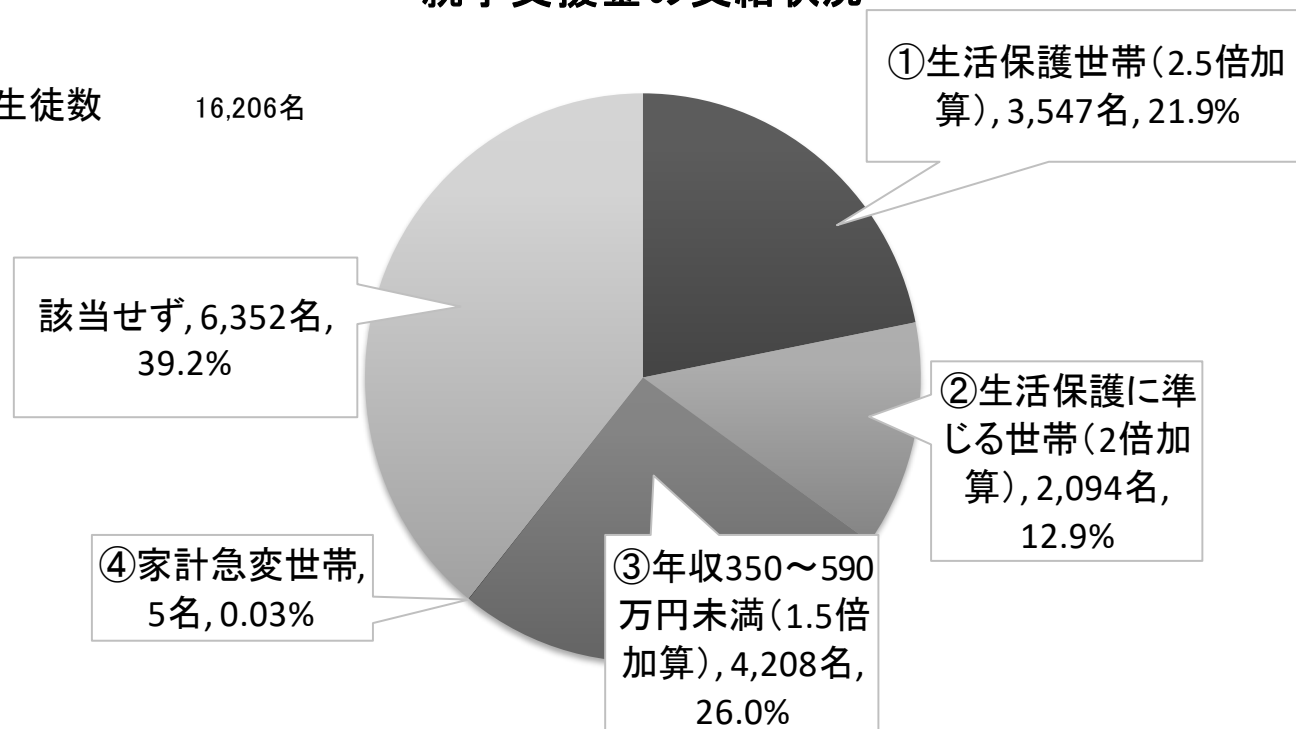
問1. 貴校の就学支援金の支給状況について、該当する生徒数を記入してください。

生徒数	①生活保護世帯（2.5倍加算）	②生活保護に準じる世帯（2倍加算）	③年収350～590万円未満（1.5倍加算）	④家計急変世帯	該当せず	⑤私立高等学校等奨学給付金
16,206名	3,547名	2,094名	4,208名	5名	6,352名	3,179名
	21.9%	12.9%	26.0%	0.03%	39.2%	19.6%

### 就学支援金の支給状況

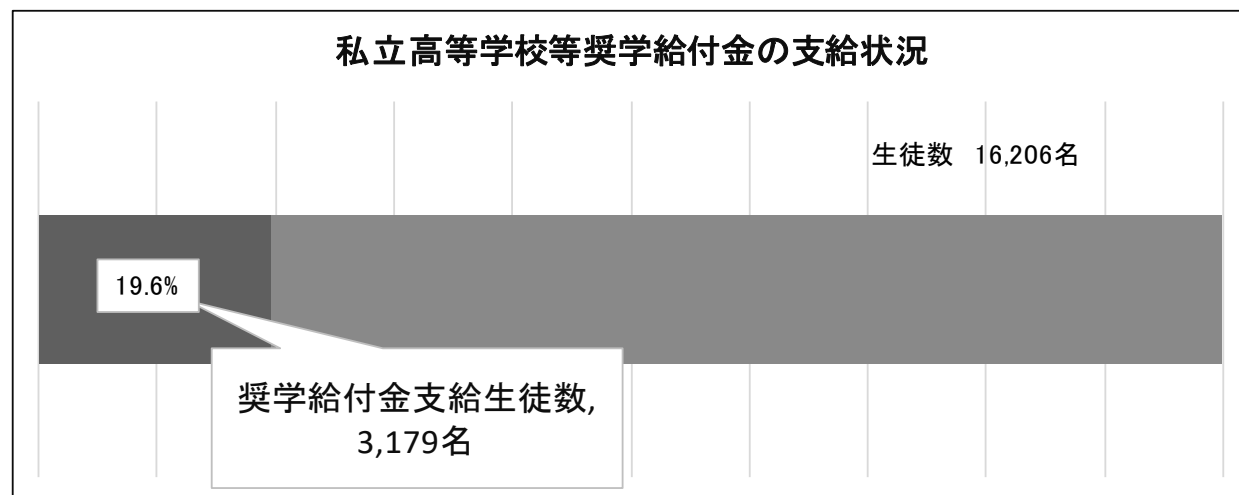
生徒数

16,206名



### 私立高等学校等奨学給付金の支給状況

生徒数 16,206名



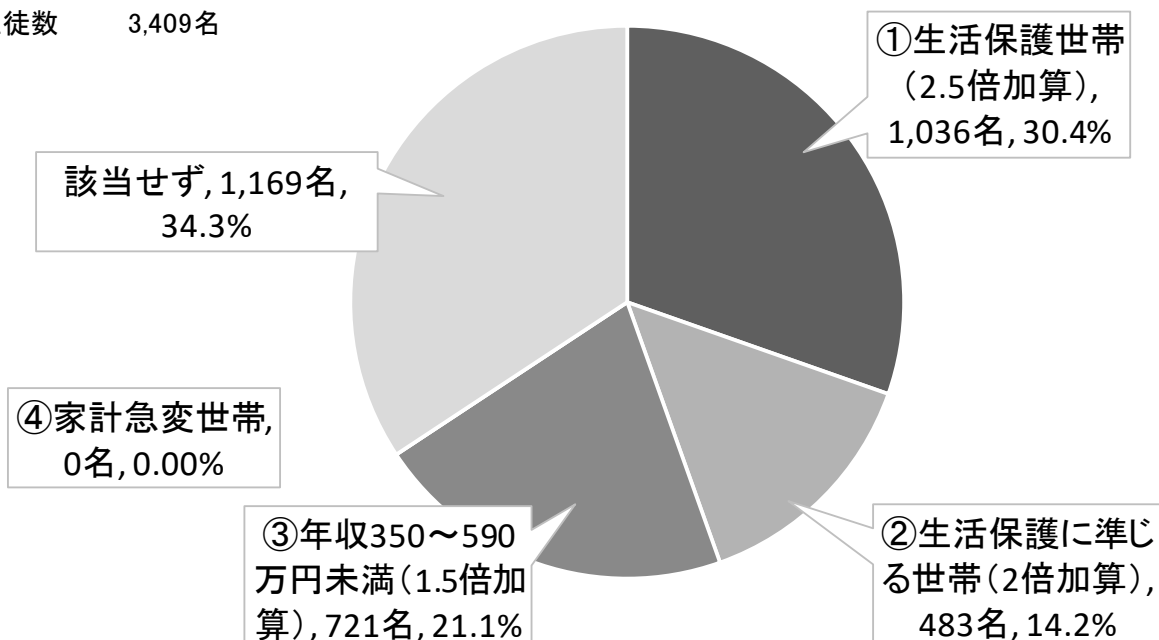


〈参考：大阪府 14校 生徒数 3,409名〉

生徒数	①生活保護世帯（2.5倍加算）	②生活保護に準じる世帯（2倍加算）	③年収350～590万円未満（1.5倍加算）	④家計急変世帯	該当せず	⑤私立高等学校等奨学給付金
3,409名	1,036名	483名	721名	0名	1,169名	988名
	30.4%	14.2%	21.1%	0.00%	34.3%	29.0%

### 大阪府の就学支援金の支給状況

生徒数 3,409名

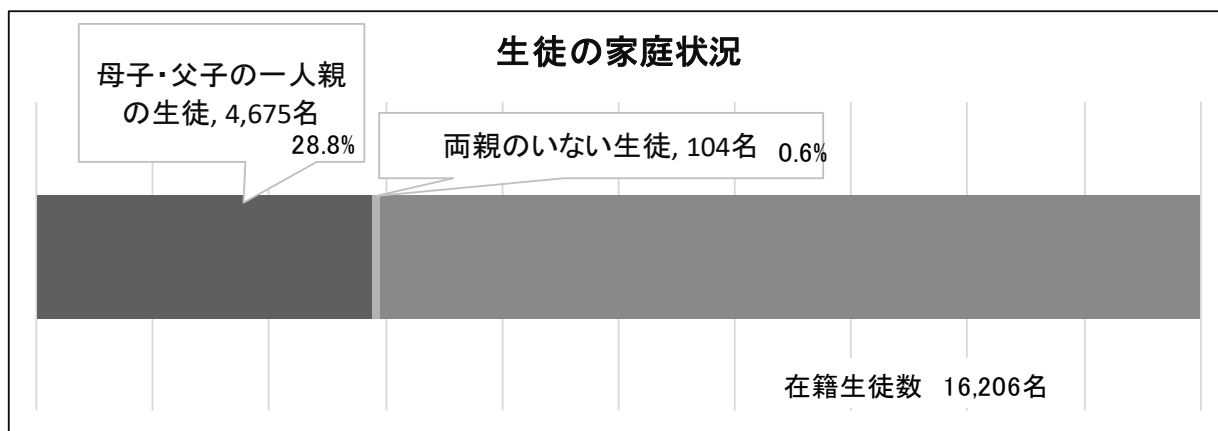


問2. 貴校の都道府県における独自の授業料減免補助制度について、お答えください。年額で最大（生活保護世帯など）いくら減免（軽減）されていますか。

最大の減免額（年額）	都道府県独自の授業料減免（軽減）はない
兵庫県＝940,500円、広島県＝550,800円、大阪府＝588,000円、神奈川県＝337,200円、東京都＝456,000円、千葉県＝417,800円、愛知県＝375,600円、福島県＝288,000円（被災543,895円）、長野県＝39,000円、北海道＝84,000円、山口県＝59,400円、山形県＝99,000円、福井県＝501,338円、茨城県＝161,400円、徳島県＝122,400円、熊本県＝297,000円	群馬県、岐阜県、岡山県、静岡県、埼玉県、福岡県、鹿児島県、岩手県、鳥取県、佐賀県、宮崎県、沖縄県  (無回答＝奈良県)

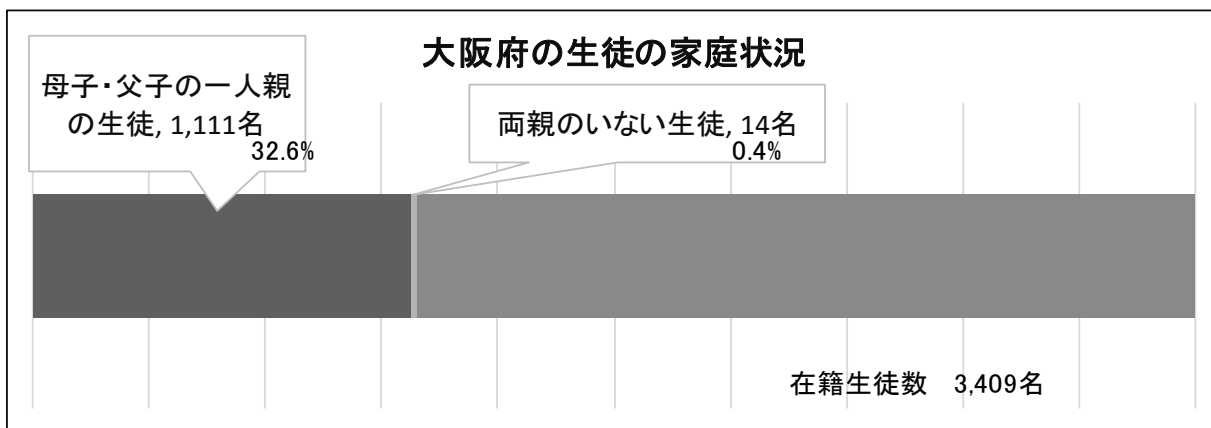
問3. 生徒の家庭の状況をご記入ください。

在籍生徒数	母子・父子の 一人親の生徒 数	両親のいない 生徒数
16,206名	4,675名	104名
	28.8%	0.6%



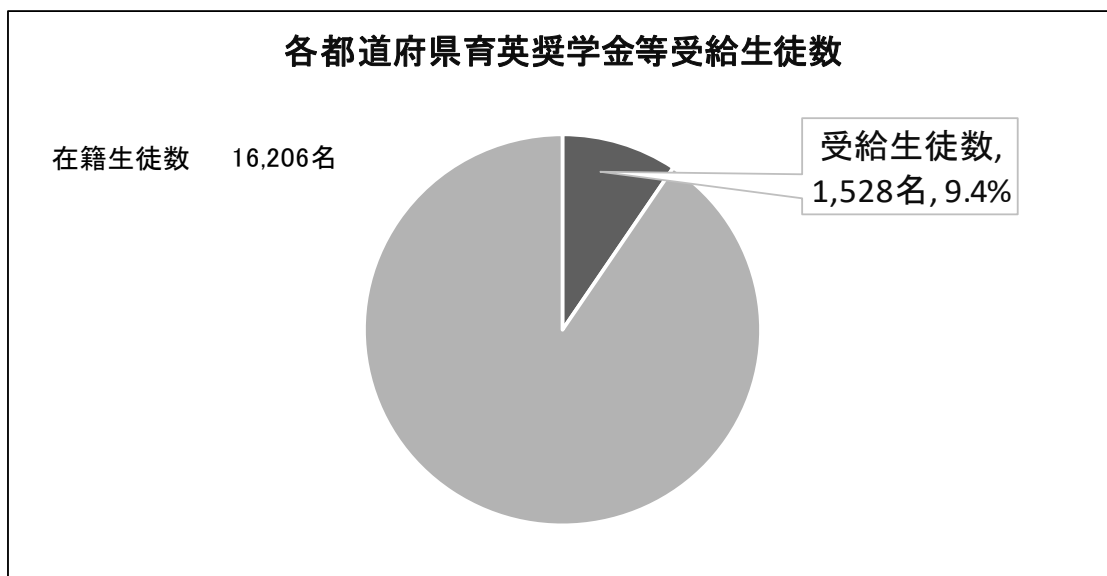
〈参考:大阪府 14校 生徒数 3,409名〉

在籍生徒数	母子・父子の 一人親の生徒 数	両親のいない 生徒数
3,409名	1,111名	14名
	32.6%	0.4%



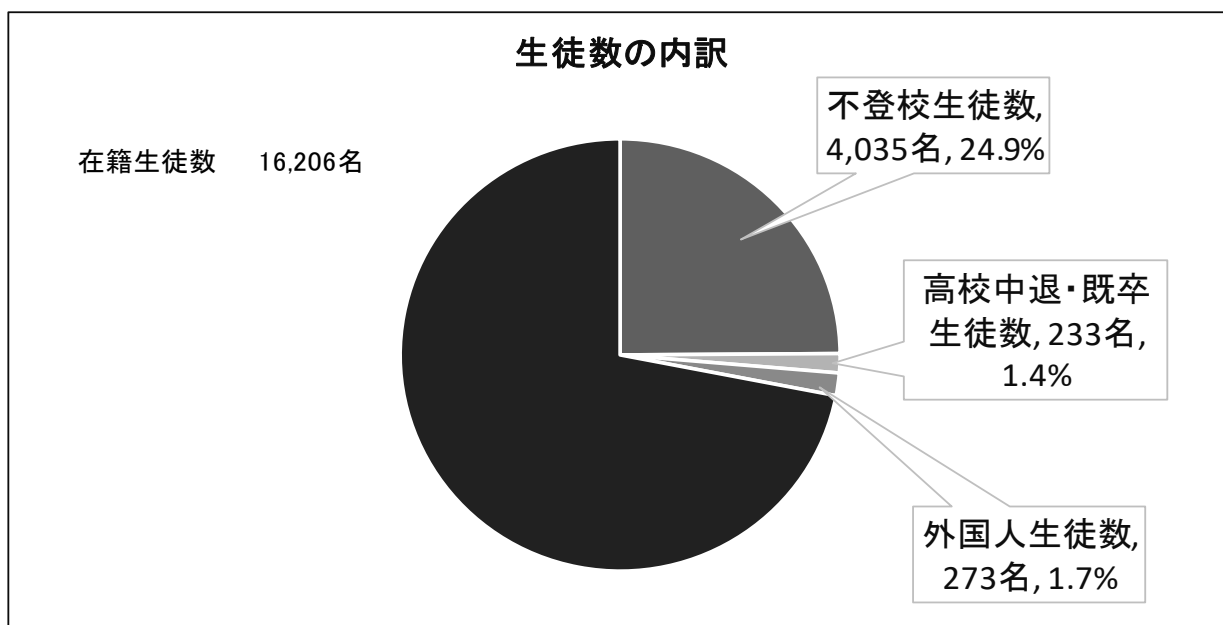
問4. 貴校の各都道府県育英奨学金等を受給している生徒数をご記入ください。

在籍生徒数	受給生徒数	他
16,206名	1,528名	14,678名
	9.4%	90.6%



問5. 貴校に在籍する生徒数の内訳について、不登校生徒数および高校中退・既卒の生徒数ならびに在日外国人生徒数も含め、お答えください。

在籍生徒数	不登校生徒数	高校中退・既卒生徒数	外国人生徒数	他
16,206名	4,035名	233名	273名	11,665名
	24.9%	1.4%	1.7%	72.0%

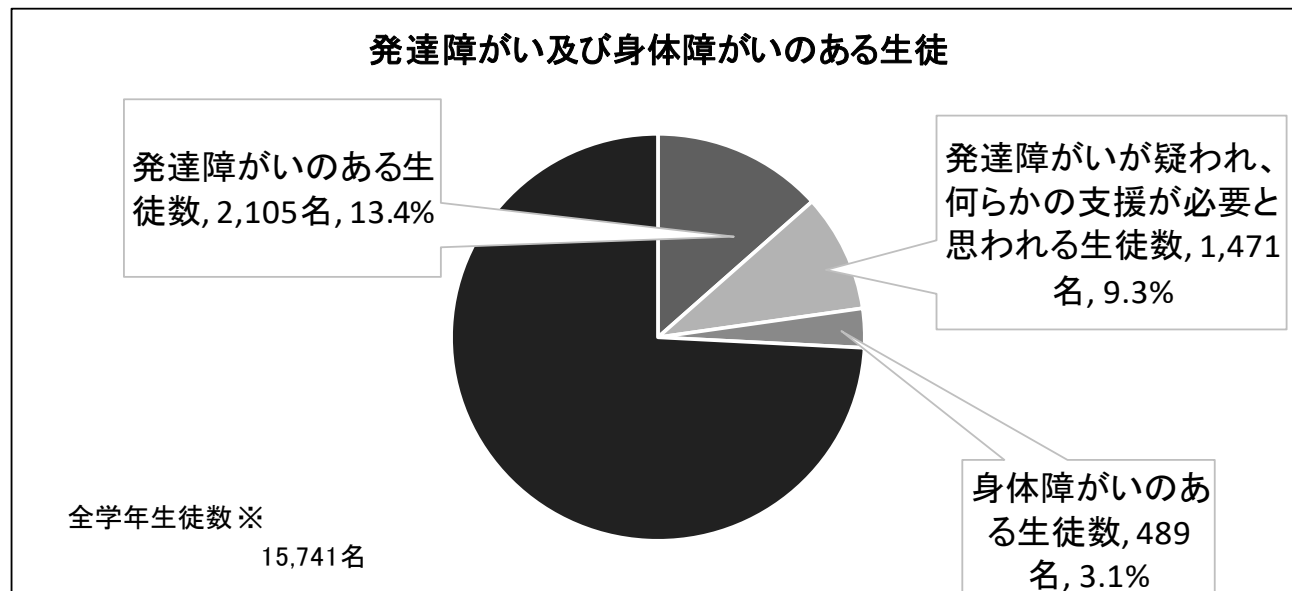


〈参考:過去の調査結果〉

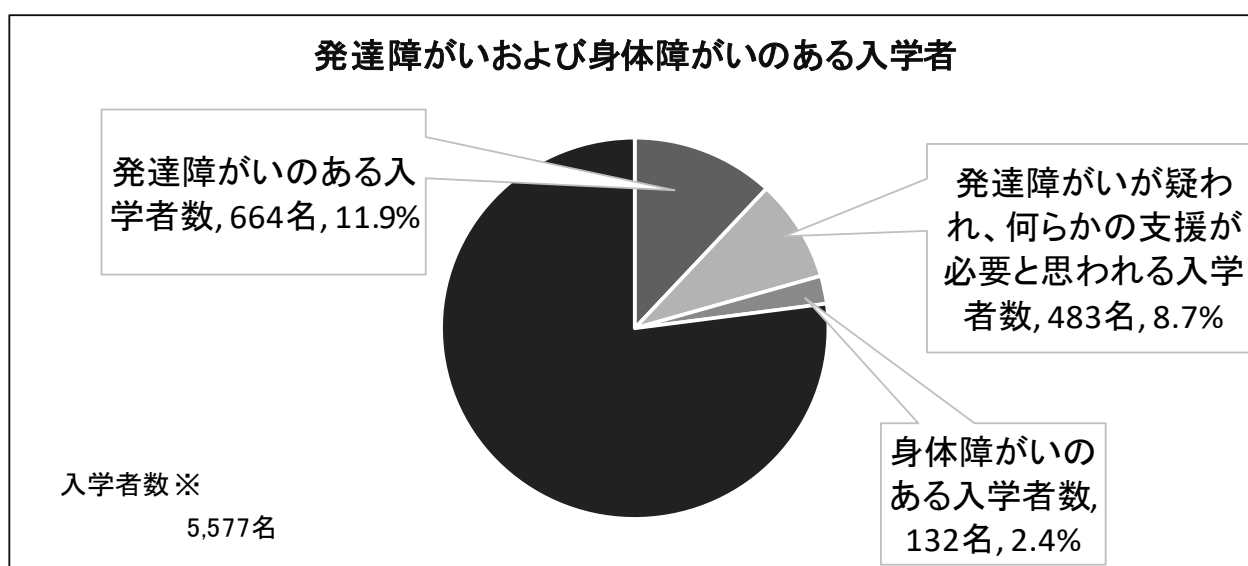
調査年度	在籍生徒数	不登校生徒数	高校中退・既卒生徒数	外国人生徒数
平成29年度	17,052名	3,689名	324名	329名
		21.6%	1.9%	1.9%
平成30年度	17,009名	3,606名	229名	328名
		21.2%	1.3%	1.9%

問6. 発達障がい及び身体障がいのある生徒数について、お答えください。

全学年生徒数※	発達障がいのある生徒数	発達障がい疑われ、何らかの支援が必要と思われる生徒数	身体障がいのある生徒数	他	※障がいのある生徒数を集計していない学校の生徒を除く
15,741名	2,105名	1,471名	489名	11,676名	
	13.4%	9.3%	3.1%	74.2%	



平成31年度入学者数※	発達障がいのある入学者数	発達障がい疑われ、何らかの支援が必要と思われる入学者数	身体障がいのある入学者数	他	※障がいのある生徒数を集計していない学校の入学者を除く
5,577名	664名	483名	132名	4,298名	
	11.9%	8.7%	2.4%	77.1%	



- 全国で76校の高等専修学校で発達障がいのある生徒が在籍。回答校の74.5%に該当。
- 受け入れている学校では1校あたり平均で28.1人を受け入れている。都道府県別では愛知県13校、大阪府11校、兵庫県7校、福島県6校、東京都・静岡県が各5校、神奈川県・広島県が各3校、北海道・山形県・茨城県・佐賀県が各2校、福岡県・長野県・群馬県・千葉県・埼玉県・福井県・鳥取県・岡山

県・山口県・徳島県・宮崎県・熊本県・鹿児島県・沖縄県が各1校受け入れている。

- 全国で46校の高等専修学校で身体障がいのある生徒が在籍。回答校の45.1%に該当。
- 受け入れている学校では1校あたり平均で10.9人を受け入れている。都道府県別では愛知県12校、大阪府9校、静岡県・兵庫県が各3校、東京都・神奈川県・広島県が各2校、北海道・山形県・福島県・長野県・茨城県・千葉県・徳島県・山口県・宮崎県・熊本県が各1校受け入れている。

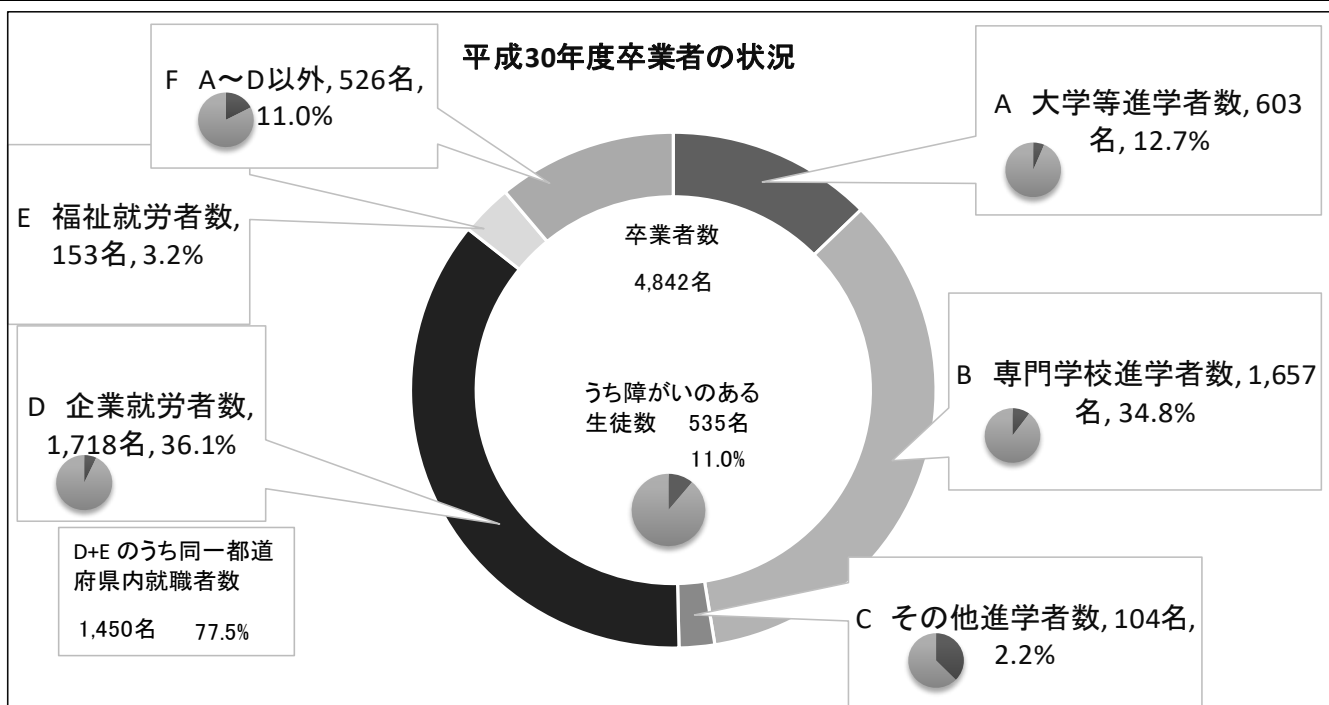
〈参考:過去の調査結果〉

調査年度	全学年生徒数	発達障がいのある生徒数	支援必要生徒数	身体障がいのある生徒数
平成29年度	17,147名	1,563名	1,056名	445名
		9.1%	6.2%	2.6%
平成30年度	17,009名	1,521名	1,266名	385名
		8.9%	7.4%	2.3%

調査年度	入学者数	発達障がいのある入学者数	支援必要入学者数	身体障がいのある入学者数
平成29年度	6,224名	503名	397名	161名
		8.1%	6.4%	2.6%
平成30年度	6,155名	595名	542名	136名
		9.7%	8.8%	2.2%

問7. 貴校の平成30年度における卒業者の状況についてお答えください。

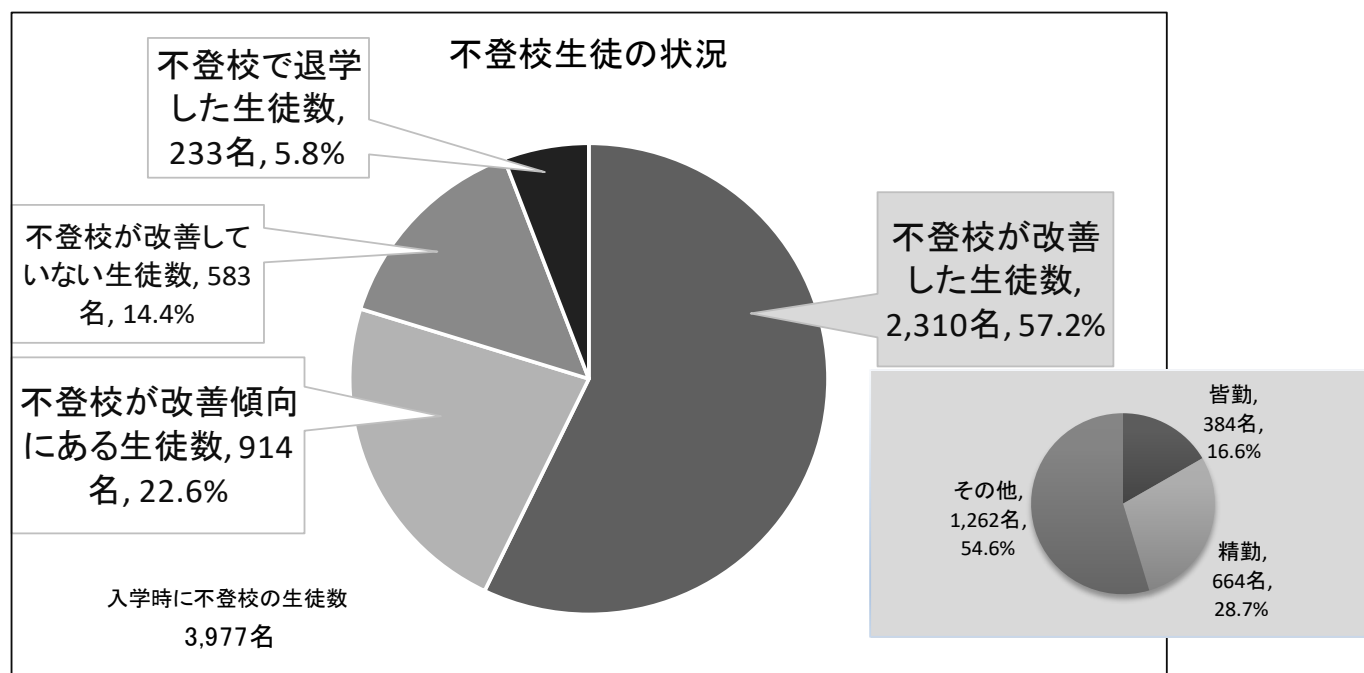
平成30年度卒業生数計	A 大学等進学者数	B 専門学校進学者数	C その他進学者数	D 企業就労者数	E 福祉就労者数	Eのうち同一都道府県内就職者数	F A~D以外
4,842名	603名	1,657名	104名	1,718名	153名	1,450名	526名
	12.5%	34.2%	2.1%	35.5%	3.2%	77.5%	10.9%
うち障がいのある生徒数	535名	39名	170名	39名	122名		92名
	11.0%	6.5%	10.3%	37.5%	7.1%		17.5%



## Ⅱ. 不登校生徒の現状について

問 8. 不登校生徒の状況について、お答えください。

入学時に不登校の生徒数	不登校が改善した生徒数			不登校が改善傾向にある生徒数	不登校が改善していない生徒数	不登校で退学した生徒数
3,977名	2,310名			914名	583名	233名
	58.1%					
	皆勤	精勤	その他	23.0%	14.7%	5.9%
	384名	664名	1,262名			
	16.6%	28.7%	54.6%			



問 9. 不登校生徒に対する具体的な改善策をご記入ください。

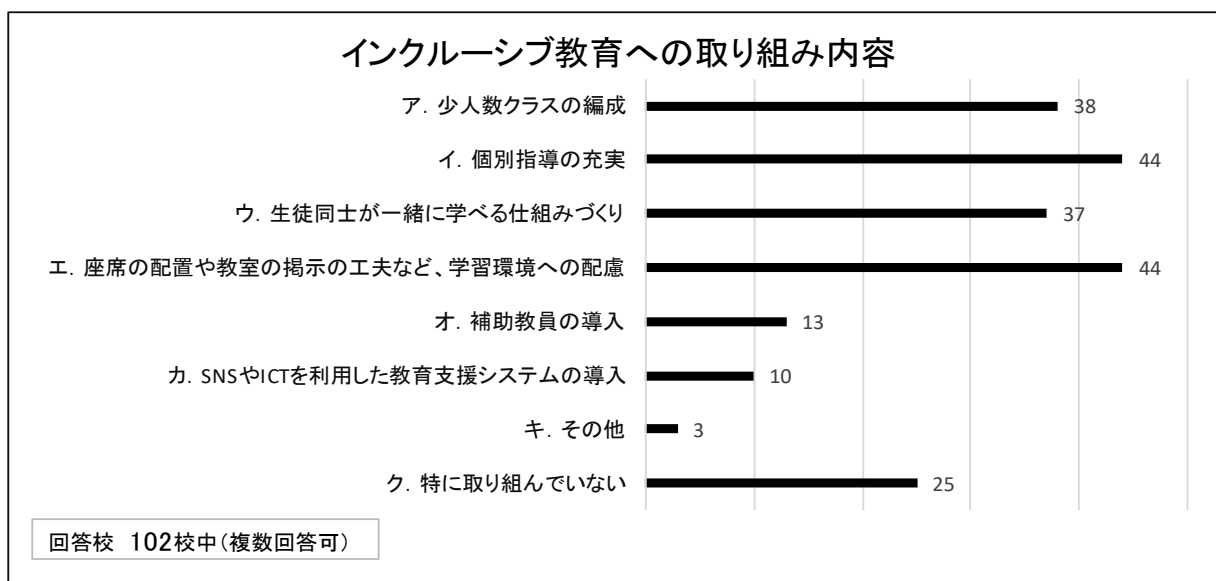
4月と10月の年2回個人面談を実施。生活アンケートを年2回実施 / 昼食時に担任が教室で一緒に昼食をとるなど常に担任が身近にいる / 心理士を常駐 / 別室の活用 / 家庭訪問 / 保護者に来校してもらい、出席状況等を話している / 保護者の教育力が低く、家庭での指導は期待できない。本人の自覚を促すことにより、進級・卒業を目標に指導している / 一人ひとりを大切に、きめ細やかな指導を進めている / 本人、保護者との話し合いを密に行う / わかりやすい授業、仲の良い友達、アットホームな学校によって学校生活が楽しいと思えること / 入学前の中学校、保護者、学校との教育活動(入学前教育) / こまめな声かけと保護者との連携 / 褒める / できるだけ待つ / なるべく本人に働きかける / とにかく「待つ」ことも重要 / できる課題からクリアさせ自信をつけさせる / カウンセリング / 個別指導 / 居場所作り / 補習期間を長めに設定する / 安心して登校できる環境づくり(他人の苦手・弱さを認め受け入れる環境) / 生活全般に目標を持たせる / 学年ごとに始業式で皆勤賞・精勤賞対象生徒を表彰 / 毎年二者面談を2回、三者面談を1回実施(欠席10日を超えた生徒を三者面談) / インクルーシブ教育による効果 / 教員間の連携 / 訪問指導、宿泊指導 / 担任・カウンセラー・家庭との連携をし、共通認識で支援している / 特にないが学習内容が本人の学習意欲につながり登校が少しずつでもできるようになっている / 国家資格を取得する学校であることを説明 / 登校の必要性の説明 / ホームルーム編成において不登校生徒を同じクラスの所属にする(学級での不安を軽減し適応を図るため) / 入学前、入学後も連絡等を絡めた目標設定を行う

ことで、登校へのモチベーション向上へ繋げるようにしている / 高校では欠席が多ければ進級・卒業できないことや、進学・就職の時も不利となることを、常日頃から伝え指導する / 人物重視の募集活動をして、不登校でも過ごしやすい環境を整えている / 一人一人に合った登校支援サポート / 早期対策として新入生一泊合宿や夏のキャンプを設定し学校生活への安定化を図っている / 常に学校内の雰囲気を知る醸成し、学力不振生徒にも習熟度別授業や補習等で対応している / 本人の長所を認めそれを伸ばすよう指導する / 個別面談の時間を取ることで悩み・不満の解消に努めた / 部活で発表の場を設けることで目標を設定し意欲を高める / 本人、保護者、医療機関、療育機関、不登校ひきこもり支援のNPO団体などの情報共有と連携した生徒指導 / 個人別出席カードを作成し、学校及び個人が出席状況を相互に把握、その上で生徒及び保護者と学校間で個別対応 / 生徒同士で声をかけていくよう促す / 登校していなくても毎日連絡を取り、電話で声をかける / 安全を感じられる教室空間づくり (SSTによる集団育成) / 明確な手続きによって担保される移動の自由、導線づくり / 自らの状況を電話連絡できるようになるスキルづくり / 指導者は生徒同士を仲良くさせようとし、認められる部分から互いにできることを見つけ実行することに注力する / 校則は有るが、範囲内で自由である / 基本的には入試の時点で、本校で不登校が改善する見込みのある生徒に合格を出している / 今年度開校したばかりで在校数も少ない。よって生徒一人一人へ目が行き届き易くなっている。不登校生徒が出すシグナルの早期発見につとめるよう、意識をしている / 公認心理師資格、社会福祉士資格を取得した教員が各2名ずついる。他、7名の教員が高校免許のほか特別支援教諭の資格を有している(高校教員免許は20名の教員全員が取得)

### Ⅲ. インクルーシブ教育について

問 10. インクルーシブ教育への取り組みについて、貴校が行なっている内容を選択してください。

ア. 少人数クラスの編成	38	37.3%
イ. 個別指導の充実	44	43.1%
ウ. 生徒同士と一緒に学べる仕組みづくり	37	36.3%
エ. 座席の配置や教室の掲示の工夫など、学習環境への配慮	44	43.1%
オ. 補助教員の導入	13	12.7%
カ. SNSやICTを利用した教育支援システムの導入	10	9.8%
キ. その他	3	2.9%
ク. 特に取り組んでいない	25	24.5%

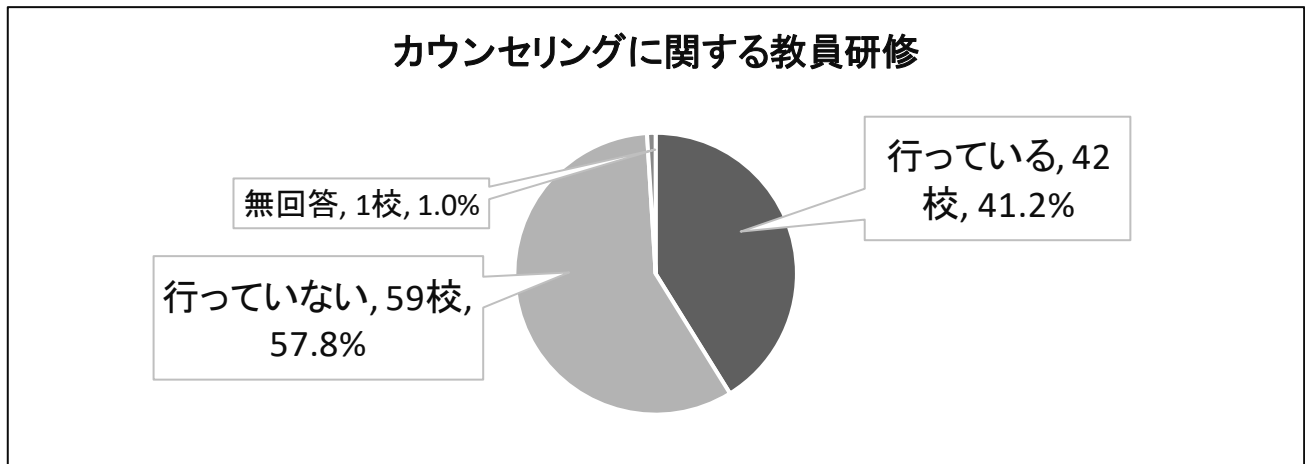


その他＝担任による家庭連絡の充実 / バディ教育（健常児と障害児がペアを組んで学校生活の様々な活動に取り組む） / 「サポートシート」で全校生徒の特性や所見を情報共有し、指導に活用する

#### IV. カウンセリング研修及びカウンセラーの配置等について

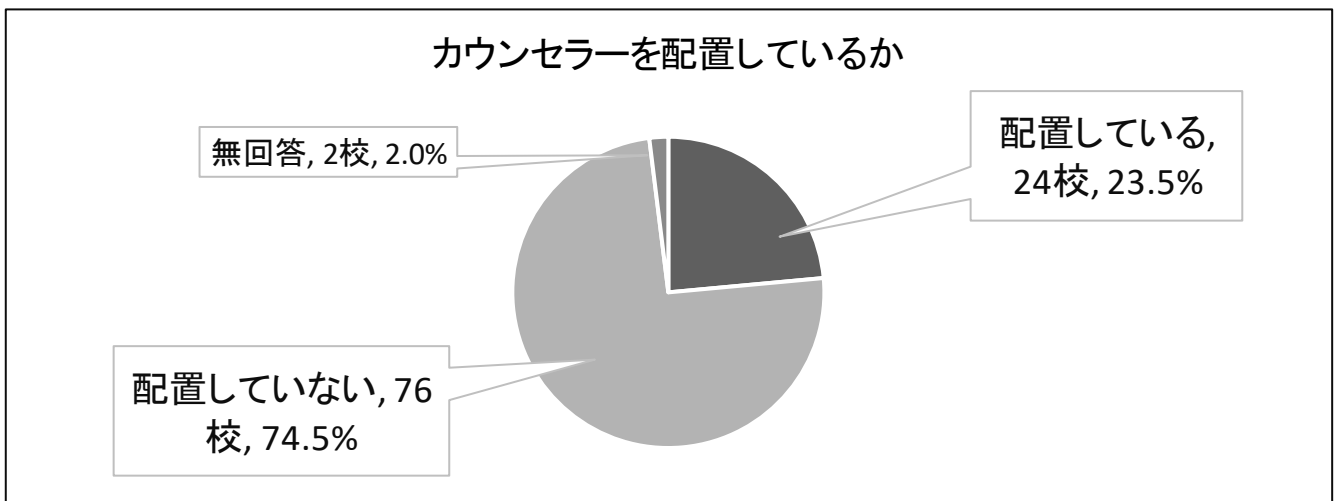
問 11. カウンセリングに関する教員研修を行っていますか。

行っている	42校	41.2%
行っていない	59校	57.8%
無回答	1校	1.0%



問 12. カウンセラーを配置していますか。

配置している	24校	23.5%
配置していない	76校	74.5%
無回答	2校	2.0%

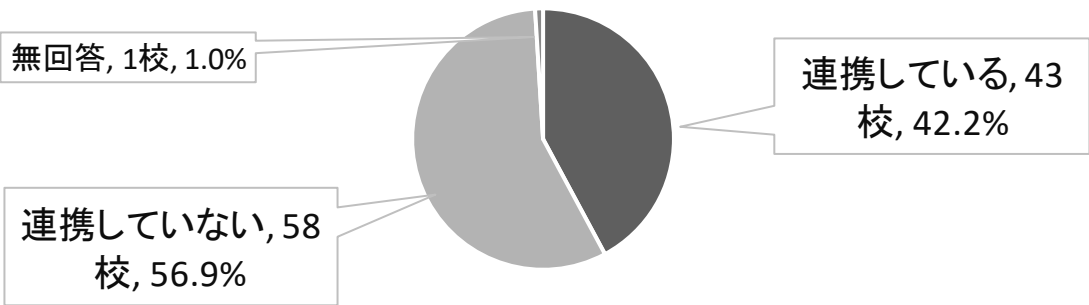


問 13. 外部カウンセラーと連携していますか。

連携している	43校	42.2%
連携していない	58校	56.9%
無回答	1校	1.0%

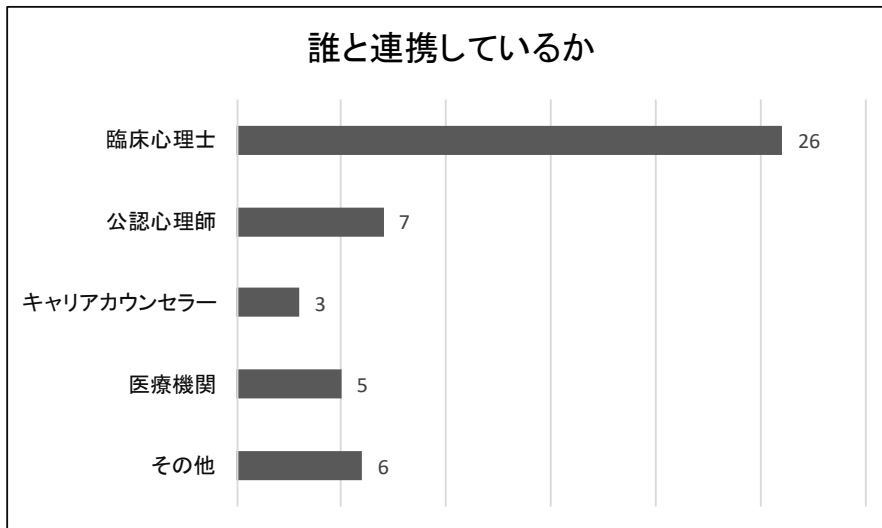


## 外部カウンセラーとの連携状況



### 誰と連携しているか

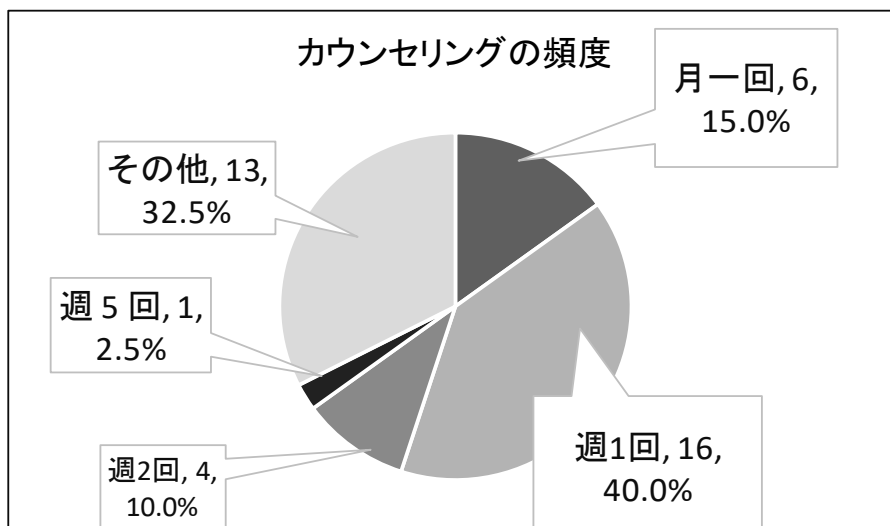
連携先	学校数	割合
臨床心理士	26	60.5%
公認心理師	7	16.3%
キャリアカウンセラー	3	7.0%
医療機関	5	11.6%
その他	6	14.0%



その他＝心のアドバイザー、医者、大学教授、特別支援教育士スーパーバイザー、スクールソーシャルワーカー、日本産業カウンセラー協会産業カウンセラー、日本カウンセリング学会認定スーパーバイザー

### カウンセリングの頻度

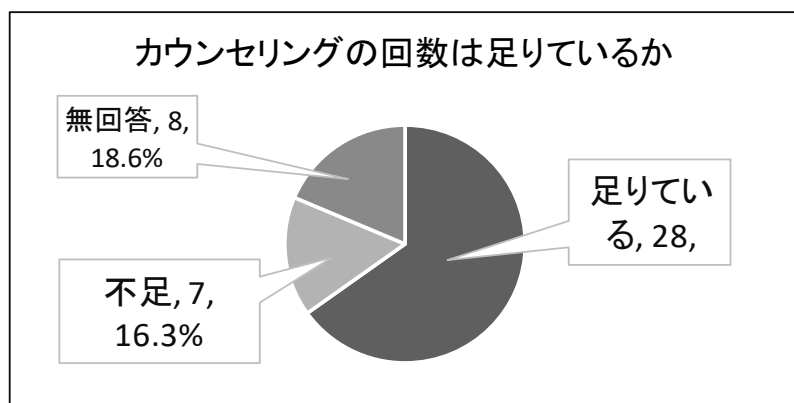
頻度	学校数	割合
月一回	6	14.0%
週1回	16	37.2%
週2回	4	9.3%
週5回	1	2.3%
その他	13	30.2%



その他＝随時、週3回、年3回、年5～6回、現時点ではカウンセリング依頼したことがない

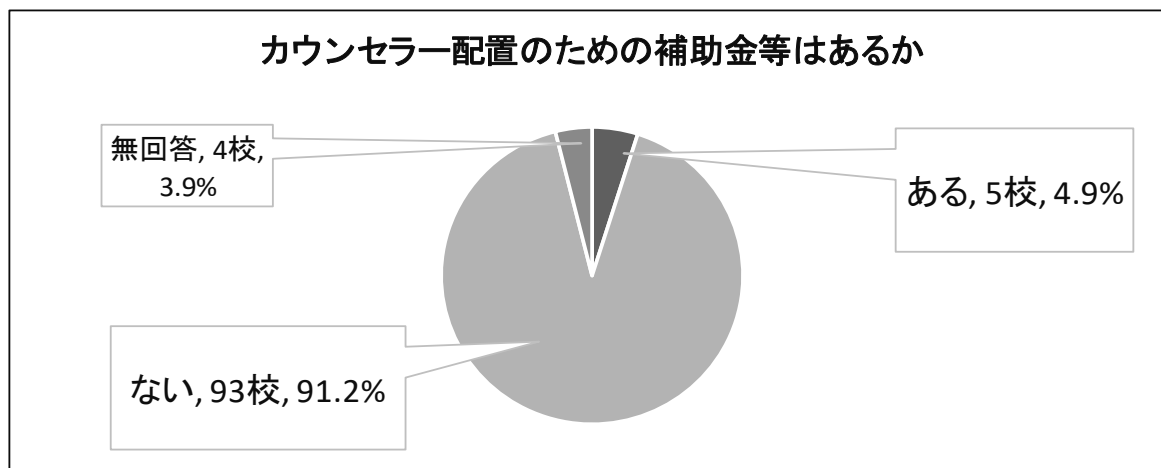
### カウンセリングの回数

足りている	不足	無回答
28	7	8
65.1%	16.3%	18.6%



問 14. カウンセラーを配置するための補助金等がありますか。

ある	5校	4.9%
ない	93校	91.2%
無回答	4校	3.9%

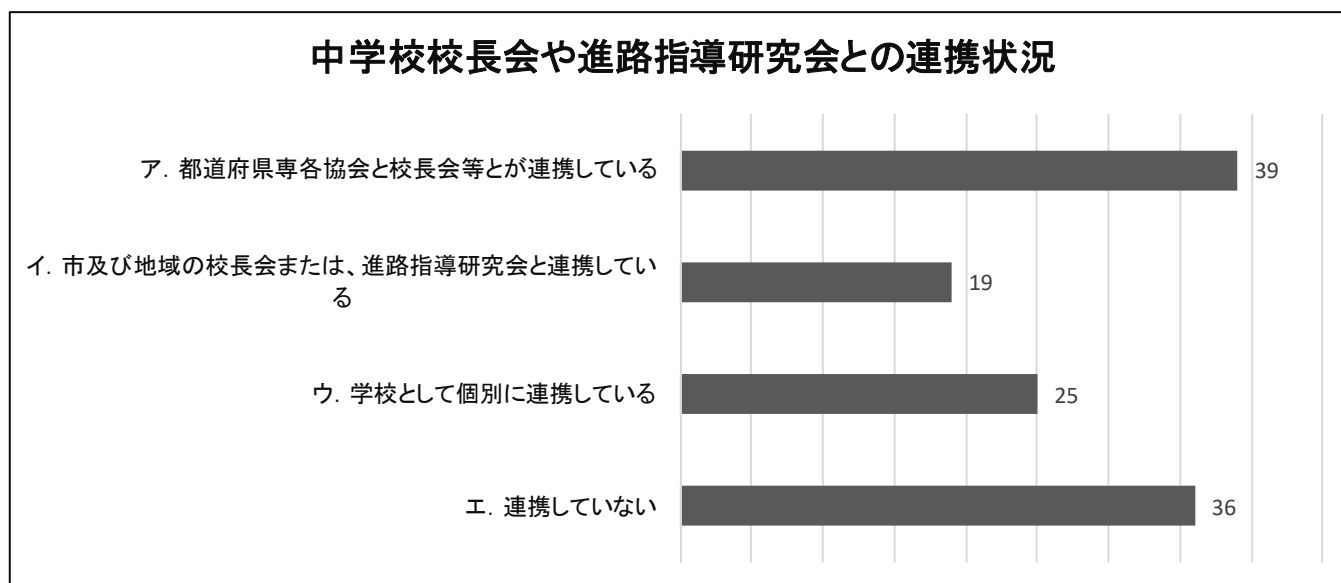


**補助金等の実態について**：一条校との大きな格差を感じている / 今年度より新規事業費補助となりました。(県補助金)「専修学校各種学校特色教育推進事業補助」カウンセラーの配置や支援の必要な生徒へのサポートに関して、最大年 58 万円まで補助が出ます。(兵庫県) / 2019 年度より佐賀県で高等専修学校への運営費補助の増額が決まり、生徒ひとりにつき 28 万 9 千円が出ることになりました。 / 震災関連事業による派遣 (2020 年に終了となる予定)

## V. 行政や地域との連携について

問 15. 中学校校長会や進路指導研究会と連携していますか（複数回答可）。

ア. 都道府県専各協会と校長会等とが連携している	39	38.2%
イ. 市及び地域の校長会または、進路指導研究会と連携している	19	18.6%
ウ. 学校として個別に連携している	25	24.5%
エ. 連携していない	36	35.3%

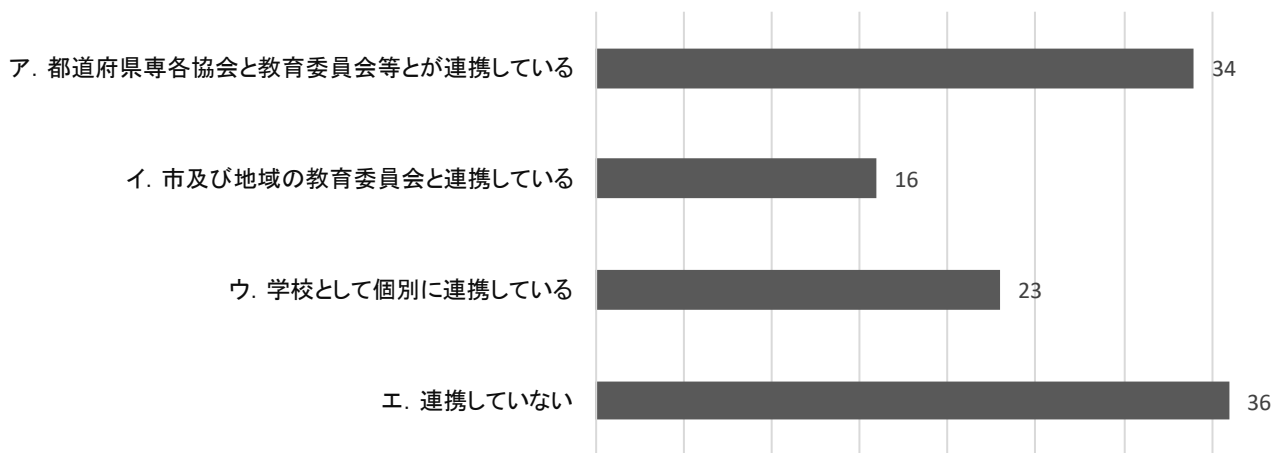


**具体的な連携事例：**各地域の中学校校長会に参加させていただいて学校説明会等 / 中学校訪問での説明（地域の全中学校） / 中学校進路担当者等との連絡協議会の開催 / 中学校校長会と高等専修学校委員会と情報交換会・勉強会 / 札幌市学校教護協会にオブザーバー校として参加 / 中学校進路連絡会 / エリアごとの進路相談会に参加 / 中学校からの要請に応じて不登校生への説明会や相談会を実施 / 夏の中学校教員研修会や中学校の進路担当教員との懇親会に参加し、情報共有や専修学校に求められているニーズの把握を行っている / 市民協議会が主催するガーデニングショーに参加。生徒が主体となり草花を鉢植えして育成し、それを出店した / 凧揚げ大会に参加予定 / 東京都中学校高等専修学校進路指導協議会夏季研究協議会への参加 / 地域の教委主催の進路相談会等に参加 / 地域中学校校長会の定期研修会（8月）で高等専修学校についての説明会を実施 / 単発的に中学校校長会で学校説明をさせてもらったことはあるが、連携はしていない

問 16. 教育委員会や行政と連携していますか（複数回答可）。

ア. 都道府県専各協会と教育委員会等とが連携している	34	33.3%
イ. 市及び地域の教育委員会と連携している	16	15.7%
ウ. 学校として個別に連携している	23	22.5%
エ. 連携していない	36	35.3%

## 教育委員会や行政との連携状況

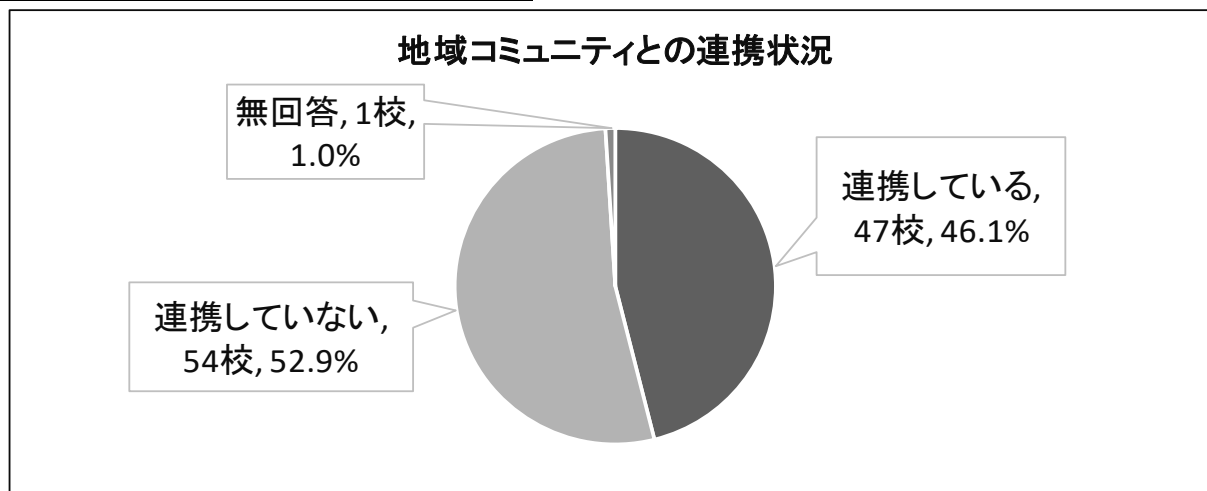


**具体的な連携事例：**須坂市教育委員会と連携しての業務等の推進 / 愛専各、教育委員会と連携 / リーダーシップ研修生の受け入れ / 佐賀県の法務私学課の中に、専修学校支援室があり、現場の問題を共有したり、連携体制が取れていると思う / 県の私学担当部署との連携

問 17. 地域コミュニティと連携していますか。

連携している	47校	46.1%
連携していない	54校	52.9%
無回答	1校	1.0%

## 地域コミュニティとの連携状況



**具体的な連携事例：**農園福祉施設 / 名古屋市熱田区の社会福祉協議会の福祉フェスタに毎年参加している / 名古屋市美化連盟に加盟し毎年ボランティア清掃を実施している / 地域の夏祭り、運動会、餅つき、防犯、伝統行事など / 地域商店街とのコラボレーション / 城北フェアへの参加「F ショー出演」 / 自治会の行事に参加 / 町内会に学園祭の招待状を配布 / 地域行事に際し、学校施設を地域等に貸与 / 区、町の祭りに「ソーラン隊」が参加し演舞している / 保育園、学童クラブ、高齢者施設、障害者施設等におけるボランティア活動 / 学校行事等の告知(地域誌への掲載など) / 不登校生の親の会、校区連絡会及び地元の商工連合会 / 区の児童館において夏休みにボランティア活動として造形教室を開き子供達に工作を教えている / ダンスパフォーマンスを幼稚園などで実施 / 食の祭り / 高齢者施設との交流 / 高齢者施設でのボランティア(介護実習、レクリエーション実習など) / ファッションショー、福祉まつりなど地域のイベント参加 / 地域のイベントでボランティア活動(安城市七夕祭りのゴミカゴボランティア、シティマラソンの給水ボランティア、保険センターでのパパママ教室ボランティアなど) / 学校関係者評価委員になっていただいている / 生野区役所を通して支援対象の生徒についての情報共有ができたり、地域の公立小学校のプログラミング講習を請け負ったりしている。生野税務署からも確定申告啓発ポスター作成を

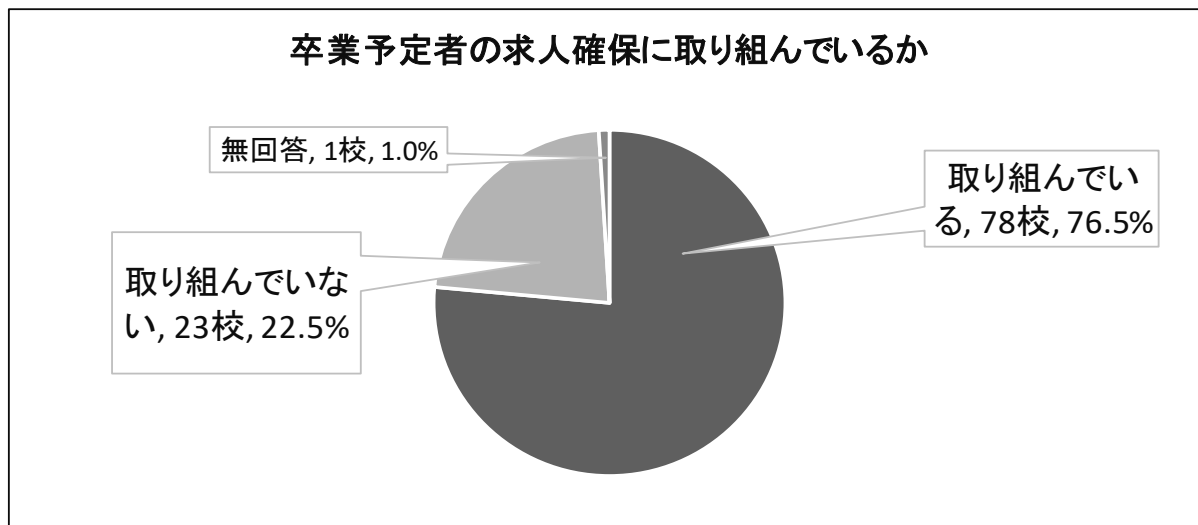
依頼されている / 公園管理 / 里親制度 / 学校近隣の美化活動を定期的に行っている / 学校祭へご協力いただいたり、エコキャップ回収に地域ぐるみで取り組んでいる / 地域ボランティアに参加している / ボランティア清掃 / 農業手伝い / 清掃ボランティア『ふるさと美化活動』への参加 / 地域の保育園や老人ホームへ出張コンサートに行く / 地域行事への生徒の自主的な参加(司会進行、ライブへの参加、似顔絵サービス等) / 進路選択につながる職場体験等 / 地域の町内会を母体とする地域活性化委員会と連携している

**教育効果・エピソード：**社会体験が増加 / 毎年多くの生徒が参加し、福祉や環境についての意識を高めることができた / 過疎化が進んでいる地域を盛り上げるために何ができるかなど自分たちで考え行動していく力が身についている / 自主的に地域の方と話し、計画を立て実行できるようになった / 町内会の方が毎年学園祭に来校くださり生徒の企画に参加いただいていること / 玄関前での登校指導の際、町内会の方に挨拶されることがあること / 地域貢献 / 平野区民祭り、瓜破西祭りに参加し地域の方と親しく交流できた / 来年度出場のお願いや他の曲へのリクエストなど / 学生作品の展示等協力 / 学校の存在が区内に周知される / 学習している内容を実際の場面でいかに生かすか、生徒が自ら考え行動できるようになる / モデル・お客様からの評価を直にもらえる / ボランティア活動を通じての心の成長 / 卒業後の進路選択に影響を与えている / 行事を通じ、学校への理解が深まる。地域の方との交流に伴い、言葉遣いなどのマナーを意識する / 地元企業とのコラボによる商品開発や店舗運営での学び / 地元のイベントにて教育成果発表 / 不登校親の会にて個別相談やカウンセリング / 工作を子供たちに教えるにあたりテーマや教材、教え方等を生徒自身が考えたりする。小さな子供たちに教えることの難しさや楽しさなどを体験することができ、自主性や責任感が育まれた / 学校一丸となって取り組み、教育効果があった / ボランティアを通して社会のルールやマナーを学び社会性を培うことができる / イベント参加やボランティア体験を通して、人に伝える機会(発表会など)での自信を育むことができる / 本校生徒の専門性の高さをアピールすることができ、生徒の学習意欲促進や自己肯定感の向上につながった / 学校への地域からの認知度の向上 / 外部施設を利用する際の理解 / 任されることで自発的な管理活動が見られる / 登下校時に声をかけていただくことで、生徒の意識に変化があった / 主体性や協調性、企画力など、今後の社会でますます必要性が高まるであろう力が身についている / 事前打合せなど、イベント制作のノウハウを実体験を通して学ぶことができる / 責任感を持つことの重要性を認識できる / 様々な体験を通して、自分にできること、興味を持つものを見つけ、職業選択につなげていく / 奉仕活動を通じて目上の方、高齢の方との交流ができ、様々な世代の方々との付き合い方を学んでいる / 地域の方の中に茶道等の指導者がおり、体験学習を実施していただき、日本文化の大切さを学んでいる

## Ⅵ. 学びのセーフティネット機能の充実強化について

問 18. 高等専修学校卒業予定者の求人確保に取り組んでおりますか。

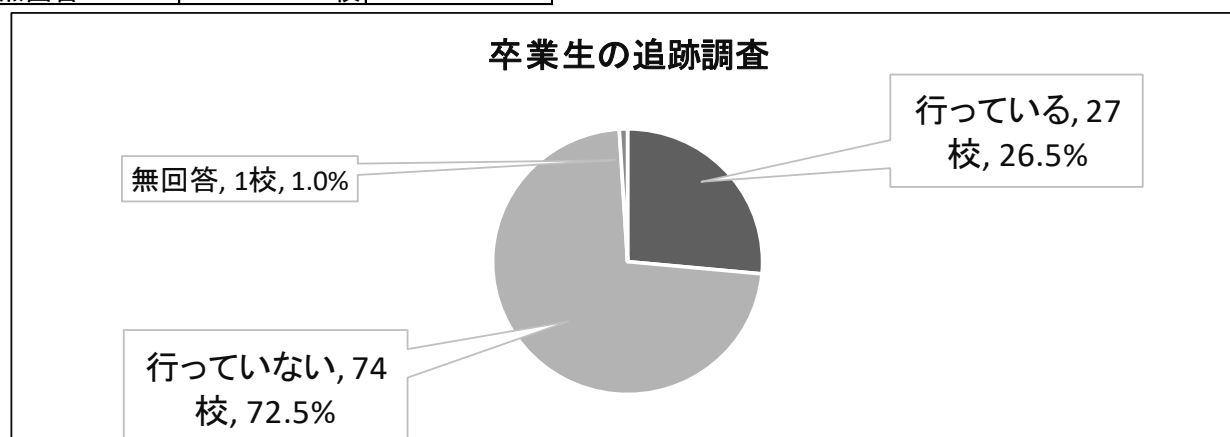
取り組んでいる	78校	76.5%
取り組んでいない	23校	22.5%
無回答	1校	1.0%



**具体例：**5月に企業訪問を実施して学校の状況を伝えている / 多くの求人票 / 説明会に参加 / 面接練習 / 情報交換会に参加 / ハローワークと連携 / 職業能力開発校との連携 / 人材紹介会社とも連携し求人情報をタイムリーに集めている / 企業を訪問して願いの求人 / 卒業生が就職している会社への求人 / 本校後援会との定期的な情報交換 / 障害者雇用推進のための職場開拓 / 卒業後の定着フォロー支援 / 学外実習を通して依頼し、求人を確保 / 理美容学校(通信課程)では理美容店へ就業することが前提 / 企業説明会の実施や各企業への求人票の配布 / 若者サポートステーション・就労移行支援などとの連携を深めている / 地元企業による就労観育成に関する出前授業((一社)青少年進路支援協会紹介による) / 高校新卒支援企業を介した求人情報収集 / 卒業後、就職先を退職しても、本校の卒業生に依頼をいただく様に、就職後まじめに働く事を指導している / キャリア支援を行っている部署からキャリアカウンセリングや就職支援、各種企業説明会、エンターテイメント業界の求人情報の提供を受けている / インターンシップ先からの求人を確保 / 進路指導部による、企業を学校に招いての説明会などを今年から行なっている / 福島県より進路アドバイザーさん1名が常に連携して頂いて、講演・面接・求人票について等、行っている / 進学希望者が多いため取り組んでいない

問 19. 卒業生の再就職支援に関して、卒業生の追跡調査を行っておりますか

行っている	27校	26.5%
行っていない	74校	72.5%
無回答	1校	1.0%

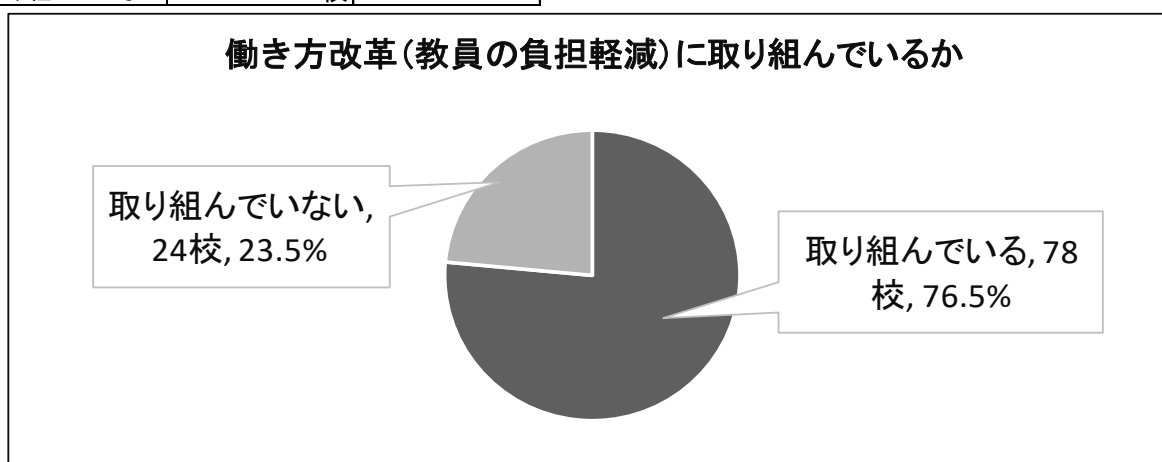


**再就職支援の具体例**：卒業後3年、毎年春の時期に追跡調査を実施 / 就職先、ハローワークとの連携 / 障害のある卒業生に対する定着フォロー支援の展開 / 卒業生が気軽に母校訪問できる環境・雰囲気作り / 希望者に対し、就職担当・担任から声かけをし再就職指導を行っている / 再就職を希望する卒業生から母校へ連絡が入り、対応する / 学校に来させ指導 / 卒業後報告に来校 / 卒業生の就職先を訪問し、就業の様子を調査 / 併設している総合教育センターにて個別のサポートを実施 / 8月に前年度卒業生の就職先と進学先に1日担任が電話確認をする / 追跡調査は行っていないが相談があれば対応している / 卒業生全員の追跡はできていないが、卒業生への進路変更相談など可能な限り対応しフォローしている / 定期的に状況を確認し、離職があった場合には、ハローワークと連携し、再就職先を検討する / 大半の生徒が進学するため行っていない

## VII. 教員の働き方改革について

問 20. 教員の働き方改革について、増加する「教員の負担」の軽減に取り組んでいますか。

取り組んでいる	78校	76.5%
取り組んでいない	24校	23.5%



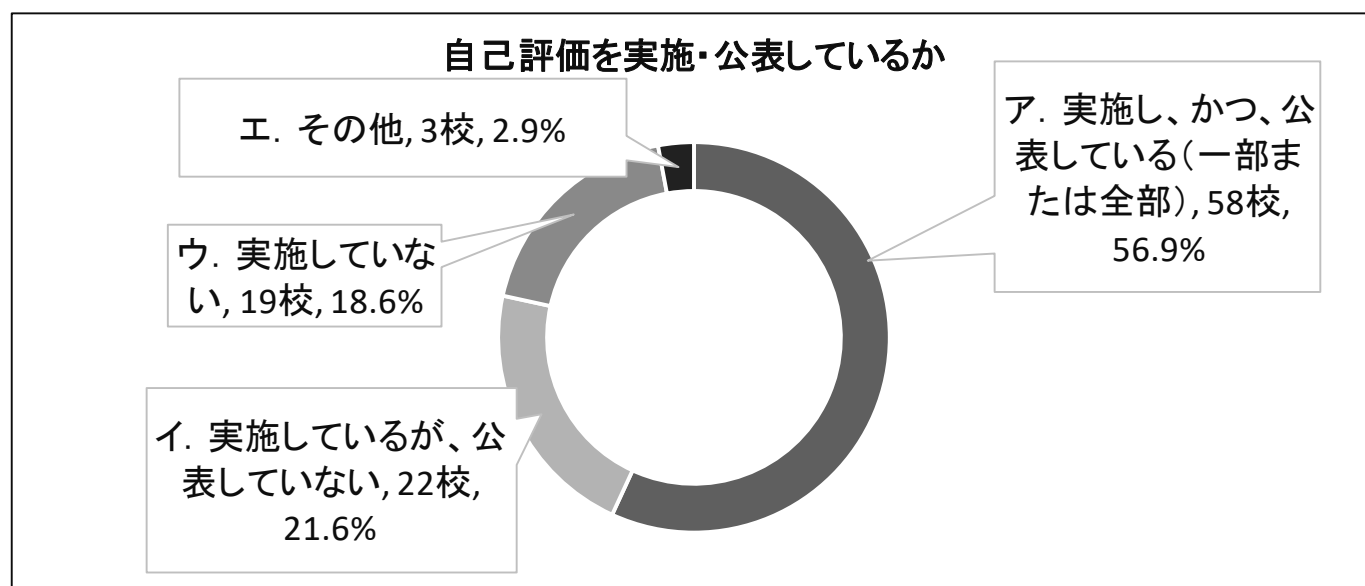
**具体例**：会議は1時間以内。パソコンを利用したデータ処理。残業時間の短縮 / 教員一人一人の分掌を少なくし各教員の事務作業を軽減 / 残業は基本的にしない / 残業指示書の提出 / 時間外労働の短縮 / 残業の指示はしないように / ノー残業デーの設定 / 定時退勤 / 意識改革 / 休日出勤の軽減 / 休日出勤の場合は代休を取

れるようにする / 時間外勤務の事前申請や時間外勤務理由書の提出 / 積極的な有給休暇取得 / 部活指導時間の短縮 / 早帰りの指示 / 行事の見直し・精選 / 年2、3回、上長と面談 / 超過勤務時間の把握と分析 / 各教員の分掌の見直し / 職責による役割分担の明確化 / 公務分担の明確化 / 通常業務の断捨離を行うとともに管理職が業務進捗状況を把握し仕事の見直しや助言を行う / 書類の簡素化 / 会議の見直し / 勤務時間の調整 / 複数の教員を配置 / 校務の見直し / 校務の現状の把握とそれに伴うスリム化及び合理化を検討中 / 仕事の振り分け / 年次有給休暇を確保できるよう、長期休暇のほか時間割変更を実施 / 教務事務を配置し、教科指導以外の業務について軽減を図る / 有給の消化月間(8月)を作っている / ストレス簡易調査の実施による健康管理 / 年間の休日数の確保 / 勤務時間の厳守 / 関係校との教材の共有 / 毎週水曜日の18:00あがり / 教務システムの充実による事務作業の軽減 / 定期試験中の年休取得を促す / 今年度より新卒の教員を採用し、授業や生徒の個別指導など教員の負担軽減に貢献している / 職員会議の効率化(常時職員間の意見交換等) / 取り組むことできない。業務が多すぎてカットなどすることができない現状がある / 元々少人数の学校であり残業などない / 現状では取り組む必要性がない

## Ⅷ. 自己評価

問 21. 自己評価を実施・公表していますか（一つだけ選択）。

ア. 実施し、かつ、公表している(一部または全部)	58校	56.9%
イ. 実施しているが、公表していない	22校	21.6%
ウ. 実施していない	19校	18.6%
エ. その他	3校	2.9%



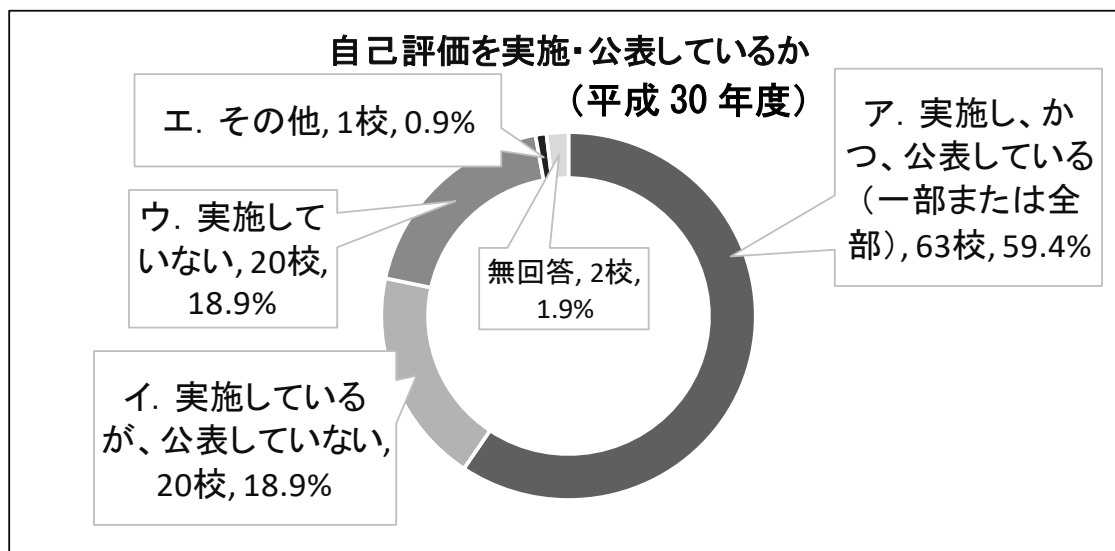
※その他=来年度実施予定、準備中、専門課程で実施予定があり高等課程でも実施予定



〈参考：平成 30 年度調査結果〉

ア. 実施し、かつ、公表している(一部または全部)	63校	59.4%
イ. 実施しているが、公表していない	20校	18.9%
ウ. 実施していない	20校	18.9%
エ. その他	1校	0.9%
無回答	2校	1.9%

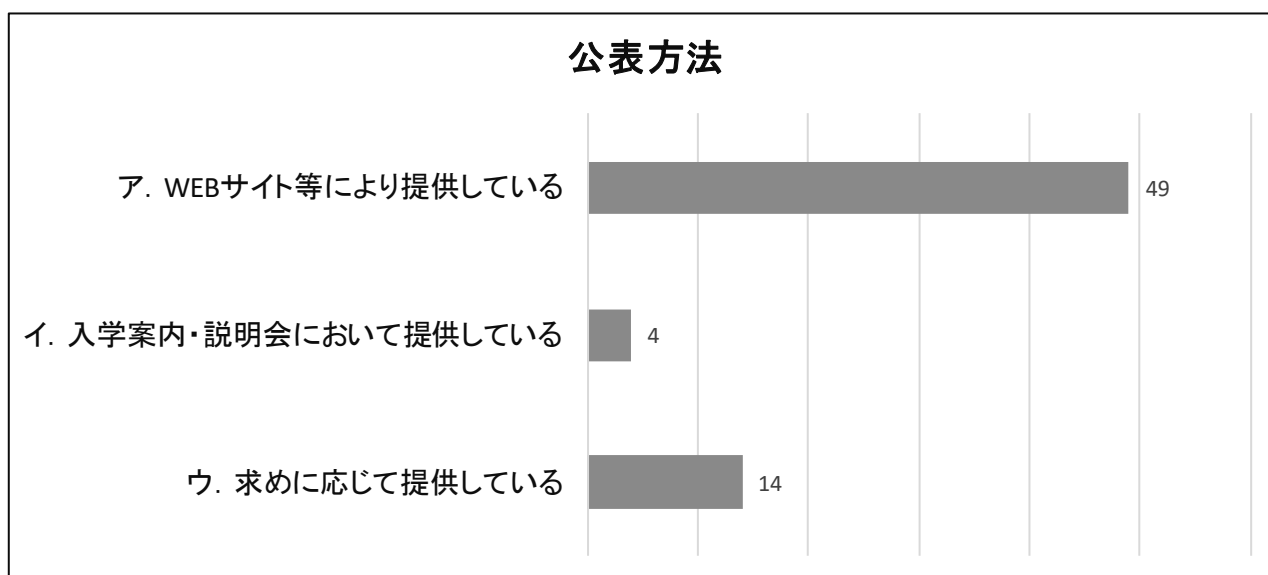
※その他=まだその時期ではない



※問 22 に関しては、問 21 でアを選択した場合のみ回答してください。

問 22. 公表されている方法を教えてください(複数選択可)。

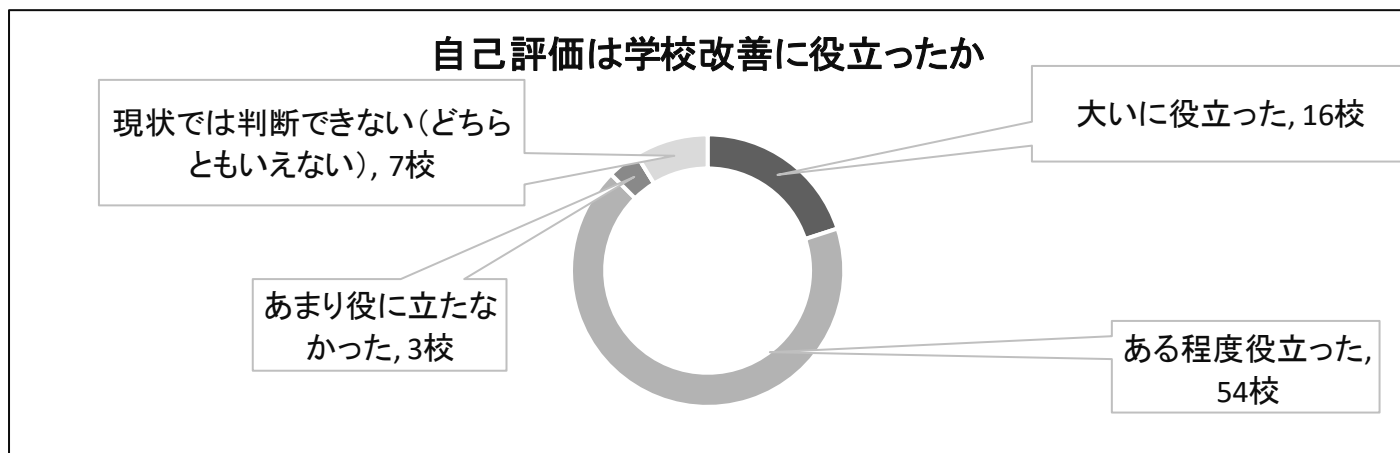
ア. WEBサイト等により提供している	49	84.5%
イ. 入学案内・説明会において提供している	4	6.9%
ウ. 求めに応じて提供している	14	24.1%



※問 23、24 に関しては問 21 でア、イを選択した場合のみ回答してください。

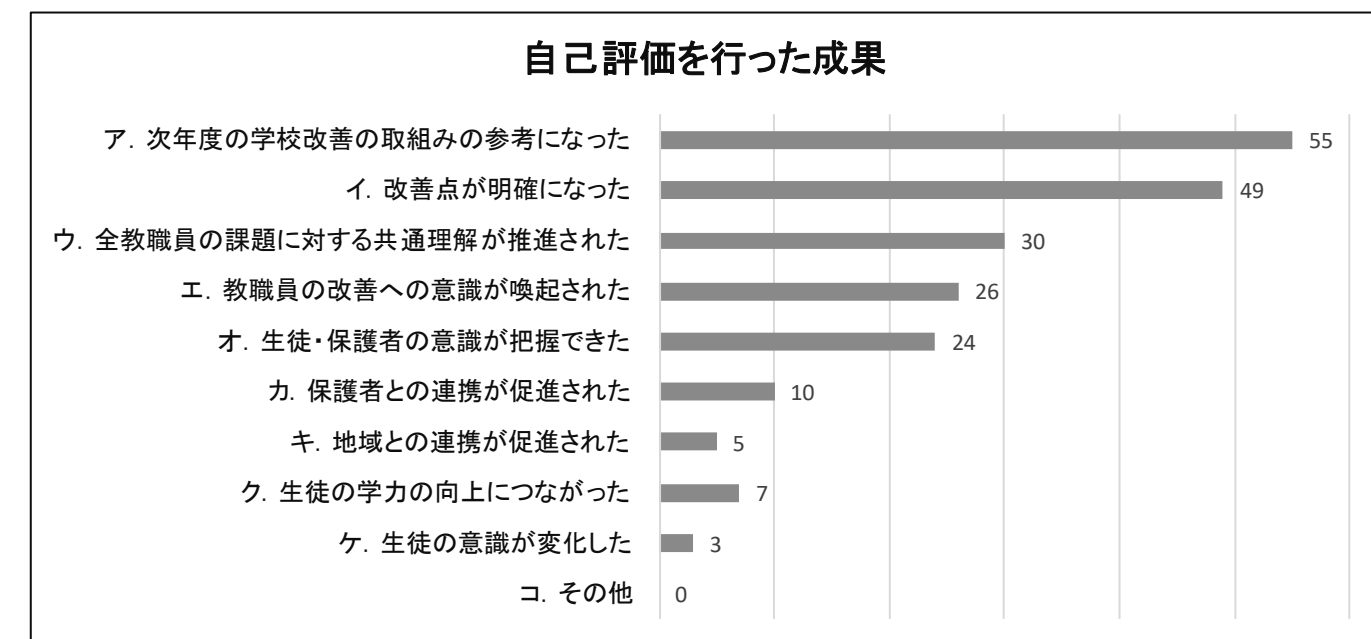
問 23. 自己評価の結果は学校改善に役立つと感じていますか（一つだけ選択）。

大いに役立った	16校	20.0%
ある程度役立った	54校	67.5%
あまり役に立たなかった	3校	3.8%
まったく役に立たなかった	0校	0.0%
現状では判断できない(どちらともいえない)	7校	8.8%



問 24. 自己評価を行った成果として考えられるものを選んでください（複数選択可）。

ア. 次年度の学校改善の取組みの参考になった	55	68.8%
イ. 改善点が明確になった	49	61.3%
ウ. 全教職員の課題に対する共通理解が推進された	30	37.5%
エ. 教職員の改善への意識が喚起された	26	32.5%
オ. 生徒・保護者の意識が把握できた	24	30.0%
カ. 保護者との連携が促進された	10	12.5%
キ. 地域との連携が促進された	5	6.3%
ク. 生徒の学力の向上につながった	7	8.8%
ケ. 生徒の意識が変化した	3	3.8%
コ. その他	0	0%

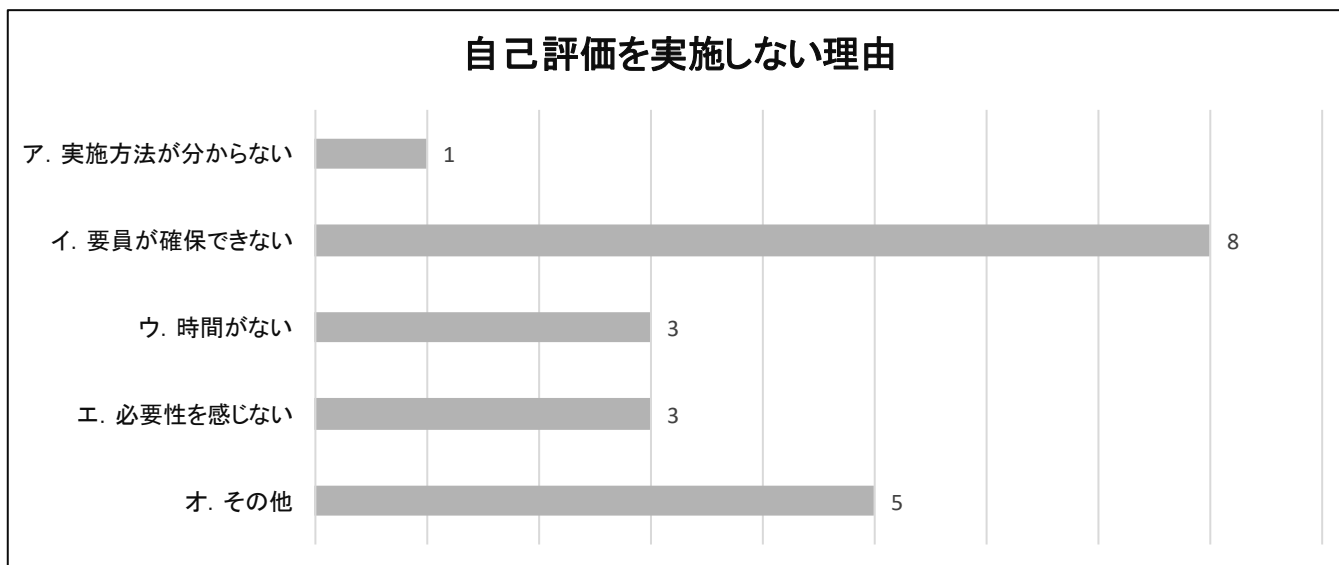


※問 25 に関しては問 21 でウを選択した場合のみ回答してください。

問 25. 自己評価を実施していない理由は何ですか（複数選択可）。

ア. 実施方法が分からない	1	5.3%
イ. 要員が確保できない	8	42.1%
ウ. 時間がない	3	15.8%
エ. 必要性を感じない	3	15.8%
オ. その他	5	26.3%

※その他＝在校生卒業後は休校の予定である、2019年12月実施予定、今年度開校したため現在その準備を進めている



## IX. 教育活動情報の公開

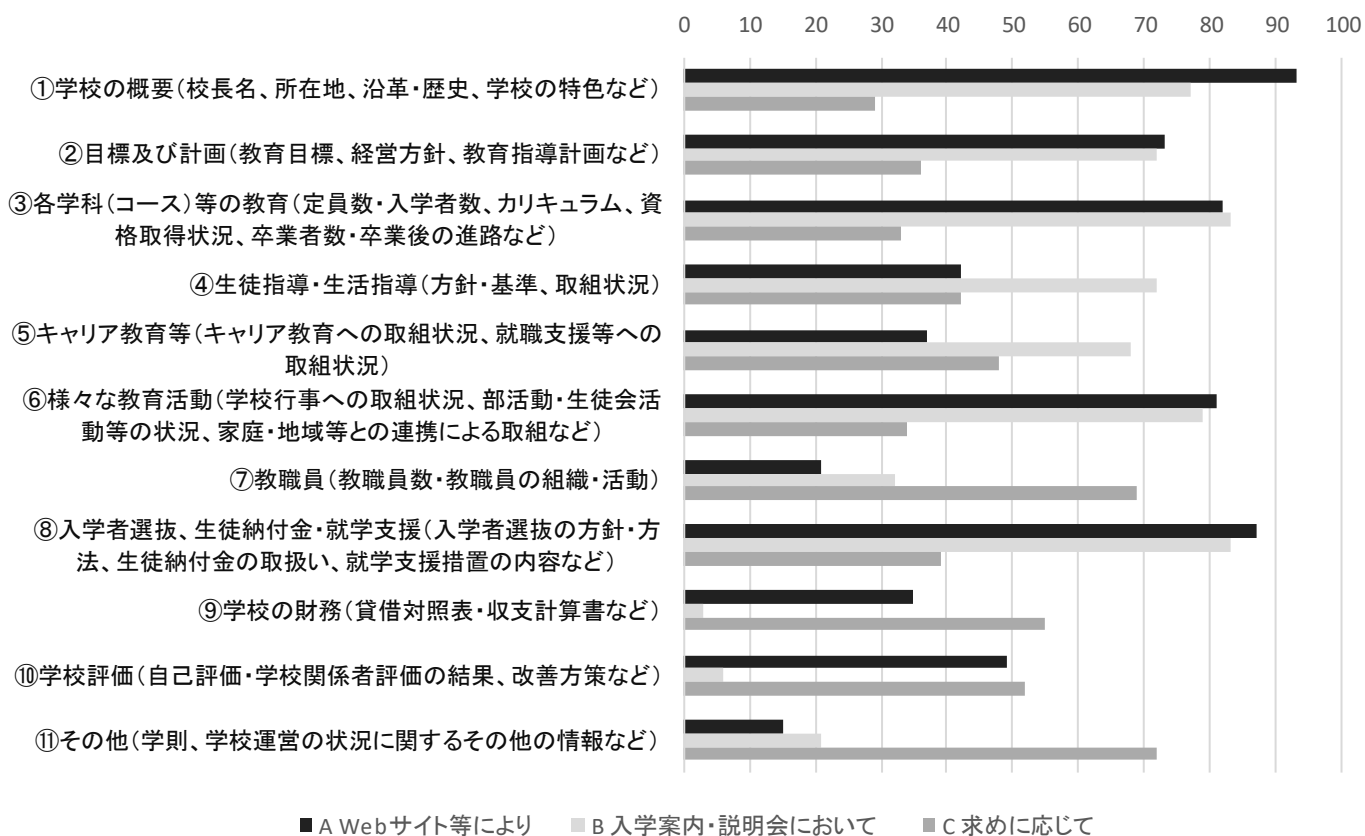
問 26. 文部科学省で公表されている「高等専修学校における情報提供等への取組に関するガイドライン」の各項目について情報提供を行っているかどうか、

- A. Webサイト等により提供している
- B. 入学案内・説明会において提供している
- C. 求めに応じて提供している

のそれぞれの観点から判断し、提供している項目について記入してください（複数選択可）。

項目	A Webサイト等により	B 入学案内・説明会において	C 求めに応じて
①学校の概要(校長名、所在地、沿革・歴史、学校の特色など)	93	77	29
	91.2%	75.5%	28.4%
②目標及び計画(教育目標、経営方針、教育指導計画など)	73	72	36
	71.6%	70.6%	35.3%
③各学科(コース)等の教育(定員数・入学者数、カリキュラム、資格取得状況、卒業者数・卒業後の進路など)	82	83	33
	80.4%	81.4%	32.4%
④生徒指導・生活指導(方針・基準、取組状況)	42	72	42
	41.2%	70.6%	41.2%
⑤キャリア教育等(キャリア教育への取組状況、就職支援等への取組状況)	37	68	48
	36.3%	66.7%	47.1%
⑥様々な教育活動(学校行事への取組状況、部活動・生徒会活動等の状況、家庭・地域等との連携による取組など)	81	79	34
	79.4%	77.5%	33.3%
⑦教職員(教職員数・教職員の組織・活動)	21	32	69
	20.6%	31.4%	67.6%
⑧入学者選抜、生徒納付金・就学支援(入学者選抜の方針・方法、生徒納付金の取扱い、就学支援措置の内容など)	87	83	39
	85.3%	81.4%	38.2%
⑨学校の財務(貸借対照表・収支計算書など)	35	3	55
	34.3%	2.9%	53.9%
⑩学校評価(自己評価・学校関係者評価の結果、改善方策など)	49	6	52
	48.0%	5.9%	51.0%
⑪その他(学則、学校運営の状況に関するその他の情報など)	15	21	72
	14.7%	20.6%	70.6%

## 教育活動情報の公開

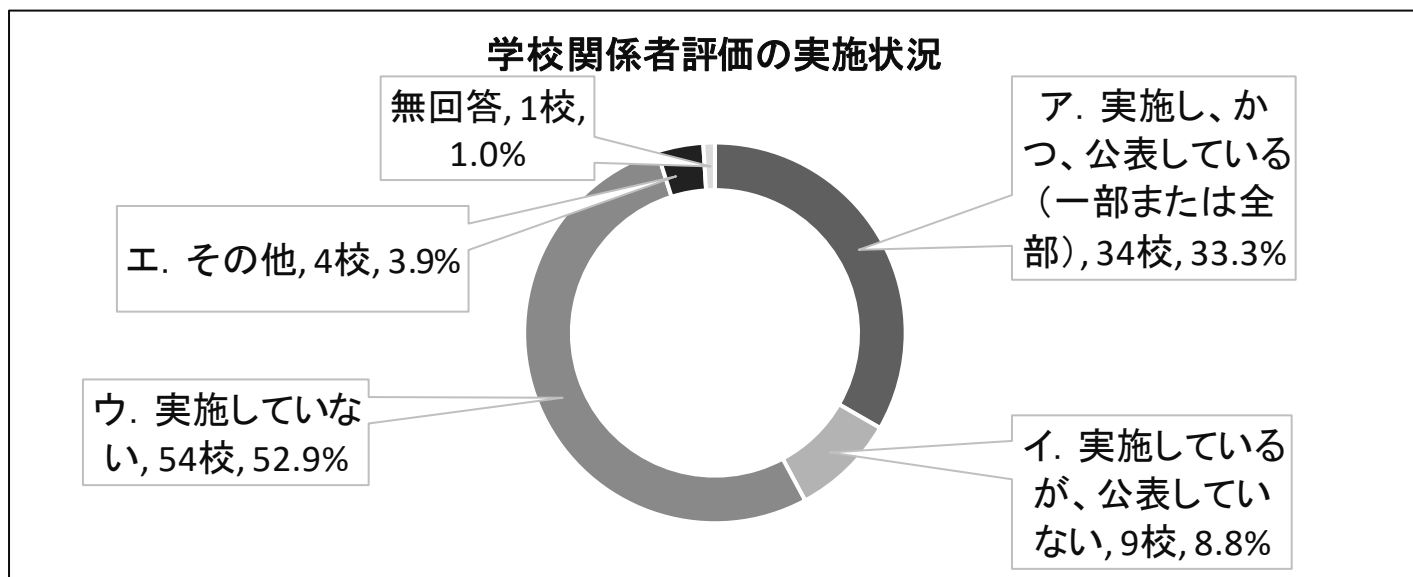


## X. 学校関係者評価

問 27. 学校関係者評価を実施・公表していますか（一つだけ選択）。

ア. 実施し、かつ、公表している(一部または全部)	34校	33.3%
イ. 実施しているが、公表していない	9校	8.8%
ウ. 実施していない	54校	52.9%
エ. その他	4校	3.9%
無回答	1校	1.0%

※その他＝来年度実施予定、準備中、学園理事会において年3回現状報告している

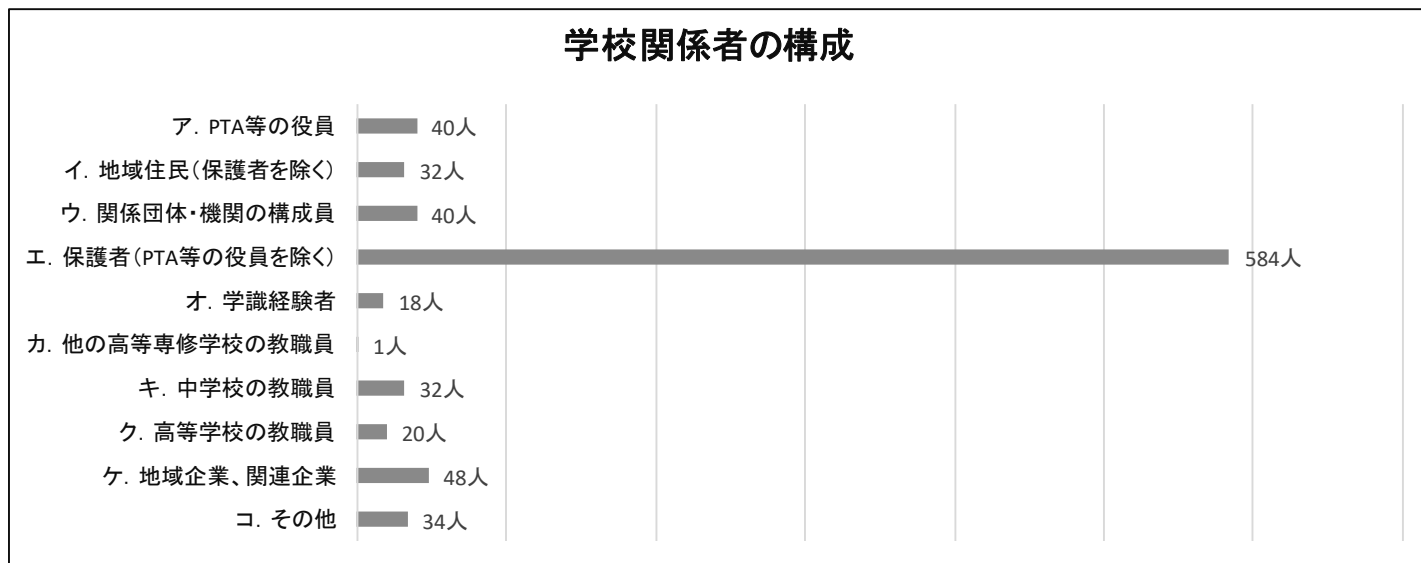


※問 28 に関しては問 27 でア、イを選択した場合のみ回答してください。

問 28. 学校関係者評価における学校関係者の構成について該当するものの人数を記入してください（複数選択かつ人数を記入）。

ア. PTA等の役員	40人
イ. 地域住民(保護者を除く)	32人
ウ. 関係団体・機関の構成員	40人
エ. 保護者(PTA等の役員を除く)	584人
オ. 学識経験者	18人
カ. 他の高等専修学校の教職員	1人
キ. 中学校の教職員	32人
ク. 高等学校の教職員	20人
ケ. 地域企業、関連企業	48人
コ. その他	34人

※その他＝卒業生、専門課程卒業生、小学校校長、大学教職員、専門学校校長、大学事務局、同窓会会長、元 PTA 役員、元高等学校校長、大学教授、学校内教員

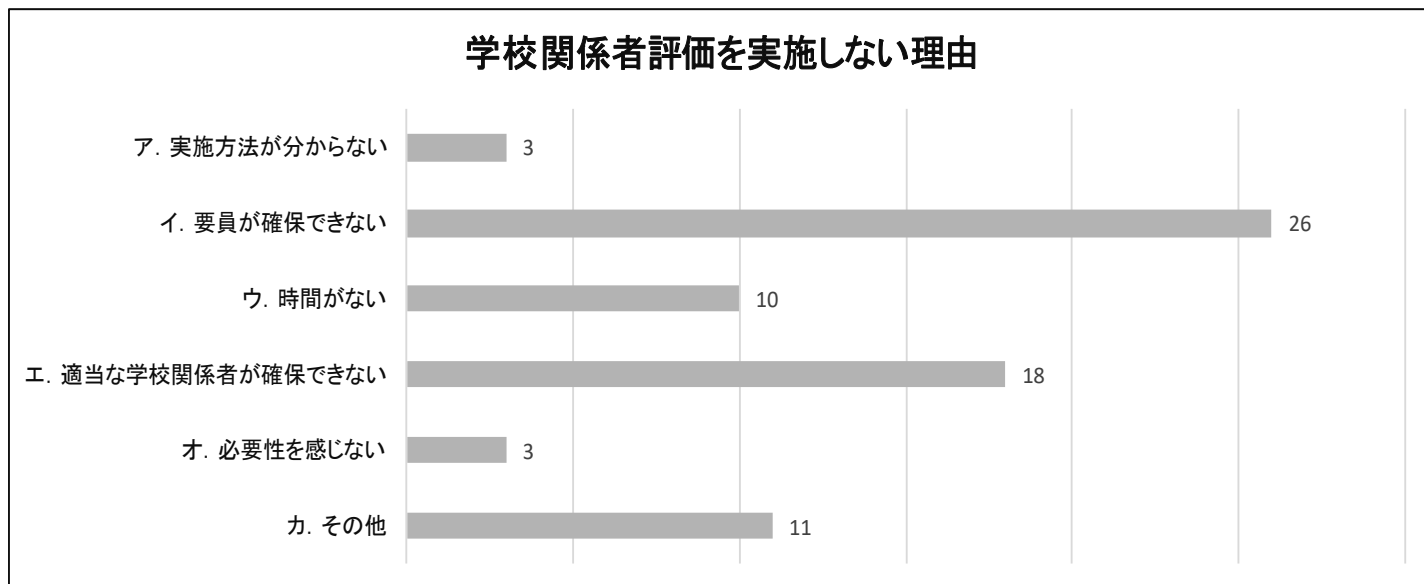


※問 29 に関しては、問 27 でウを選択した場合のみ回答してください。

問 29. 学校関係者評価を実施していない理由は何ですか（複数選択可）。

ア. 実施方法が分からない	3	5.6%
イ. 要員が確保できない	26	48.1%
ウ. 時間がない	10	18.5%
エ. 適当な学校関係者が確保できない	18	33.3%
オ. 必要性を感じない	3	5.6%
カ. その他	11	20.4%

※その他＝現在準備中、在校生卒業後は休校の予定である、実施について検討中、学園の高等課程全体で検討中、現在作成中。次年度より公表予定、現在準備中であり要員や時期についても検討中、今年度開校したため、現在その準備を進めている



## 2-4 令和元年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」分析と考察

### I. 高等専修学校におけるインクルーシブ教育と不登校改善の関係

関西外国語大学

古田 克利

(調査研究分科会委員)

#### 1. はじめに

本稿では、令和元年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」（以降、本調査）で得られたデータをもとに、インクルーシブ教育と不登校改善の関係を分析する。文部科学省の調査（注1）によると、国・公・私立の中学校で平成30年度に不登校を理由として30日以上欠席した生徒数は119,678人であり、全体の生徒数に占める割合は3.6%となっている。これに対して、本調査の集計結果（問5）を見ると、高等専修学校に在籍する全体の生徒数に占める不登校生徒数（中学校時代に不登校を経験していた生徒）の割合は24.9%であった（本報告書8頁参照）。さらに、入学時に不登校の生徒数に対する、不登校が改善した、または改善傾向にある生徒数（問8）の割合は80%を超えており、高等専修学校が学びのセーフティネットとして一定程度機能していることが読み取れる。しかしながら、入学時に不登校の生徒数のうち、皆勤状態にまで改善した生徒数の割合は16.6%にとどまり、更なる改善の余地が期待される。そこで本稿では、本調査で得られたデータをもとに、インクルーシブ教育と不登校改善の関係を明らかにするとともに、不登校生徒の改善に対して、より効果的な支援の在り方を探る。

#### 2. 不登校改善率

不登校改善率は、入学時に不登校であった生徒が、高等専修学校での学びを通じて不登校が改善した生徒数の割合を表す。具体的には問8「不登校が改善した生徒数（2,310名）」と「不登校が改善傾向にある生徒数（914名）」の合計値を、「入学時に不登校の生徒数（3,977名）」で除したものを不登校改善率として算出した。なお、不登校改善率が1を超える学校が3校あったが、これは「不登校が改善した生徒数」と「不登校が改善傾向にある生徒数」の双方に生徒数を重複して回答している可能性がある。本稿では、便宜的に該当する3校の不登校改善率を1に変換し、以降の分析を進めた。また、「入学時に不登校の生徒数」が未記入の学校もあったため、それらの学校は本稿の分析には含めていない。結果、本稿の分析対象となった学校数は69校となった（注2）。不登校改善率ごとの学校数の分布を図1に示す。

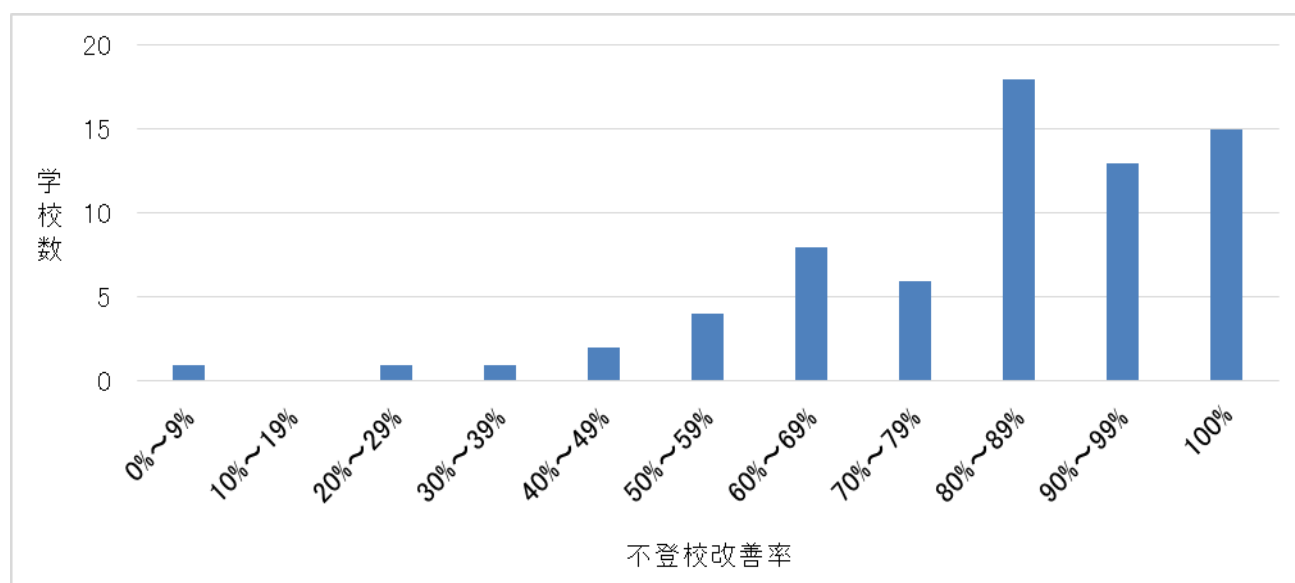


図1 不登校改善率と学校数



分析対象校全体の、不登校改善率の平均値は0.81（標準偏差＝0.20）であった。また、図1より、不登校改善率80%台の学校数が18校（全体の26.1%）と最も多く、同100%の学校数が15校（全体の21.7%）と続く。さらに、不登校改善率70%以上の学校が、52校であり全体の75%を占めていることが分かった。

本稿では、ここで算出した不登校改善率に着目し、高等専修学校においてどのような取り組みが不登校改善率を高めているのかを見ていきたい。具体的には、まずインクルーシブ教育の取り組みの内容と、不登校改善率との関係を探る。次に、インクルーシブ教育の取り組みのひとつである「個別指導の充実」に焦点をあて、教員のカウンセリング教育の有無、学外カウンセラーとの連携の有無と不登校改善率の差を見る。

### 3. インクルーシブ教育

#### 3.1 インクルーシブ教育の定義

近年、インクルーシブ教育に関する研究の蓄積スピードが増している。これは、2012年に中央教育審議会による「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」が発表されたことや、2014年に我が国が批准した「障害者の権利に関する条約(以降、障害者権利条約)」の中で「インクルーシブ教育システム」の構築に触れられていることによる影響が大きい。

そもそもインクルーシブ教育とは「エクスクルーシブ教育(排除的教育)の対概念で、障害、人種、国籍、言語、宗教、虐待、いじめ、貧困といった多様な理由による社会的に周縁化されやすい子どもとそうでない子どもとが地域の学校で『ともに学ぶ』教育のこと」(注3)などと定義されるが、その教育が何を指すのかは時々の文脈により多様である。例えば、障害者権利条約の中では、インクルーシブ教育に関し、個人に必要な「合理的配慮」にもとづくものである点や、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであるといった点に焦点があてられている。これらのことから、インクルーシブ教育とは、これまでに無い新しい教育の仕組みや方法を指す用語ではなく、一部の学校で既に取り組みされてきた様々な共生教育の工夫を、一般化し更によりよいものへと改善するために生み出された概念であると捉えることができるだろう。不登校の原因はさまざまであるが、その背後には、何らかの理由により社会的に周縁化されやすい生活環境や個人特性が潜んでいる可能性がある。それゆえ、社会的に周縁化されやすい子どもとそうでない子どもとが地域の学校でともに学ぶ教育(＝インクルーシブ教育)をおこなうことは、不登校生徒の改善を促すことが予想される。そこで本調査では、これまで高等専修学校がおこなってきた教育活動上の様々な取り組みをインクルーシブ教育の概念から捉えなおし、取り組みの具体的内容や程度と、不登校改善率の関係を明らかにする。

#### 3.2 高等専修学校におけるインクルーシブ教育の取り組み状況

本調査で明らかにされた高等専修学校におけるインクルーシブ教育の取り組み状況について見ておきたい。まず、問10では「インクルーシブ教育への取り組みについて貴校がおこなっている内容を選択してください。」という教示のもと、7つの選択肢から該当する取り組みを複数選択してもらった。その選択数を見ると、表1の通りであった。

表1 インクルーシブ教育の取り組みの数と校数

インクルーシブ教育の 取り組みの数	校数	割合
取り組んでいない	12	17.4%
1～3つ	43	62.3%
4つ以上	14	20.3%
合計	69	100.0%

表1より、インクルーシブ教育に取り組んでいない学校数は12校（17.4%）、取り組みの数が1～3つの学校数は43校（62.3%）、取り組みの数が4つ以上の学校数は14校（20.3%）であることがわかる。

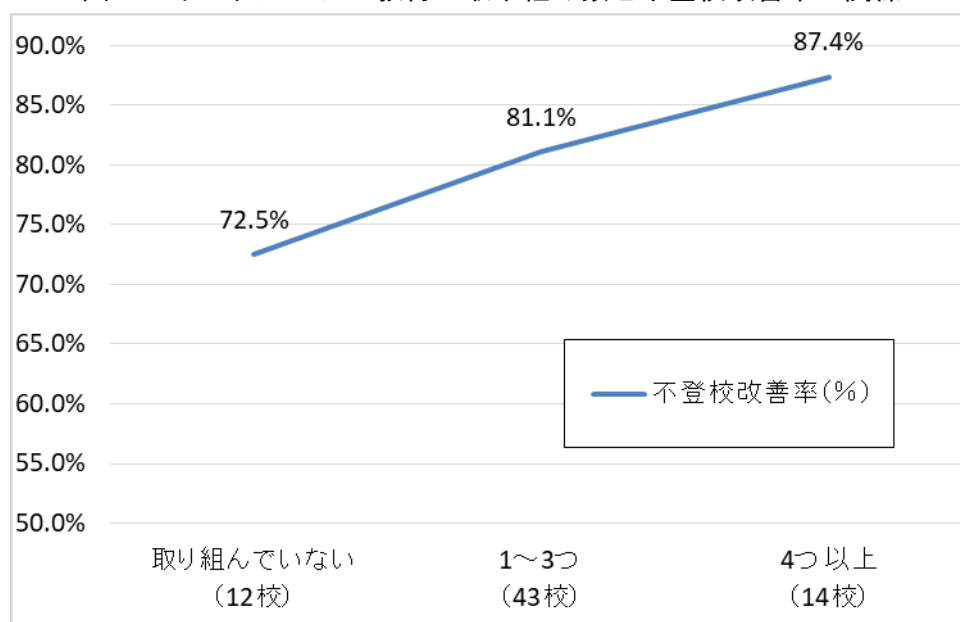
具体的な取り組み内容に関しては、「ア. 小人数クラスの編成」「イ. 個別指導の充実」「ウ. 生徒同士と一緒に学べる仕組みづくり」「エ. 座席の配置や教室の掲示の工夫など、学習環境への配慮」「オ. 補助教員の導入」「カ. SNSやICTを利用した教育支援システムの導入」「キ. その他」の7つの選択肢から該当するものをいくつでも選択してもらった。本調査の集計結果を見ると、高等専修学校がおこなっているインクルーシブ教育の取り組みは「イ. 個別指導の充実」（43.1%）および「エ. 座席の配置や教室の掲示の工夫など、学習環境への配慮」（43.1%）が最も多く、「ア. 小人数クラスの編成」（37.3%）が続く結果となっていた（本報告書13頁参照）。

#### 4 インクルーシブ教育と不登校改善の関係

##### 4.1 インクルーシブ教育の取り組み数と不登校改善率の関係

インクルーシブ教育の取り組み数と不登校改善率の関係を図2に示した。インクルーシブ教育に取り組んでいない学校（12校）の不登校改善率は72.5%、インクルーシブ教育の取り組み数が1～3つ（43校）の不登校改善率は81.1%、インクルーシブ教育の取り組み数が4つ以上（14校）の不登校改善率は87.4%であり、インクルーシブ教育の取り組み数が増えるほど、不登校改善率は高い傾向にあることが読み取れる。では、どのようなインクルーシブ教育の取り組み内容が不登校改善率をより高めるのか。次に、インクルーシブ教育の具体的な取り組み内容と不登校改善率の関係を見ていく。

図2 インクルーシブ教育の取り組み数と不登校改善率の関係



##### 4.2 インクルーシブ教育の具体的な取り組み内容と不登校改善率の関係

インクルーシブ教育の具体的な取り組み内容と不登校改善率の関係を検討するために、取り組みを実施している=1、実施していない=0のダミー変数を選択肢ごとに作成し、各選択肢と不登校改善率の相関分析をおこなった。相関分析の結果は、表2の通りである。

表2より、「ア. 小人数クラスの編成」「イ. 個別指導の充実」と不登校改善率の間に弱い正の相関が見られた。一方で、「ウ. 生徒同士と一緒に学べる仕組みづくり」「エ. 座席の配置や教室の掲示の工夫など、学習環境への配慮」「オ. 補助教員の導入」「カ. SNSやICTを利用した教育支援システムの導入」「キ.

その他」と不登校改善率の間にはほとんど相関は見られなかった。特に、「イ. 個別指導の充実」と不登校改善率の間には1%水準で有意な正の相関が見られた。この結果は、個別指導の質および量の充実が、不登校改善に有効であることを示唆している。そこで、インクルーシブ教育の取り組みのひとつである「個別指導の充実」に注目し、カウンセリング教育及びカウンセラーの配置等の有無と不登校改善率の関係を見ていきたい。

表2 インクルーシブ教育の具体的な取り組みと不登校改善率との相関

インクルーシブ教育の具体的な取り組み	不登校改善率との相関	有意確率
ア. 少人数クラスの編成	弱い正の相関	10%
イ. 個別指導の充実		1%
ウ. 生徒同士と一緒に学べる仕組みづくり	ほとんど相関無し	N.S.
エ. 座席の配置や教室の掲示の工夫など、学習環境への配慮		
オ. 補助教員の導入		
カ. SNSやICTを利用した教育支援システムの導入		
キ. その他		

注 弱い正の相関＝相関係数が0.2～0.4、ほとんど相関無し＝相関係数が-0.2～0.2

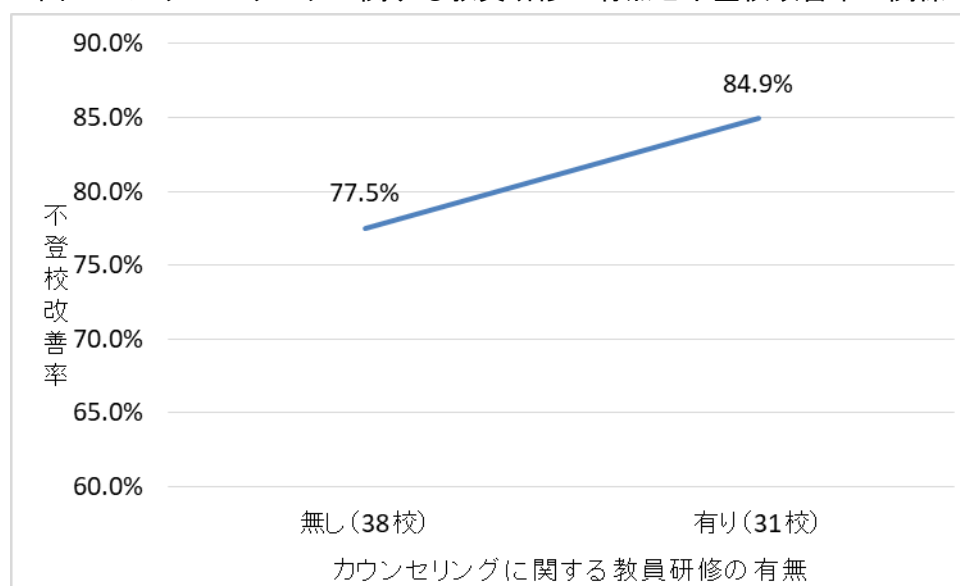
#### 4.3 カウンセリング教育及びカウンセラーの配置等と不登校改善率の関係

問11から問14では、カウンセリング研修及びカウンセラーの配置等について質問を行っている。それぞれの回答と、不登校改善率の関係を順に確認していく。

##### (1) カウンセリングに関する教員研修（問11）

カウンセリングに関する教員研修の有無と不登校改善率の関係を図3に示す。カウンセリングに関する教員研修が「有り」と回答した学校の不登校改善率は84.9%であり、「無し」と回答した学校の不登校改善率（77.5%）に比べて7.4ポイント高かった。

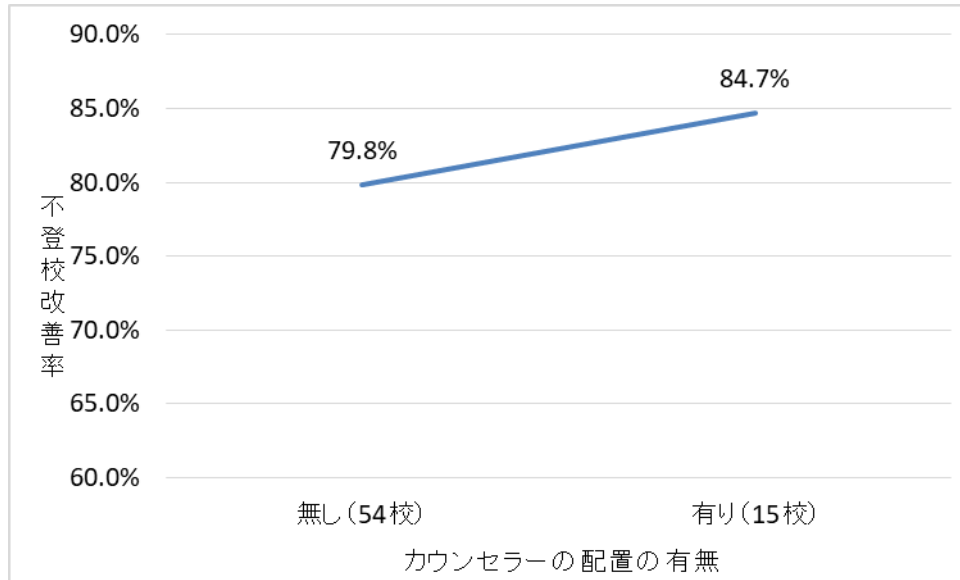
図3 カウンセリングに関する教員研修の有無と不登校改善率の関係



(2) カウンセラーの配置の有無 (問 1 2)

カウンセラーの配置の有無と不登校改善率の関係を図 4 に示す。カウンセラーの配置が「有り」と回答した学校の不登校改善率は 84.7% であり、「無し」と回答した学校の不登校改善率 (79.8%) に比べて 4.9 ポイント高かった。

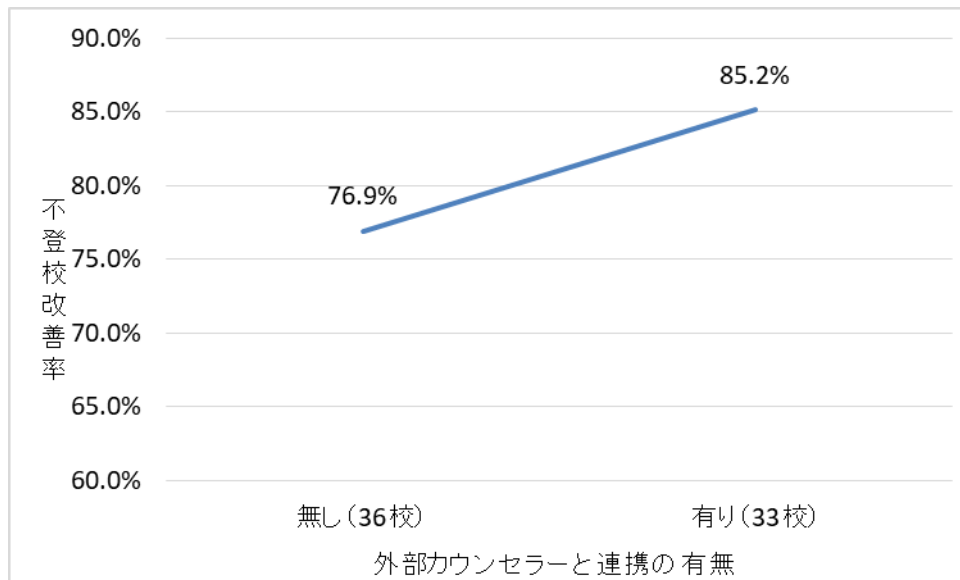
図 4 カウンセラーの配置の有無と不登校改善率の関係



(3) 外部カウンセラーとの連携の有無 (問 1 3)

外部カウンセラーとの連携の有無と不登校改善率の関係を図 5 に示す。外部カウンセラーとの連携が「有り」と回答した学校の不登校改善率は 85.2% であり、「無し」と回答した学校の不登校改善率 (76.9%) に比べて 8.3 ポイント高かった。

図 5 カウンセラーとの連携の有無と不登校改善率の関係

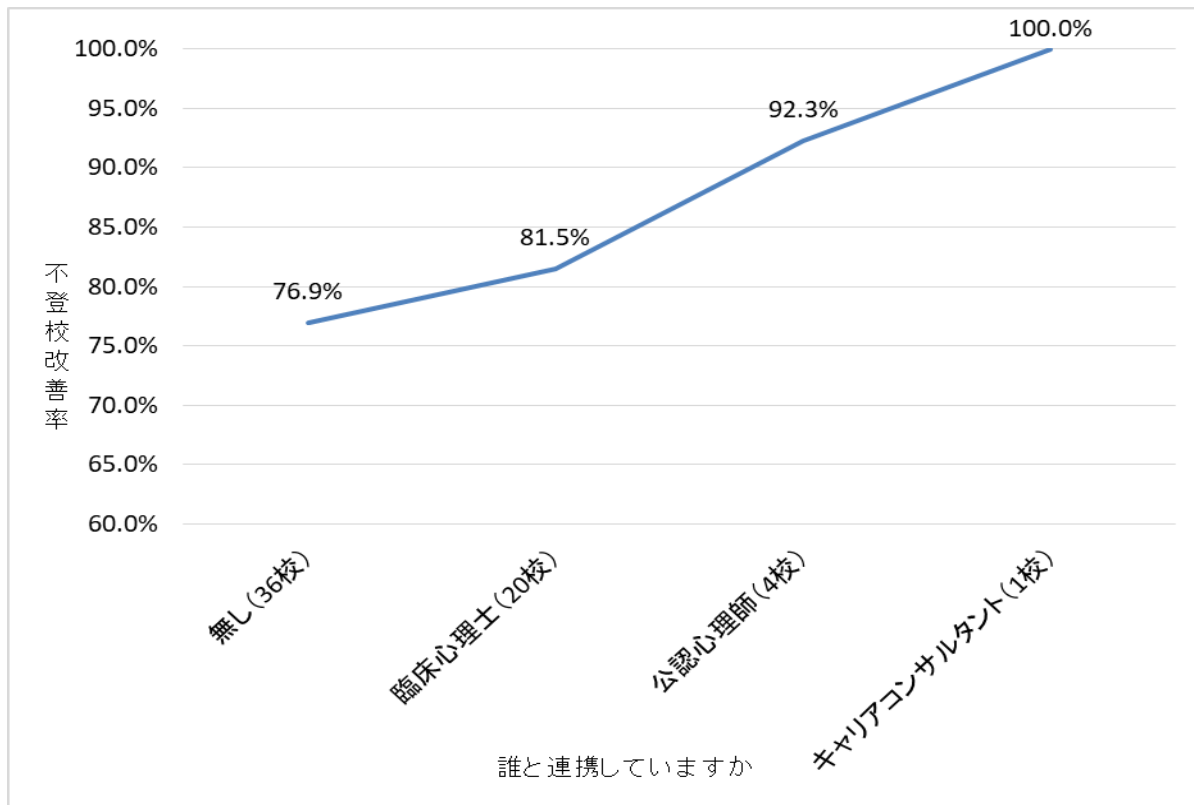


(4) 外部カウンセラーの種類と不登校改善率 (問 1 3)

外部カウンセラーの種類と不登校改善率の関係を図 6 に示す。不登校改善率は、キャリアコンサルタント (100%) が最も高く、公認心理師 (92.3%)、臨床心理士 (81.5%) の順に続く。ただし、キ

キャリアコンサルタントと連携する学校数が1校と限られている。そのため、この結果から直ちにキャリアコンサルタントとの連携が不登校改善率に有効であると結論づけることはできない。

図6 外部カウンセラーの種類と不登校改善率の関係



## 5. まとめ

本稿では、これまで高等専修学校がおこなってきた教育活動上の様々な取り組みをインクルーシブ教育の概念から捉えなおし、取り組みの具体的内容や程度と、不登校改善率の関係を見てきた。結果、(1) インクルーシブ教育の取り組み数が多いほど、不登校改善率が高い傾向にあること、(2) とりわけ「個別指導の充実」が、不登校の改善を促す可能性があること、(3) カウンセリングに関する教員研修をおこなっている学校ほど、不登校改善率が高いこと、(4) カウンセラーを配置、または外部カウンセラーと連携している学校ほど、不登校改善率が高いこと、(5) キャリアコンサルタントや公認心理師、臨床心理士と連携している学校ほど、不登校改善率が高いことが明らかになった。以上の結果から、高等専修学校が学びのセーフティーネットとして更なる機能向上を図るために、高等専修学校および高等専修学校を取り巻く関係者に求められることは次の通りである。すなわち、高等専修学校は教員のカウンセリングスキル向上や外部カウンセラーとの連携を深めること。また高等専修学校を取り巻く関係者は、それらが促進されるような支援をより強化することである。ただし、本稿は不登校改善率に焦点をあてたものに過ぎない。今後は、高等専修学校のもうひとつの特徴である職業教育の側面からも、検討をおこなう必要がある。

## 注

- 1 文部科学省(2019)「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」を参照。
- 2 本稿の分析は、2019年12月31日時点の集計結果にもとづく。
- 3 堤英俊(2018)「日本におけるインクルーシブ教育の日常化の課題—〈理想〉と〈現実〉の相克を巡って」(湯浅恭正・新井英靖編著『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版)を参照。

## Ⅱ. 『高等専修学校の4つの特徴』から見たアンケート結果の分析と考察

今年度のアンケート結果に関する分析と考察については、文部科学省のホームページにも掲載されているパンフレット『未来をひらく高等専修学校』で取り上げられている「高等専修学校4つの特徴（仕事に活かせる資格を取得できる！・不登校経験者の自立を支える！・多様な個性のある生徒の自立を支える！・夢の実現をサポートする!）」に準じて、各特徴を代表する高等専修学校からもそれぞれの見地でのコメントをいただいている。

### 『仕事に活かせる資格を取得できる!』高等専修学校としての見地

大竹高等専修学校  
教諭 大竹 嘉明  
(実施委員会・調査研究分科会委員)

本校は調理師、美容師の国家資格の取得を目指す学科を持つ。以下に実態をもう少し詳しく記載する。

#### 問5

- ・不登校生徒：5名。国家資格の養成施設という性質上、登校が必須の為、通常は受入を行っていない。「環境さえ変われば、通えるようになるはず」と中学校の先生から確証を得ている生徒のみ、若干名の受入を行っている。
- ・高校中退者：0名。3年間を通して養成施設のカリキュラムを修了するという制度上、転入の受入を行うことはできない。1年生4月からやり直しであれば受入は可能だが、現状では過年度生は在籍していない。
- ・外国人生徒：0名。国家資格を得る為の勉強には日常会話以上の日本語が必要な為、日本語に問題がある生徒の受入は難しい。父母いずれかが外国人という家庭の生徒はいるが、どの生徒も幼少期より日本で育っており、専門学科の教科書を問題なく読解している。

#### 問6

- ・発達障害：0名。国家資格を得る為の勉強は難しい為、知的障害を持っていては習得が困難と考えている。よって受入は行っていない。
- ・身体障害：0名。過去相談を受けたこともあった。その際は、専門教科の実技において、支障が予測された為、話し合いの元、辞退して頂いた。(背骨の発達不全が理由で低身長であり、調理台に届かない。又重いものが持てず、フライパン等調理器具の取り扱いが困難と予測された)。

#### 問7

- ・大学：資格・就職志向が強いご家庭が多い為、例え相応の学力があった場合でも大学に進学することは現状では稀である。
- ・専門学校：調理師科においては上級資格である「栄養士」を取得するべく、専門学校に進学する生徒は多い。その他は、保育士や看護師など国家資格の取得を目的に進学するご家庭が多い。
- ・就職：調理師科、美容師科ともに関連分野に就職する生徒が大半である。

#### 問18

- ・概ね以下の流れで、生徒達の就職活動を支援している。
  1. 過去に卒業生が就職した企業へ求人依頼
  2. 企業を招いてのガイダンスや学内説明会を実施  
※特に卒業生が就職後に定着している企業を中心に。
  3. 校外の就職説明会にも参加  
※「自宅から通いたい」という希望が近年多い為、地域の説明会には積極的に参加している。

#### 4. 職場体験実習の実施

#### 5. 進路教員と企業との密な連携

##### 問19

卒業後4月、5月で卒業生就職先企業へ訪問し、卒業生の様子を聞き取りしている。企業と連絡を細かく取り合うことで、離職時も企業から連絡をもらえるようになり、卒業生の動向が把握しやすくなっている。離職を学校・企業いずれかの責任と捉えず、共に一層の定着化に取り組んでいる。

##### 問20

- ・校務分掌の見直し：国家資格に向けての補習や文化祭等、専門教科の教員の負担が多くなりがちである。校務を一律教員に均等割りせず、一般教科の教員に校務を多めに負担してもらうようにしている。
- ・教員出勤日の見直し：教員のみでの出勤日が今まで多くあったが、生徒登校日以外の出勤日を絞流ようにしている。美容師科においては国家試験の時期（1～3月）に特に多忙になる為、年度前半で多く休みが取れるようにする等、年間通して、その他教員の出勤日数と均一になるように調整をしている。
- ・長期休暇の確保：国家資格の養成施設では、生徒が授業に休めば、その分補習を課せねばならない。補習実施は土曜日が多く、特に専門教科の教員は出勤日数が多くなりがちである。その為、夏期・冬期には今まで以上に長期の休暇が取れるように年間スケジュールを組むようにしている。
- ・放課後の業務見直し：生徒への技術フォロー等は朝に回し、定時に帰れるようにしている。

### 『不登校経験者の自立を支える！』高等専修学校としての見地

細谷高等専修学校

事務長 細谷 祥之

(実施委員会・調査研究分科会委員)

本校はライフデザイン科を設置している学校で、「ファッション・服飾」、「介護・福祉・保育」、「クリエイター」と幅広い分野を学びながら3年間で自分の進路を見つけていくと同時に、技能連携を結んでいる県立高校の卒業が出来る学校だ。

文部科学省のホームページにも掲載されているパンフレット「未来をひらく高等専修学校」での「高等専修学校4つの特徴」といった分類では、4つの分類を複数満たしている学校が多いが、本校も以下の通り4つすべてに該当する学校だ。

#### ①仕事に活かせる資格を取得できる

(介護職員初任者研修(旧ホームヘルパー2級)を基本的に全員取得、他)

#### ②不登校経験者の自立を支える

(中学校まで年間30日以上欠席のあった生徒が各学年3割前後在籍)

#### ③多様な個性のある生徒の自立を支える

(特別に配慮が必要な生徒も一緒に学んでいけるよう可能な限り様々な面で配慮している)

#### ④夢の実現をサポートする

(声優、漫画、イラスト、ダンス、DTM等の「クリエイター分野」をはじめ、「ファッション・服飾分野」、「介護・福祉・保育分野」と、各分野での生徒の将来の夢の実現に向けて授業を展開している)

今回のアンケート調査では、「②不登校経験者の自立を支える」について今年度から新たな調査項目「Ⅱ. 問8、問9」が加わった為そちらについて考察する。

「問8. 不登校生徒の状況について、お答えください。」について。

まず、「入学時に不登校の生徒数」についてだが、今年度の調査では3,977名が「中学校までに不

登校を経験していた生徒」となっている。全体の在籍生徒数16,206名の内、25%以上の生徒が中学校までに不登校を経験していた生徒であり、普通高校と比較すると高等専修学校が如何に不登校を経験した生徒の中学校卒業後の受け皿として重要な役割を担っているかが読み取れる。(2019年10月17日に公開された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、中学校での不登校生徒数の割合は6年連続で増加傾向にあるが、それでも過去最高を記録した平成30年度の数値が3.65%(119,687名)であり、高等専修学校の25%と比較すると、高等専修学校が非常に多くの不登校経験者の中学校卒業後の受け皿となっていることが推察される。)

さらに重要な点は、高等専修学校が不登校経験者の受け皿となるだけではなく、不登校を経験したその生徒達が3年後にきちんと社会に出られるようしっかりと教育活動を行っている点であり、その第一歩として如何に毎日登校できるように生徒達を育成していくか、面倒を見ていくか、ということだ。

そちらについては、同じ設問内「不登校が改善した生徒数：6割弱」、「不登校が改善傾向にある生徒数：2割強」という結果で、合計すると不登校経験のある生徒についてなんと約8割の生徒が改善または改善傾向にあり、奇跡的ともいえるような大変素晴らしい成果(数字)を残している。当然そのためには、そうなるための学校側の日々の努力の積み重ねが土台にあるのではと考えるが、そちらについては「問9.不登校生徒に対する具体的な改善策をご記入ください。」から読み取れる。

各学校から様々な具体策をご回答いただけたが、そのほとんどが、各学校及び教職員の方々一人一人が多くの経験をもとに様々な工夫を行い、手間をかけ、時間をかけ、費用をかけ日々努力を積み重ねている事例であり、中学校までに不登校を経験していた8割の生徒が改善または改善傾向にあるというのは、その結果であるということが読み取れる。

一方で、前述のデータから考察すると、119,687名の「中学校での不登校生徒数」に対し、高等専修学校での「入学時に不登校の生徒数」3,977名という数字は、中学校での不登校生徒のほとんどは高等専修学校以外の学校へ進学等をしているということが読み取れる。高等専修学校に約20年間携わってきたことによる個人的推測だが、その大きな要因が高等専修学校という学校(学校種)をよく知らないことに起因しているのではと推測する。

中学校での不登校生徒数が6年連続で増加している現在、高等専修学校4つの特徴の一つである「②不登校経験者の自立を支える」といった側面は、高等専修学校が社会にとって非常に重要な役割を担い続けているという意味で今後もしっかりと継続していく必要があり、それと同時にそのような学校種(高等専修学校)があるという事実を、不登校を経験した生徒及びその関係者に広く周知する目的で、高等専修学校(学校種)の社会的認知を確立していくことが今後行政及び私達「高等専修学校」関係者に残されているひとつの課題であると考えます。

## 『多様な個性のある生徒の自立を支える!』高等専修学校としての見地

岩谷学園高等専修学校

理事長 岩谷 大介

(実施委員会・調査研究分科会委員)

岩谷学園高等専修学校はメディア・情報科を設置しており、商業実務分野として登録をしています。主に一般科目+専門科目(ビジネス系、商業系、パソコン系の技能実習科目)を組み込んでいます。また、ゼミも行っており、社会で生きるキャリア教育が特長です。資格取得に関しては情報系検定(全商ビジネス文書実務検定、全商情報処理検定 他)、商業系検定(日商簿記検定、全経簿記能力検定、全商・珠算電卓検定 他)、その他(日本漢字能力検定、実用英語技能検定 他)を3年間で学び進路実現をしてお



ります。また、技能連携を結んでいるため、「高等専修学校卒業資格」と同時に「高等学校卒業資格」を得る事もできます。

問1：全体アンケートと並行している数字であり、特段①～④で大幅なずれはないと思われませんが、④に関しては岩谷全体数の1割である事から非常に高い数字であると言えます。

問3：母子、父子の割合は岩谷全体数としては低いと思われま

す。問5、6に関しては、不登校生徒数は22名と岩谷全体数の1割以上です。(ただし、この数字は純粋な不登校として)発達障がいに関しては岩谷全体数の7割弱であり、非常に高い数字であると思います。どちらも積極的に受け入れを行っており、積極的に学校に“楽しく”通えるように支援サポートを行っております。教職員は【傾聴】良く話を聞き面談を多く行い、【受容】ありのままを受けとめて認め、【信頼】生徒を信じ任せて気づきをあたえる事を大切に、共感をすることで生徒本人に前向きな気持ちを目覚めさせる事を重要としています。不登校であったり、発達障がいを持ち、中学校時代に上手く周囲とコミュニケーションが取れない生徒達であったり、そしてその保護者や担当の先生方が、このような事を柱に支援サポートを積極的に行う“学びのセーフティーネット”の高等専修学校があると広く認知し、進路選択の一助となっている事が伺えます。これからも認知が上がり、希望者が増加する事が予想されます。

問7：当校の大学進学は一桁であり、専門学校進学者4割弱と福祉就労者が4割弱と同等の数値です。専門学校は大手校や単科校含めて希望は多くいますが、高等専修学校で培った技能技術を活かせる学校へ進む傾向もあれば、漫画、アニメなど自分の“好きな事”を自己実現するために進学するケースも見受けられます。福祉就労者に関しては、発達障がいの受け入れを積極的に行っているから非常に多い数字を出しています。

問8：不登校の中には多くはありませんが、精勤賞を受賞した者もいます。また、改善傾向にある生徒も6割と非常に高い数字を出しています。教員が家庭訪問をしたり、面談を多く実施したりと、細かな支援フォローを行っているからだと思われま

す。問11、12、13、14のカウンセリング研修に関しては積極的に行っています。高等専修でのカウンセラーの配置に関してはお金の面を含めて難しい側面はありますが、そのために教員全員がフォローできる体制を作り上げる努力をしています。産業カウンセラー等々の資格を積極的に取り、生徒対応に活かしています。また、外部との連携を密に強化した対応も行っています。高等専修学校全体でもカウンセラー配置数は低く、各校大きな問題になっていると思われま

す。問15、16、17の行政や地域に関しては、高等専修学校の性質上多くの学校が連携を行っていると思われま

す。協会、校長会、進路指導協議会、障がい関係機関や医療機関とも連携を行っています。問18、19に関しては岩谷全体ではキャリアセンターを有していますのでそちらとの連携を行って対応をしています。ただ、不登校生や障がいをお持ちの生徒が多いため、担任や副担任が生徒実態の把握をしており、また保護者とのコミュニケーションも密に取れているので、主幹は学校側となります。

問20の教員の働き方改革は現在事務局含めて動いております。有給や振替の確保、時間外労働の0化、分掌見直し、業務の合理化・効率化等々です。担任含めた職位の責任の明確化など踏み込んだ所までの議論が必要となっております。現状、当校として上記は全て達成できておりますが、他校に関してはわからないのが現状です。

問21、22、23、24、25、26、27、28、29の自己評価に関しては全て行い公表もしております。どのように対応すれば公表までできるのかを分野を超えて情報共有する事が重要とも思えます。実施して公表をしない事が自分達の首を絞めてしまうかの理解が必要と思います。教育活動状況や学校関係者評価に関しても同様だと思

## 『夢の実現をサポートする！』高等専修学校としての見地

東京表現高等学院 MIICA

校長 福田 潤

(実施委員会・調査研究分科会委員)

本調査は、全国の会員校を対象に実施した高等専修学校の実態を把握するためのアンケート調査であり、本年度で8年目を迎える。

アンケート調査は10の項目から構成されており、それぞれが高等専修学校の実態を把握するための基礎データとなる。

今年度の文部科学省出版の「未来をひらく高等専修学校」より、高等専修学校4つの特徴の一つである、『夢の実現をサポートする！』高等専修学校としての見地より考察するものである。

『夢の実現をサポートする！』分野の特徴としては演劇、音楽、ダンス、デザインなど世の中には才能や高い技術力が求められる職業がたくさんあります。これらの職業では国家資格や検定などの資格を必要としないため、経験の中で技術や実力を磨いていくことが大切になってきます。高等専修学校には、中学を卒業してすぐに、なりたい職業を目指すための学びがあります。一般の高等学校の学習指導要領にとらわれない自由なカリキュラムで、エンターテインメント系やクリエイター系の授業も充実。卒業後は専門学校や大学に進学し、さらに道を究め、憧れの職業に関わる人も多くいます。若い夢を応援し、才能を伸ばす学びが高等専修学校にはあります（参考「未来をひらく高等専修学校」第I章P.14より）。

Iは就学支援金状況・授業料減免・家庭環境・不登校生徒・発達障がい等のある生徒に関する項目である。この項目は、高等専修学校に在籍する生徒の家庭の特性や経済的状況、また生徒自身の特性を把握することを目的としている。

問5は中学校時代に不登校であった生徒、高等学校中退もしくは既卒の生徒、外国人の生徒の割合を把握するための設問である。

中学校時代に不登校であった生徒の割合は、およそ2割ほどであるが、才能がある生徒が中学校時代には周囲と上手くコミュニケーションが取れず、登校が常ではない生徒が、学びたいことが学べ、周囲に同じ夢を追う環境がある高等専修学校を進路として選択することで後期中等教育のセーフティーネットとなっていることが伺える。

問6は発達障がい及び身体障がいのある生徒の割合を把握するための設問である。

夢の実現をサポートする分野としては、ほぼ該当生徒がいないが、エンターテインメント系やクリエイター系、また語学系では一芸に秀でることで職業とすることができるので、全くいないわけではない。保護者の理解と社会的な理解が進めば、その受け皿にもなれるだろう。パソコンを使う仕事でも活躍が期待される場所である。

問7は高等専修学校の卒業者の状況に関する調査である。

エンターテインメントやアーティストの養成系の高等専修学校の場合は、進学者や事務所への所属以外だと、卒業後すぐに進路決定と言えない状況があるため、他分野の高等専修学校に比べてであるが、卒業生における進路未決定者の割合はやや高くなっている。しかしながら高等専修学校では、職業教育の実践実習授業の実施において、特定の職業に進路を決めていく割合は普通高校と比べても高いと言えるであろう。

IIは高等専修学校の不登校生徒の現状についての調査である。

問8は高等専修学校の不登校生徒の状況についての調査である。

夢の実現をサポートする高等専修学校においては、中学校在学時に不登校（年度間30日以上欠席者）だった生徒は13%程度いる。全日制高校においては1.2%（平成30年度 文部科学省 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査より）であることから、夢の実現のサポートが必要

な生徒における、後期中等教育のセーフティーネットとしての役割が大きいことが伺い知れる。

Ⅳはカウンセリング研修及びカウンセラーの配置等についての調査である。

問11から問14の設問すべてに、夢の実現をサポートする高等専修学校においては、「なし」という回答になり、スクールカウンセラーについては研修も配置もなされていないのが現状である。しかしながら、Ⅱの調査により回答している通り、おなじ後期中等教育の高等学校と比べて、在校生の多くが不登校を経験している。そのことからスクールカウンセラーの研修や配置が必要であるのは明白である。

高等学校のスクールカウンセラー配置率は85.8%（平成29年度 文部科学省学校 保健統計調査より）となっており、高等専修学校との格差が歴然としている。是正が求められる。

Ⅵは学びのセーフティーネット機能の充実強化についての調査である。

問18はエンターテインメント系もクリエイター系も在学中から積極的にインターンシップに行くよう指導している。インターンシップに行くことで現場の空気や求められるレベル、目指すべき目標がよりクリアになり、学校での学モチベーションにつながる。また、インターンシップ先の企業で就職をする生徒も見受けられる。また、夢の実現をサポートする高等専修学校においては企業への就職というよりは、フリーランスとして活動する卒業生が多いのも大きな特徴である。

# 第3章 地域振興分科会による地域連携委員会の実施

## 3-1 地域連携委員会のイメージ（東京都の取り組みを例に）

昨年度より地域振興分科会内で実施している地域連携委員会は、東京都専修学校各種学校協会が進める『平成30年度専修学校振興構想懇談会』内にある「高等専修学校検討部会」（以下の参考資料内の赤枠③の部会）モデルに、全国各地域の高等専修学校で展開している。

参考資料

平成30年度下期 専修学校振興構想懇談会の設置の概要

平成30年11月28日資料  
東京都専修学校各種学校協会

### 事業の概要

①専修学校構想懇談会設置の目的  
専門職大学等の制度化など職業教育体系の大きな転換期を迎える中、平成15年に設置し、提言を行った専修学校構想懇談会の総括を行うとともに、現在の専修学校をとりまく環境を再確認し、専修学校教育の質の保証、社会人の学び直し、留学生教育等の確に对应するため、専修学校における職業教育のあり方等について調査研究を進め、具体的な施策を関係機関等に積極的に提言する。

②振興懇談会の運営方法  
専修学校にかかわる全体像について、現状の分析・課題等を検討し、骨格となる議論を行う構想懇談会を設置する。構想懇談会のもとに、より詳細な議論を深めるため、作業部会を設置する。作業部会は専門学校作業部会、高等専修学校作業部会を設置し、それぞれの課題、提言をまとめる。

③研修会セミナーの開催  
これら研究のプロセス、研究成果などについて、研修会、セミナー等を適宜開催し、専修学校及び関係者の共通認識の醸成と情報の共有を図る。

### 事業の推進体制

事業総括：振興対策部

①専修学校構想懇談会

②専門学校  
検討部会

③高等専修学校  
検討部会

各検討部会の下部に、必要に応じ小委員会を設置する

### 各会議の役割と構成

①構想懇談会（懇談会総括）  
・旧構想懇談会の総括（懇談会の成果と残された課題等）  
・専修学校の現状での諸課題と今後の全体像  
・各検討部会の役割分担と成果の統合  
懇談会メンバー  
専修学校関係者、行政関係者（文科、都）、職業教育有識者（大学教授等研究者）ほか

③高等専修学校検討部会  
・高校ではなしえない高等専修学校の役割（調査、背景分析）等  
・高等学校との格差についての調査と研究  
・高等専修学校創設のあり方  
・検討部会としての成果報告書の作成 他  
構成メンバー  
高等専修学校関係者、行政関係者（文科、都（私学部・教員）  
中学校関係者、有識者（大学教授等研究者）

### 平成30年度スケジュール

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	
		振興対策部 懇談会準備作業				振興構想懇談会		
			検討部会①	検討部会②	検討部会③ 中間報告のまとめ			
30年度においては2つの検討部会がそれぞれ年2回程度の検討部会を実施する								
必要に応じて調査等を実施							中間報告発表会	

### 専修学校振興懇談会 取組と目標

（取組計画）

各検討部会による審議  
・課題の整理  
・観点、方向性の整理・確認  
・テーマの設定  
・先の懇談会の総括  
学校視察  
懇談会によるまとめ

年度のまとめ  
・各検討部会のまとめ  
・振興懇談会としてのまとめ  
・次年度の計画

調査の実施  
・専修学校団体  
・所轄庁  
・産協団体  
・業界団体等  
ヒアリングの実施  
調査結果のまとめ

提言内容の整理・素案づくり  
・提言書の構成  
・提言先の検討

年度のまとめ  
・各検討部会のまとめ  
・振興懇談会としてのまとめ  
・次年度の計画

まとめ  
・各検討部会のまとめ  
・振興懇談会としてのまとめ  
・提言の発信の検討

と  
各  
方  
向  
性  
の  
打  
ち  
出  
し

↓

検  
討  
の  
方  
向  
性  
と  
現  
状  
の  
諸  
課  
題  
と  
調  
査  
の  
実  
施  
・  
提  
言  
の  
素  
案  
の  
作  
成

↓

提  
言  
内  
容  
の  
発  
信

（30年度達成成果）

- ・各検討部会による課題整理
- ・検討の方向性の決定
- ・先の懇談会の総括
- ・年度の検討のまとめ
- ・報告会の開催

（31年度達成成果）

- ・実態調査の実施
- アンケート調査
- ヒアリング調査
- ・調査結果のまとめ
- ・提言の素案
- ・シンポジウム開催

（32年度達成目標）

- ・素案の検討
- ・関係機関との調整
- ・提言の発信
- ・シンポジウム開催

ゴール目標 7月

今年度も引き続き、全国12か所（北海道・福島・茨城・東京・神奈川・愛知・大阪・兵庫・徳島・山口・佐賀・沖縄）において、本書6ページ記載の【学びのセーフティネット機能の充実強化のために取り組むべき具体案】に準じた内容で、各地域で培ってきた地域連携の現状をまとめるために、地域振興分科会を中心に地域連携委員会の実施を計画。今年度はその内8地域（北海道・茨城・東京・愛知・徳島・山口・佐賀）で本会が開催された。期間中2回実施した学校もあり、多くの地元委員から意見を聞くことができた。

各地域の委員の所属を見てみると、県私学課支援室室長や市町の教育長、地元中学校の校長会会長、中学校進路指導研究会会長、企業管理部長など、これまで連携を取って組織はもちろん、つながりがなかった組織とも情報交換ができる場として、また高等専修学校の社会的認知度向上の機会として効果的な委員会となった。今後、他地域でも「チーム高等専修学校」の構築が加速する要因となることが期待される。

以下各地域の連携委員会での協議内容を報告する。

## 3-2 北海道（担当校：北見商科高等専修学校）

◀第1回地域振興分科会（北見市内小・中学校生徒指導担当教員対象講演）▶

○実施日時：令和元年12月5日（木） 14：00分～15：00

○実施場所：北見市民会館 小ホール

○構成委員：北見市内小・中学校生徒指導担当教員

○議題・報告内容（抜粋）

### 1) 開会のあいさつ（村元 正彦 北見商科高等専修学校校長）

本校は昭和31年認可の北見簿記専門学校開校以来、64年目を迎える商業科の高等専修学校で、北海道有朋高等学校との技能連携制度によって高等学校の卒業の資格を取得できることが特徴である。近年では中学校在籍時に不登校であった生徒や特別支援学級に在籍していた生徒が入学しており、当地域において、通常の高等学校に進学が困難な生徒にとってセーフティーネットの役割を果たしている。これからも地域にとって必要な存在となれるように努力していきたい。

### 2) 本校の現状（藤澤 章 北見商科高等専修学校 教頭 ※以下3）・4）も同様）

本校は昭和31年4月に北見簿記専門学校として認可開校、創立64年目の商業科の高等専修学校である。開校以来、平成の中頃までは近隣の公立高等学校受験に合格できなかった生徒が不合格となり消極的理由で入学してくる生徒が多く、教育成果があがらないばかりか、生徒指導に関わることに多くの時間を割かざるを得ない状況の中、地域社会においても評価は決して芳しいものではなかった。そのような中で平成16年頃より、不登校の生徒など特別な配慮の必要な生徒を受け入れ、今までのいわゆる素行面で問題のある生徒をたとえ募集定員に満たない場合であっても入学選抜試験の場で受け入れの可否についてきちんと精査すること。また、受け入れた生徒に対しては卒業・そしてその先へつなげるため、習熟度別少人数制の学習支援体制を取り入れるとともに、総合選択授業の導入や学校行事の見直しなどを進め、安心して通学してもらえるような学校環境づくりを行ってきた。学校改革には約10年の年月がかかったが、現在では地域社会において、不登校だった生徒が安心して通学できるようになる学校、不登校生徒がリスタートできる学校という、中学校からの評価を頂けるようになった。また、当地域でも年々増加している知的・発達障がい（軽度）の生徒、先天的な疾患を抱えた生徒についても、本校を選んで入学してくるようになっており、その割合は徐々に増えてきている。ただしあくまでも本校は資格や技能取得を主眼とした高等専修学校であり、より高いレベルの進学や就職を果たしていけるようこれからも務めていきたいと考えている。

### 3) 本校の教科指導体制

本校は当地域における所謂インクルーシブ教育の先駆けとして、一部の障がいを抱えた生徒が健常な生徒とともに不登校経験者を含め、同じ教室で学ぶ体制を取っている。そのため学力差が極めて大きく生徒の理解力にも大きな差がある。そのため、習熟度別少人数制学習を取り入れ、苦手な生徒の多い国語・数学・英語などの一般科目の他、商業科目の簿記をグループ別学習として行っている。在籍生徒に対する毎年の学校評価アンケートでもこの制度は好評で、中学校で高校進学の際の進路指導においてこの本校の学習スタイルを知り、受験先選定の際に本校を勧めてくださっているとの話をよく耳にするようになっている。近年では当地域の他の高等学校でも導入しているとの話も聞いている。

一方、生徒の希望する進路も多様化しており、商業実務分野のみならず他の多くの分野へ進みたいというニーズがある。高いレベルの進路を希望する生徒もあり、そういった生徒に対しては放課後の完全個別学習でのサポートや商業科課程では学ばない教科指導にも取り組み、現役で大学薬学部や臨床心理分野の大学、看護学校、臨床検査技師養成校などに卒業生を輩出するなど高いレベルの進学にも取り組んでいる。近年の取り組みとしては情報処理分野の資格・技能習得に力を入れ、情報処理技能関連の全8種目の資格全てで1級に合格する生徒を多数輩出、特に平成31年3月卒業の生徒は12名の生徒が達成し、在籍学校別として全

国一の実績をあげている。このことが生徒たちの自信と達成感につながっており、生徒の検定取得に対する意欲も例年大きく向上している。

#### 4) 本校の生活指導について

かつて不登校であった生徒などが多く入学してくることなどもあって、本校の生徒のメンタリティは総じて弱い。また、教員からのあらゆる面での指導に対しても理解できない生徒が多くいる。家庭教育がきちんと為されて来なかった事が伺われる生徒も数多く、通常の生徒指導体制では効果がないことも多い。そこで、本当の意味で効果ある生徒指導、人間力を向上させるための生徒指導として本校で取り組んでいることは「わかりやすい生徒指導」である。本校は近年、飲酒・喫煙・暴行・金銭面などの非行にかわって、最も多いのが携帯電話に関する交友関係のトラブル（SNSなど）に関する事柄と、家庭内でのトラブルが多くなってきている。罪の意識が薄い生徒も多く、指導の効果を上げるためにも適切な言葉やタイミングを選び行わなければならない。近年の生徒は人前で指導されることを極端に嫌う傾向があり、そのため指導事項があった場合は個別に対応することを原則とし、指導を受ける生徒がなぜ指導を受けているのかを理解できるように適切な指導環境を整え時間と手間をかけて行わなければならない。

#### 5) 質疑応答など

【A小学校】小学校でも不登校生徒の問題は深刻で、卒業した後の子供たちの行き先については心配も多いが、そういった生徒を受け入れてもらえる先として貴校のような学校がこの地域にあることは今回お話を聞くことで初めて知った。小・中学校の連携や情報の申し送りなどはあるが、これからは不登校に関する情報の共有や共同での勉強の機会などがあれば、もっと多くの生徒を救うことにもつながるのではないかと。

【藤澤教頭】先ほどもお話しさせていただきましたように本校は社会に直結する資格や技能取得を目的とした学校であり、不登校の生徒や障がいのある生徒を受け入れることに特化しているわけではない。しかし実際は当地域においてそういった生徒の受け入れ先となっており、今後もそういった過去を持つ生徒の割合は増加するものと考えている。不登校の生徒についてはもともと基礎的な能力の高い生徒もあり、そういった生徒が本校に入学後に登校することができ、日々の学習に取り組むことで、卒業するまでに大きな成果をあげている生徒も多い。また、障がいを持った生徒については、個別進学相談会の開催、オープンキャンパスなどの場において、個々の生徒が持っている特性を見極めつつ、本校で受け入れることが難しいまたは適切ではないと判断した場合は入学選抜よりも前の段階で在籍中学校にその旨を伝えるようにしている。本校教員も、カウンセリングやピアサポート等の研究会に出席するなどこれまでも研鑽を積んできているが、今後は地域の小学校・中学校の先生方と共に情報交換や意見交換などを通じて交流を図り、そういった生徒を一人でも多く救うことのできるような活動ができるようにこちらもお願いできればと思う。

【B中学校】私どもの中学校からも毎年貴校へ生徒がお世話になっている。手を尽くしても不登校が改善できなかった生徒が貴校に進学後に皆勤で卒業したといった話もよく聞いているが、不登校の生徒に対する何か特別な方法があるのか、ご教示願いたい。

【藤澤教頭】私たちにも不登校の生徒に対する特別なメソッドのようなものは存在しない。教職員が一つのチームとして個々の生徒を見守ることに尽きる。担任と生徒の関係でもフィーリングが合う・あわないといったこともあるため、生徒たちには担任であるなしに関わらず、相談しやすい・話しやすい先生に相談するように、という呼びかけをしている。生徒は話をしやすい先生に相談をすることにより生徒の些細な兆候であっても把握し、その情報を教職員が共有できるように努めている。実際にはまだまだ不十分であるが、そのような取り組みの積み重ねが成果につながっているものと考えている。

## 《第2回地域振興分科会》

○実施日時：令和元年12月23日（月） 11：45～13：00

○実施場所：学校法人栗原学園 北見情報ビジネス専門学校1F 会議室

○構成委員：小野 朋之（北見市教育委員会 指導室長）

※北見市教育委員会 教育長 志賀 亮司 様代理として出席

潮田 信（オホーツク管内中学校長会 会長 北見市立西小学校長）

中崎 孝俊（北見市議会議員）

戸田 龍一（北見商工会議所 副会頭 ㈱サン園芸 代表取締役）

坂井 浩（学校法人栗原学園協力会 副会長 ㈱坂井印刷 代表取締役）

柏尾 典秀（学校法人栗原学園 理事長）・・・主催者

土澤 満（学校法人栗原学園 本部長）・・・司会

村元 正彦（学校法人栗原学園 北見商科高等専修学校 校長）

藤澤 章（学校法人栗原学園 北見商科高等専修学校 教頭）・・・発表者

（計9名）

○議題・報告内容（抜粋）

### ＜会議の目的＞

- a. 高等専修学校のこれまでの歩みについて。
- b. 高等専修学校の当地域における存在意義について理解を図る。
- c. 本学園の当地域における取組みについて。
- d. 意見を交換し委員間の交流を図る。

### 1) あいさつ・高等専修学校について（柏尾 典秀 学校法人栗原学園 理事長）

高等専修学校は全国に約300校あるが当地域には他になく、こういった教育を特色としているかなどについてはあまり知られていない。全国的組織として全国高等専修学校協会という組織があるが、その中で文科省より高等専修学校を広く知っていただくためのリーフレットが発行された。高等専修学校の特徴として習熟度別にきめ細やかな指導を行うことと人間力向上のための教育などがあげられる。数々の決まりなどにとらわれず柔軟に生徒に対応できることも高等専修学校の特徴である。不登校などの理由によって高等学校に入学が難しい生徒に対する学びの場であること。また個々の生徒に寄り添って資格取得をさせるなど、地域で活躍する人材を送り出す学校として今後とも努力していきたい。

本事業は、全国で12の高等専修学校が分科会を開催、その内容を集め、今後、高等専修学校はどうあらねばならないか、どのように地域社会に貢献していくのかなどについて調査研究するものである。

### 2) 本学園における取組みについて（藤澤 章 北見商科高等専修学校 教頭）

- ・本校の概要の紹介
- ・本校の生徒の特長とそれに対する取組みについて
- ・不登校だった生徒や軽度の発達障害を持つ生徒が入学
- ・学力の差が大きく、個々に寄り添う指導が必要であること
- ・資格の習得に対するきめ細やかな指導体制
- ・卒業後は当地域で就職する生徒も多く、地域に必要な人材として活躍していること など

### 3) 質疑・意見交換等

【坂井委員】栗原学園協力会には当地域の企業や団体167社が加盟している。学園と直接的な取引のない企業や団体も多く加盟しており、学園内の専門課程の学校も含め、地域で活躍する人材を養成している極めて重要な学園である。学園を卒業した生徒や学生のほとんどがこの地域で就労している。大都市圏の学校まで行かなくても資格や技能が習得できることは大変大きい。また商

専では、不登校の生徒や支援の必要な生徒に対し本当にきめ細かな対応を行っているという話をよく聞いている。これは当地域の他高校では決して行っていないことで、この学校がこの地域において大切な学校であると感じている。

【村元校長】現在、本校では習熟度別の使用人数制学習を行っている。例として数学は1つのクラスを3つのグループに分けている。ほかに英語や簿記、国語などもこのシステムで行っており大きな成果をあげている。不登校の生徒に対してはすべての生徒が成功しているわけではないがほとんどの生徒の登校状況が改善されている。過去の生徒の中には不登校であった生徒でも、現役で大学の薬学部に進学を果たした生徒などレベルの高い生徒が複数いる。そういった生徒に対しても個別指導なども含め対応している。

【小野委員】北見市内でも不登校生徒が大変増えている。その原因の一つとして発達障がいや情緒障がいを抱えている生徒が増えていることがあげられる。本校ではどのくらいの割合でかつて支援学級に在籍していた生徒がいるのか。

【藤澤教頭】不登校生徒の約4割の生徒がかつて支援学級に在籍していた生徒である。また本校入学後に接する中でおそらく何らかの障がいを抱えているであろうと推察される生徒も含めると半数を超えるのではないかと。

【小野委員】発達障がいにも様々な状況があるが、どの程度の生徒ならば実際に受け入れることが可能なのか。

【村元校長】体験入学や事前の個別相談会などで中学校から実際に相談等があるなかで、受験する前に一度本校まで来ていただき実際にお会いする中で判断している。本校での生活に問題があると考えられる場合は事前に他の進路へ進むようにアドバイス等行っている。だれでも受け入れているわけではなく、程度や状況に応じて受け入れが可能かどうかを判断し、事前に保護者の方にお伝えをしている。

【坂井委員】今回お話を聞く中で、「総合選択授業」というものがあつたがどのような活動を行っているか。

【藤澤教頭】総合選択授業は週2時間の実施で、洋画鑑賞や手芸、ジグソーパズルやプラモデル、トレーニング事務体験など、直接の授業や科目とは関係ないものではあるが、学校という場所により目を向けてもらい、学校のことを好きになってもらうきっかけとなればという意味での取り組みの一つである。実際にこの授業がある日は、他の登校日と比較して圧倒的に出席率が高い。また、共に活動する教員とより緊密なコミュニケーションが図れ、その後円滑に学校生活を送っていけることにもつながっている。

【中崎委員】これからは地域社会に関わる形でボランティアに対する学習も取り入れてみてはどうか。現在、地域社会で様々な年齢層を巻き込んでのボランティア活動を行っているが、近隣の高校や大学などから生徒・学生が来てくれている。野球部などのクラブ活動単位での参加もある。ほかに地域食堂という取り組みも行っていて、そこに栗原学園の生徒や学生も今までたくさん参加してくれており、特に挨拶がとても素晴らしい。また高齢者に対する接し方についても慣れていて他校からの生徒がなかなかなじめない中でとても珍しく感じている。栗原学園の生徒は卒業後、地元で就労する人が多いのでそういった人材が若い学生の内から地域社会に関わってくれることは大変意義深いものがあると感じている。

【戸田委員】商専の生徒の男女比率、また具体的にどういったところへ進学・就職をしているのかを聞かせて頂きたい。

【藤澤教頭】在校生の割合としては男女ほぼ半々である。進学先として身近に学園系列専門学校があるためにそちらへ進学し、卒業後は地元で就職する生徒が多い。就職希望の生徒はほぼ地元での就労希望で分野も製造職から経理分野、販売など多様である。例年、就職希望者と進学希望者の比



率は進学希望が7割強、就職希望が3割弱である。今年度は札幌の大学への進学希望者が複数いる。

【中崎委員】北見市内の他の私立高校との兼ね合いはどうか。昨年度から女子高が男女共学化となったが影響はあるか。

【村元校長】影響を受けたのは事実であるが、近隣の公立高校の方が影響を受けたのではないか。

【藤澤教頭】実際影響を受けたことは事実である。共学化に伴って本来であれば本校を受験してくれたであろう生徒の多数がそちらに流れている。

【戸田委員】現在は定時制の高校が、不登校生徒の受け皿になっていることがあるが。

【藤澤教頭】保護者が昼間の高校にきちんと通学させたいという意向を持っているご家庭は本校や近隣の高校へ進学させている。通信制高校の地域キャンパスもあり、そちらへの進学も増えてきつつあるようだ。実際に進学先を選択する際には中学校の先生からの勧めというものに大きく影響されているようである。

【潮田委員】私は小学校で勤務しているため、中学校卒業後の進路については情報も不足しがちである。実際に小学校でも不登校生徒を多く抱えており、中学校へ進学して以降も大変心配な生徒が数多くいる。中学校からも、その該当していた生徒が中学校卒業後にこちらの学校に進学しているという話もよく聞いている。郡部の小規模校では中学校や近隣の高校との交流や情報交換もあるが、北見市内の小学校ではそういう取り組みについてはほぼない。そういった中でこれからは小学校の段階から将来のことを見据え、学校見学をするであるとか不登校の悩みを持った保護者との情報交換などが図れるようにするための取り組みがあってもいいのではないか。中学校に入学して受験が目前に迫ってから進路を考えるのではなく、親御さんにも先を見据えることができるような取り組みを具体的に用意していくことも大切である。

【土澤本部長】本学園では、学園内で高等課程から専門課程に進学してくる生徒が多い。生徒・学生に対する指導の観点からも、生徒の特性に関する情報もスムーズに共有でき、保護者の方も安心して通学させられるなどのメリットがある。かつて不登校であった生徒が専門課程に進学後に学校生活に躰いた場合でも、高等課程の先生と連携してそれを乗り越えているケースも多くある。

### 3-3 茨城県（担当校：細谷高等専修学校）

《第1回地域振興分科会》

○実施日時：令和元年12月2日（月）14：00～16：00

○実施場所：細谷高等専修学校 礼法室

○参加委員： 萩野谷 匡（筑西教育委員会指導課長）

嶋山 和也（筑西市立下館南中学校校長）

大武 浩治（筑西市立明野中学校校長）

今庄 義基（筑西公共職業安定所）

上野 怜（学校法人細谷学園理事）

村上 義孝（株式会社エデュース代表取締役）

細谷 貢（細谷高等専修学校校長）

細谷 恭子（細谷高等専修学校教頭）

細谷 祥之（細谷高等専修学校事務長）

（計9名）

## ○議題・報告内容（抜粋）

### 1) 今年度の事業概要説明

企画提案書の中の地域振興分科会がこちらの会議で、12の都道府県を代表としてピックアップして高等専修学校の特色を吸い上げて全国としてまとめる形を予定している。

全国で協会に入っている学校が200校位あり、高等専修学校としてはもっと多いが、「大学入学資格付与（高等学校卒業程度）指定校」（卒業すると高卒と同等であると文科省で認められている学校）に限定すると約200校となる。高等専修学校がとても多い県もあるが茨城県は本校のみとなる。

今年度のテーマに関しては、「高等専修学校の地域と連携した特色あるカリキュラム」についてまとめるということであり、可能であれば地域の方々と連携したカリキュラムがあればそちらを中心にまとめていただきたい。

#### ①水戸南高校との連携

・普通科目について、Bコース（茨城県立水戸南高等学校ライフデザイン科も卒業）を選べると水戸南高校の先生が本校にきて授業を行ってくださる。

・普通科目では、時間をかけて学ぶことが必要な生徒も多いため、水戸南高校の各科目に対応した形で普通科目が細谷高等専修学校の時間割にも組み込まれており、細谷高等専修学校の授業でもレポート等を教えていく形をとっている。

・Bコースの普通科目の単位は、普通科の約半分の単位数に設定されていて、残りの約半分については技能連携科目（本校で行っている専門科目の授業）を学習することで高校の卒業資格が取得できるよう認めていただいている。本校の生徒は一日中座学だと難しい生徒が多い反面、普通科目をまったくやらないとなると卒業後の一般常識に欠けてしまう不安もある為、普通科目が普通科の約半分、残りの半分が様々な専門科目、という今のバランスがちょうど良いのではと考えている。

#### ②介護職員初任者研修

13年前から株式会社つくばエデュースの方に御指導いただき、特別集中講座の形で基本的に全員で資格取得できるようカリキュラムを組んでいる。

#### ③介護・福祉・保育総合専攻

将来介護等の進路を具体的に考えている生徒がより時間をかけてじっくりと実力をつけていけるよう、実際の事例を含めながらご指導いただいている。

#### ④クリエイター総合専攻

プロの声優さん、プロの漫画家の先生等、各分野での現役のプロの先生をお願いし御指導いただいている。

#### ⑤選択科目

華道（池坊）・茶道（裏千家）の先生をお願いし御指導いただいている。

#### ⑥その他

1年前から陸上部ができて活発になり、例えば100M走るのには校庭が狭いため下館南中学校のグラウンドを時々お借りしている。中学校の部活動にも時々一緒に参加させていただき顧問の先生にも御指導いただきながら大会でも良い記録をだしている。

【嶋山委員】クリエイター総合専攻では、生徒の希望で科目を決めているのか。どの科目が多いのか教えて頂きたい。

【事務長】毎回全部の科目を設定するのではなく、毎回2つずつ科目を設定して、2つの中で生徒がやりたい方を選択する形式で行っている。2つの設定科目の組み合わせについては生徒に事前にアンケートをとり、基本的に全生徒が2つのうちどちらかはやりたい科目が入っているという形になるよう設定している。来年（今後）は専門学校などの進学を考えやりたいものに係わるい

くつかの科目はセットでやれるようになると良いかと思う。

クリエイターの科目を動と静というイメージで2つに分けられれば今後の進学等も含め総合的に実力をつけていく上ではさらに役立つのではないかと考える。しかし、現在楽しく毎時間好きな方を選んで前向きに学んでいる生徒のことを考慮すると簡単に進めにくい部分もあり現在検討している。

【大武委員】この学校を卒業した後の進路は、今やっているファッション・服飾、介護福祉、クリエイター関係がメインになるとと思いますが、それ以外の分野などの進路はあるのか。

【事務長】興味をもつものが一人一人違うので、勉強したものが多くはなるのですがその他の分野でも動物関係の専門学校・保育関係・幼稚園関係・作業療法士等、本当に一人一人様々です。

入学時点では、職種についてどのようなものがあるのかほとんど知らない状況ですので、いろいろな勉強をしてもらいながら決めてもらいたい。

1年生の時にだいたいの専攻のカリキュラムを体験し、9割以上の生徒は2年生から3年生に進級する際も専攻するものは変わらないが、1割弱の生徒の専攻が進級時に変わるため希望調査は年に1度行うようにしている。

卒業後に進学するか就職かとう部分では、ほとんどの生徒が何かしらのやりたいことは見つかるが、進学となると保護者の協力（金銭面）が必要となるケースが多く、そこが進学か就職かを定める大きな要因になっているように思う。

【教 頭】専門学校は希望の学校に進めて良いのだが、就職は自分の思いのままにいかないこともある。希望する職業とずれてしまうことも多いのが現状である。

【萩野谷委員】地域の連携したカリキュラムとあるが地域というとならえはどのようなとらえ方なのか。

【事務長】厳密な定義はないが、生徒が通ってきている地域というと茨城県、栃木県で考えている。中には東京からきている先生（マンガ・声優）もいるので地域からは外れてしまっているが、それ以外の先生方は地元の先生をお願いしている。

【上野委員】講師などが学校に入ってくるというのは現在やっているようだが、地域の良い素材をどう組み込んでいくかということが課題ではないか。

例えば地理 B・郷土学習のようなもので自分たちが歩いて調べるなどしていくと歴史も関わってくる。歴史と地理を一緒に学べるカリキュラムを組む。

また、現代社会…地域で郷土の偉人から学ぶ、市の観光協会、ボランティア、市役所の観光課等との連携も良いのではないか。

講師が学校に来るだけではなく、子供が自ら地域に足をむけて調べていく、アクティブラーニング、そのようなことが今回のテーマの大切なことではないかと捉えた。

【事務長】講師を呼ぶというより自分から学ぶというのが理想だ。水戸南高校の学習スタイルもどちらかという教わるというより自分でしらべて完成させていくというのが基本。

【大武委員】現代社会の分野であると倫理と政治経済というものが中心。倫理的なものでは先ほどの上野先生が話されたような内容、地域経済という観点からすると地域の都市開発論、そのようなものも多少入ってくるのではないか。そのようなカリキュラムを組むと地域との連携ということにつながっていくのではと思う。調べ学習はなかなか難しいけれども水戸南の先生との話し合いの中で、教科書を使わなくてはならない部分もあるが資料的なもので取り入れてもらうようなカリキュラムを組むと良いかと思う。

【嶋山委員】前回の会議の時にもあったが細谷高等専修学校が前の学校のイメージが強いということから今あったように、地域のイベント（下館道の駅・商工会など）をカリキュラムの中に取り組みんでいけるようになると生徒たちの動機づけや細谷高等専修学校の学習内容の発信にもなるのでは

ないか。

【萩野谷委員】筑西市内の地域の歴史のことであれば文化課等と連携していただければ資料や施設関連の情報が沢山あります。

【事務長】水戸南の授業は授業の時間数が少なくギリギリなのでいろいろと難しい部分もあるが、水戸南の科目に対応した細谷のカリキュラムにはゆとりがあるので現代社会の先生等を中心に働きかけたいと思います。

【教 頭】教科書よりも楽しそうだと思うので生徒たちも喜ぶのではないか。

【事務長】村上先生には、介護の資格取得の授業や介護の職場実習等を10年以上御指導いただいているが連携という意味でいかがですか。

【村上委員】細谷学校は実践的な学習が多いイメージ。

地域との連携と考えると今年の夏休みにつくば市の小中の学校の生徒を対象に福祉体験キャンプというものを実施したが、そのキャンプのボランティアに細谷の生徒に来ていただいた。参加した高校生も楽しそうだった。少しずつでも経験をさせていくことが大切。

2年前に県の委託事業として細谷学校で行った犬猫殺処分防止のDVDを作った際には、細谷の生徒達に実際に笠間市の茨城県動物指導センターに見学に行ってもらいながらDVDを作っていたが、県の方でもとても良い取り組みだと言われていたので他の学校ではできないのができるのは素晴らしい。

その他2月に針供養の行事をやっている。なかなか今やっている学校がないのでそんな行事も大切にしてほしい。

【事務長】針供養の神社も学校から歩いて行ける距離にあるので、針供養などの学校行事でも連携していけたら良いかと思う。

【教 頭】福祉関係にも力を入れていることもあり、つくば市で行われた福祉体験キャンプのようなイベントにも参加したいと興味を持っている生徒もいる。ただ交通手段が問題になっている。

【事務長】イベントやボランティアは様々な生徒がいるので、安心して外に出せる生徒もいるが心配な生徒もいる。どんどん経験させていきたい。

【事務長】講座等については、今年も6月頃から特別講座を10回程度行っている。

ハローワークの方には、就職の生徒も多いので毎年学年毎に違う内容で講話をお願いしている。3年生においては企業説明会もおこなっている。

【ハローワーク】希望があれば生徒の職業意識の形成という意味で講座を行っている。企業を呼んで行っていることもある。

【事務長】学年ごとに年1回ずつ行っているのですが今位の回数で良いのか。

【ハローワーク】回数を決めているわけではないが、講座は年1、2回位が基本かと思う。他の学校でも学年毎に内容を変えて行っている。

【事務長】知っている職種を書くとすると例年ほとんど知らない生徒が多いことが気になっている。

その様な知識量の個人差については、親等から家庭で学んだりする部分も多いかと思うので、家庭の状況によっても差があるようにも感じる。

現在行っている講座は筑西市の出前講座も多いが講座について他に何か入れた方が良いものはありますか。

【嶋山委員】SNS関係の講座は中学校で実施しているがそのような講座は如何でしょうか。

【事務長】まだ実施したことはないが是非やりたい。

【嶋山委員】県でも講師を派遣してくれている。市の方でも実施してくれるのではないか。

【教 頭】是非実施したい。先生が言っても生徒達が深刻な問題として受け止めない。講座等で御指導い

ただくと違うと思う。

【萩野谷委員】携帯会社では無料で行っている。

【事務長】（事務長）高校生もSNSでのトラブルが多い。中学校でもありますか。

【嶋山委員】SNSについての指導は、新入生説明会で行ったり、保護者向けの家庭教育学級でも実施しているがなかなか良くなり、減ることはない状況である。

【事務長】中学校では携帯は禁止ですが高校は遠くから通って来ている関係で送り迎え等でどうしても持たせなくてはならない生徒もいる。

【嶋山委員】他の高校も持ち込みはしている。授業中使用しない等の決まりしかないのではないかと。

【事務長】本校は朝回収して昼休みに返し、昼休みが終わるとまた放課後まで預かる学年もある。昼休みは音楽を聴いたりするために使わせている。

【萩野谷委員】昼休みはずっと携帯を使っている状況ですか。

【事務長】ごく一部ですが友達との輪の中に入りにくい生徒もいるので、そのような生徒にとっては携帯が必要とこちらで想像している部分もある。

【教 頭】携帯の使い方については学校だけの問題ではなく保護者・生徒と一緒に考えてほしいと思う。今年難しいとしても来年は携帯の講座について取り入れていきたいと思う。

#### 《第2回地域振興分科会》

○実施日時：令和2年1月9日（木）10：00～12：00

○実施場所：細谷高等専修学校 礼法室

○参加委員： 萩野谷 匡（筑西教育委員会指導課長）

嶋山 和也（筑西市立下館南中学校校長）

大武 浩治（筑西市立明野中学校校長）

今庄 義基（筑西公共職業安定所）

上野 怜（学校法人細谷学園理事）

細谷 貢（細谷高等専修学校校長）

細谷 恭子（細谷高等専修学校教頭）

細谷 祥之（細谷高等専修学校事務長）

（計8名）

○議題・報告内容（抜粋）

#### 1) 令和2年度以降の実施（拡充、縮小、見送り）を検討していく事項について

【事務長】前回検討いただいた「地域の方と連携した特色あるカリキュラムについて」は、1. 授業、2. 講座等3. その他 報告書にまとめたものをご覧ください、御意見等いただきたい。

令和2年度以降も同様に基本継続となるかと思いますが、拡充した方が良いか、縮小した方が良いのか、見送った方が良いか等も併せてご意見いただきたい旨の説明がなされた。〈各自資料確認 5分程度〉

#### 【報告書資料】

##### 令和元年度 細谷高等専修学校(茨城)と地域とが連携したカリキュラム、講座等

令和元年度に細谷高等専修学校と地域とが連携したカリキュラム、講座等及び令和2年度以降に実施検討予定の地域と連携したカリキュラム、講座等について以下に記載します。(令和2年2月以降は予定)(カッコ内市町村名は、連携している担当者及び施設等の所在地)

## 1. 授業

### ①普通科目(細谷高等専修学校 B コース全学年)(茨城県立水戸南高等学校)

(茨城県水戸市)(3 学年合計 286 時限)

県立高校の各教科の先生が細谷高等専修学校で授業や試験を行い、県立高校の卒業単位として認定。生徒は3 年間で県立高校の卒業資格を取得。

### ②介護職員初任者研修(2 年生)(株式会社つくばエデュース)

(茨城県つくば市、石岡市)(授業:44 時限)(実習:3 施設合計 198 時間)

介護福祉施設の各担当者(介護福祉士、看護師、ケアマネージャー、社会福祉士等)が介護職員初任者研修(旧ホームヘルパー2級)の資格取得に必要なカリキュラムを細谷高等専修学校で行い、県が資格を認定。生徒は2 年生で資格を取得。

### ③介護・福祉・保育総合専攻(株式会社つくばエデュース)

(茨城県つくば市、石岡市)(140 時限)

2、3 年生の専攻科目で介護・福祉・保育を専攻した生徒に対し、生徒がしっかりと実力をつけていけるよう、介護福祉施設の担当者が細谷高等専修学校で授業を行う。

### ④クリエイター基礎、クリエイター総合専攻(アニメ(筑西市)、マンガ(足立区)、声優(所沢市)、演劇(筑西市)、イラスト(筑西市)、ボイストレーニング(筑西市)、ダンス(筑西市)、スポーツフィットネス(筑西市)、DTM(デスクトップミュージック)(下妻市))

(茨城県筑西市、他)(280 時限)

1 年生の全生徒に対し現役のクリエイターが中心となり授業を行う。それを基に、2、3 年生の専攻科目でクリエイターを専攻した生徒に対し、現役のプロのクリエイターが細谷高等専修学校で授業を行う。

### ⑤選択科目 華道(池坊)(茨城県筑西市)(11 時限)

選択科目で華道を選択した生徒に対し、池坊の指導者が細谷高等専修学校で授業を行う。希望する生徒は初伝、中伝の免状を取得。

### ⑥選択科目 茶道(裏千家)(茨城県筑西市)(11 時限)

選択科目で茶道を選択した生徒に対し、裏千家の指導者が細谷高等専修学校で授業を行う。

授業	連携先	連携時間数
普通科目	茨城県立水戸南高等学校	286時限
介護職員初任者研修(授業)	株式会社つくばエデュース	44時限
介護職員初任者研修(職場実習)	株式会社つくばエデュース	198時間
介護・福祉・保育総合専攻	株式会社つくばエデュース	140時限
クリエイター基礎、 クリエイター総合専攻	各分野のクリエイター	280時限
選択科目 華道	池坊	11時限
選択科目 茶道	裏千家	11時限

## 2. 講座等

### ①6 月 14 日 職業講話(1 年生)(筑西公共職業安定所)

ハローワーク筑西の学卒ジョブサポーターの方よりご指導いただいた。なぜ働くのか?どのような働き方(アルバイト、パート、正規・非正規社員)があるのか?ハローワークでの高校生担当の部署や高校生の就職活動のスケジュール等について教えていただいた。

《講話後の生徒感想文》

正社員と非正社員(契約社員、パートなど)の違いや、生涯年収額が大きく違う事が分かりました。何億円という大

きな数なので驚きました。現在自分は、将来何に就職するかを決めていないので、今日は良いヒントをもらえたと思います。正社員では、収入や仕事の内容、雇用の安定性など、非正社員と比べてとても良いことが分かりました。調査書の部分などについては、今もう就職活動が始まっているので、欠席などせずに頑張ります。

#### ②6月26日 企業説明会(3年生)(筑西公共職業安定所)

生徒の職業意識形成を促進する目的で、社会人として求める人物像や仕事のやりがい、魅力等について3つの企業の各担当者からご説明いただいた。(①ゴルフ場、②日本マクドナルドフランチャイジー、③醤油・米菓の製造・販売)

《講話後の生徒感想文(抜粋)》

- ・お客様を笑顔にして帰ってもらう事が、何よりも大切だという事が分かりました。
- ・自分から率先して行動する事が大切だという事が心に響きました。
- ・お客様へ最善を尽くす事が、大切な事だと感じました。
- ・相手の話を「聞く」ではなく、「聴く」という事の意味が良く分かりました。
- ・「生涯勉強である」、この言葉は心に響きました。
- ・自分から進んで仕事をやる事が大切だという事を聞いて、私は指示待ちの姿勢が強いので、気を付けて生活をしようと思いました。
- ・積極性、責任感を持って何でも取り組まなくてはならないことに気付かされました。

#### ③7月10日 創立100周年記念講話(1,3年生)(細谷学園理事)

「美しい心」を育てようというテーマでご指導いただいた。童話「花さき山」の紙芝居や様々な事例を通して「美しい心(支え合う心、助け合う心、人の心の痛みや辛さを感じる心、自然を敬う心、謙虚さ、感謝する心)」について学んだ。

#### ④7月11日 職業講話(2年生)(筑西公共職業安定所)

「求められる人材」「これが必要」「自分を知る」等のテーマで、自分をしっかり見つめてこれからの職業選択に活かしていけるよう、コミュニケーション能力、協調性、積極性、基本的な生活習慣、責任感等についてご指導いただいた。

《講話後の生徒感想文》

職業講話を聞いて為になった事、役に立った事が沢山ありました。その中でもよかったと思った事が3つあります。1つ目は「求められる人になろう」です。パソコン、電話の受け答え、きちんとした言葉づかい等で、特に「電話の受け答え」が為になりました。きちんとした言葉づかいで受け答えの仕方が良くわかりました。私はよく、親がいない時に要件を聞かずに電話を切ってしまう時がありましたがしっかりと要件を聞いて切るという事が分かりました。2つ目は「これが必要」、高校生の採用で重視する事です。コミュニケーション能力、協調性、積極性、基本的な生活態度、責任感が必要だと知りましたが、ほとんど当てはまりませんでした。なので、頑張っ直そうと思います。3つ目は「自分を知ろう」です。自分の強みや長所を作ろうで、私は自分の事があまり分かっていないので長所も短所も全く見つかりません。アピールポイントも全く分かりません。なので、しっかりと見つかるまで頑張ろうと思います。他にも役に立つお話が沢山聞けました。本当にありがとうございました。3つの事を中心に頑張っ出来るようにしたいです。

#### ⑤9月12日 福祉体験(2年生)(社会福祉協議会(地域福祉推進課))

市の社会福祉協議会の方より、インスタントシニア体験・車いす体験を行った。高齢者の動きの制限や車いすでの動きを実際に体験し、他人事ではなく親身に対応する心がけを学んだ。また、生徒たちは視覚障碍者のためのユニバーサルデザインの実物(時計やレシピ本など)に触れ、興味や関心を見せた。2学期から始まる介護職員初任者研修(資格取得のための授業)に向けて有意義な体験となった。

#### ⑥9月13日 年金セミナー(3年生)(下館年金事務所)

公的年金制度に対する理解を深めるために、国民年金についてスライドを見ながらご指導いただいた。

#### ⑦9月20日 労働法セミナー(2年生)(茨城労働局)

将来の就職を見据えて、種々の労働関係の基礎事項についてご指導いただいた。

### ⑧11月7日 健康づくりのための料理教室(2年生)(筑西市食生活改善推進協議会)

市の健康福祉課より委託されたもので、若者(学生~20・30代)へ健康づくりのための料理教室という目的で実施した。調理前の講義では、食の大切さ、若者時期の健康と栄養の関係等のご指導をいただいた。

その後、1回でバランスのとれた食事を目標に、トマトの親子丼・アンチョビとゆで卵のポテトサラダを生徒と食改さんと実際につくりその場で試食した。アンチョビなど生徒にとって初めての食材もありとてもよい経験となった。

### ⑨11月29日 租税教室(1年生)(下館税務署)

市内の税理士の方にお越しいただき税についてご説明していただいた。「なぜ税金を支払うのか?」「税金は何のためにあるのか?」「税金は何に使われているのか?」等を生徒たちに身近なものを例に挙げ分かりやすくご指導いただいた。生徒への事後アンケートではしっかりと質問等を記入することかできた。

### ⑩2月21日(予定) 高校生のための無料法律教室(1年生)(茨城県司法書士会)

家庭総合、生活産業基礎の授業の一環として取り入れる。消費者に関する法律(悪質商法・多重責務・ネット犯罪など)、高校生の生活や社会に出たときに自分が犯罪に巻き込まれないように、また、詐欺などにあわないために四コマ漫画等を使ってご説明いただく予定。

## 3. その他

### ①陸上部の練習(下館南中学校)

本校陸上部の練習の際、時々地元中学校(下館南中学校)のグラウンドをお借りし、中学校の部活動にも一緒に参加させていただきご指導いただいている。

令和元年度の各大会でも好成績を残すことが出来、顧問の先生に生徒たちもとても感謝している。(全国高等専修学校体育大会:男子走り幅跳び優勝、男子100メートル優勝)(茨城県定時制通信制体育大会:男子走り幅跳び優勝、男子100メートル優勝、男子800メートル入賞、男子4×100メートルリレー優勝等)

## 4. 令和2年度以降の新規追加等検討事項

### (1)高校生に向けてのSNS講座

(県、市、携帯会社等どちらの方に依頼するか検討)

### (2)スクールソーシャルワーカーとの連携(決定)

### (3)子どもが自ら地域に出て行き調べていく学習等

#### ①福祉体験キャンプ ②茨城県動物指導センター ③筑西市立図書館

#### ④歴史と地理と一緒に学べるカリキュラム等(郷土学習、筑西市観光課、筑西市観光協会(郷土の偉人から学ぶ)、筑西市文化課))

#### ⑤現代社会に係るカリキュラム等(地域の都市開発論(地域経済の観点)、地域のイベント(下館道の駅、商工会等))

### ⑥針供養

### (4)その他

#### ①地域の適任者(道徳に係る講話等)

#### ②地域の指導者(選択科目でのチョークアート、デザイン書道等)

## 2) 来年度について拡充・縮小・見送り等の検討

### (1) 授業について

【大武委員】地域と連携することが中心に入っていると思う。②③について、つくばエデュースさんの力を借りてということは分かったが、介護福祉施設の各担当者と記載されている部分について、「そ



の施設がどこの地域のものなのか」がはっきりした方が、地域と連携したということがはっきり分かるのではないか。

【事務長】つくばエデュースさんの施設が中心となるので、その点を明記します。つくば市に2つ、石岡市に2つ、合計4施設あるので、そのあたりを記載します。

つくば市にあるため、保護者が共働き等で送迎が困難な場合、9割以上の生徒は、つくばエデュースさんの送迎用の福祉バスを利用し、朝少し早めに登校し、夕方は少し遅くなるがこちら迄送ってもらう形をとっています。

【大武委員】⑤⑥選択科目で、「華道」「茶道」と記載されているが、「地域と連携」ということを考えた時に池坊の指導者が筑西市内の方であれば、それを明記した方が地域と連携推したことがはっきり分かると思う。

【事務長】「裏千家」「池坊」に関して、そのあたりを明記します。

【嶋山委員】④についても、クリエイター総合専攻について、アニメからDTMまでこの種目を全てやったわけですね。こちらについても、筑西市内というよりは県西という形でしょうか？

【事務長】ほぼ筑西市内です

【嶋山委員】ということであれば、それも分かるような形の方が良い。名前まで入れるというわけにはいかないのでしょうか。

【事務長】だいたい皆さん、良いと言って下さると思いますが、報告書提出の時間が限られているので今回は各先生の住所を基に「〇〇市」という形で記載します。マンガ・声優の先生だけ都内で、それ以外は基本的に筑西市内の先生です。

【嶋山委員】「クリエイター専攻科の中でいくつかのものをやった」というイメージがあったのだが、実際にこの中に記載がある科目をすべてやっているということですよ。専攻の科目とは、もっとあるのか。

【事務長】記載がある専攻科目についてはすべて行っています。

現在全部で3つの専攻がある。「介護・福祉・保育総合専攻」、「クリエイター総合専攻」の他に、こちらに書いてはないが、「ファッション・服飾総合専攻」があります。ファッションについては地域と連携という形であるが、服飾に関しては常勤職員で実施しているため、地域と連携という視点では微妙な形なので今回の資料では省きました。

【上野委員】カリキュラムということを考えて、これにどのくらいの時間をかけたのかということを書き記しておく方が良い。パンフレットのカリキュラムには配当時間は書いてあるが、報告書を見ると、年間どのくらいの時間をかけているかということを書き記しておく、分かりやすい。カリキュラムということであれば、内容と時間が関係するので、時間も入れた方が、初めて見た人にも分かるのではないか。

【事務長】①～⑥まで、入れた方が良いでしょうか？

【上野委員】興味を引くのは、クリエイターとか介護とかの選択教科。そこにどれくらい時間をかけているのか、これを見た人が、年間総合トータル時間の中でどれくらいかけているのか、関心事であると思うので

【事務長】②③④を中心に、時間を追記します。

【上野委員】表が付いていれば理解できるが、見比べるのは大変かもしれない「時間がどのくらい」と書いてしまえば良い。

- 【事務長】③④に関しては、表の中に時間数がはっきり書いていないので、こちらは時間数を明記したい。
- 【萩野谷委員】④についてわかりやすさという点でみると「DTM」とは？ 「ボイトレはボイス・トレーニング」とかは分かるが、初見で「ボイトレ」とあったらわからない人もいるのでは？
- 【事務長】DTMは「Desk Top Music」の略で、楽器を演奏できなくてもPCで作曲できるものです。Desk Top Music、ボイストレーニングも含め、きちんとフルネームで報告書に記載します。
- 【上野委員】⑤⑥ 細谷学園の伝統で、和裁・洋裁、日本文化を大事にしているということで、華道・茶道を行っているが、男子生徒が増えてきたということで、男子でも華道・茶道に興味があるとは思いますが、一般的に女性の方が興味は高い。男子が増えてきたときに、選択教科が華道と茶道で良いのか、これから考えていく必要があるのではないかと。例えば、「道」が付く「書道」などは、男女関係なく実施できる。
- 【事務長】今年は、華道・茶道・書道の3つから選択する形になっている。書道については常勤講師が授業を行っているので省いてある。男子が増えてきたということで、書道の他にもう一つ選択肢があっても良いかとは感じている。2年前くらいから「チョークアート」の導入を検討している。これを進めにくい要因として、華道の先生は何十年もお世話になっているが、「チョークアート」を導入した場合、多数の生徒がこれを選択し、華道選択の生徒が少なくなってしまうのではないかと懸念している部分もあります。このため、なかなか進めにくい状況である。男子でも絵が好きな生徒がおり、どうしようかと検討している内容である。「デザイン書道」というものもあるが、上手に書くというのではなく楽しいのではないかと考えている。
- 【校長】男子が増えてきたので、飲食店関係の希望者が出て良いかなと思う。食物関係は時間をかけて行っている。しかし、そちらの希望が必ずしも多くない。
- 【事務長】サービス業、美容師でも飲食店でもそういったお店で働く場合、チョークアートが出来る店員さんが一人いると結構便利ではないかと思われる。
- 【教頭】昔は、華道だけであった。20年くらい前に茶道も行っていた時期があったが、今年からまた導入した。生徒が各選択科目をバランスよく選択するか否か等を考えると、新しい選択科目を入れるというときに、いろいろと考えてしまう。なかなかこれが良いから…というだけでパッと取り入れずらい部分もある。
- 【校長】自信のない子が多い。自分が社会に出て仕事ができるかどうか、不安を持っている。介護の勉強をすると、これをきっかけに自信も持てるようになる生徒が見られる。実習に行くまでは不安な状態であったが、実習で職場に行ってみて安心するということが多い。介護の実習が終わると、生徒の明るさ、生活態度まで大きく変わるような感じがする。就職先も介護関係が一番多い。
- 【事務長】令和2年度以降の検討事項として、「チョークアート」の導入なども考えていきたい。
- (2) 講座等 (3) その他 について
- 【今庄委員】①②④について 公共職業安定所の講話の後、アンケートを実施しているが、生徒がしっかり聴いている様子がうかがわれるので、アンケートに関することも記載してほしい。  
アンケートは、職安で回収している。
- 【教頭】本校の職員が書かせてお届けしているのか。それだと控えがあると思うのですがない時にはお借りしたい。
- 【事務長】報告書にはアンケート（感想文）等のコメントをいくつか記載したい。
- 【事務長】講座等の拡大・縮小については基本的に毎年行うことになっているが、積極的にこちらからお願いしいというよりは各団体の方からお声がけいただいて実施しているものも多い。ハロー

ワークさんの講座についてはこちらからお願いしている。これは必ずやった方がいい講座などご意見いただければと思います。

【萩野谷委員】学校での負担がなければ継続で良いのではないかな。

【上野委員】③の100周年の講話でやらせていただいたが県立高校では1・2年生が道德の授業が必修になった。私が話した内容も道德であり、年間1つくらいは道德の講話をいれておいた方が良いのではないかな。時間は限られているので難しいかもしれないが入れた方が良いのではと感じる。

【事務長】道德は職員が行うよりは地域の方などをお願いした方が素直に聞けるのではないかなと感じる。例えばこのような方をお願いすると良いなどありますか。

【教 頭】可能でしたら上野先生にお願いしたい。

【事務長】上野先生、よろしければ来年度もお願いできればと思いますが如何でしょうか？

【上野委員】心を育てるためにも入れておいた方が良い。

【事務長】年に1・2度は実施しておいて、少しずつの積み重ねで良い方向に行けばと思う。報告書内、来年以降のところで記載させていただきます。

### 3) 令和2年度以降の新規実施を検討していく事項について

#### 令和2年度以降の新規追加検討事項

##### (1) SNS 講座について

前回の会議の時に県や市または携帯会社でも講座を行っている聞き、お願いしやすいのは携帯会社かと思っている。こちらは入れていく。

##### (2) スクールソーシャルワーカーとの連携

委員の村上先生がスクールソーシャルワーカーもされているということで連携できないかと相談している。本校にも全く学校に来られなくなってしまった生徒がおり、来られない理由が本人ではなく家庭の事情。真岡市と連携しているが、スクールソーシャルワーカーとの連携があればもっと良い方向に行くのではないかと考えている。

##### (3) 子どもが自ら地域に出ていき調べていく学習

①②生徒の何人かが参加したもので①は小学生が参加するキャンプにボランティアで参加した。

②は笠間の茨城県動物指導センターを見学に行った。

③は例年1年生が全員で行き図書カードを作りたい人は作っている。

⑩今は学校のみで行っている行事だが、代表者だけでも淡島様(神社)に出向き針供養を行うのも良いのではないかなというご意見を頂きました。検討したい。

【校 長】昔は近くの神社で行っていたが今も依頼すれば行っているのだろうか・・・昔(15~16年前)までは本校でも代表者が行って針供養を行っていた。

【教 頭】100周年の記念誌にも載っているが、高校生が針供養を行う事は珍しいので新聞にも取り上げられた。

【校 長】以前は協力依頼が神社からあった。協力依頼がなくなってから自然に行かなくなってしまった。

【上野委員】小さい頃は和裁所がその付近にあり、和服姿で若い女性が神社にきていた。針供養は針に対して感謝するということで道德である。道德の授業と針供養は一体化できる。どんなものでも使っている物に感謝する心。道德の授業を行った後に針供養にいくとなぜ針供養でお参りするのかが理解でき、きちんと分かった上で良いお参りができるのではないかな。

【事務長】校内でやっている針供養を膨らませて丁寧に説明してあげられると良い。

【上野委員】針ばかりでなく、筆塚・鉛筆塚などがある。和裁だと帯塚というのもある。使ったものに感謝する。そんなことができれば良いと思う。

【大武委員】淡島神社は郡司さんはいるのですか・・・どこかと兼任されているのか。

- 【上野委員】淡島神社の隣に薬師神社がある。薬師神社に目を書いて納めていた。目の神様。そんな2つの神社
- 【教 頭】金井町主体で
- 【校 長】ついでに板谷波山の記念館を見るというのも悪くない
- 【教 頭】アルテリオに行っても板谷波山までは行ってないので見せておくのも良い。
- 【事務長】こちらに書かれていないものでも良いので何かありましたら・・・
- 【萩野谷委員】⑤⑥⑨は④にまとめられるのではないか（地理・歴史）
- 【事務長】⑦⑧も現代社会としてまとめられる。
- 【萩野谷委員】観光協会と観光推進課はちがうのですよね
- 【大武委員】違います。
- 【嶋山委員】先ほどの道徳の兼ね合いで今年二宮金次郎の報徳サミットが行われた。映画などもとても勉強になる。かるたなども行っているが、中身はなかなか歯応えがあり、高校生でも良いと思う。
- 【上野委員】かるたは寄贈している
- 【教 頭】昨年いただいたかるたは国語の教員に渡していて時々時間が空いた時にやらせてくれている。意味もわからずやるのではなく、かるたの言葉の意味やエピソードなどを御指導いただけるのもっと興味が持てるのではないかと思う。
- 【上野委員】いつもで声がかかれば来ます。ほとんど小学校でやっている。小学校では3・4年生になると地域の勉強が始まる。地域の昔の暮らしなどを学ぶ。協和にある農業資料館というところに見学にいき、昔の暮らしを知る。それとセットで金次郎の話をしたり、私達が学校に行き紙芝居などを讀んだりしている。紙芝居も人数が多いので映像に映して進めている。
- 【大武委員】旧二宮・真岡などから生徒さんも来ているだろうから特に関わりがあるのではないか・・・
- 【教 頭】石で作った金次郎の像がある。小学校などにもあった。
- 【校 長】奉安殿・二宮金次郎にお辞儀をしていた。
- 【教 頭】感謝する気持ち・道徳はやはり日本人として大切にすべきもの
- 【事務長】文科省委託事業は3年計画で今年度は2年目ですので来年が3年になります。また来年度もお願いできればと思いますのでよろしくお願い致します。

### 3-4 東京都（担当校：東放学園高等専修学校）

○実施日時：平成31年5月27日（水）12:00～14:00

（第3回専修学校振興構想懇談会 高等専修学校検討部会）

○実施場所：全理連ビル4階会議室

- 構成委員：齋藤 真 （東京都中学校校長会進路対策委員会副委員長【昭島市立拝島中学校校長】）  
 楠美 利文 （東京都中学校進路指導研究会会長【東京都世田谷区立緑丘中学校校長】）  
 伊藤 秀樹 （東京学芸大学教育学部総合教育科学系教育学講座講師）  
 吉原 宏幸 （東京都生活文化局私学部私学振興課長東京都教育庁指導部義務教育指導課）  
 前川 悟 （学校法人神須学園【大阪技能専門学校高等課程】理事長  
 一般社団法人大阪府専修学校各種学校連合会副理事長）  
 小川 明治 （学校法人電波学園【名古屋工学院専門学校】理事長  
 一般社団法人愛知県専修学校各種学校連合会会長）  
 柴田 真也 （全国専修学校各種学校総連合会事務局業務企画課長）

清水 信一 (学校法人武蔵野東学園常務理事 全国高等専修学校協会会長  
公益社団法人東京都専修学校各種学校協会副会長)  
谷 誠 (専門学校東京アナウンス学院校長 東京都専修学校各種学校協会理事)  
吉野たけし (二葉ファッションアカデミー校長 東京都専修学校各種学校協会運営委員)  
佐谷 肇 (国際理容美容専門学校副校長 東専各協会高等専修学校振興委員会委員)  
福田 潤 (東京表現高等学園 MIICA 校長 東京都専修学校各種学校協会運営委員)  
渋谷 通江 (野田鎌田学園杉並高等専修学校校長 東専各協会高等専修学校振興委員会委員)

ガザ-バ：宮本 二郎 (文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課専修学校教育振興室室長補佐)

## ○議題・報告内容(抜粋)

### 1) 愛知県的高等専修学校の現状(小川 明治 学校法人電波学園【名古屋工学院専門学校】理事長 一般社団法人愛知県専修学校各種学校連合会会長)

- ・学校数は27校
- ・サポート校の高等専修学校へのくら替えを危惧。
- ・生徒数は7,117名で、年々減少している。
- ・愛知県の公立中学校数419校。
- ・計画進学率93%の中に高等専修学校は入っていない。
- ・中卒者の減少も深刻な問題。
- ・N高校、ゼロ高等学院への対応を含め、高等専修学校の真価が問われる。
- ・自分の学校だけでなく、高等専修学校の全体の質を上げることが必要。

### 2) なぜ集まるのか〔質疑応答〕

- ・高等専修学校に送れば何とかしてくれる、よく面倒を見てくれるという信頼感が一番。
- ・高等専修学校の全教職員は、危機感を持ってカバーし合う。
- ・不登校や成績の悪い者に自信をつけさせる。

【清水委員】愛知県の先生は努力をされている。出願と入試の解禁日を私立高校とそろえているのは、中学校の先生方にとってはやりやすい。東京は、15歳人口が多かったころ、不登校で内申オール1の子が入れる都立高校は存在しなかった。今は、少子化に伴っての改編で、各地域にオール1でも入れる都立高校(チャレンジスクール)が増えてきたが、愛知県の場合はどうか。

【小川委員】単位制をつくり始めている。県立高校の改革はこれから進んでいくと思うが、子供が少ない中で脅威の一つとなる。

【清水委員】東京は19校中ほとんどの学校が高等専修学校と銘打っているが、高等専修学校の社会的認知は向上していない。愛知県は19校中4校しか高等専修学校という名称は使っていないが、中学校の先生方からしっかり認知を得ている。東京と愛知の大きな違い、特に初心を貫く強さは何なのか。

【小川委員】中学校からの要求をすべてのんできた結果、中学校の校長会から、私学より言うことを聞いてくれるから専修が好きだと言ってもらえている。懇親会なども活用して信頼関係をつくってやることも大きい。歴史も古く、昭和56年から校長会とのパイプがある。

【清水委員】東京の高等専修学校と都中進との連携はことしで何年になるか。

【楠美委員】40年ぐらいかと思う。

【前川委員】出願時期、試験日の統一には驚いた。かなり反対があったのではないか。

【小川委員】別々にすると、私学の一般入試があるときに高等専修志望の子だけが教室に残る。一緒にすると、生徒が全員出て中学校側も各現場を回りやすくなるので、なるべく統一しようということになった。大阪は、ばらばらなのか。

【前川委員】そもそも私立高校に推薦という概念が表向きにはない。2月10日が第1回目の一般入試になるので、我々高等専修学校は、その2月10日より前の1月中や12月中に推薦を行っている。高等専修で一般入試を2月10日に統一するのもなかなか難しい。例えば理美容系などは専門学校に合わせて9月、10月から入試を実施しているところもある。

【清水委員】東専各の解禁日は11月1日以降という内規はある。

【前川委員】専門課程のほうはAO、推薦等々の解禁日があるが、高等課程はない。

【清水委員】高等専修学校は東京もばらばらの対応になっている。愛知県が信頼関係を築いている大きな理由は、統一できていることかと思う。

【小川委員】愛知県は私学がウェブ出願を取り入れている。

【清水委員】東京も私立はウェブに流れているが、都立高校はまだなっていない。

【楠美委員】同じ日程にすると、中学校側としては同列でどこを選択するかという話になるので、やりやすいのかなと感じた。東京の場合、将来の目標がはっきりしていない子は、まずは高校という名のつくところ、そこがだめだった場合に、通信、定時、高等専修学校も含めて、その中でどうするみたいな選択の仕方をする。今は生徒数が減ってきて、高等学校という枠の中でほぼおさまってしまうので、高等専修学校という選択肢は少なくなってきた。若い先生方は、高等専修学校の存在すら知らない。世田谷では、6月に清水先生に来ていただいて、高等専修学校の中身の話、11月には都立のいろんなタイプの学校の先生に来ていただいて説明をしてもらうことを企画している。

【清水委員】東京では、少子化が進んできたときに都立高校の改革が進み、都立高校でも不登校の子たちが入れるようになった。並行して通信制高校やサポート校がいっぱいできて、そちらに流れたところもあるので、愛知よりも厳しさが前倒しで来たという現実がある。5月16日に新広報ツールの説明会をしたときに4つの魅力を実施している学校の先生方に簡単に話をしてもらったが、理美容系などは、若くして入ってきた子たちのほうが伸びしろがあり、現場では重宝される傾向があると言っていた。自動車整備の給与体系はどうか。

【前川委員】3級整備士（高等課程卒業）と2級整備士（専門課程卒業）があり、給与体系にも若干差があるとは聞いている。

【清水委員】不登校の子たちのやり直し、学び直しについては、全国の高等専修学校が大きな実績を持っている。また、発達障害の子に関して我々はインクルーシブの教育環境を持っていることが強みかと思う。障害者福祉サービスに着手している学校があったり、都内には夢を追う高等専修がいっぱいできているので、福田先生にフォローをお願いしたい。

【福田委員】芸能などは若ければ若いほど価値が高い部分があるので、15歳から始めているほうがプロダクションに所属させてもらいやすいところはある。育てる期間が長いほど価値が高いという面もあるので、早くからやっている方がその人が目指す夢に近づけるというところはある。

【伊藤委員】小川先生というよりは東京、大阪の話を伺いたいのだが、サポート校が高等専修学校に変わるということはあるのか。

【清水委員】東京はまだない。通信制が高等専修に比べたというのはある。

【前川委員】大阪もない。

【小川委員】中学校側も、サポート校とか高等専修をわかってない部分がある。

【伊藤委員】高等専修学校が中学校から嫌われないためには、ある程度足並みがそろっている必要があると思う。会員校ではないところがルール違反をして困ったという部分は結構あるのか。

【清水委員】東京は、高等課程にはないが、専門学校にはある。

【小川委員】愛知県もないが、新しく会員になった学校がルールに従ってくれるかは心配。入会后1～2年

の動きによって変わってくる。規約には法的拘束力はないので、協力を依頼するしかない。高校や中学校から協会にクレームが来ると我々は言いやすい。

【清水委員】東京には倫理委員会があって、違反したところには注意するが、東専各の会員を除名することはできない。全専各でも除名したことはないと思う。

【小川委員】愛知県で、制裁として高校から信頼を得ている冊子に1年間掲載しないということをやったことがある。

【前川委員】大阪は経常費補助金の何%かは専各に入れることになっているので、ルール違反を理由にやめられるのも困る。

【清水委員】東京は7万円の基本会費のほかに、振興費保持の総額の2%を特別会費として徴収している。生徒数が多いところは、2%で何百万円になる学校もある。

【伊藤委員】自己点検・自己評価をしているかとか、文科省さんにルールを決めてもらってやってもらう必要はあると思う。

【清水委員】専門学校は、職業実践専門課程の場合は、自己点検・評価と学校関係者評価がセットになっているし、4月に開校した専門職大学の場合は第三者評価までがセットになっているので、やらなければ、特に一条校の場合は厳しい改善命令が出てくると思う。補助金をもらうには、やはり学校が説明責任を果たすということで、大阪のように自己点検をして、ホームページ上で財務まで公表するのが当然だと思う。ちなみに東京では、チャンスがあれば手を挙げたいということで準備はしている。ただ、大阪と違って財務までは厳しいので、そこまではできていない。

【吉野委員】東京では、都立高校も教育の形をいろいろ変えている中で、高等専修学校という枠組みは取り残されて、逆に、通信制のサポート校がそこに進出してきているようなイメージがある。東京都の状況を他県から俯瞰していただいて、忌憚ないご意見をいただければと思う。

【小川委員】愛知県でも、やっと2~3年前から県当局が理解をしてくれたと思っている。それには、自民党の県議会議員の大ボス的な人と接触して、自民党の市議会議員を集めて高等課程についてプレゼンしたこともあった。実際にどんどん見せることが必要だと思う。私自身の個人的な感覚で言うと、中学校の職員にどう信頼されるか。いくらよいツールをつくっても、生徒はそれを読まない。中学校の先生の一言がないと絶対集まらないし、入ってくれた以上は、その信頼を裏切らないように責任を持ってやるしかない。

【前川委員】私も来るものは拒まず、そしてやめさせない。そうすると中学校の先生が、あそこに行ったらこんな子でも卒業させてくれるという評判が立ち、それが広がっていくことで信頼に変わるのかなと思う。もう1点は学費の件で、大阪は私立の全日制高校よりも高等専修学校のほうが10万円以上安い。これは経常費補助金のおかげで、財務的に学費を上げなくて済むので大きなメリットだと思っている。

【宮本補佐】中学校との信頼関係という話があった。我々、専修学校制度を見ていく中で質保証の話がされることが多いが、学校の評価が質の保証につながっていると感じた。そういう意味では、外部の一般社会の人からどう専修学校が評価されるかを考えていかなきゃいけないと思っている。話がずれてしまうが、高等専修学校は面倒見がよく、卒業するまでしっかりサポートしてくれるところが売りだとすれば、今後、高校を中退してしまった人たちなど、過年度生を積極的に受け入れることは考えられないか。

【小川委員】愛知県の場合は過年度生も入れているところがあるが、私のところは年齢的な問題、指導上の問題で、1名も入れていない。

【清水委員】過去、21歳の過年度生を入れたことがあるが、この学校に入学したら、同級生を車に乗せるな、同級生の前でたばこを吸うな、一緒に遊びに行っても酒は飲むな、約束できるかということ

ころから入っていかねばいけない。生活指導上、いろいろ問題がある。

### 3) 高等専修学校認知度アンケート(案)の決定と実施のスケジュール

【清水委員】前回議論をしていただいた部分を手直した。この最終確認と、できたら2019年12月までにアンケートを実施することを提案したい。まず、アンケートの中身について、ご意見はないか。また、アンケートは100人、200人の規模ではなく、20代から60代まで、各年代別に300人ぐらいずつのデータは欲しいなと思っているが、どんな形でお願いしたら多くのデータが集まるか、ご意見を伺いたい。

【楠美委員】どういう肩書で依頼をするかが大きい。都の校長会・進路対策委員会に協力していただけるのであれば、そこから全校へ発信することはできるかと思う。

【楠美委員】別口で、都中進としてアンケートを取ることは可能だと思う。

【清水委員】都中進さんにも、今度6月12日に世田谷にお邪魔したときに1回取らせていただこうと思っている。年代別は、例えば世田谷区で何校、練馬区で何校という形でやっていただければありがたい。内容的には、これで行かせていただくということではよろしいか。——それではこの内容で12月中にやりたい。

○実施日時：令和元年10月24日(木)10:00~12:00

(第4回専修学校振興構想懇談会 高等専修学校検討部会)

○実施場所：全理連ビル4階会議室

- 構成委員：齋藤 真 (東京都中学校校長会進路対策委員会副委員長【昭島市立拝島中学校校長】)  
楠美 利文 (東京都中学校進路指導研究会会長【東京都世田谷区立緑丘中学校校長】)  
伊藤 秀樹 (東京学芸大学教育学部総合教育科学系教育学講座講師)  
吉原 宏幸 (東京都生活文化局私学部私学振興課長東京都教育庁指導部義務教育指導課)  
前川 悟 (学校法人神須学園【大阪技能専門学校高等課程】理事長  
一般社団法人大阪府専修学校各種学校連合会副理事長)  
小川 明治 (学校法人電波学園【名古屋工学院専門学校】理事長  
一般社団法人愛知県専修学校各種学校連合会会長)  
柴田 真也 (全国専修学校各種学校総連合会事務局業務企画課長)  
清水 信一 (学校法人武蔵野東学園常務理事 全国高等専修学校協会会長  
公益社団法人東京都専修学校各種学校協会副会長)  
谷 誠 (専門学校東京アナウンス学院校長 東京都専修学校各種学校協会理事)  
吉野たけし (二葉フアッションアカデミー校長 東京都専修学校各種学校協会運営委員)  
佐谷 肇 (国際理容美容専門学校副校長 東専各協会高等専修学校振興委員会委員)  
福田 潤 (東京表現高等学園 MIICA 校長 東京都専修学校各種学校協会運営委員)  
渋谷 通江 (野田鎌田学園杉並高等専修学校校長 東専各協会高等専修学校振興委員会委員)  
おザバ：宮本 二郎 (文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課専修学校教育振興室室長補佐)

○議題・報告内容(抜粋)

#### 1) 開会

【清水委員】きょうのメインは、前川先生による大阪の高等専修学校の事例発表になる。その前に、報告事項を含めて高等専修学校関連のお話をさせていただきたい。9月13日(金)に高等専修学校のワーキンググループの会議があり、そこで、高等専修学校を紹介する1枚もののリーフレットを作成することが決定した。できれば、全国の中学校の先生方に枚ずつお配りし、目に触



れる機会を増やしていきたい。

以前、新しい広報ツールを各学校のホームページのトップに置いていただきたいという話をしたが、現段階で、全国高等専修学校協会、東専各のほか、武蔵野東、副会長の大岡高等専修学校、立修館はアップされている。これが広がっていくと中学校の先生方の目にとまる数が増え、募集効果も上がっていくと思うので、ぜひご留意いただければありがたい。

2つ目は、認知度アンケートについて。これも先生方にご協力いただき、今現在、1,151 通の回収ができています。整理ができた段階でメールをするので、次回1月の検討会議で議論をして、最終報告書をまとめていきたい。南関ブロック会議が10月30日に開かれる。高等課程は第2分科会で26名が参加予定。チーム高等専修の東京プラス神奈川の事例を、岩谷学園の五十嵐先生から発表していただく。もう一つのテーマは、各県における予算要望の現状と報告と意見交換を予定している。東京の高等専修学校と中学校の先生方を結び、1年に1回出している機関紙を配付させていただいた。特集テーマは、今我々が一番目指している「魅力発信」で、2ページ目から各校の魅力発信、高等専修学校の強みを写真入りで紹介している。そのほか、第33回の中専協夏季研究協議会（8月1日・アルカディア市ヶ谷）の内容等も載っているので、お時間のあるときに読んでいただきたい。

## 2) 大阪府の高等専修学校の事例発表（前川 悟 学校法人神須学園【大阪技能専門学校】理事長 一般社団法人大阪府専修学校各種学校連合会 副理事長）

大阪府の状況について

平成30年度、大阪府の高等専修学校数は31校。うち23校が大専各加盟校である。

生徒数は、平成30年度は5,074名。29年度5,291名、28年度5,451名から少しずつ減っているが、令和元年度の速報では大阪府全体で100~200名増えている。

平成30年度の大阪府の公立中学校数は525校、中学校生徒数22万5,305名、計画進学率は93.9%である。（高等専修学校は計画進学率に入っていない）この生徒数が、大阪では令和2年度入試で約1,500名、令和3年度入試で3,000名減ると言われている。

大専各高等課程部会の取り組みについて

ア) 年3回部会開催（5月、9月、11月）。3回とも私学課の総括主査、係長級の方が同席され、会議の初めに20分程度の情報提供をいただいている。

イ) 広報活動：冊子「高等専修学校ってなんだろう」を毎年、約500校の中学校に7部ほど郵送。令和元年度は、文科省の魅力発信の冊子と併せて郵送している。

ウ) 高等専修学校オープンスクールのチラシ（職業体験講座の案内を含む）とポスターを1万1,500部郵送。

エ) 大阪府公立中学校長会との連絡協議会：毎年7月下旬に開催。

昨年度は7月26日、中学校校長9名、大阪府教育庁私学課参事1名臨席のもと、大専各高等課程部会の役員校の先生方が10名出席。議題は、・高等専修学校制度について。・卒業後の進路について事例発表（3校）。・大専各高等課程部会の取り組みについて。・質疑応答及び協議。

オ) 中学校教員向け研修会「高等専修学校ってなんだろう」：毎年7月開催。令和元年度で4回目となる。出席者は77名の中学校の先生方。内容は、高等専修学校制度について大阪府教育庁私学課参事からの説明と会員校による事例発表、質疑応答である。

カ) 令和元年度より中学校進路指導主事（各地区代表）との連絡協議会を開催。

出席者は12名。15分の事例発表の後、残りの45分は12名の先生方一人一人から、高等専修学校をどのように見ているか意見を頂戴した。

子供たちの進路決定に当たっては、進学校も高等専修学校も同じように見ている。1人も漏らさ

ないように、その子に合った進路を決めてあげたいとの意見をいただき、うれしかった。若い先生からは、高等専修学校の研修会を教育庁、教育委員会の中でももっと行ってほしいという意見も頂戴した。この連絡協議会をどう発展させていくかが、来年度に向けての課題と考えている。進路指導主事の先生方に会員校を見学に行っていただけないかと思っている。

キ) 大阪府（教育長及び大阪府議会議長・副議長）への要望を12月の中旬から下旬にかけて行っている。

ク) 新年交流互例会：大阪府、大阪府議会議員、高校・中学校の先生方のほかに関係団体等もお呼びしている。「交流」を入れている。今年1月の開催時には171名の方が出席し、そのうちの約半数が来賓。今後、議員連盟をどのようにするかが大きな課題となっている。大阪の中高連では維新を中心に自民、公明等超党派で議員連盟をつくっているが、なかなか意見がまとまらないそうである。

ケ) 職業体験講座の実施：昨年度は7中学校から依頼があった。大阪の高等専修学校は8分野中6分野しかなく、残りの分野は大専各の専門学校の会員校の先生方が応援に駆けつけてくれた。

コ) 情報開示時期の申し合わせ：大阪府の情報開示期限の1週間前までに、私学助成・経常費補助金の交付を受けている学校はホームページ上に公開する。10月末の期限の1週間から10日前に、私が各校のホームページをパトロールしながら、アップしていない学校には連絡をしている。

#### 大阪府教育庁の体制について

- 大阪府教育委員会は、府教委事務局の名称を「教育庁」と改正し、事務局内に私学課を置くなどとする組織改正を決めた。
- 私立学校に関する業務が知事から教育長に委任されることを受けた措置。従来府教委が担っていた公立学校とともに、知事部局が担っていた私立の幼稚園、小中高校を所管し、私立の設置認可や助成などを行う。
- 組織の再編にあたっては私学側の「独自性を脅かされる」との懸念に配慮し、私学監は教育長直属にして、府教委の直属で公立学校を指導する「教育監」と指揮命令系統を分けることにした。この改正で大きいのは、公私連携が少しずつ進み始めている点である。教育委員会所轄の教育センターで行う、主に府立中学校、高等学校、小学校等の先生方を対象とした研修を私学も受けることができるようになった。ただし、受けられる研修が限られているので、調整後、会員校に私学課から直接メールで案内をしている。高等専修学校は、教科の研修より発達系の障害の研修、生徒対応の研修、特別支援の研修、不登校に対する研修等の申し込みがあるが、まだまだ申込者数が少ないので、会員校には申し込みを促している。ただし、専門課程のほうは公私連携が進んでおらず、高等課程のほうが先行している状況である。

#### 私学助成の要望の歴史

- 昭和56年 大阪府専修学校振興議員連盟発足  
ほとんど自民党だが、力のある議員が多く、いろいろ意見を通すことができた。
- 昭和57年 私立専修学校高等課程生徒授業料軽減補助金制度創設  
今で言う修学支援金の上乗せ制度（大阪府独自）。単価は8,000円、生徒数4,957人に約4,000万円近い補助金が出た。
- 昭和61年 私立専修学校高等課程経常費補助金制度創設  
単価3万円、合計で約4,000万円の経常費補助金制度が創設された。
- 平成11年 単価が26万5,000円となり、高等学校の単価29万1,900円に近づいた。
- 平成14年 高等学校と同単価になる。

大阪府私学課のコメント：専修学校高等課程は、高校と同様に後期中等教育の一翼を担う教育機関であ

ることを踏まえ、高校との助成格差を是正し、同一の競争条件・保護者負担の平等を図る。

現在、大阪は30万6,000円。国からの交付金と地方交付税を合わせると約34万円になるが、大阪府の独自ルールで、公立・府立は生徒1人あたり教育単価の2分の1を上限とするためカットされている。カットされた3万幾らについては、中高連のほうで毎年、知事要望、教育長要望に挙げている。一方で、今は1億以上の経常費補助金をもらっているが、経常費補助金を受けた高等課程・学校は、大専各へ10%キックバックする制度があり、これが大専各の予算の中でかなりのウエイトを占めている。もう一つ、私学課の補助金検査がある。補助金が1億を超えると毎年、1億未満だと2~4年に1度程度。また、1,000万円を超えると公認会計士の監査、会計士の先生方のサインがなければ決算書をつくれない。

- ・平成20年 橋下知事の下、大阪府財政再建プログラムにより、高等学校の経常費補助金単価が10%カット、小学校、中学校は25%カットとなった。
- ・平成22年 さらに大阪府財政再建プログラムによる補助金カットの案に対して、府議会議員への説得、パブリックコメントへの意見、各会派・党派代表への要望などをした結果、3分の1カットは免れた。経常費補助金を高等学校と同額もらえてうらやましいとお考えの先生方がいると思うが、実は報酬・給与の上限があり、知事と同等の1,600万を超えた分は全部経常費補助金がカットされる。

経常費補助金の交付要件（学校法人等に関する基準）

- ①学校法人会計基準に準拠した会計処理を行っていること
  - ・公認会計士・監査法人の監査報告書が必ず添付されていること。
- ②生徒に対する教育活動に一定以上の経費を支出していること
  - ・原則、教育還元率が70%以上。収入と支出の割合が70%未満だと経常費補助金はゼロになる。ゼロか100しかない厳しい世界。
- ③国又は他の経常的補助制度の交付対象となっていないこと
- ④当該年度の5月1日に在学する生徒の数が一定以上であること

経常的補助金の交付要件（配布基準）

- ①補助金額＝総配分額×補助基準値÷学校ごとの補助基準値の合計値＋調整額
- ②補助基準値＝定員内実員数×配分基準係数
- ③配分基準係数＝（納付金等収入係数＋教研費支出係数＋専任教員配置係数＋教育還元係数）×ガバナンス向上取組係数

ポイントは③のガバナンス向上取組係数で、財務関係を全て公表しないとゼロになる。

ガバナンス向上取組係数とは

計算書類（資金収支・事業活動収支、賃借対照表等々）、財産目録、事業報告書、監事による監査報告書、アンケートを含む自己評価の結果報告書、学校関係者評価の結果の報告書、学校いじめ防止基本方針等。

以上が期限までにホームページにアップされていないと、1億円、2億円もらえる高等専修学校もゼロ円になる。ただし、計算書類に関しては大科目だけでよいことになっている。

【清水委員】私のほうから、今、前川先生に列挙していただいた事例の中で、東京でやっていることやっていないことを発表する。高等課程の取り組み①のA) 私学課同席は東京ではあり得ない。今はこの検討会議が唯一の私学課との連携になっている。広報、オープンスクールのチラシはやっている。校長会との連絡については、毎年7月の中旬に、進路対策委員会で私から高等専修学校の概要をお話しし、資料もその段階で配付させていただいている。

オ) の中学校教員向け研修会が東京では一番遅れているところで、例えば夏季研究協議会にもなかなかお集まりいただけていない。前回プレゼンのあった愛知県では100名、大阪は70

名、東京は30名という状況である。

力)の中学校進路指導主事との連絡協議会はやっていない。都中進でやっていただいているものがこれにかわるかと思う。都中進さんとの会議は年3回ほどやらせていただいている。

要望については、小池知事に代わってから直接要望ができるようになった。成果は、特別支援の補助金について、私立高校の2分の1補助、75万円を1回目のヒアリングで話をしたら、翌日につけていただいた。

新年交流会は東専各でもやっている。中学、高校の先生方のほか関連団体や東専各の賛助会員企業の方などが集まる。

ケ)の職業体験講座については、大阪と大体同じかと思う。

コ)情報開示の申し合わせは、なかなか東京は進んでいない。次年度(2020年度)からは、各学校の個別の表の中に自己点検評価をし、公表しているかという問いを全部入れることにした。あわせて、日本スポーツ振興センターの保険に加入の有無もわかるようにする。これは大阪でもぜひやっていただきたい。

補助金については、平成11年にほぼ私立高校と同額になった当時、私の記憶では、大専各の高等専修学校部会の先生方が、自らハードルをつくって補助金を同額にしたという話を聞いている。

専各への負担金は東京もあるが、限りなくゼロに近い形に是正した。

補助金検査については、東京も監査事務局の監査があるが、ここ数年、高等専修は対象になっていない。授業料無償化に関する認定校のパーセンテージが、1条校は全て100%なのに私立の専門学校は62%だった。やるべきことをやらないと行政は手を差し伸べてくれない。

計画進学率の話も含めて、小川先生に愛知の状況との比較をお願いしたい。

【小川委員】愛知は中学の校長会をキーに動いている。前川先生の話聞いて、大阪の場合は随所に行政が参加していることをうらやましく思った。また、助成金を受けるにはいろいろなハードルがあることに驚いた。

自己点検・自己評価は、愛知県では進んでいない。大阪のようにほとんど義務にする方法もよいと思う。

陳情は、愛知県の場合は年2回、私学団体として知事に直接行く。愛知県は県議がすごく力を持っているので、2~3年前、自民党の議員を全員集めていただき、30分間、高等専修学校のプレゼンをした。その後、県議から言われて、担当部長、課長、振興室長等が高等課程を見にくるようになっていく。

計画進学率は、愛知県の場合中学校の校長会が強く、崩そうと思ってもなかなか崩れない。

【清水委員】今、自己評価の話があったが、幼稚園協会が、学校関係者評価のシステムの1つとして評議員会を活用することを研究している。小規模校にとって、評議員会を学校関係者評価で活用できると、高等専修学校における学校関係者評価の普及率は上がってくると思う。

### 3) 質疑・意見交換

【谷委員】中学校の先生方への説明を行政の方がされていたが、東京でもできればと思う。最初の取っかかりは何だったのか。

【前川委員】私が部会長になったときに、ちょうど私学行政の方も異動したばかりだったので、部会への参加をお願いしたら快く来てくれた。それが既成事実になって、毎回に参加してくれている。たまたま熱心な方に出会えたことが大きい。

【福田委員】要望の歴史の中の平成14年のコメント、「専修学校高等課程は高校と同様に後期中等教育の一翼を担う教育機関であることを踏まえ、高校との助成格差を是正し、同一の競争条件・保

護者負担の平等を図る」これが東京都の悲願でもある。どのようにハードルを決めていったのか。

【前川委員】当時、私は大専各に関わっていなかったので後ほど聞いた話だが、高等学校の経常費助成の条件に近づけたと言われている。

【清水委員】専修学校制度ができて44年が経過して、JRの定期の割引率、高体連への参加、日本スポーツ振興センターの保険、修学支援金、授業料無償化など、いろいろな格差がなくなった。唯一残っているのが、学校への経常費補助で、我々小規模校は補助金を少しでも1条校に近づけていかないといけない。

【楠美委員】いかに高等専修学校を先生方、生徒、保護者に伝えていけるかが大きいと感じた。校長会や進路指導主事との話し合いは、東京都全体では機会がない。東京都中学校進路指導研究会にも全ての地区が入っているわけではなく、最近は研究会に出てくること自体が難しくなっている。話を聞きながら、職場体験講座を各中学校でやっていくのが一つの方法かなと思った。○斉藤職場体験講座は東京でもやっているということだが、具体的に生徒はどんな体験ができるのか。

【清水委員】補助資料の4になるが、総合の学習の時間への提供授業プログラムとして中学校に配布し、東専各が事務局になってやっている。今年は事務局を通して実施したのは3校だった。このような活動は東京でもやっているの、ぜひご活用いただければと思う。

【クロダ】地域によって特色や違いがあることを改めて感じた。子供たちの進路に向けて、いいタイミングで求める情報を発信できるような機会をつくっていかれたらと考えている。

【伊藤委員】人と政治が大事だということがよくわかった。大阪でも職業体験講座は地域に偏りがあるという話だったが、東京でも、平成29年度の出張授業や講師派遣を見ると地域に偏りがある。どうしたら偏りがないようにできるのかが気になった。東京都では、中学校で8月に行う夏季研究協議会にも来ていただくのが難しい。こちらから行くほうが、高等専修学校を知ってもらうには現実的なのかなと思う。

【清水委員】広報部隊も人数が限られているので、東京都内の全ての中学校に行くことは物理的に不可能だ。少子化で15歳人口が減っていく中であっても、高等専修学校は後期中等教育機関の中で必ず必要な学種だと思っている。文科省のいろいろな調査発表を見ると、不登校の数は減っていない。高等専修学校という学種で不登校の子たちもしっかり学び直しをして、社会に巣立っているという事実をもっとアピールしていけば、後期中等教育の中の一翼も二翼も担っていける学種になるのではないかなと思う。ガバナンスのところでは、学校いじめ防止基本方針は義務なので、しっかりやっておいていただきたい。

【宮本補佐】今日はいろいろ勉強になった。高等専修学校の魅力発信の部分で、冊子を配ったり、職業体験や出前講座をやられているが、これをどう広げていくかという課題がある。今後は例えば職業教育や職業体験をバーチャルに見せたり体験するようなツールが必要になってくるかなと思う。

### 3-5 神奈川県【担当校：岩谷学園高等専修学校】

《第1回地域振興分科会》

○実施日時：令和元年11月8日（金） 15：30～17：00

○実施場所：岩谷学園1号館3階 301ホール

○参加委員：林 孝之（神奈川県公立中学校長会 会長平塚市立金旭中学校 校長）

上條 茂（神奈川県公立中学校長会 副会長藤沢市立滝の沢中学校 校長）

宮田 浩明（社会福祉法人クリスト・ロア会 会長）

- 大田 裕多佳（神奈川県専修学校各種学校協会 副会長 学校法人早見芸術学園 鎌倉早見美容芸術専門学校 理事長）
- 鈴木 之一（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員長学校法人敷島学園 ココス力調理製菓専門学校 理事長）
- 岩谷 大介（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 副委員長学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 校長）
- 新留 光一郎（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人野田鎌田学園 野田鎌田学園横浜高等専修学校 校長）
- 窪田 正仁（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人柏木学園 大和商業高等専修学校 教頭）
- 金子 宗平（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人梅原学園 アイム湘南理容美容専門学校）
- 辻野 晃（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人生蘭学園 生蘭高等専修学校）
- 田口 尋夢（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人新堀学園 専門学校国際新堀芸術学院）
- 廣田 洋平（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人石川学園 横浜デザイン学院）
- 甲方 裕之（学校法人岩谷学園 就労移行支援事業所アイ・ピリープ 所長）
- 宮川 洋（学校法人岩谷学園 認定こども園エクレス 園長）
- 志村 秀穂（学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 副校長）
- 小尾 史也（学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 教員）
- 白石 浩至（学校法人岩谷学園 本部統合事務局 部長）

（2名欠席計15名）

## ○議題・報告内容（抜粋）

### 1) 挨拶

#### 【大田委員】

高等専修学校は人材育成、技術訓練、職業訓練、キャリア教育を行う学校であり、今の日本にとって生活産業を支える人材の育成という点で非常に重要な位置を占めている。その割には認知度が低いということで文部科学省委託事業を通して、高等専修学校の認知活動を全国的に活性化させようということでこの会が開かれた。

子どもたちが元気良く育て資格を取って好きな職業に就ける、生活産業に関わる人材として、そして社会の一員として納税の義務を果たせる。そのような人間の育成を目指している高等専修学校の認知を挙げ、子どもたちに選んでいただける魅力ある高等専修学校自身の向上・アップをどのように図っていくのかという議論をこの会で展開できれば、この事業活動の役割が果たせると考えている。活発なご意見を賜りたい。

#### 【鈴木委員】

高等専修学校では全国で様々な生徒を受け入れて教育している。障害を持った生徒や不登校の生徒も受け入れ、特色ある専門教育により子どもたちを育てながら社会に繋げている。中学を卒業してすぐ入学してくる生徒以外にも、高校中退者など最終学歴が中学卒業の人たちも入学してくる。インクルーシブ教育も先駆けとして行ってきた。今回高等専修学校の社会的認知度をどうやって上げていくか。

高等専修学校の教育は学校が単独で行うものではなく、中学校の先生方の意見や、企業の方の話を聞いてどのようなニーズがあるのか意見として取り入れて行っている。これらの教育活動を神奈川でまとめたものを

全国に発信をし、行政に働きかけて高等専修学校に通う子供たちに対して教育の機会均等化を図りたい。行政では高等学校と高等専修学校は同じ教育をしているのに区別されている。その中で1人でも多く教育して社会につなげたいという気持ちは皆同じである。もっと認知度を高めて充実した教育を行っていきたい。その1つの先駆けとして今回、この（「専門学校による地域産業中核的人材養成事業」学びのセーフティーネット機能の充実強化）を行いたいと考える。この事業委員会のメンバーも高等専修学校の教職員だけでなく、中学校の先生、養護施設の運営者、就労移行支援事業所の所長、認定こども園の園長など、縦・横の幅広い関係者で構成させていただいた。色々な意見が出ること、様々な意見に耳を傾けることができることを望んでいる。

## 2) 委員自己紹介

### 【宮田委員】

社会福祉法人なので学校法人とは違うが、子どもを抱える、これからの将来を担っていくための土台を作る職種という意味では共通点がある。奄美大島に知的障害者の施設を持っている。東京には児童養護施設を持っていて、児童養護施設の組織の会長です。神奈川にも児童養護施設が20施設あり、うまく連携をとって関わっていければ良いと思い参加した。

### 【上條委員】

神奈川県公立中学校長会副会長と藤沢市立滝の沢中学校校長です。校長会では主に進路指導を担当している。昨日仕事の学び場 Jr.が滝の沢中学校で実施され、生徒のキャリア教育、進路学習の一環としてお世話になった。生徒の進学先の選択が多様化している中で、卒業後専門的な技術を学びたい、それを自分の生活に活かしたいという生徒がいる。具体的に卒業後は調理をやりたいと何校か見学に行き選んだ生徒もいる。高校と高等専修学校どちらにしようか迷っている生徒もいる。その中で2年生に自分の進路選択していく中の選択肢のひとつになるよう丁寧に体験させてもらった。このような形で中学校の方でキャリア教育の一環として連携させていただいている。この会で中学校現場の勉強も踏まえて参加したい。

### 【宮川委員】

学校法人岩谷学園の幼児教育である認定こども園エクレスの園長です。認定こども園は幼稚園と保育園とが一緒になっての統括である。10月から3歳以上の保育料無償化の流れの中で現場も色々と考えている。0歳から小学生に上がるまでの子ども約400名を預かっている。毎月、その月に生まれた子どもを主人公にしたお誕生会をやっている。その中で年長を子が将来の夢を語る。5歳の子がお花屋さん、ケーキ屋さん、パティシエになりたいなどいろいろ夢を語る。この夢が実現できるような社会になってもらいたいし、そういう教育を実践したいと思っている。当園でも特性のある子どもを預かっている。そのような子が大きくなった時に安心して自分のやりたいことができる、夢が実現できる、そういう教育ができたらと思っている。

### 【甲方委員】

昨年の4月に学校法人岩谷学園が就労移行支援事業所を開所して1年7か月が経った。岩谷学園高等専修学校は不登校を経験した生徒が半数くらい、障害特性のある生徒も含め多くの生徒が進学や就職を目指している。その中で就職になかなか結び付かず、特性があって学校へ通うのがやっとであり、卒業後すぐに就職するよりはもう少し時間がほしい方たちが、同じ学校法人であるため抵抗なく2年間自分に合った就職先を見つけていく、経験を積んでいくように、受け止めて社会につなげていくというのが役割である。人前に出ると話せない人や、こんな自分で大丈夫だろうかと思っている人たちに貴重な経験をしてもらって、自分に合う場所を探してそこで実習をして自分の道を見つけていくようなことが私たちの活動の中心である。26人利用して7人が就職、1人内定が決まっている。ほかの学校からも受け入れている。

### 【新留委員】

今年4月から北新横浜に開校した。学園の中では調理の学校と情報の学校と今回3校目として開校した。私自身は以前東京の高等専修学校で勤務していた。平成元年から平成5年まで生徒数が増えた。それから生

徒数が激減し、現在縁があって野田鎌田学園で高等専修学校に携わっている。

【窪田委員】

大和商業は情報と福祉のコースがある。前回南関東ブロック会議の勉強会の中で、愛知と大阪は学びのセーフティーネットがきっかけで、今は高等学校と高等専修学校に差がないという話を聞いた。大阪と愛知に並べるようにしていきたいと思い参加した。

【金子委員】

本校は高校を卒業した生徒と中学校を卒業した生徒が同じようにスクーリングをしている。中学校を卒業して入学してくる生徒の方が多い。情報交換を含めて勉強のため参加した。

【廣田委員】

本校はファッション、マンガ、デザインの専攻がある。検定や資格よりも自分が今までやってきたモノづくりが中心となって、「それを実現するにはもう少し勉強しなくてはいけない」という動機で不登校経験生徒が多く、学び直しも含めて一般科目も頑張りながら好きなことを伸ばしつつ、次のステップへ進んでいく形の勉強の仕方を取っている。2001年から不登校生徒や学習障害の生徒がいて本校を選んでくる生徒は大きく変わっていないことを知って何か学べると感じた。

【辻野委員】

生蘭高等専修学校はビジネスの学習に重点を置いているが、ほとんどの生徒が発達障害を抱えた生徒、支援級に在籍していた生徒、普通級にいて本人保護者の受容がない生徒など、多種多様である。そういった生徒の3年後の最終的な卒業後の進路も高等専修学校は様々な大学にも行くようになった。専門学校や一般就職、手帳を使った就労も斡旋している。高等専修学校における教育の機会均等化という所で、子どもたち一人ひとり権利があるので入学する学校によって子どもたちへの支援が変わるのではなく、直接還元できるような形になればと思い今回参加した。

【小尾委員】

本校は商業実務高等課程であり商業に重点を置いているが、発達障害の生徒や不登校経験のある生徒の受け入れをしている。小中学校時代につらい思いをした子たちを回復させて社会につなげていく役割で教育を行っている。

【鈴木委員】

神奈川県専修学校各種学校の委員長と、ヨコスカ調理製菓専門学校の校長と理事長を兼任している。高校を卒業してから入学してくる専門課程と、中学校を卒業してから入学してくる高等課程がある。両課程ともに調理師、製菓衛生士、介護食士を育成している。本校卒業後は進学が年に1~2人で95%は就職をするので、就職して生き残れる人柄、仕事をもらえる環境を自分で作ることができる学生を輩出している。技術や知識はもちろんだが、あいさつやコミュニケーションの部分に重点を置いた教育をしている。今回の事業を通して、みなさんの意見を聞きながらより良い生徒・学生指導をしていきたいと思っている。

### 3) 意見交換

【岩谷委員】

どうすれば高等専修学校の社会的認知が高まるか。岩谷学園の地域連携について甲方委員より説明してもらいたい。

【甲方委員】

アイ・ビリーブは岩谷学園高等専修学校から歩いて5分くらいの所にある定員20名の小さな事業所である。岩谷学園高等専修学校が横浜駅から徒歩7分であり、通学範囲がとても広いので全員がアイ・ビリーブに来られるわけではない。それぞれの地元で合う事業所があればそちらの情報を提供している。全ての人がアイ・ビリーブに合うわけではないので、その人に合ったアイ・ビリーブ以外の事業所を紹介することもある。例えばパソコンが得意な人であれば、パソコンに特化した就労率が高い所を紹介している。



【岩谷委員】

アイ・ビリーブ開設の発端は岩谷学園高等専修学校の保護者の方から、高等専修学校で完結ではなくて就労移行支援事業所などがあつたほうが良いという意見をいただいたからである。

【辻野委員】

中学校に挨拶に行く中で若い先生が高等専修学校を知らないことが多かったが、ここ数年、中堅の先生方が若い先生に「高等専修学校も見に行きなさい」と指導している姿が増えた。インターネットで不登校について検索すると通信制の学校がピックアップされる中で中学校の先生方の理解を得ることはとても重要。中学校の教員全員が認知しているわけではないので、中学校長会とも密に連携して協力していきたい。

【窪田委員】

保護者、生徒と直接話ができる機会が増えてきたが、私学の説明会には高等専修学校は入れない。大阪、愛知では高等学校と高等専修学校への授業料支援補助金の金額が同じであると聞いた。

【上條委員】

進路対策委員会の年間会議の中で高等専修学校に来ていただいたときに、どうしたら生徒たちに高等専修学校の存在が広まるか話し合った。これは続けていくべきである。役員から全校長に情報を広めていくことが大切なので継続していきたい。生徒の進路選択の幅が広がってきている。実際に見学に行き、自分のやりたいことか、学習スタイルが合っているかなど自分で確認して選んでいるのが現状。中学校現場は若手の教員が多くなっている。仕事の学び場 Jr.は生徒に認知される面でも良いし、教員への認知にもなる。高等専修学校展はとても効果がある。私学展と同じ日程で開催されるので生徒が行きやすい。そこで話を聞いてから、それぞれの学校の見学会につながるのを、最初の一步として機能している。説明会は平日が良いのか休日が良いのか検証していくべき。

【窪田委員】

平日に開催した神奈川県高等専修学校説明会の参加者が多かった。これは中学校で宣伝してくれている効果なのか。

【上條委員】

それもあるが、高等専修学校展の効果が1番ではないか。もし何かやるのであれば中学校に言っていただければ、夏前の進路面談や進路ガイダンスでお知らせする。

【宮田委員】

30年くらい前に高校に行くのに当てはまらない生徒がいた。そんな生徒に高等専修学校を勧めた。それから児童養護施設から専修学校へ進学するパーセンテージが上がった。昔は公立高校に受からなかったら高校進学はゼロで必ず就職していたがそれにテコ入れをしたかった。その子のニーズに合わせた進学先は絶対あると思って高等専修学校を見つけた。東京に児童養護施設と自立援助高校が約100か所ある。そこに高校の先生が学校をPRしたいと言ってくれば5分~10分PRする場を開いている。児童養護施設等から大学等へ進学する場合しっかり奨学金制度がある。児童養護施設からの進学率も高まってきている。高等専修学校の発達障害のある生徒の受け入れのパーセンテージを見て、高等専修学校は努力していると感じた。これをもっと発信する必要があるのではないかと。現在児童養護施設利用者の8割が親からの虐待を受けている。そういう子は18歳を迎えて社会自立に直面した時、高卒だけではなく専門的な教育を受けたい、資格を取りたいという子も多い。そこで高等専修学校や専門学校と連携して進路の門戸が広がるということをPRしていきたい。

【廣田委員】

最近中学生本人が特性があるという前提のもとに進学先を自分で探していける世の中になった。中学校の先生の助言も重要だが、高等専修学校展などのイベントでたまたま会って入学につながる子もいる。そういう子は特性がある生徒の受け入れがある学校を探しているわけではなく、説明を聞いてみてこの学校が

合っていると感じている。「認知をあげる」とはどこにターゲットを置くかで変わってくる。特性のある生徒や不登校生徒の受け入れを発信するのも重要だが、そういったものを抜きにしてイベントを開いていくということも認知を上げる方法の一つではないか。

#### 【新留委員】

神奈川の情報交換会は中学校の先生がとても多く参加している。南関東では神奈川だけが高等専修学校のパーセンテージが増加している。高等専修学校に入学してくる生徒は「この学校は誰でも入れたんでしょ？」と発言するなど自分を卑下している生徒が多い。高等学校と高等専修学校との壁に劣等感を感じて入学してきている。そこで授業では資格を取る意味などを説いて、プライドを持って卒業してもらうようにする。そうすると弟や妹の入学率が上がる。在校生に対する意識改革が大切ではないか。そのためには教職員の意識を変えなくてはいけない。中には教員と教諭の違いが判らない人もいる。専門学校の高等課程と学校名に高等専修学校が入っている学校の違いが判らない人もいる。野田鎌田ではそこから勉強している。そうして教職員が変わっていけば生徒も変わるのではないか。

#### 4) アンケートについて

対象中学校の先生方に高等専修学校の認知度アンケートを取ろうと思っている。進路の先生だけに配布するかなどアンケートの対象を考えている。これについては中学校長会の意見も聞きながら神奈川県高等専修学校委員会の会議で議論していきたい。

#### 5) 講評

##### 【上條委員】

第1回の事業委員だったが予定している時間以上の活発な意見交換ができて有意義な会であった。この事業委員会が目指す方向性は認知度を上げたりセーフティーネット機能を考えていく会なので、第2回もそれぞれの立場の意見を持ち寄って目的が達成できるような会にしていきたい。

#### 《第2回地域振興分科会》

○実施日時：令和2年2月13日（木） 15：00～16：00

○実施場所：岩谷学園 1号館 3階 301ホール

○参加委員：林 孝之（神奈川県公立中学校長会 会長平塚市立金旭中学校 校長）

上條 茂（神奈川県公立中学校長会 副会長藤沢市立滝の沢中学校 校長）

宮田 浩明（社会福祉法人クリスト・ロア会 会長）

大田 裕多佳（神奈川県専修学校各種学校協会 副会長 学校法人早見芸術学園 鎌倉早見美容芸術専門学校 理事長）

鈴木 之一（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員長学校法人敷島学園 ココス力調理製菓専門学校 理事長）

岩谷 大介（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 副委員長学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 校長）

新留 光一郎（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人野田鎌田学園 野田鎌田学園横浜高等専修学校 校長）

窪田 正仁（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人柏木学園 大和商業高等専修学校 教頭）

金子 宗平（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人梅原学園 アイム湘南理容美容専門学校）

辻野 晃（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人生蘭学園 生蘭高等専修学校）

- 田口 尋夢（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人新堀学園  
専門学校国際新堀芸術学院）
- 廣田 洋平（神奈川県専修学校各種学校協会 高等専修学校委員会 委員学校法人石川学園  
横浜デザイン学院）
- 甲方 裕之（学校法人岩谷学園 就労移行支援事業所アイ・ピリープ 所長）
- 宮川 洋（学校法人岩谷学園 認定こども園エクレス 園長）
- 志村 秀穂（学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 副校長）
- 小尾 史也（学校法人岩谷学園 岩谷学園高等専修学校 教員）
- 白石 浩至（学校法人岩谷学園 本部統合事務局 部長）

（計17名）

## ○議題・報告内容（抜粋）

### 1) 挨拶

#### 【大田委員】

高等専修学校はいろいろな課題を持った中学生の受け入れをしながら育てる。さらにより良いカリキュラムを作っていく。教育の質の保証というのは大切なことである。それがそれぞれの小学校、中学校、高校、大学、専門学校のカリキュラムという形になって変わっていく。我々学校を運営している人間として、学生たちにどういったものを提供していくのか、学校全体でどういう計画で進めていくか、これがすごく大切である。今までは個々バラバラにやっていた。とくに高等専修学校はそれぞれに分野があるので、それぞれバラバラであった。ちょうど文部科学省のこのような事業があり、神奈川県もやりましょうということで今日は第2回目の会議である。今年度はこれで終わるが来年度もぜひ継続的に皆さんのご意見を聞きながら、神奈川県としてある一定の答えを出しながら、神奈川の子どもたちを神奈川県で育てる。できれば神奈川県で働いてもらって神奈川県に税金を納め、その税金が私たちの学校の教育の補助金、助成金として戻ってくるようなことができたらいいと考えている。いろいろな意見をいただきながらまとめていきたい。神奈川県は2月7日に私学の助成制度というものができた。神奈川県はいつも早く、今回も高等教育の無償化が世帯所得500万円までであったのが700万円までに変わった。おそらく18日に正式に報道されて県教委の方から知らせが来ると思う。神奈川県は教育県なのでいつも何でもいち早く取り掛かるが、東京都に抜かれている。高等専修学校の委員会だけは少し先走りをしながら、神奈川方式はこれで行くんだというくらいの意気込みでまとめていただきたい。

#### 【林委員】

本日は公立高校の共通選抜の前日なので事前指導であいさつをしてから来ました。私学の助成金が世帯年収500万円から700万円になり、1番最初の出願状況を見ると定員割れしている公立高校が52校ある。その分、私学や高等専修学校へという形になるのではないかと。子供たち保護者にとっては幅広い選択の余地がある。これはすごく良いことだと思う。これが神奈川県が行っている政策の1つかなと思う。今、大田委員からあったように上手く使って高等専修学校には、さらにこの会議をもとに幅広い形で進めていただくと良いと思う。それが私たち中学校側すると子ども、保護者にとって良い部分になると感じているので、ぜひこれからも中学校と高等専修学校ががっちりしたスクラムを組んでほしい。

### 2) アンケート調査結果報告

#### 【岩谷委員】

参考にアンケートお願いの鏡文書と高等専修学校の認知度アンケートもお配りしています。アンケートは50校前後に配布して36校戻りがありました。集計結果ですが、

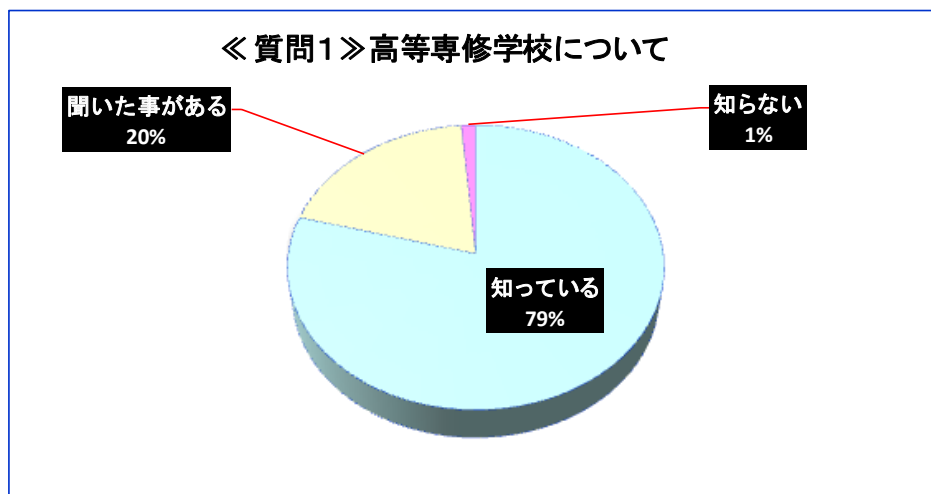
①高等専修学校について 合計：371名

「知っている」294名、「聞いたことがない」「知らない」77名

→認知度はまだまだ低いのではないか。

### 《質問1》 高等専修学校について

知っている	294
聞いた事がある	72
知らない	5
合計	371

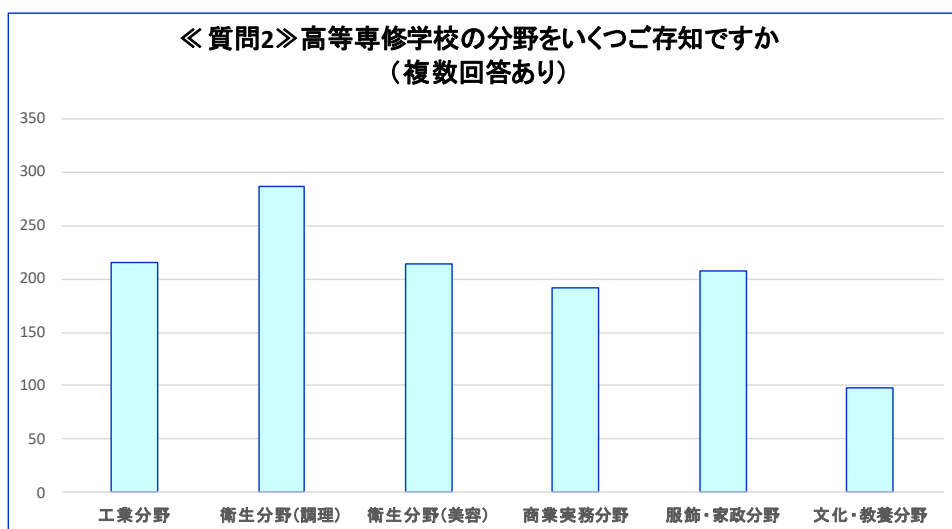


### ②高等専修学校の分野をいくつご存知ですか

複数回答ありだが、分野・教養分野が飛び抜けて低い。衛生分野の調理・美容が高い。工業分野はパソコンだと思いが、認知度が高い。

### 《質問2》 高等専修学校の分野をいくつご存知ですか（複数回答あり） （回答者数：372名）

分野	回答者数	回答者数による比率
工業分野	215	57.8%
衛生分野（調理）	286	76.9%
衛生分野（美容）	214	57.5%
商業実務分野	192	51.6%
服飾・家政分野	207	55.6%
文化・教養分野	98	26.3%

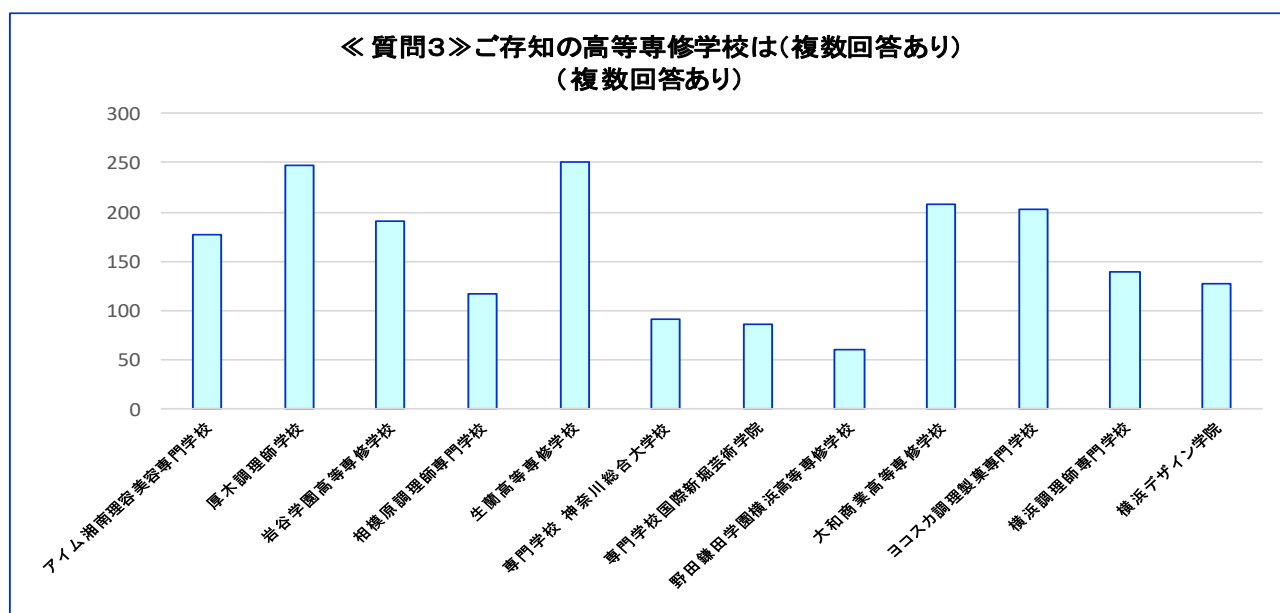


### ③ご存知の高等専修学校

各校の参考になればと思いアンケートを取らせていただいた。各校それぞれ受け止め方があると思うので参考にしてください。

《質問3》 ご存知の高等専修学校（複数回答あり：回答者数372名）

アイム湘南理容美容専門学校	177	回答者数による比率	47.6%
厚木調理師学校	248		66.7%
岩谷学園高等専修学校	190		51.1%
相模原調理師専門学校	117		31.5%
生蘭高等専修学校	250		67.2%
専門学校 神奈川総合大学校	92		24.7%
専門学校国際新堀芸術学院	86		23.1%
野田鎌田学園横浜高等専修学校	61		16.4%
大和商業高等専修学校	208		55.9%
ヨコスカ調理製菓専門学校	202		54.3%
横浜調理師専門学校	139		37.4%
横浜デザイン学院	127		34.1%

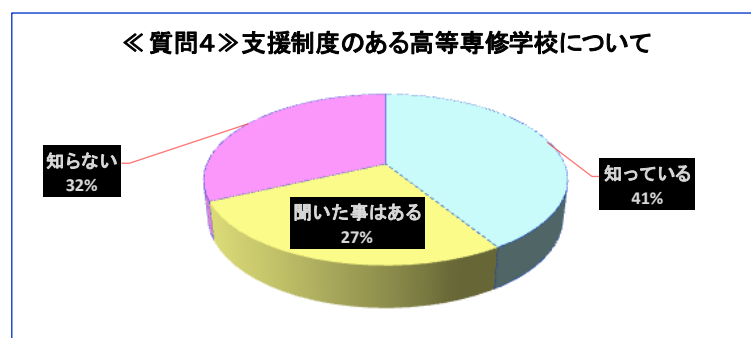


④支援制度のある高等専修学校について

支援を要する生徒（不登校・学習不安・コミュニケーション不安・療育手帳や精神手帳を持っている生徒）を受け入れている高等専修学校はご存知ですかと聞いている質問です。「知らない」が100名を超えているので、まだまだ知名度が低いということが伺える。

《質問4》 支援制度のある高等専修学校について

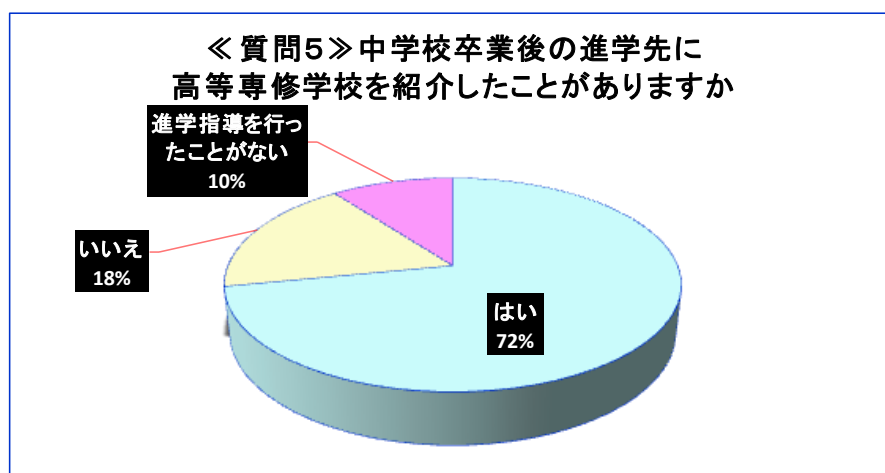
知っている	151
聞いた事はある	99
知らない	117
合計	367



⑤中学校卒業後の進学先に高等専修学校を紹介したことがありますか。  
生徒が希望しなかったということもあると思うが、中身を知らないから進路指導をできなかったということもあると思う。

《質問5》 中学校卒業後の進学先に高等専修学校を紹介したことがありますか

はい	266
いいえ	66
進学指導を行ったことがない	38
合計	370

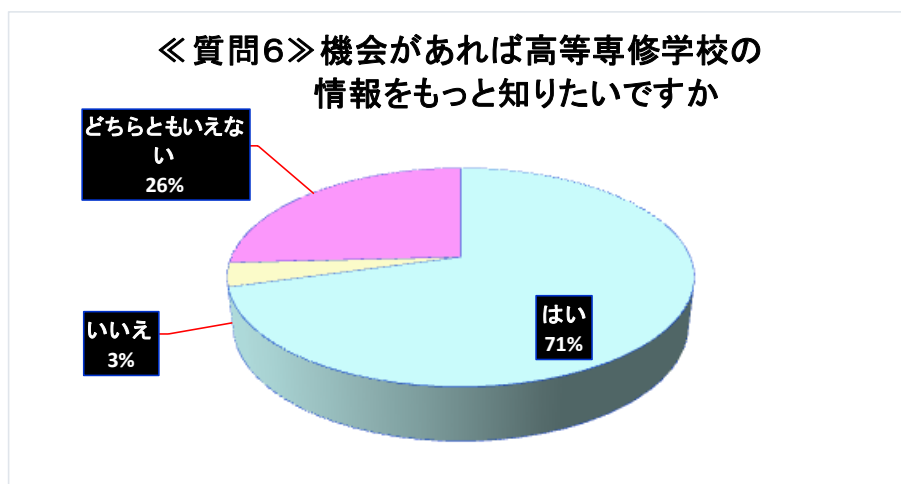


⑥機会があれば高等専修学校の情報をもっと知りたいですか。

「いいえ」が13名いる。これは高等専修学校側がしっかりと反省し、もっと魅力の発信をしていく必要がある。

《質問6》 機会があれば高等専修学校の情報をもっと知りたいですか

はい	260
いいえ	13
どちらともいえない	95
合計	368

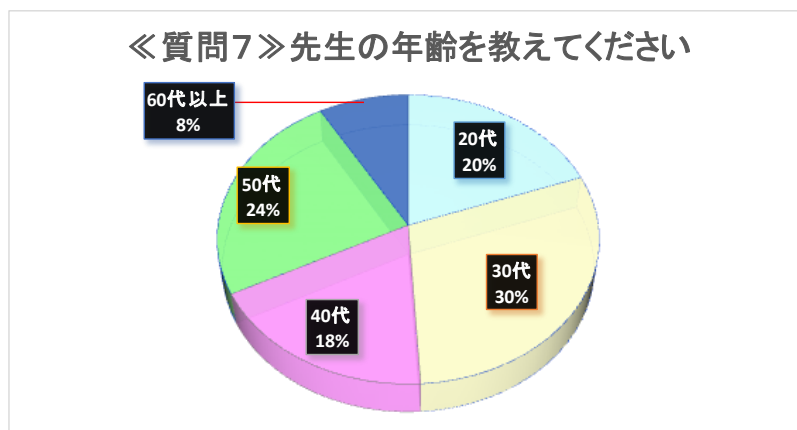


⑦先生の年齢を教えてください。

30代がととても多い。

《質問7》先生の年齢を教えてください

20代	72
30代	110
40代	68
50代	90
60代以上	31
合計	371



⑧どのような経緯で高等専修学校を知りましたか。

「進路指導において」が圧倒的に多いが、「教え子が入学した」「実際に行きたい子がいた」「卒業生がいた」「友人が務めている」など一つひとつ参考になる意見がある。

【窪田委員】

高等専修学校を知っていると答えていただいている先生方が非常に多いが、中学校から見て高等専修学校がどの位置にあるのか知りたい。よく高等専修学校はサポート校よりも認知度が低いと聞く。

【林委員】

私が感じていることは、まず公立高校でその次に私立高校という流れが、今は逆転してきている。これは私学の助成金の影響が大きいと思う。これによって今までハードルが高かった部分がだいぶ低くなってきた。これは高等専修学校についても同じだと思う。「学費が高い」という部分が助成金でだいぶ変わってきた。しかし家庭の経済的格差はととても多いように感じる。

金旭中学校では高等専修学校とフリースクールが同じ位置にある。一昔前の学校が荒れている時代の生徒指導は今ほとんどない。その代わりに、引きこもりの生徒が多くなった。このような生徒を進路指導していく時に、生徒たちから最初に出てくるのは広域通信制である。どこで知るのはわからないが、保護者からもよく出てくる。おそらく生徒自身が調べながら出てくるのだと思う。通常のフリースクールより先に広域通信制が出てくる。生徒全員と校長面接をしたが、不登校生徒2名から早い時期に広域通信制という言葉が出てきた。

【上條委員】

「位置」という言葉だと言い表しにくいですが、生徒の中では進路選択の幅が広がっているというのは事実である。公立高校も様々な特色を出しているが、私学も助成制度が充実してきて学校選びがしやすくなってきている。不登校や発達障害など様々な課題を抱える生徒が各クラスに在籍している。そういった生徒が進路を考えていく時に公立高校、私立高校、高等専修学校、サポート校は同列と言ってもいい程、選択肢になっている。本人がネットでを見つけることも事実だが、中学校の教員が紹介することが1番大きいと思う。

アンケートで岩谷委員は厳しめな分析をしていたが、中学校は若い先生が非常に増えている。アンケートの⑦でも20代30代で約半数を占めている。滝の沢中学校でも3年生6クラスのうち1人は初めての進路指導である。今の2年生も6クラスのうち進路指導をしたことがない教員が2名いる。高等専修学校を何となくはわかっているが、具体的にどういう学校があって、どういう生徒が選んでいるというものに触れていない教員が多いのが現状である。この現状を踏まえて認知度を上げていく手立てを講じる必要があると感じる。ベテランの先生は生徒のニーズに合わせて進学先を紹介できるが、現場は若手が多いのが現状である。広域通信制選ぶ生徒が増えていることも事実である。

【窪田委員】

高等専修学校展や仕事の学び場 Jr など努力はしているが、認知度を上げることは非常に難しい。具体的にどういった方法であれば若い先生方の認知度を上げられるか助言をいただきたい。

【林委員】

今まで取り組んでいる仕事の学び場 Jr は生徒も学んでいるが、若い先生も学んでいる。内容がすごくわかりやすい。仕事の学び場 Jr を経験した先生が各校へ散らばっていくとそこで広がると思うので、すごく良い行事だと思う。キャリア教育の一環として上級学校調べを中学校は必ず行うが、その中の1つが仕事の学び場 Jr である。生徒もわかるし先生もわかる内容であった。横浜で行う高等専修学校展も良いポジションである。高等専修学校展を目的に来る人もいるだろうし、そうじゃなく知るというケースもあると思う。

【岩谷委員】

高等専修学校展というのは、みなとみらいに高等専修学校が集まり、それぞれの学校が特徴を話したりショーを行って高等専修学校の中身を知ってもらうイベントを神奈川の私学展に合わせて行っている。仕事の学び場 Jr というのは、高等専修学校が中学校にお邪魔させていただき、高等専修学校は学びのセーフティネットであり職業教育を行っているため、それぞれの職業の話や実習を行っている。

【辻野委員】

仕事の学び場 Jr は大変だが、今日のこの話を聞くと各校このまま頑張らなくてはいけない。認知度の所ではアンケート⑥で高等専修学校の情報をもっと知りたいかという質問に対して「どちらとも言えない」「いいえ」が合わせて108名はそういった理由でこの回答になったのか考えると、高等専修学校の説明が同じことを続けすぎているのではないかと感じた。毎年同じような説明をしていると「もうわかりました」ということでこの回答になっているのではないかと。そう捉えると、もっと違う視点から、中学校の先生がもっと情報を知りたいと思えるようなアクションが高等専修学校側に必要なのではないかと。生徒の進路指導に必要な情報だから知りたいというのは当然だと思う。それ以外のそうではない部分で中学校の先生の興味を引くような所を高等専修学校自体が発信しなければいけないと、アンケートの数字を見て感じた。高等専修学校の人間が考えていくことが大切だと感じた。アンケートは正直に答えていただいているので、今まで知りたかったことが数字化されているのでとても良かった。支援制度があるという所では、積極的に取り組んでいるのが岩谷学園と生蘭だが、ある程度認知はされながらもまだまだ若い先生にどう周知していくのかという所が生徒募集担当の考えていかななくてはいけないことだと思う。この資料を学校に持ち帰って、高等専修学校の先々を考えた話し合いをしていきたい。

【岩谷委員】

個々の学校もそうだが、高等専修学校の委員会としても情報をアップデートして、中学校の先生が知りたい情報を提供しないと、という反省が我々にはある。そうしないと押し売りになってしまう。

【辻野委員】

つい先日、専門学校の先生が来校した際に逆の立場として話を聞いて、逆の立場だったらどういう情報が欲しいのか考え時に、「卒業した生徒がどういう風に頑張っているのか」や「どういった進路に進んだのか」を細かく説明している専門学校と、そうではなくて自分たちの学校が今やっている状況を説明している学校



では興味の湧き方が違う。聞く側がいかに関心を持ち、いかに大切な情報だと思えるか、そういった情報を載せてあげると上手く伝わるのではないかと感じた。高等専修学校は預かった生徒がどういった結果、どういった状況、どういった進路で頑張っているかを中学校に伝える義務もあると思う。中学校の先生はそういった情報を知るとほっとすると思う。募集ではなく、「この子頑張っています」「毎日行けてなかった子が毎日行けています」と言った時に中学校の先生の表情がすごく安心してくださり、中学校との距離感もぐっと縮まる。これを高等専修学校側のアクションとして行っていくことが大切である。

【窪田委員】

こういった報告は時期的にはいつ頃が良いのか、参考として聞きたい。

【林委員】

進路指導の中で保護者に情報を紹介できるので、進路指導が始まる前が良い。10月前までに情報をもらえると生徒・保護者に話ができる。

【上條委員】

生徒が学校見学に動きやすいのは夏休みである。公立高校や私立高校の説明会は夏にあり、それから自分の希望を考えていく時期で、大体秋に決めていく流れです。

【岩谷委員】

違う視点での意見を聞きたい。

【甲方委員】

認知度の点からいうとネットが大切だと思う。広域通信制の方に向かう方が多いというのも、不登校の生徒は集団が苦手なネットを探すことが多いと思うのでそこでヒットしやすいことがあると思う。1つの広域通信制がヒットするとリンクしてたくさん出てくるため、一度にいくつもの学校を見ることができる。高等専修学校の場合、例えば岩谷のページを開いても岩谷で終わってしまう。「高等専修学校とはこういうところ」というページにどっからでも飛べて、「どんな人がいる」「どんな所に就職している」「障害者枠、一般枠でこれくらい就職している」「進学ではこんな所に進んでいる」このようなことを知ることができるページがあると良い。

【鈴木委員】

今回学びのセーフティーネットということで高等専修が中心になっているが、もっと子どもの世代からの育て方は違ってくるのか。

【宮川委員】

私が小学校の校長をやっていた時に、不登校や特性がある子の保護者から相談が来た。小学校の立場からすると、わからないので中学校で専門の先生から指導があるからと逃げてしまう。小学校の教員時代、9回6年生の担任を持ったが、保護者からの心配事があった時に「中学校の先生の話聞いてください」としか言えない。小学校の先生から「進路先には高等専修学校みたいなところがある」「選択肢がいろいろある」ということを保護者に伝えれば、その知識を持って保護者が中学校へ行くことができる。そうすれば選択肢も広がるのではないかと。私が毎月園便りを持って近隣の小学校を周って小学校の校長と話をする、小学校の校長は高等専修学校を知らないことが多い。小学校の教員が知れば、保護者・本人が知り、そこから認知が広がるのではないかと。思う。

【林委員】

ここ数年感じていることは、不登校生徒の保護者の方はすごく勉強されている。中学校卒業後の進路まで考えて中学校に入学してくるケースがある。小学校の先生も知っていれば保護者はもっと安心すると思う。公立高校が出席日数を問わずに受験できることなど、保護者はやはりネットで情報を得ていると思う。

【辻野委員】

一昨年、生蘭高等専修学校の説明会に幼稚園生の保護者が来たことがある。先々週、綾瀬市の小中学校、

養護学校の学校保健会の先生方が27名来校し、小学校・中学校を卒業した後、特性ある子たちにどういった進路選択があって、生蘭高等専修学校はどういった生徒たちを受け入れているのか気になって見に来ていただいた。そこで小学校で落ち着かなかった子たちが落ち着いて授業を受けている姿を見てすごく感動されていた。ある小学校の校長先生と話したときに、「小学校からキャリア教育を行っている」と言われたことがあった。不登校生徒の保護者がそこでネットで調べて、1番初めに出てくるのが広域通信制なのではないかと、今話を聞いて思った。高等専修学校は小学校のキャリア教育に目線に向けていかななくてはいけないと感じた。

【宮川委員】

私も保育園、幼稚園の保護者向けに小学校への接続の話をするが、その中でその先の高校大学などは様々な選択肢があるということをしは話をしている。

【岩谷委員】

高等専修学校に通っている生徒、全国16206名が回答したアンケートの中の「生徒の家庭の状況」で母子または父子家庭が4675名、全体の約3割おり、両親がいない生徒は104名いた。前回、宮田委員から様々な奨学金の話聞き、岩谷学園でもまだ未決定であるが、片親や両親がいない生徒への援助を卒業生の組織に投げかけた所、来年から奨学金化しようという話になっている。

【宮田委員】

児童養護施設は全国に604か所あるが、親のいない生徒というのは児童養護施設からの進学だと思う。数年前に相談に乗ってほしいということで広島に行ったときに、学校で言えば進路指導の先生、児童養護施設ではアフターケア含めた社会自立に向けての専門の職員を要請したいと話があった。平成25年に予算化してもらい、自立支援コーディネーターを各施設に配置している。それが今年度、国の予算になった。名称は自立支援指導員として、学校でいう進路指導の先生が各施設に配置可能になった。今日配った資料に神奈川県施設の名簿がある。高等専修学校委員の集まりに施設の先生方を呼んで、児童養護施設に通う子どもの進路先拡大になれば良いと思う。私は東京だが、世田谷区、大田区、品川区などは横浜は十分通学圏である。見える化だけでなく見せる化していかなくてはいけない。特徴を出してアピールしていくことが大切だと思う。自立支援コーディネーターの職員が「うちの施設だから進学先はここ」ということがあってはいけない。なぜなら子どもは施設を選べないからである。社会自立するための学校の選択も同じように門戸を広げた視点で子どもたちに向けて、支援の標準化をしていかなくてはいけない。ようやく国はこれを認めてくれた。資料の中にもあるが、高等専修学校に進学する子どもの割合はまだまだ少ないが、引きこもりや不登校の数は児童養護施設は圧倒的に多い。その中で様々な選択肢を与えることが自立支援コーディネーターの力の見せ所である。そこで子どもが「言われたから行く」のではなくて、自分から行きたい気持ちをどう持たせるかが進路指導の手腕である。児童養護施設の職員は月1回集まって、良かったことや失敗したことなど全て共有している。それが厚労省の方から予算化されたので、全国的にそれを行っている。神奈川は東京以上に目覚ましい数字を残しているのでは抜かれるのではないかと考えている。

【鈴木委員】

自立支援コーディネーターというのはもうすでに全国全ての施設に配置されているのか。

【宮田委員】

2つの施設だけはやっていない。そこは職業指導員という者を置いている。児童養護施設を出た後、社会に出るためのワンクッションとして自立支援ホームというものがある。そこにはジョブトレーナーを置いている。

【鈴木委員】

児童養護施設に通っている子どもは本来どこに進学しても良いはずだが、「施設に通っている以上、公立に通わなくてはいけないのかな」と考えている子どももいるのか。

【宮田委員】

今から25年前、定員割れしている高校があり、そこだったら多分入学できるだろうとある生徒を公立高校に行かせようとしている職員がいた。私は、この子は学校に入ったとしても途中で中退する恐れがあると思ったため、その子に何がしたいのか聞くと「ご飯を作ったりすることが好き」と言ったので調理学校へ進学させた。無理して高等学校に入学しても続かなかつたら何も意味がない。それを園長含めて職員にきちっと説明して、責任を持つとって高等専修学校へ行かせた。今は飲食店でしっかり務めている。30年前には女の子を高等専修学校に行かせた。

このようにその子のニーズに応じた選択肢というのは児童養護施設でも可能である。そのために働きかけて助成金、奨学金がこれだけ出てきた。

ちなみに今回の資料は、国から新しい養護ビジョンが出て「施設はこうあるべきだ」という縛りが非常に強かったため、そうではなくて各都道府県でこのビジョンに基づいて計画を立てなさいということで東京都が作ったものである。これは神奈川県も作っていると思う。資料があれば次回持ってこようと思う。

【窪田委員】

東京都の高等専修学校から養護施設へ説明に行くようなことは実際にあるのか。

【宮田委員】

実際に説明に来ている学校はある。児童養護施設としては子どもの将来の選択の門戸が広がるので助かっている。それぞれ特徴のある高等専修学校に行っている。

【窪田委員】

それは中学校の進路指導から流れてくるのか。

【宮田委員】

それもあがるが、自立支援コーディネーターの委員会を毎月行っている。そこに単独で学校説明に来る学校がある。

【新留委員】

今話を聞いて、1条校と124条校のすみ分けが必要だと感じた。これが一緒になってしまうと逆に魅力がなくなってしまう。まず自分の学校で何ができるのか、この神奈川県でどういう役目ができるのか考えていた。

児童養護施設から通っている生徒が本校にいて、2年後の進路を考えながら指導しているが、担任と養護施設の担当者と密に連絡を取りながら行っている最中なので、今日話をしっかり持って帰りたい。

### 3) 挨拶

【鈴木委員】

高等専修学校と40年近く関わっているが、中学校の先生方に対して高等専修学校の認知度を伺うアンケートを取ったことは初めてである。今年は林委員の力も貸していただきこのようなアンケートが取れたことに感謝している。このアンケートで分かったことをそれぞれ持ち帰って、各学校がどう活かすかが大切である。中学生だけに限らず、高等専修学校というものをどう高めていくか。そして冒頭に大田委員からあったように、神奈川県の中で育てながらそこで活躍できるようにもっと神奈川県を豊かにしていきたいと思っている。また、広報について様々出たが、人数を増やすことよりも、ひとり一人の子どもたちが「自分は何がしたいのか」「それをどう活かしたいか」「どう学びたいか」それをもっと知らしめるべきではないかと思う。高等専修学校は高等学校と違って偏差値がない。したがって、入れる学校を選ぶより、自分が何をしたいかそういう視点で選べるように、皆さんの力を合わせながら進めていきたいと思っている。

2019年度の学びのセーフティーネットは今日で終わりになるが、次年度も続けていく所存なので、引き続きご協力、ご支援をいただきたいと思います。1年間ありがとうございました。

### 3-6 愛知県【担当校：安城生活福祉高等専修学校】

○実施日時：令和元年12月5日（木）15：00～16：30

○実施場所：学校法人さくら学園 安城生活福祉高等専修学校

○参加委員：兵藤 伸彦（安城市小中学校校長会長、安城市立安城南中学校 校長）

松永 博司（愛知県安城市立安城西中学校 校長）

鳥居 貴之（愛知県安城市立安祥中学校 校長）

藤本 径也（NPO 法人 SevenSwell 理事長）

岩瀬 せつ子（学校法人さくら学園 理事長）

宮治 友也（学校法人さくら学園 本部新規事業部長）

落合 孝患（安城生活福祉高等専修学校 進路指導部長）

河口 文吾（安城生活福祉高等専修学校 パティシエ専攻主任）

（計8名）

○議題・報告内容（抜粋）

<会議の目的>

全国の高等専修学校では、不登校の生徒、発達障害のある生徒など多様な生徒を受け入れ、特色のある専門的な教育を行い、進学、就職へと繋げている。また、中学校や関係機関、地域の企業等と密に連携し、地域で活躍できる人材の育成を行っている。

本校においても、地域や企業と連携して様々な事業を実施し、生徒の専門的な知識、実践的なスキルを養い、就職に繋げている例がある。このような事業について、地域や企業の関係者と意見交換を行い、今後のより良い連携方法を模索するとともに、本校における地域や企業との連携状況をまとめ、実施委員会に報告することを目的とする。

#### 1) 開会のあいさつ（岩瀬 せつ子 学校法人さくら学園 理事長）

本校は2015年度から3年間文部科学省の委託事業として、地域や関連企業にアンケートを実施し、「地域の声」に基づいたカリキュラムの構築、実習システムの構築を行ってきた。介護の分野に関しては成果が得られたものと自負している。昨年度からは同様の事業の一環で、全国の高等専修学校と連携し、高等専修学校を中心とした地域連携の事例の収集を実施しており、本年度は2年目にあたる。本校はパティシエ専攻における地域連携の事例に特化して事業を進めており、本日は関係機関の先生方にご意見をいただきたいと考えている。

本校は先生方もご存知の通り、従来より様々なボランティアを通して地域と密に連携した教育を行ってきた。本日と昨日も福祉科と生徒会が中心となって駅前共同募金を実施してきた。これも社会福祉協議会やソロプチミストの方々と連携をして実施しており、地域との連携の1つの例ではないかと考える。

本校ではそれぞれの科が特色を持って活動を行っているため、今後こういった形で地域と連携を深めていき、どのように発展させていくかを先生方にいろいろとご意見をいただきながら検討していきたいと考えている。

#### 2) 出席者自己紹介

【鳥居委員：安祥中学校校長】

安祥中学校は本校に近く、多くの生徒が中学校卒業後に本校に入学して様々な専門分野を学習している。

【松永委員：安城西中学校校長】

安城西中学校の卒業生は本校の地域、企業との連携事業の中心として多数活躍している。

【兵藤委員：令和元年度安城市小中学校校長会長、安城南中学校校長】

昨年度に引き続き、校長会の代表として本会議に出席していただいた。

【藤本委員：本校の地域企業連携事業の連携先責任者】

NPO ではキャリア教育、社会教育の一環として大学や高等学校を中心に学校と地域を結ぶような事業を実施している。

【落合委員：本校の進路指導部長】

調理師科の教員として調理師専攻、パティシエ専攻の地域や企業との連携事業において取りまとめを行っている。

【河口委員：本校のパティシエ専攻主任、製菓衛生士】

パティシエ専攻の地域や企業との連携事業において、メニュー開発や製造側の生徒指導の中心を担う。

【宮治委員：当会議の取りまとめ。司会進行。報告書作成】

### 3) 事業の概要(宮治 友也 学校法人さくら学園 本部新規事業部長)

本事業は「専修学校による地域産業中核的人材養成事業(学びのセーフティーネット機能の充実強化)」という名称であり、全国の高等専修学校と連携して実施している。

高等専修学校は不登校、発達障害、家庭環境の問題といった様々な問題を抱えた生徒が多く在籍している。

そのような生徒に対して、現場実習、地域連携、産学連携を中心とした特色ある教育を実施している。

本事業では、全国の高等専修学校の特色ある教育、地域連携の現状を調査し、地域連携のメリットと改善点を把握して今後の連携方法を検討していくとともに、全国の各地域の高等専修学校を中心とした地域連携で得られた効果等のエピソードの収集を行うことを目的としている。

事業には、高等専修学校、大学、業界団体、行政機関等が参加しており、全国各地の12の高等専修学校において事例を収集し、とりまとめて報告を行う予定である。地域連携、企業連携のみにとどまらず、高等専修学校への様々なご意見をいただきたいと考えている。

### 4) 高等専修学校の実状

【宮治委員】高等専修学校という学校種については、まだ広く知られているとは言い難い現状がある。高等専修学校は専門学校の高校生課程であり、高校の間から職業教育、実践的な学習を行い、地域で活躍する専門人材の育成を行う機関である。

昨年度の会議においてもご報告させていただいたが、高等専修学校に通う生徒は、生活保護世帯の割合、ひとり親、両親のいない家庭の割合、中学校時代に不登校の生徒の割合、発達障害のある生徒の割合が、高校生全体における割合と比較して非常に高いことがアンケート調査によって明らかになっている。高等専修学校が学びのセーフティーネットとして機能していることが分かる。また、昨今では外国籍の生徒の割合も年々上昇しており、こちらも高校生全体における割合と比較して非常に高くなっている。

高等専修学校の卒業後の進路については、高校生全体と比較して、専門学校への進学、就職の割合が非常に高く、大学への進学の割合は高くない。また、進路が未定のまま卒業する生徒の割合は定時制高校や通信制高校と比較すると低い。多様な生徒が在籍するが、専門的な教育、実践的な教育を行って、地元企業への就職や専門学校への進学に結び付けることができているのではないかと考える。高等専修学校の実状について、ご意見、ご質問等をいただきたい。

【松永委員】ある程度は予想していたが、生活保護、不登校、発達障害などの割合が想定以上に高く正直驚いている。安城生活福祉高等専修学校はこの全国のアンケートの結果と比較してどうか。特に豊田市、知立市などの自動車工場の盛んな都市の近郊であるため外国籍の生徒の割合は高いと予想しているがどうか。

【宮治委員】本校の場合、全体的には全国の高等専修学校のアンケート結果と同様の傾向がみられるが、外国籍の生徒の割合は全国の平均よりはるかに高く、ここ数年で急激に増えてきている。本校の中では、外国籍の生徒への対応が大きな課題として挙がってきている。

【松永委員】家庭の経済面の話は、中学校において卒業後の進路を決める際に大きな課題となることから実感として強く持っている。私立の高校や高等専修学校に進学する際には補助金があるが、まずは進学時また進学後4月、5月の費用をどのように工面するかが難しい面がある。ただ、それを逃すと本人の進路が絶たれてしまうため非常に難しい問題である。生活保護世帯とひとり親、両親のいない家庭はリンクする問題である。

また、不登校の生徒については中学校でも苦労している。学校には来ることができるが教室に入れない生徒も多く、そのような生徒の受け皿として安城生活福祉高等専修学校が機能している部分に関して感謝している。

外国籍の生徒に関しては、しっかりと学習し進路もしっかりと考えている生徒が増えてきている印象を受ける。この地域の大きな特徴であると思うので、今後もこのような外国籍の生徒を中学校と高等専修学校が連携して教育していきたいと強く思う。

【岩瀬委員】やはり外国籍の生徒の中では言葉で不自由する生徒が多い。授業後に外国籍の生徒だけを残して日本語学校で勤務していた教員が日本語の授業を行っている。言語の部分さえクリアすれば日本人の生徒と同様に、また日本の生徒以上に活躍できるような生徒も出てくると思う。現状では一般教科に苦労しているが、高校3年生くらいになるとほぼ理解できるようになってきているような印象を受ける。

【松永委員】近隣の公立高校において、外国籍の生徒枠での特別入試の制度が始まっている。最初は豊田市内の高校だけであったが近年は安城市内の高校でも始まっている。安城市内の高校では外国籍の特別入試で入学した生徒が国公立の大学に合格している例もある。高校においても、通訳だけでなく日本語を教える教員の必要性が高まってきているという実感を受ける。高等専修学校においても外国籍の生徒の増大はまだまだ伸びしろがあると思う。生活保護、不登校、発達障害、家庭環境の問題、外国籍の問題など様々な問題がある中、安城生活福祉高等専修学校は丁寧に行っているという印象を持っている。

【岩瀬委員】本日の共同募金においてもブラジル籍の生徒がおり、最初は呼びかけになかなか苦労していたが、次第にうまく言えるようになっていった。地域連携も含めてあらゆる場でスキルアップできるように指導していきたい。外国籍の生徒にもボランティアを積極的に行おうという意志が見えて嬉しく思う。

【鳥居委員】外国籍の生徒を積極的に受け入れていただいていることに大変ありがたく思っている。危惧していることは外国籍の生徒よりもその保護者がより日本語が通じないことである。保護者が、通訳がいないと意志疎通できないときに様々な事項をどのように伝えるかは大きな課題であると思う。生徒を通じて伝えることができる内容とそうでない内容があるかと思う。また、国籍も多種にわたってきており、そのあたりの難しさも課題になってくると思う。公立の中学校では通訳の巡回が増えてきた。高等専修学校では通訳は設置しているのか。

【岩瀬委員】現在通訳は設置できていない。そのため、生徒自身に日本語を教える補講を実施している。中学校ではどのくらいの頻度で通訳がみえるのか

【鳥居委員】本校では外国籍の生徒が多いこともあり、週5日のうち、4日ほど通訳が来ている。半日ずつほど勤務している。学校便り等の翻訳もしてくれている。生徒内で揉め事があった時にも来てもらっている。懇談会にも来てもらう。やはり家庭とのパイプ役になってくれるのが大きい。

【岩瀬委員】本校の大きな課題として認識している。生徒自身の通訳では限界が来ているように感じている。

【鳥居委員】今後もこの地域では外国籍の生徒は増えていくことが予想されている。対策が必要になってくるのではないかと思う。

【兵藤委員】外国籍の生徒は中学校も高等学校も今後確実に増える。安城市内の中学校では外国籍の生徒の

割合が高い学校では通訳が高頻度で巡回し、外国籍の割合が低い学校では巡回していない。需要と供給の観点から考えると、高等専修学校にも通訳を配置できるようになっていく必要があると考える。本年度から安城生活福祉高等専修学校では男子生徒の募集を開始されたが、雰囲気がとても良い方向に振れたと思う。地域との連携の充実と男子の入学、そのそれぞれが安城生活福祉高等専修学校の雰囲気の向上に繋がっているのではないかと考える。地域の企業も男子の就職を期待しているところが多い。

【岩瀬委員】確かに男子の入学によって大きく雰囲気が変わったように思う。男子と女子では振り舞いや指導の方法が異なる部分もある。それぞれにしっかりと対応できるようにしていきたい。

【兵藤委員】男子生徒にもおいても専門職に対して強い目的意識をもったものが中学校にもいる。そのような生徒の受け皿になってもらえればありがたい。

【落合委員】初年度に入学してきた男子生徒は、元気はあるが比較的優しい生徒が多いように感じる。女子生徒とともに切磋琢磨して頑張ってくれている。

【宮治委員】やはり就職先の企業は男子生徒の需要が非常に大きいことを実感している。本校としてもその声に応えるべく本年度の調理師科に続いて来年度は介護専攻に関しても共学化を進めていく。

## 5) 安城生活福祉高等専修学校の現状

【宮治委員】安城生活福祉高等専修学校には愛知県内の広範囲から生徒が入学してくるが、安城市、岡崎市出身の生徒で全体の40%を超える。安城生活福祉高等専修学校は2年次より各専攻に分かれて専門的な授業や実習を行っていくが、各専攻において中学校や企業、地域と連携を積極的に行っている。それぞれの専攻における連携の状況を紹介していく。

ファッション専攻では、中学生からファッションイラスト画を募集し、本校の生徒が実際に制作して学園祭や市の複合施設でのイベントで実施するファッションショーで披露している。その他にも外部のイベントに積極的に参画し、ファッションショーや小物販売などを実施している。昨年度は名古屋の栄で開催されたファッションショーや安城七夕祭りの浴衣コンテストに参画した。

【河口委員】パティシエ専攻では、中学生を対象にスイーツコンテスト実施しており、入賞作品は実際に製造するとともに学園祭において表彰を行っている。また、学内に菓子製造業許可を取得した調理室を備え、学内外の様々な場所で生徒が作った菓子を販売している。他にも企業との共同開発や外部販売などの機会が充実している。昨年度は地元の有名なパン屋さんや抹茶屋さんと共に共同開発したパンの販売を行った。具体的な内容については後程ご意見をいただく予定である。

【宮治委員】保育専攻では、地域の幼稚園や保育園での現場実習の機会が充実している。また、園児用の衣装を制作して、幼稚園児とともに学内外のファッションショーに参画する機会もあり、積極的に地域と連携を行っている。

介護専攻では、地域の介護施設での現場実習の機会が非常に多い。介護実習や介護レクリエーションの実習などを行っている。高等専修学校の敷地内にデイサービスがあり、生徒は放課後にも実務経験を積むことができる。また、三河地域の介護施設と連携して、奨学金制度を創設した。地域の施設との密な連携なしには成立しない制度であると考えます。

【岩瀬委員】介護専攻は令和2年度より「医療福祉専攻」に変わり、医療健康コース、介護キャリアコース、歯科看護コースを新設する。また、男子生徒の募集を開始する予定である。

【落合委員】調理師専攻ではレストランやホテルなど、地域の飲食施設での現場実習の機会が充実している。また、外部企業との連携事業や学外での製菓販売に参画することも多い。昨年度は地元の有名店である「北京本店」様に特別講義や調理実習の授業を行っていただき、現場実習にも行かせていただいた。また、地元の酒蔵とのコラボレーション事業も進めている。令和元年度より男

子生徒が入学しており、良い雰囲気です学校生活を送ることができている。

本校の生徒の卒業後の進路の状況としては、全国の高等専修学校の状況と同様に関連する専門学校等への進学や専門的な知識を生かすことができるような企業への就職が多く、大学等への進学は多くない。約7割の生徒が進学、約3割の生徒が就職である。進学先としては、美容、ファッション、製菓、保育、介護など高等専修学校で学習した専門分野をより学習することができる専門学校への進学例が多い。就職先としては地域性もあり自動車関連等の製造現場が多いが、調理、製菓、製パン、介護、美容、アパレルなどの企業への就職も増えてきている。各専攻における地域連携事業や外部での販売などを通して、こういった専門職への就職を希望する生徒が増えてきている。大変うれしく思う。昨年度の就職決定率が98.1%と非常に高く、全国の高等専修学校の平均を大きく上回り、全国の高等学校の平均も上回る事ができた。

特に調理師科の生徒もしくはパティシエ専攻の生徒においては、専門職に就職する生徒が8割から9割となっており、非常に高い割合となっている。高校の3年間で現場実習や地域、企業との連携事業を生かして関連する企業への就職を希望する生徒が多くなっている。

【岩瀬委員】他校と比較しても、高校のうちに学んだ内容が生かせるような就職先への就職実績が非常に高いと思う。ミシュランの星がつくような料亭に就職した生徒もいる。

【藤本委員】そのような就職先に進む際の試験は面接だけか、それとも実技試験があるのか。

【落合委員】多くの飲食店は面接だけであるが、実技試験を課す企業もある。切り方などの簡単な実技試験を実施されるケースが多い。最近では一般常識の試験を課す企業が増えている。

【松永委員】介護の専攻は、高等専修学校で全ての単位をとったあとに国家試験の受験が必要なのか。専修学校では免除か。

【岩瀬委員】免除ではない。卒業後に実務経験を積んだあとに国家試験の受験が必要になる。そのため、卒業後のフォローとして、介護専攻の卒業生には毎月国試対策の補講を行っている。アフターケアも重要であると考えている。やはり、補講に参加しない生徒は国家試験に合格するのが難しいように思う。

【松永委員】公立の福祉系高校も近年は介護専攻に進学する生徒が減少して苦戦を強いられていると聞く。社会のニーズと就職を希望する生徒の数にギャップがあり、どこの学校も苦戦されている。この分野は今後どうしていけばよいのかと率直に不安がある（松永）。

【岩瀬委員】介護ロボットなどの発達により、現場の職員の負担は減りつつある。資格を有する職員の待遇は補助制度の拡充などにより、非常に改善されてきていると考える。やはり仕事に対するイメージの問題が大きいと思う。

【松永委員】噂やイメージの影響が大きいことは感じている。中学校から高校に行く際に、もしくは専門学校を選ぶ際に、やはり保護者が業界に抱いているイメージが影響してくると思う。そのあたりをうまく宣伝できれば状況は変わると思う。

【岩瀬委員】パート職員や資格を持たない職員の待遇が高くないとはその通りだと思うが、資格をもった職員の待遇は悪くない。そのあたりをしっかりと伝えていきたい。

【松永委員】学校が伝えるより保護者の口コミの方が影響が大きい状況がある。さくら学園の強みは、系列に介護の専門学校を有していることであると思う。高等専修学校を終えてからの専門学校への接続の方法、高等専修学校と専門学校で連携して介護人材を育成していく方法を検討していくことが大切であると考えている。そのあたりの接続の仕方を中学校の保護者は知らないのでアピールポイントになるのではないかと考える。

【宮治委員】ちょうどご意見いただいた内容が2015年度から3年間実施した本校の文部科学省委託事業の大きなテーマであった。その中では、愛知県内の福祉系の専門学校から様々なご意見をいた



だき、どのようなカリキュラムを高等専修学校で学習し、どのようなカリキュラムを専門学校で学習するのか、そしてそれをどのように接続していくのかという部分をまとめていった。系列の専門学校の授業を本校の生徒が体験したり、専門学校の教員に授業を依頼したりして、より高度に介護を学習したい生徒が興味を持てるようなカリキュラムを作っていた。ただ、介護の場合は高校卒業後に実務経験を積むことで国家資格が取得できるため、専門学校に進学して高度に介護の学習をしたいと考える生徒の数は大きく伸びてはいない現状がある。

【岩瀬委員】介護福祉士の資格を取得するための学習は高等専修学校の段階で行い、大学等への進学後に同じ福祉系である社会福祉士の資格を目指す生徒もいる。調理の分野でも高等専修学校の間調理師の免許、製菓衛生士の免許を取得したあとに大学等に進学して管理栄養士の資格を目指す生徒がいる。卒業後にさらに高度な資格に挑戦できるというのは高等専修学校の大きな強みではないかと考えている。高等専修学校の間は何を目指し、卒業後には何を指すかそれぞれの生徒にあったプランを見つけていくことが大切であると考えている。

## 6) 地域連携の状況

【宮治委員】安城生活福祉高等専修学校では、多くの生徒が近隣地域への就職するため、近隣地域や企業と連携し、今後地域で活躍できる人材を共に育成していくことが大切であると考えている。本日はパティシエ専攻における地域や企業との連携事業に関して紹介し、意見交換をさせていただきたい。

まず、1つめに三河安城駅前のベーカリーカフェで継続的に洋菓子販売をさせていただいた事例について取り上げる。

Alt BAKERY&CAFÉ では、メニューの企画から生徒が携わり、地元の食材を用いた洋菓子を企業とともに検討した。本校内で洋菓子を製造して定期的にお店に商品を補充して販売させていただいてきた。店頭販売での様子を生徒に伝達して、情報共有を行ってきた。昨年度の会議で取り上げさせていただき、その後も継続的に販売を進めてきたが、お店の閉店に伴い、事業としては終了した。

【河口委員】Alt BAKERY&CAFÉ は地元の建築設計事務所が運営しており、地域貢献を目的に開店されたお店であったため、利益度外視で生徒が様々なことに挑戦させていただいた。

【宮治委員】Alt BAKERY&CAFÉ で販売してきた洋菓子は、新たに安城市の複合施設で地元の有名企業である「お豆腐工房いしかわ」様の店舗で定期販売を実施させて頂いている。今回は地域貢献だけでなく、利益等の計算も重要になってくると考える。

【河口委員】まだ2週間ほど前に始まったばかりの事業であるが、Alt BAKERY&CAFÉ での経験を生かして、生徒との話し合いを進めながら事業が円滑に進むように努力していきたい。

【宮治委員】予定では、週に一度商品の補充を行い、複合施設で販売を行う予定である。

もう一つ本年度より始まった地域連携、企業連携として半田市のNPO法人 Seven Swell 様との連携事例を取り上げたい。こちらは前に述べた地元の複合施設での洋菓子販売の際にお声がけいただいて事業が始まった。生徒が実践的な学習を行えるように連携して事業を実施できないか、地域の食材を用いてお菓子を共同開発し、幼児施設や学童保育で園児や小学生に提供できないか、また、NPOで運営されているカフェで販売できないか、そういったことを目標として進めて動いている。

【落合委員】まず、8月7日に本校のパティシエ科の生徒、調理師科の生徒を対象に、地元の食材を使ったレシピを考える授業を実施していただいた。グループごとにアイデアを出し合って商品を検討した。代表の藤本様の方から、当日の授業の内容をご説明いただきたい。



【藤本委員】産学連携として、高校や大学といろいろな事業を進めているが、どこの学校も既に産学連携という事業は多かれ少なかれ実施している。産学連携の進め方としては、地元の企業からお話があり、また、お題が与えられて学校と共同して考えていくという流れが大半である。そのような産学連携を行うことが高校生や大学生にとってどれくらいやりがいがあるのかという部分に疑問を感じている。今回の産学連携では「仕事をするとはどういうことか」という部分から学生と話を始めている。仕事の目的は、世の中が困っていることを自分たちが解決することであるので、本来は会社から課題を与えられるのではなく、自分たちで課題を見つけて解決方法を考えるような進め方で産学連携事業をするべきだと思う。夏休みの授業の中では、子ども達が食べるおやつを開発しようという課題の中で園児が食べたいもの、保護者が食べさせたいものは何かと考えること、すなわち、対象者理解を深めることに大きな重点をおいてグループ討議を進めていった。

【宮治委員】実際に参加した生徒にヒアリングを行ったところ、「特別授業が面白かった。ただ商品を考えるのではなく、ターゲットのことを考えて検討するのが大事だと学んだ。」「普通高校では無いような授業でこれからは生かせると思った。」「グループワークは難しかったがとても楽しかった。専門学校ならではのといった感じの授業で良かった」といったような感想が聞かれた。藤本様の思いが生徒にしっかりと伝わっているように思う。そのような授業を実施していただき、大変感謝している。

【落合委員】その後 11 月 7 日に NPO 法人 Seven Swell 様ともう 1 社地元の企業の方が管理されている畑でさつまいもの収穫に立ち合わせていただいた。ここで栽培したさつまいもを使用してスイーツを考案予定である。まずは、本法人内のグループホームにおいて、利用者、近接する保育園の園児、本校パティシエ専攻の生徒によってクリスマス会を企画し、その場で収穫したさつまいもを用いたスイーツを提供してみて、その様子を踏まえて、今後対外へと展開をする際の方針を検討していく予定である。



【宮治委員】本会議に向けて、実際に当連携事業に参加した生徒にヒアリングを実施してきたので報告する。

まず、1人目の生徒は、安城西中学校出身の調理師専攻・製菓衛生士受験コースの2年生の生徒である。

この生徒は、中学校時代は家庭科の授業が大好きで、一方でコミュニケーションが苦手であった。本校に入学した理由は調理師免許と製菓衛生士免許の両方が取得できるためであった。

高等専修学校では、いろいろなクラスメイトがおり、3年間クラスが変わらないので、人間関係で難しいところもあるが、リーダー的な役割を担うこともあり成長できたと話していた。特に地元の有名なレストランである「レストラン仔馬」様での現場実習が思い出に残っており、特に接客などでコミュニケーションを学ぶ機会があったのが良かったと話していた。企業、地域連携の事業については、やはり販売するための商品を作るのは大変で正直放課後は帰りたいたいと思うこともあるが、知識も増えて勉強になっていると感じている。販売していることをもっと外部に発信していけば、それによってモチベーションが上がって良いと思うと話していた。

また、2人目は碧南南中学校の出身でパティシエ専攻3年生の生徒にヒアリングを行った結果をご報告する。こちらの生徒も中学校時代は人と話すのがとても苦手な生徒であり、現在も口数は少ない。本校を志望した理由は、ファッションに興味があったからと回答している。ファッションに興味があったが、1年次に製菓の先生の授業を受けて、パティシエになりたいと思うに至った。この生徒は、卒業後は地元で小さい頃から大好きな洋菓子店であった「エルメート洋菓子店」様に就職することが決まっている。

本校ではクラス委員に挑戦している。コミュニケーションに苦労しているが自分としては頑張っていると話していた。

企業、地域連携の事業を通して、自分自身コミュニケーションが苦手なことは理解しているが、学内や学外での製菓販売の際に人に呼びかけたり、人と話したりすることが少しずつできるようになってきたと感じている。学内でも学外でも、お客様に関わって直接販売する機会がもっと増えていくと嬉しいと話していた。

【落合委員】この生徒は就職活動時には、エルメート洋菓子店にどうしても就職したかったが、エルメート洋菓子店は高校生採用をしていなかった。そこで連絡をしたところまずはインターンシップを行った後に求人を出すかを決めるとのことであった。コミュニケーションが苦手な生徒であるため心配していたが、実際外に出たら色々な経験が役に立って、インターンシップをうまく過ごすことができ、内定を勝ち取ることができた。学校の中では口数が少なくても、外部での販売の時などは積極的にコミュニケーションをとれるようになる生徒もおり、この生徒もそういったタイプの生徒であったと考える。

【宮治委員】生徒を指導する立場から、学外での連携事業での生徒の関わり方をどのように見ているか。

【河口委員】無口な生徒やコミュニケーションが苦手な生徒の中にも、まじめな性格で考え方がしっかりしている生徒がいる。そういった生徒は非常に積極的に事業に関わってくれている印象を受ける。そのような生徒がクラスを引っ張ってくれて事業がうまく回っているように思う。

【岩瀬委員】製菓衛生士の国家試験は難しい。何度も受験することになるが、挑戦を繰り返すことで合格を勝ち取っている。資格に挑戦することが生徒の成長に大きく繋がっているのではないかと考える。

【宮治委員】本校全体について、また地域や企業との連携事業について広くご意見を頂きたい。

【鳥居委員】発信してもらえるとモチベーションがあがるという意見があったが、その通りだと思う。地元の複合施設に自分たちが製造した洋菓子が置かれることも大きいですが、それを広くみんなに知ってもらうことが大切だと思う。

広報の方法を生徒が検討するのも面白いと思う。チラシをつくって町内会に配ったりすると

良いのではないか。ファッション科の生徒が協力してつくるのも面白いと思う。多科と協力して、学校全体で活動することができると思う。

地産地消をテーマとして新聞に取り上げてもらったりできると良いと思う。有名な企業とのコラボレーションもうまく PR することによって生徒たちのやりがいにつながると思う。なかなか難しいかもしれないが、小中学校の学校給食にアイデアを提供することも検討できないかと思う。パッケージのデザインでも良いと思う。「発信」という部分をテーマにして活動できると良いと思う。

【岩瀬委員】市の会議の際に生徒が作った洋菓子をみんなに食べてもらい、好評をいただいている。昨年には市とコラボレーションして市のイベントでメロンパンを販売したこともある。いろいろなことをしているが、地域の方々にまだまだ認知されていないと思う。給食センターとコラボレーションするのは良い方法だと思う。ぜひ検討したい。

【松永委員】北京飯店、レストラン仔馬、おとうふ工房石川など地元の有名な企業とコラボレーションすることは生徒の実生活に繋がり、その中で職業教育ができるのは良いと思う。会話が苦手でも、技術を磨いて認めてもらう経験をすることが将来に繋がると思う。

今後の教育は知識を覚えるだけでなく、それをどう生かすかという部分が求められる。途中の対話、プロセスが重要になる。地元のトップにいる方々に話を聞き、どのようにしたらそこにたどり着くことができるかということを考えることが生徒自身にとって大切だと思う。他校のように自分たちで店を作って運営することも大切だが、地元業界のトップと接しながら自分たちのアイデアを出す機会を設けることが理想的な職業教育だと考える。先生たちは大変だと思うが、愛情をもって事業を進めれば生徒もついてくると思う。

【兵藤委員】高等学校とは違う、高等専修学校だからできるという部分があるので、持続可能である事業と単発で実施する事業を分けて、持続可能な事業は継続的に運営することで広がっていく部分があると思うし、単発な事業もまた違う経験ができてよいと思う。無理のない範囲で持続可能な事業を進めて行くと良いと思う。

【藤本委員】単発で実施するのは自己満足であり、産学連携の一つの目標として、持続可能に継続的に進めて事業化に向けて進めようとする姿勢が重要であると思う。子どもたちの中でお金を稼ぐのは悪いことだと考える風潮があると思うが、必ずしもそうではないと思う。このように現場に近いところで学習することで考え方が良い方向に変わっていけばよいと思う。職業教育からライフスタイル、ファイナンシャルプランニングなど様々な方向に学習の幅を広げていけばよい。最近の生徒はボランティア志向が強いと思う。やりがいを重視するのは良いことだと思うが、職業の根幹を考える機会をつくることも大切だと思う。

専修学校という存在を知らなかったが、素晴らしい学校種だと思った。自分が学生の頃に知っていたら入りたいと思った。もっと認知が進んでいけばよいと思う。

【岩瀬委員】それぞれの先生方の立場から様々な意見をいただき、非常に参考になった。現在は偏差値を尺度とした学校選択の風潮が強いが、これからも高等専修学校らしく、心が豊かな生徒の養成、実践的な職業教育をこつこつと進めていき、外部に発信していきたいと思う。会議にご参加いただいたことに大変感謝している。

### 3-7 徳島県【担当校：龍昇経理情報専門学校】

◀第1回地域振興分科会（徳島県における地域連携の実態）▶

○実施日時：令和元年9月30日（月）10：00～11：30

○実施場所：とくぎんトモニプラザ（徳島県徳島市徳島町城内2-1）

○参加委員：井上 圭三（徳島市教育委員会教育次長）

井上 裕明（四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹）

小川 善弘（徳島市城西中学校校長）

清水 和夫（徳島市城東中学校校長）

杉本 恭介（徳島市徳島中学校校長）

鈴江 智子（東邦セールス株式会社管理部）

西池 幸夫（東邦セールス株式会社管理部長）

湊 貴司（徳島市加茂名中学校校長）

山尾 新次（四国福山通運株式会社徳島支店支店長）

山口 麻里（徳島市八万中学校校長）

横山 鉄也（徳島県教育会会長・徳島市南部中学校校長）

久次米 健一（龍昇経理情報専門学校校長）

久次米 健義（龍昇経理情報専門学校副校長）

（計13名）

○議題・報告内容（抜粋）

＜会議の目的＞

龍昇経理情報専門学校（高等専修学校）を中心に、中学校や企業との連携実態を報告する。

#### 1) 龍昇学園理事長挨拶（久次米 健一）

国のデータによると発達障害がある子どもの割合は10%未満となっている。しかし、県立私立の高校の先生方の意見を聞いていると、発達障害ではないかと思われる生徒の割合は20%くらいではないかという意見がある。そういった発達障害がある生徒を地域や企業、教育行政、現場の先生方と連携して、どのように支援をしていくかということを考えていくのがこの会議の趣旨。忌憚なき意見を頂戴したい。

#### 2) 徳島市教育委員会教育次長挨拶（井上 圭三委員）

支援の必要な子どもたちが増えてきている。そういった子どもたちにきちんと目を向けて、支援教育、そして社会に出た時にも配慮していただきながら育てていかないといけない。中学校、高等専修学校、大学、企業、それぞれの現場での子どもたちの情報を聞かせていただきながら、周知してできるところを進めていきたい。有意義な会になるようご協力をお願いします。

#### 3) 前回会議のまとめ・現在の取り組み（久次米 健義）

本学校での取り組みを発表したうえで、中学校の校長先生方から提案や課題を挙げていただいた。企業の方からは、入社当初のあいさつがきちんとできないという意見がみんな共通していた。

今年度の在校生のデータ報告

中学校時代に不登校（年間欠席30日以上）を経験した者は全体の54%。障害による手帳を取得している者が全体の9%。手帳は取得していないが、発達障害ではないかと思われる者が全体の21%。

進路について過去5年のデータを報告。進学が43%、就職が57%。

中学校からの情報伝達については、個別の学校見学の際に、引率の先生から話を聞かせてもらっている。授業時間内ではアウトプットすることで知識の定着や自信を深めるために生徒同士の教え合いの時間を設けるようにしている。

就職活動に向けてもグループでの他己分析や、機械を使った電話応対練習、面接練習を行っている。企業とのやりとりでは、前回会議で頂いたご意見をもとに、以前より密に連絡・情報の交換を行うようにした。応募前の見学は必ずお願いし、生徒の癖や傾向を伝えたくて、夏休みなどの短期アルバイトや1日仕事体験もお願いしている。

#### 4) 卒業生の現状

【井上裕明委員 四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹】

龍昇学園さんから本学に9名入学している。残念ながら1名が退学、1名が休学となっている。残りの7名についてはよく頑張っている。明るくて友人も多い者、販売士2級・日商簿記2級を取っている者、デザインコースにて公募ポスターで賞を取っている者、保育士と幼稚園教諭の免許を目指している者など。

3月まで公立高校の校長をしていたが、先生方が頑張って指導してくださってもなかなかうまくいかず、学校判断での進路変更ということがあった。そういうことから考えると、龍昇学園さんから入学している学生の頑張りというのは、本学だけの取り組みではなくて、龍昇学園さんの時代にしっかりと指導をされているというところが大きいのではないかと感じている。

【山尾新次委員 四国福山通運株式会社徳島支店支店長】

昨年1名入社していただいた。今年から赴任したので入社当初のことは分からないが、第一印象としては、素直なおとなしい子という感じ。みんなにアンケートをとったところ、最後まで一生懸命行う、気が利く、行動が早い、嫌な顔をしない、遅刻をしない、うちは接客業なので接客がとてもしっかり、礼儀正しいなど、いいところばかり出てきた。悪いところも書くように伝えしたが、声が小さい、おとなしい、積極性が少ないというくらいしか意見が出なかった。最近の若い子にしたらすごく礼儀正しい。とても教育が行き届いていると感じる。

【久次米健一】

四国福山通運徳島支店で総合事務として勤務している彼の様子は、配付資料の龍昇新聞、卒業生を訪ねるというコーナーで掲載している。

【西池幸夫委員 東邦セールス株式会社管理部長】

現在3名の方が在籍している。みんな出勤率は非常にいい。入社5年目の方は、年齢層の高いところに配属になり、話し相手がいない、あまりしゃべるのも積極的でないということがあって、その時は辞めようかなという思いもあったようだが、最近若い子が入ってきてその輪に加わり、ちょっと明るくなってきた。

入社3年目の男性の方はやはり無口。挨拶もこちらからすると返ってくるが、喋らない。基本的には3年目から正社員登用していくが、この方については難しい。他の方たちに置いて行かれているが、それでも一生懸命出勤率も高く、黙々と仕事をしている。ただ、男性なので彼の将来設計を心配している。将来家庭をもってやっていく中で、本当にこのままでよいのか、本人がどう考えているのか分からない。もっと積極的に次のステップの仕事に行くということがなかなか見えてこない。

【鈴江智子委員 東邦セールス株式会社管理部】

3名とも採用に携わったが、みんな大変おとなしいと感じた。最初挨拶はできなかったが、今は私の顔をみると挨拶できるようになった。私も積極的に挨拶をするようにしている。この3名以外にも、他の高校から入ってきた子で、挨拶をしない、人の目を見ない、そういう子もいる。本当に基本的なことから私たちも考えて、挨拶をしようなど、声をかけている。また、現場の仕事では辛いこともあるが、「頑張りよ」と声をかけ、みんな心を鍛えて強くなってきている。

#### 5) 発達障害について

【小川善弘委員 徳島市城西中学校校長】

先月開催された特別支援教育の大会で、大学の先生で医者をしている方の講演があり、印象に残っていることがある。発達障害はステップがある、個人差が大変違う。故に、どこからが障害でどこからが障害でないというのを決めるのが難しいという点。医学的な考えによると、わがまま・気ままではなく、脳の機能異常が原因であるという点。できないことが多いので叱られることが多く、褒められることが少ないという点。これらが心に残っている。教員の共通認識として、子どもたちがやったこと、やろうとしていることを認めていこうというスタンスでいる。

【井上裕明委員 四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹】

今から10年ほど前に総合教育センターに転勤になった。小中学校では発達障害の生徒の対応が進んでいたが、高校では対応が全然できていなかった。中学までは手厚く面倒も見てくれるのに、高校に入ったら冷たいという意見は保護者から頻繁に出ていた。このままではいけないと思い、高校でも特別支援教育が必要だということで動き出したが、かなり反発があった。高校では義務教育ではないから、そこまでできないというのが高校教員の反論。特別支援は大切なんですということを強調して伝えることによって、数年かかったが、現在やっと高校現場での発達障害の対応ができるようになった。とはいえ、今現在、いろいろな事情で高校を中退する者は県内で年間100名を超えている。高校の現状として知っておいてもらいたい。

## 6) 中学校の現状

【横山委員鉄也 徳島県教育会会長・徳島市南部中学校校長】

小学校のころから支援学級に入って、親も理解があり、情報の引き継ぎをしながら教育を受けている生徒は、自立へと向かっていく傾向が強い。難しいのは、通常学級に在籍していて、親が認めないケース。大学の小児科の先生が言っていたが、子どもを見る時には必ず家庭を見なければならぬ。それと個人的な意見だが、学校で出来ることと、家庭で出来ることとがある。それを精査していく必要がある。あいさつというのは、本来家庭教育すべきこと。それがいつの間にか学校・企業でしていかなくてはならないようになってきている。この機会に家庭に返す方が子どもたちや社会にとってよいのではないか。

【山口麻里委員 徳島市八万中学校校長】

合理的配慮という言葉がある。中学校の方でも、保護者や本人が望むことを何もかもしなくてはいけないのではと、最初一時混乱したことがある。横山委員の話にあったように、できることとできないことを見極めて支援していかなければいけない。

井上委員から高校は小中学校に比べて支援教育が遅れているという話があったが、それでも小学校の方がかなり進んでいて、中学校は遅れているという部分があるように感じる。現在本校の特別支援学級に在籍している生徒は8名だが、来年は18名、その次の年は32名、その次の年は38名と、どんどん増えていく予定。小学校で支援学級に入ると、いろいろな支援が受けられたり、先生方が熱心であったりすることで、支援学級を希望する生徒が増えていると思われる。

合理的配慮を含め、中学校側はきちんと1人1人に合った支援をしていかなければならないなと感じている。

【清水和夫委員 徳島市城東中学校校長】

本校も年間30日以上欠席が30人を超え、不登校の多い学校になっている。徳島市の適応指導教室、すだち学級にたくさんお世話になっている。子どもたちのできていることをしっかり認めてあげることが大事。しかし、すだち学級に行くことができない子、家に引きこもりの子もいる。

学校には来ることができるが、教室には入れない子たちのために1つの教室を開放している学級がある。現在3名の生徒が利用している。4月には本来のクラスに戻るようになっているが、どうしてもダメなら5月からまたそちらの学級という形をとっている。去年は教室に入ることができなかったが、今年はい入ることができるようになった子もいる。

先ほどの学校新聞の中で、この仕事をするにあたってどんなスキルが必要かという問いに、卒業生がコミュニケーション能力と答えていることが、非常にインパクトがある。こういったことを中学校の段階から何か指導できる手立てがあるのではないかと感じる。

【杉本恭介委員 徳島市徳島中学校校長】

現代社会は5年後10年後が予測できないくらいのスピードで変わっている。なくなる仕事も出てくる。しかしそれを予測して、子どもたちが生きていける力をつけてあげなければいけないという話を職員たちと話している。

それと同時に、不登校や発達障害の子もいる。すだち学級と連携してやっていける子もいれば、部屋から出られない子もいる。そういった子たちにいろいろな選択肢を与えてあげなければならない。1日も部屋から出られなかった子が中3の最後には学校に来て進路相談を受け、進路選択をしていく。親御さんはもちろん、本人が特に社会的自立を願っている。それを支えるのが中学校教員の役割。

その中で、社会への架け橋として龍昇学園さんに期待しているところは大きい。こういう力をつけることでこういう生き方ができるという情報を提供していただけることはありがたい。ここからはお願いになってしまうが、時代のニーズに応じた学習で人材を育成していただいて、その取り組みや成果をどんどん発信していただけたらと思う。そうすると今どうしようか迷っている生徒にも光が見えるかと思う。

【湊貴司委員 徳島市加茂名中学校校長】

不登校の子たちの中には、高い割合で支援が必要な子どもたちがいる。学級の中で、空気が読めないとか、人との距離感が分からないために、学校での居場所がなくなって休みがちになり不登校になってしまうというケースが目立つ。

龍昇さんの学校説明会に参加すると、不登校だった子どもたちが生き生きと活動している。キーワードとして安心安全、特に安心を感じながら生徒たちが過ごしているのかなと強く感じる。そういった学校経営が自分の中での指針となっている。

子どもたちを認める・褒める場面を自然と待つのではなく、そういう機会をあえて仕組む、そういう回数を増やすのがいいのかなということで、本校ではいろいろな活動をさせるようにしている。それをやらされるのではなく、子どもたちの方からこういうことをやりたいですという風に持っていく。たまたまですが、結果として不登校の生徒が2年前は27名、昨年度が18名、今年度現時点では7名と減ってきている。

部活動では目立てないのだが、奉仕活動で先生に褒められたことで生き生きしたり、不登校だったが友人に誘われて朝のあいさつ運動に参加するようになったり、自分のやりがいや小さな目標を持つことができた。これは龍昇さんで、資格を取得するために一生懸命になっている子どもたちの姿に近いものがあるのかなと、龍昇さんをお手本にしている。

子どもたちが不登校になる要因は、友人関係と言ってはいるが、実際クラスの中で何があったのかというと、特にない。要は不安。学級の中にいるのが不安だと。そういう状況に対処しないと、そのまま医者に行っても起立性の調節障害だと診断されるだけ。安心して過ごすことができる場所づくり、目標をもたせるような学校経営をするようにしている。

進路については、年度末、厳しい状況になったときに、こういう学校があるよと龍昇さんを紹介しているという経緯がある。もっと言えば、子どもたちの方から龍昇さん目指して頑張るんですという声が出てくるようになればいいなと思っている。そのあたりから連携とは何をしていけばよいかが見えてくるように思う。



## 7) 保護者の理解について

【久次米健一】

発達障害ではないかと思われる生徒に対して、そのあたりの理解を保護者の方にどのようにして伝えていくのか、具体的な方法を聞かせていただきたい。

【横山鉄也委員 徳島県教育会会長・徳島市南部中学校校長】

その話にもっていくまでに時間を要する。学校というチームで、保護者の方に子どもにとって何が一番大事なのかということ、時間をかけて説明していき、理解していただく。

【小川善弘委員 徳島市城西中学校校長】

本当に長い間の課題。障害があるということ認めたくない保護者はたくさんいる。教員の側からそういう話を出すと、信頼関係が崩れるということが実際にあった。本校ではスクールカウンセラーに週1回来てもらっている。子どもの状況をスクールカウンセラーの方から保護者に話をしてもらおう。そうすることで、医療にもつないでいくことができる。

【井上裕明委員 四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹】

総合教育センターに勤務していた時、学校と家庭との間にワンクッション置くために、相談部署の電話番号を保護者の方に教えるよう学校側に伝えていた。ワンクッション置くことで保護者の方も話を理解してくださるということもある。それもひとつの連携。

【山口麻里委員 徳島市八万中学校校長】

本校もスクールカウンセラーで成功している例がたくさんある。週2回、午後から。スケジュールは一杯になっている。

【清水和夫委員 徳島市城東中学校校長】

保護者に困り感がないときはうまくいかない。保護者に困り感があって悩んでいる時はスムーズに行くことが多い。保護者とコミュニケーションをとったり、状況を確認したりしながらタイミングを見計らって話をするようにしている。

【杉本恭介委員 徳島市徳島中学校校長】

やはりワンクッション置いて、専門の方に話をしてもらおうと親御さんも見えやすいものがあるかと思う。教員が決めつけてしまうのはよくない。スクールカウンセラーの他に、巡回相談員の先生に来てもらったり、特別支援学校と連携して来てもらったりしている。同時に、教員の意識や知識も更新していかないといけないので、年に何回か研修をしている。

【湊貴司委員 徳島市加茂名中学校校長】

保護者の方に、ちょっと気になる点があるんですと声をかけ、保護者が子どもを気にかけるというような状況を作っていく。時間はかかるかもしれないが、大きな症状が見えるまでの手立てとしては、家庭へ仕向けていくのも1つかなと感じている。相談を受けるような関係ができた時には、比較的話はスムーズに進んでいる。そういう関係性も大事かなと思っている。

## 8) 企業での対応

【久次米健一】

発達障害ではないかと思われる方に対して、企業の方たちはどう対応しているのか、お話をください。

【西池幸夫委員 東邦セールス株式会社管理部長】

あいさつは、大きな声で、自分からということを入社の時に話をしている。最初はできるが、だんだんトーンが下がってくる。そうすると再度伝えてという風になっている。

【鈴江智子委員 東邦セールス株式会社管理部】

顔を見るとすぐおはようと元気に声をかけるようにしている。こちらから話しかけて明るく持っていく。そして、何か相談があったら必ず話を聞くようにしている。

【山尾新次委員 四国福山通運株式会社徳島支店支店長】

弊社に入社している方は人当りもよく、コミュニケーションもしっかりとれている。

実は娘が3人いるのだが、うち2人が小学校・中学校時代登校できなかった。その時、このような会があったらもう少しなんとかなったのではないかと。いい会に参加させてもらったと思っている。

【久次米健一】

これからいろいろな仕事がAIにとってかわると言われている。しかし、どんな職業であっても、人に感謝される、プラスアルファのサービスの工夫ができるのが人間だと思う。そういった教育をみなさんと共に考えていきたい。

9) 総括(井上 圭三 徳島市教育委員会教育次長)

昨年は教育研究所の立場で参加させていただいた。徳島市役所では、相談員が話を聞いたり発達の状況を調べたりしたうえで支援委員会を開き、その子にあった学びの場を保護者の方や学校側にお伝えしている。小学校への入学時に幼稚園や保育所から子どもたちの情報は入ってくる。子どもがこういうところで困っているということを出しながら相談所や教育調査を勧めているが、保護者の方が発達障害に対して偏見的なイメージがある方の場合、小学校6年間毎年お声かけをしても納得いただけずに通常学級での支援しか受けられなかったというケースもある。

不登校に関しては、昔は学校に行かないのは悪だというイメージがあったが、すだち学級で学ぶことが選択肢として許されていていっていると感じている。龍昇さんへ行きたいという、学校復帰プラス子どもの自立を見据えた取り組みをしていかなければならない。

学校の先生方も企業の方も、1人1人に応じた丁寧な声掛けや自立を促す取り組みをされて、子どもたちを導いてくださっている。この会議が生かされて、よりよい子どもたちへの支援ができるよう今後も協力をお願いする。

≪第2回地域振興分科会(徳島県における地域連携の実態)≫

○実施日時：令和元年12月3日(火)10:00~11:30

○実施場所：とくぎんトモニプラザ(徳島県徳島市徳島町城内2-1)

○参加委員：石井 博 (徳島市教育委員会教育長)

井上 裕明 (四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹)

小川 善弘 (徳島市城西中学校校長)

清水 和夫 (徳島市城東中学校校長)

杉本 恭介 (徳島市徳島中学校校長)

杉本 千恵 (徳島市国府中学校校長)

鈴江 智子 (東邦セールス株式会社管理部)

西池 幸夫 (東邦セールス株式会社管理部長)

湊 貴司 (徳島市加茂名中学校校長)

山尾 新次 (四国福山通運株式会社徳島支店支店長)

山口 麻里 (徳島市八万中学校校長)

横山 鉄也 (徳島県教育会会長・徳島市南部中学校校長)

久次米 健一 (龍昇経理情報専門学校校長)

久次米 健義 (龍昇経理情報専門学校副校長)

(計14名)

## ○議題・報告内容（抜粋）

### <会議の目的>

龍昇経理情報専門学校（高等専修学校）を中心に、中学校や企業との連携実態を報告する。

#### 1) 龍昇学園理事長挨拶（久次米 健一）

全国の高等専修学校は不登校や発達障害の生徒を多数受け入れている。その生徒たちの個性を伸ばすために資格取得や心の教育を行って、実社会や大学に送り出している。しかしその反面、経済的な問題やさまざまな環境の元、教育が行き届きにくい生徒もいる。生徒たちが地域で輝いて生きていくことができるように、これからの高等専修学校の在り方について、委員の皆様からご意見を頂戴したい。

#### 2) 徳島市教育委員会教育長挨拶（石井 博委員）

先般、徳島市の学生生徒補導連絡協議会という組織の体験発表会があった。9名の学生が、素晴らしい発表を行った。審査をして最優秀賞を決めるのだが、審査員の心に一番届いたのは、中学校時代不登校でなかなか学校に行けなかった、その子が高等専修学校に入り、いろいろな壁を乗り越えて今は毎日学校に通い、友人関係も徐々に作ることができているという生の声だった。

少し役割は違うが徳島県は夜間中学校の開設を決定した。多様化する子どもたちの状況の中でいろいろな受け皿の必要性、そして子どもたちの持っている光輝くものをしっかり伸ばしてあげることが大切だと感じている。

#### 3) 前回会議のまとめ（久次米 健義）

平成30年度の第1回会議にてご意見を頂いたものの中で、今年度から反映することができた取り組みを報告した。また、本校卒業生の現状や中学校の現状、そして発達障害についてどのようにして保護者や周囲の理解を得られるようにするのかなど、それぞれの立場で具体的な取り組みを発表し合った。

#### 4) 龍昇学園の現状（久次米 健義）

##### ○3年生の進路について

進学…4年制大学の心理学科、4年制大学のデザインコース、県外専門学校4年制のゲーム学科、専門学校3年制の歯科衛生士コースなど、多方面へ進学。

就職…事務、警備、パン製造、スーパーマーケット接客販売、シール印刷加工など。

##### ○不登校経験者の現状

過去3年間の入学者のうち、中学校時代不登校経験者の割合は57%。そのうち皆勤、精勤等不登校が改善された者が40%。

障害者枠で就職した卒業生の事例を、出席できなかった企業の方に代わり報告。

中学時代に学校の先生の勧めで、進路の選択肢を広げるために療育手帳を取得。

本校入学後は保護者の方と面談を重ね、3年夏に本人も合意の元、障害者職業支援センターにて検査を受けた。作業能力は比較的高く、適正職種は給食の盛り付けや倉庫でのピッキングなど。熟考の末、障害者枠での就職を優先し、3年9月に障害者対象ふれあいマッチングフェアに参加。その時の縁がきっかけで、現在は飲食チェーン店の厨房で仕事をしている。

一定期間ごとに、採用担当者、店長、本人、支援者の4者で、勤務状況の評価・振り返りを行っている。良い評価をいただいている点は、上司に報告・相談ができること、当初の予定より上のレベルの仕事を行われていること。半面、今後の課題点は急な早退や欠勤などの体調管理。

企業側から提案があり、卒業4か月後から障害者就業・生活支援センターへ、支援の引き継ぎを行った。

##### ○就職活動について

6月にはプレースメント株式会社や株式会社ハリアー研究所が主催する、県内外企業の人事担当者と学校の進路担当者が名刺交換を行う、就職情報交換会に参加。

四国福山通運株式会社様とはプレースメント様主催の情報交換会がきっかけで、現在卒業生がお世話に

なっている。先日大阪での就職が内定した者は、ハリアー研究所様からの企業紹介がきっかけとなった。10月末には約70社のブースを生徒が回る、徳島県、労働局、ハローワーク等が主催のジュニアマッチングフェアに参加。東邦セールス様とはマッチングフェアがきっかけでその後たくさん卒業生がお世話になっている。

2月には株式会社ハリアー研究所が主催するトランス就職情報交換会（いろいろな課題を抱える子たちの雇い入れに積極的な企業との情報交換会）に参加予定。

## 5) 龍昇学園での生徒のための取り組み（久次米 健義）

### ○ボランティア活動

毎朝町の清掃活動、赤い羽根共同募金の呼びかけ、冬季夜間防犯パトロール。

小さなこと。やる気さえあればできること。社会から必要とされていることを感じることができる。

### ○検定試験

卒業時に一番の思い出を聞くと、はじめて合格証書を手にした時のことを口にする生徒が多い。自分自身に自信を与えるものとなっている。

### ○校内卓球大会

今年初の試み。意外な子が活躍。それを応援する姿。普段は関わりがない子たちの間に交流が生まれた。

### ○体験発表会

年1回秋に開催。テーマは、昔の自分と今の自分を比べて、将来の夢など。生徒の心の声を聞くことができる。学校の代表は徳島市学生生徒補導連絡協議会主催の体験発表会に出場。今年は、小・中学校時代に不登校を経験し、また現在もさまざまな葛藤と戦いながらもいろいろなことに挑戦し、良き友人とも巡り合えたという発表を行った本校の生徒が最優秀賞を受賞した。

### ○文化祭

クラス単位ではなく、生徒1人1人がしたいことをする。

デザインコンペを開催し、毎年オリジナルTシャツを作成。

事前にお店やイベント、企画運営計画書を学校に提出する。収支を自分たちで計算することで、簿記の実践につながっている。事故やケガにつながらないような失敗は、あえてさせてみる。

自ら出店やイベント運営をしない生徒には、祭全体の準備や裏方をしてもらう。

自由にすることで本領を発揮する生徒もいれば、的確な指示を出すことで能力が発揮できる生徒もいる。

### ○簿記電卓競技大会への出場

好きだからしたい・大会に興味がある → するからには勝ちたい → 勝つためには今どうするか？

常に生徒たちに考えてもらうようにしている。練習方法は生徒たちが考える。お互いに教え合い、高め合うチーム作りを目指している。自分で考え、自分で動く、自立する力をつけてもらう。

こういったイベント毎に、目標シート・振り返りシートを書くようにしている。

## 6) 大学・中学校での生徒のための取り組み

【井上裕明委員 四国大学・四国大学短期大学部広報課主幹】

入学者全員1年生からゼミを取り入れている。レポートの書き方やプレゼンテーションのあり方、礼儀やマナー、いろいろなことを1年生から教えていく。1クラス15名くらい。しかし欠席が目立つ。何回か休んだら教育支援課というところにいるチューターいわば担任のような役割の人に支援に入ってもらおうようにしている。

高校教員時代、農業高校にいた時、学力等が心配な子たちがたくさんいたが、目が輝いていた。なぜか。それは実習。土をいじって、農作物を育てて、販売して、まだあるんです、次。販売して地域の方に喜んでいただく。その喜んで顔を見ることによって、自己有用感、自己肯定感が発生してくるということを目の当たりにしていた。農作物をその地域に広めていくという独自の地域貢献という科目が

あり、生徒も生き生きと活躍の場を与えられて、本当に頑張っていた。

その他、赴任した学校では定時制課程があり、いろいろな子が来ていた。中学時代、不登校などで評定ができないような子たち。その子たちが登校して続いている。その中で見た時に、定時制の先生たちが非常に寄り添って1人1人に対応している。全日制の先生より定時制の先生の方が大変だと。発達障害や悩みを抱えた生徒にはやはりよりそいが大事だと。しかしある面では厳しさも必要。

大学での勤務は1年目で、指導・支援の方法は手探りなところもあるが、本学在籍2,800名中、発達障害や何らかの支援が必要ではないかと思われる生徒は100名近くいるように感じている。

【横山鉄也委員 徳島県教育会会長・徳島市南部中学校校長】

どこの学校でもされていることだと思うが、あいさつ運動を、自己肯定感を高めるものとして力を入れている。それから生徒会活動。受け身だった子どもが進んで発案をするようになっていく。支援が必要な生徒については職員の関わりが大事。普段の雑談の中での人間関係作っていくことで、生徒の表情の変化、行動の変化、この先生だったら自分のことを分かってくれるという信頼関係が生まれる。

【杉本千恵委員 徳島市国府中学校校長】

どの中学校にもありますけれども、生徒会の専門委員会という組織がある。本校の専門委員会とてにかく一番人気、それは給食委員会。給食終わりに各クラスから集まってきた残食をバケツにいれる。ビニール手袋をつけて残食を集めたりとか、牛乳パックを大きなゴミ箱に移し替えたりとか、その中で汚れることもある。だがとにかく給食委員が一番人気。なんで？っていう話です。結局、残食の世話の時は教員がべったりついて一緒にする。7、8人は常時教員が毎日ついて生徒の手伝いをする。ビニール袋の口ひとつつくくのも、「あら上手にくったあ」とか、「牛乳ついたん拭いてあげるわ」とか先生とコミュニケーションをとる中で、役に立っている、自分の仕事だという、そういう小さなことだけど、それがあんだなあ。「今日の給食人気だったんやなあ、残食少ないなあ」とか。そういうところが一番人気の理由なのかなと。

社会に出て、自分が思う幸せをつかむというのが人生だと思う。資格、自信、成功体験がないと、社会に出たら、忍耐力も要りますし、コミュニケーションとっていかなければいけないし、それが逆に苦手な子がどんどん増えているし、小さいことでも子どもはいつもそれを欲しがっている。それがダイレクトに得られる仕事がある。現代の子は自分が食べた食べ残しでも汚いとか言う。しかしそれが集まってくるところです仕事、一番人気があるという、そういうところに対して教師の側が敏感でなければならぬと思う。子どもによりそうよりそうと言いますが、よりそったら何があるのかは、よりそわなければ分からない。これからの若い教員にも伝えていかなければならぬ。うちに目立った取り組みというものはないが、毎日のことを教師が子どもと一緒にやるといってやるという、その大筋を外さなければ。教師の気づきというもの、これからはもっと大事なのかなあと思っている。

【山口麻里委員 徳島市八万中学校校長】

今年の文化祭の演劇は3年生全員がステージに出た。不登校ぎみの子もいたので、よくあれは担任の先生が考えたなあと思う。生徒1人1人に得意なことをさせて、演劇やダンスを1つの流れに組み込んでおり、先生が出演しているクラスもあった。非常に感銘を受けた。そういう時は本当に自己肯定感が高くて毎日ニコニコ笑顔が多かった。

それから部活動。運動部が2つ、県の新人戦で優勝した。本当に手のかかる子ばかりで、障害と診断されている子もいる。おはようの代わりに暴言を吐く子が何人もいて、先生に対しても、友達に対しても、先輩に対しても乱暴な言葉づかいをする。最初は試合でも暴力を振るいそうになったり、暴言を吐いたりして大変だった。だんだん落ち着いて、先日優勝できたということなんです。今はすごく自己肯定感が高く、嬉しそうにしている。声をかけても暴言ではなくおはようございますと言ってくれるようになった。

他にも家庭の状況が厳しい子がとても多い。授業時間にじっと我慢して座るとというのが不可能なような子がたくさんいるのだが、その子たちが部活動と言うものを得たおかげで、自己肯定感が高くなり、落ち着きつつある。それで社会に貢献できるような基礎をつくっていけないのではないかと。部活動をしていることで、あいさつが少しできるようになったことと、道具を大事にするということができるようになりつつある。

【清水和夫委員 徳島市城東中学校校長】

生徒会や行事、体験活動をすることは本当に大きな意味がある。本校ではステージがある800人ほど収容できるホールを半日借り切って、表現の部を行っている。いろいろな出し物を各学年出してみんなが楽しむ。最後に生徒会長が、「みんなのおかげで達成できました」というその時の表情が本当にイキイキしている。みんなにとって大きな自信になっている。そういう場を設定してあげるということは本当に大事だと思う。

3年生になると学級担任が学級通信を出している。その最後にありがとうのコーナーというものを毎回書いている。生徒1人1人に対して、これをしてくれてありがとうというメッセージを載せて、みんなに配っている。

特別支援の先生が通常学級で授業をしている時に、子どもたちへの行動支援、自信を持たせるという意味で、机の上に付箋を貼っている。その子がよく注意されることを、本人に了解を得た上で、付箋に書いて机に貼る。机の上に貼っているの本人はそれが視界に入る。見たら、あっと気づき、パッと直す。自分から直すため、他の人から注意されずに快適に過ごすことができる。そこから、自信・自立につなげていく。視覚に訴えることで、その子の行動を支援する。ひと手間かけてあげることが大事。

【小川善弘委員 徳島市城西中学校校長】

本校では各クラスが歌を歌う、合唱コンクールを開いている。それを通じて、人との関りや最後までやりきるということを育てている。またそれをオープンスクールで保護者に公開し、成長の姿を見ていただいている。しかし人の中に入っていくのが苦手、自分をなかなか表現できない子どももいる。そんな時は保護者へのアプローチ、保護者への支援がとても大事。保護者の困り感、つらい思いを学校がしっかりと受け止める。そのために本校では、徳島市教育委員会の支援を受けて、スクールソーシャルワーカーの方に来ていただいて、保護者や子供への支援をすることによって、自己肯定感を育てたり、困り感をフォローしたりしている。

【杉本恭介委員 徳島市徳島中学校校長】

本校の特徴として、転出入の非常に多い学校である。家庭が厳しい、前の学校でつらい状況だった、不登校ということもある。最終、藁にもすがる思いで本校を選んで来てくれている。担任を中心に考えていくが、いろいろな人の力を借りる。関係者機関含めて。例えばスクールカウンセラーにつなぐ必要があるならつなぐ。すだち学級とつなぐこともある。時には児童相談所に相談することもある。プロの人たちの力を借りて、対応して、どこかでうまくいけば、1歩前に踏み出すことができる。1例を申し上げる。他校で不登校だった子が、昨年度末に本校に入学してきた。最初は大丈夫かなという感じだったが、今はほぼ毎日登校できている。何がきっかけだったかと言うと部活動。当初は部活しか登校していない時期もあった。その間に力を蓄えていって、今は毎日頑張っている。部活の顧問が実は外部の指導者。途中入部で初心者だったその生徒をみんなに追いつくことができるように丁寧に厳しく指導した。それが丁度良かった。そこで自信を得ることができた。教員も同じように、たまたま担任になった人と合う合わないがあるが、学年を越えていろいろな人が関わることで、どこかでフィットすると前に進むことができるということで取り組んでいる。その子それぞれの役割とか居場所をいかに見出していかかが重要なのかなと思う。とはいえ、不登校の生徒もいる。何も問題なく入学してきても、中学という微

妙な時期の中で、不登校になっていく子ども現在いる。担任を中心に、常に連絡をとりながら何かのきっかけ・チャンスを生み出すように取り組んでいる。

それと日々、先生方、生徒たちに伝えているのは、自分の学校を愛しましょうということ。いろいろなところにルーツを持つ人たちがいるので、郷土愛、母校愛というしっかりしたものを持たせないと、根っこがないような状況。本校にいる間に根っこの部分を持ってほしいと思っている。それが自己肯定感につながると思う。

日常のことで言うと、分かる授業をすることが一番大事なのかなと思う。子どもたちが安心して自己表現できるような分かりやすい授業。それをどう作っていくか。今後の課題かなと考えている。

【湊貴司委員 徳島市加茂名中学校校長】

本校の現状からお話する。支援学級に21名の生徒が在籍している。全校生徒が439名。よって5%程度の割合。ただ通常学級の中に支援が必要な生徒がどれだけいるかということを考えて時に、以前は国の方で6.5%という話が合った時があったが、本校の状況を見ていけば1クラス10%~20%はいるだろうと感じている。

肝心なところ、通常学級で例えば授業中、学習障害LDなのか、ADHDなのか、高機能自閉症なのか、支援が必要な子なのか、単に授業規律が身についていないだけなのかというあたりを見てあげないといけない。間違えた指導をしても子どもに対する効果は出ないのではないかという話をしながら今学級の方で特別支援のコーディネーターさんにも加わってもらって相談をしながら今1つ1つ進めているところ。結果としてはまだまだ。

取り組みでは、認めてもらえる場面をいかに増やしていくかを考えている。一つは部活動。しかし目立つことができない子たちもいる。控え選手だったり、試合中は雑用をしていたり。そこで今年から、部活の主将だけを集めた組織、キャプテン会議を立ち上げた。各部で何かできることはないかなと、それぞれが自主的にスポーツ・芸術以外で、例えば学校の掃除をしたりあいさつ運動に出てきたりということ話し合う場。すると、ある部活は朝正門にならんで、大きな声でおはようございますと声を出す活動をした。これについてはみんなの先生で見つけては認めてあげて褒めてあげる。そういう場面を設定した。

あと文化祭の中で何か一つ、いろいろな希望をする子どもたちが出てくる場面を作ってあげてねと生徒会に声をかけていたら、今年は未成年の主張というものをすることになった。何か感謝の言葉を述べたい人という募集をして、その中で支援学級の子が1人出てきて、先生方への感謝の言葉を、マイクを持って一人でステージの上で述べた。本当にたいしたものだったし、自分の思いを表現できる場が設定できてよかったなと思った。

そういうことを進める中で、ひとりの常々組織だとかチームだとか言いながら、その目的というのは、子どもたちの頑張りの場面を情報共有してしっかり声掛けしていくつながりが大事なんだと、先生方にもお願いをして、教員のつながりというところでも自己肯定感につなげていけたらと思っている。

我々が専門性のことを知らなければ、行動支援もできない。特別支援のコーディネーターの先生から研修用の資料を出してもらったりして、具体的に短い言葉で、どのタイミングで、というような専門性を教員側も知っていないと行動支援も難しい。

## 7) 企業での従業員のための取り組み

【西池幸夫委員 東邦セールス株式会社管理部長】

社員の定着を図るために福利厚生として、2年に1回1泊の慰安旅行、年1回日帰り旅行、年1回ボーリング大会、月1全体朝礼の時に誕生祝としてクオカードをプレゼントしている。顔を覚えてもらうとか、いろいろな意味がある。ずっとやってきているのだが、この取り組みが今の若い人のニーズにマッチしているかというところ。参加率は、ボーリング大会はそこそこ、1泊の旅行となるとなかなか参

加しない状況になっている。その他野球部やボーリング部があり、リーグ戦・大会に出場している。ただやはり若い人が入っていただけなのというのが実情。興味がある人がいれば勧誘して、先輩とのコミュニケーションを図る場として大事にしていきたいと考えている。

【山尾新次委員 四国福山通運株式会社徳島支店支店長】

取り組みというのではないが、実際あった話をする。今年は新入社員が5名入った。高卒採用者に対しては新人教育係をつくっているのだが、自分の仕事もしながらということもあり、教育がなかなか難しいところ。新人みんなそれぞれ個性がある。その中で、どちらかということ静かでおとなしい子が2名いる。2人は仲がいい。そこに別の支店で人手不足が起こったので、2人に応援に行ってもらった。仕事が落ち着いたので1人はこちらに帰ってきたが、もう1人は応援先で自分の居場所を見つけたということで、そちらの支店で続けて勤務をしている。人手不足ということもあり、ちょっと仕事ができなくても「ありがとう」と受け入れてくれたというのがあるのかもしれない。何かはできるはず。自信がつけば。

## 8) その他(久次米健一)

山尾委員から前回最後にお話しいただいた、自身のお子様が不登校を経験したことを、差し障りがなければもう少し詳しく聞かせていただきたいという意見があった。もしよろしければ今後の教育現場のためにお話しいただければありがたい。

【山尾新次委員 四国福山通運株式会社徳島支店支店長】

娘が3人、今はみんな成人している。うち2人が学校に行けなくなった。

1人は小学校の途中で友人関係がうまくいなくなり、休みがちになり、保健室登校みたいなものになった。なんとかしてほしいから妻と学校に話をしに行ったが、対策は特になかった。中学校でも同じ状況が続いたが、担任の先生が姉妹の部活の顧問だったということもあり、すごく力をいれて説得して引っ張って行ってくれたおかげで修学旅行は行くことができた。

もう1人は友人とのめめ事がきっかけ。先生も介入してきたが、自分のことを信用してくれなかった。そこから保健室すら行けなくなった。ずっと閉じこもり、定時制も行くことができなかった。自分でふと思ったんでしょけど、17歳からコンビニでバイトをはじめて今は社会に出ている。

この時は、協力者の人たちが集まって考えてくれるということではなかったのか。今の子どもたちは幸せだなあと思っている。その時にそういう場があれば、うちの子ども学生生活を楽しめたのではないかと思う。

【久次米健一】

ありがとうございます。今お話しいただいたことを私たちへの提言として勉強してまいります。

## 9) 総括(石井博委員 徳島市教育委員会教育長)

やはり1人の人間の持っている力はすばらしいものがあると思う。それをどういう風にして引き出していくのか、伸ばしていくのか、そういう環境を整えることが我々の仕事の1つではないかと感じている。

本日聞かせていただいた貴重な意見を教育委員会にも持ち帰り、しっかり参考にさせていただけたらと思う。本当にありがとうございます。

## 3-8 山口県【担当校：立修館高等専修学校】

《第1回地域振興分科会》

○実施日時：令和元年9月25日(水) 15:00~16:30

○実施場所：立修館高等専修学校(山口県下関市小月茶屋3-4-26)

○構成委員：山本 毅 (山口県総務部学事文書課長) →代理:中崎由規(調整監)

田中 純 (山口県教育庁教育政策課長) →代理:三木正之(教育企画班長)



児玉 典彦（下関市教育委員会教育長）→代理:浦野健太（教育研修課主幹）  
野口 政吾（宇部市教育委員会教育長）  
長谷川 裕（山陽小野田市教育委員会教育長）→代理:下瀬昌巳（学校教育課長）  
森永 亮（下関市中学校長会会長）  
師井 浩二（宇部市中学校長会会長）  
笹村 正三（山陽小野田市中学校長会会長）  
梶谷 真未（下関公共職業安定所厚生労働事務官）  
藤井 勲（下関市連合自治会会長）  
佐藤 倫弘（下関商工会議所総務部長）  
濱本 誠治（下関市教育支援教室「かんせい」教育相談員）

担当教職員：関谷慶子（学院長） 関谷豊（理事長） 田中（教員） 山田（教員）  
奥村（教員） 福田（教員） 秋本（教員） 松本（事務職）

（計20名）

## ○議題・報告内容（抜粋）

### <会議の目的>

高等専修学校の学びのセーフティネットの現状と課題を精査し、地域差および全国共通の課題を克服することで、高等専修学校の機能高度化を目指すという、本事業の目的のための地域振興分科会を行う。

### 1) 全国の高等専修学校の状況、および立修館高等専修学校の在校生の状況説明

- ①全国の高等専修学校の実態調査に関するアンケートの状況
- ②就学支援金の状況
- ③不登校生徒、高校中退生、外国人学生生徒数
- ④発達障害又は身体障害のある生徒数（在校生と今年度の入学者）
- ⑤中学校長会や教育委員会や行政との連携状況
- ⑥地域コミュニティとの連携状況
- ⑦立修館高等専修学校の在籍生徒の状況（発達障害や身体障害を持つ生徒の数および所得状況等）

### 2) アンケート調査について

9月末から下関、山陽小野田、宇部の各中学校校長宛てに専修学校の知名度アンケートを送付する。

部数：各学校10部ずつ 対象者：なるべく若い教員 締切：10月31日

### 3) 講評および意見交換

【中崎委員】高等専修学校は通信制高校と同じようなものだと思っていた部分があった。不登校の生徒が多く在籍しているのであれば、進路の選択肢の一つとしてもっと中学校の教員に広めていけば、高等専修学校の活性化につながる。

【関谷理事長】普通高校は国語・英語などの一般教科が50%以上ある。しかし高等専修学校は一般教科の各科目が週1時間以上で良い。これが大きな特徴であり、不登校生徒が楽しく授業を受けることができる要因のひとつである。学校に通いやすいように色々工夫している。

【三木委員】ある程度は知っていたが実際まだまだ知らない部分がたくさんあった。学校に来ることの大切さを重視していることが分かった。県教委としても子どもたちのニーズに合わせた制度を考えなければならないと思った。専門教科数など双葉高校との違いをもっと推し出していく必要がある。

【関谷理事長】県が出している、中学校の進路に関する書類の中に高等専修学校が入っていなかった。このたび文科省が進路選択の冊子の中に高等専修学校を入れたので、県のほうでも是非入れていただきたい。

【浦野委員】立修館高等専修学校に入学したものの、中退してしまう生徒はどれくらいいるのか？

【関谷理事長】年間数人。実際は退学処分を言い渡して自主退学をする生徒が多い。

【浦野委員】立修館高等専修学校はあり難い存在であり、ただ資格を取るのではなく、「ありがとうカード」などを実施して社会人として自立していくための教育をしていることに志の高さを感じる。個人的な事だが、甥が昨年立修館高等専修学校を卒業し今は梅光学院大に在学している。この子は中学校時代は行く高校がないと言っているのを傍で見ていたので。無事卒業してありがたいと思っている。昨年の80周年記念講演会にも参加し、立修館高等専修学校のことを知ることができたので、こういった活動をもっとしていけば知名度を高めていけるのではないかと思う。

【野口委員】宇部市からは今年は8名の生徒がお世話になっている。一人一人の生徒の個性を見て、大切に育てていただいていることに感謝申し上げます。状況説明の中のアンケート結果について、教育機関との連携はできておらず、地域や市と連携しているのが約20%だと書かれているが、具体的にはこういった連携ができていっているのかわかるのか？

【関谷理事長】具体的にはわからない。

【野口委員】今日の趣旨がそうであるならば我々も積極的に何らかの連携をしていきたい。例えば不登校の中学生との交流はどうか？適応指導教室にきていただいてイベント行事に参加して頂ければ、中学生やその保護者は立修館高等専修学校のことをもっと知ることができると思う。教育委員会としても多面的にバックアップしていきたい。

【下瀬委員】保護者との連携について、進路相談や学校生活の相談はどうしているのか？

【関谷理事長】毎日のように保護者と連絡を取っている教員もいる。適応指導教室から入学してきた生徒は保護者との連携がうまくいくパターンが多い。しかし、引きこもっていた生徒の保護者の中にはなかなか理解を得られない保護者もいらっしゃる。なんとか居場所を作ってほしいということで、別室クラスを設け、最初はそこで過ごす、徐々に本来のクラスに入れるようにサポートしている。

【下瀬委員】企画提案書の説明の中で卒業生の再就職支援の実態調査について、現在の立修館高等専修学校の卒業生の就職状況はどうか？

【関谷理事長】昨年は就職率100%。今年は、本人と保護者の希望のずれにより就職先が決まらなかった生徒がいた。

【森永委員】下関の中学校長会としては地元こういった学校があるのは非常にありがたい。立修館高等専修学校での生活は楽しいという報告や卒業した報告を生徒がしてくる。アンケートについて、若い教員を対象とするとすると、ぴんと来ないと思うし知らない教員がほとんどなのではないか？

【関谷理事長】若い教員にありのままを記入していただきたい。10部を配布する予定だが、必要であれば増やしていただいてもいい。

【師井委員】様々な個性の生徒が通っていると思うが、困っていることを教えていただきたい。あと、アンケートに関して、標題にある「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の根本はどういうものなのかを教えていただきたい。

【関谷理事長】根本は配布資料をご覧ください。まずは高等専修学校を知っていただく活動。そのために地域連携に力を入れ、良い事例・成功例などを全国に普及させていったりする。10年以上前は高等専修学校に予算が充てられることはなかったが、インクルーシブ教育をはじめ高等専修学校の教育が注目されるようになって文科省の予算もつくようになった。困っていることは保護者の問題。例えば、兄弟が何人もいて子どもの面倒を見れず、施設に入れるといった事例がある。何とか本校に入学するが愛情表現ができない。進路のことを保護者に話しても

聞く耳を持たない、理解してくれない等。

【笹村委員】保護者とのかかわりの中で困難を抱えていると思うが、出身中学校にもご報告いただければ、連携をより取れると思う。アンケートについて、認知度を調査するだけでなく、「高等専修学校の・・・ということを知っていますか？」といった情報を投げかける設問を加えれば、知らない教員にも理解が広がるのではないかと思う。

【関谷理事長】在学生の出身中学校には、学校生活や進路活動の状況などを報告に行かせていただく。アンケートについては、ぜひ今の意見を取り入れさせていただく。

【梶谷委員】高等専修学校と高校との違いを明確に知ることができて理解が深まった。高等専修学校は山口県で1校なので、下関市だけに留まらず、県全体あるいは北九州にも広げて、生徒のニーズに合った教育をしていただきたい。ハローワークの窓口には中卒で就職希望の人が年に数人来るが、求人はほとんどない。中学校の先生方にはその事を生徒に周知していただくと高校に進路を向ける生徒が増えるのではと思う。立修館高等専修学校はコース授業を設けているので、その専門職となると県外を視野に入れて探さなければならない場合がある。質問だが、生徒の障害者手帳の有無はどういう方法で把握をしているのか？

【関谷理事長】担任との面談でわかる場合もあれば中学校からの資料で知る場合もある。職員会議などで生徒情報を内密に周知する。

【梶谷委員】ハローワークには障害者担当の職員もいて、また職業評価を行うこともできるので相談に乗ることもできる。ハローワークには、学校には申告していないけど求人を探しに来たという親子もいる。そういう時は必ず学校に連絡して、同意の上就職先を探していくので、そういう生徒がいればぜひ相談していただきたい。

【藤井委員】私が考える教育の基本理念は、のびのび教えてのびのび学ぶことだと思っている。立修館高等専修学校はその教育方針がきちんといきわたっていると思う。しかし、立修館高等専修学校は地域との連携が不足していると思う。連携とは簡単にいえば交流である。私は地元の活動で、子どもが保育園児になったら何かボランティアをさせる。幼少期よりそういう活動をしていると、大きくなったら必然的にイベント等で「何か手伝うことはないか」と言うようになる。立修館高等専修学校にはぜひそういった活動に積極的に参加してもらい、認知度を高めていってほしい。

【佐藤委員】私は、立修館高等専修学校の卒業生3名と関わりがある。うち二人は複雑な家庭の中で育ってきたが、立修館に入学して簿記という得意技を身に付けて卒業し、社会で活躍することができている。毎日ここに通うことで、コミュニケーション能力も培われていっていることだと思う。これからAIが発達すると、詰め込んだ知識や良い大学を出たとしてもコミュニケーション能力がなければ仕事の継続が難しくなる。これから10年の間に、やはりハンドメイド（手に職）を持った人間が強くなると思いながら見ている。双葉学校は県立の学校なのでそこに魅力を感じて入学する生徒が多いと推測するのだが、手に職を付けることが大きな財産になるということをもっとアピールした方が良いと思う。それと小月商工振興会は110年以上の歴史を持っており、地元出身で下関のために尽力しようとする人間が多い。地元から「あの学校が良いよ」という声が出なければいつまでたっても知名度は上がらないと思う。

【濱本委員】いつも子どもたちのために尽力して下さってありがたい。今でこそ通信制高校や適応指導教室は増えているが、立修館は昔から不登校の生徒を受け入れてくださっている。私どもの教室には50名の児童生徒がいる。25名が中学3年生。その子たちと話をする中で、なかなか進路が決まらない原因のひとつに、進路の選択肢が増えすぎているのではないかと思う。立修館高等専修学校のイラスト漫画コースはこの度初めて知った。うちの教室にも絵を描くのが好きで、

これまではそういう子の進路選択で北九州に目を向けていた。このコースをもっと宣伝して頂き、子どもの進路の選択肢の一つにさせていただきたい。市大にも8人の枠があるのは大変関心した。あと、親と子どもの中には、高校と高等専修学校との違いに違和感をどうしても持つてしまうことは否めない。我々はいくらでも説明するが、子どもがなかなか納得しないケースも多い。

【関谷理事長】今年入学した生徒の中には、イラスト漫画コースがあるから立修館高等専修学校を選んだ、という生徒もいるので、もっと知ってもらえるようにこれから活動範囲を広めていきたい。これから中学校訪問をさせていただく。また、オープンキャンパスでは在校生スピーチがあるので、中学生にとってはいい刺激になるのではと思う。

#### 《第2回地域振興分科会》

○実施日時：令和元年12月19日（木） 15:00～16:40

○実施場所：立修館高等専修学校（山口県下関市小月茶屋3-4-26）

○構成委員：山本 毅（山口県総務部学事文書課長）→代理:中崎由規（調整監）

田中 純（山口県教育庁教育政策課長）→代理:三木正之（教育企画班長）

児玉 典彦（下関市教育委員会教育長）

野口 政吾（宇部市教育委員会教育長）→代理:三原洋一（学校政策課長）

長谷川 裕（山陽小野田市教育委員会教育長）→代理:下瀬昌巳（学校教育課長）

宇野 孝一（山口県中学校長会会長）

森永 亮（下関市中学校長会会長）

師井 浩二（宇部市中学校長会会長）→代理:海頭巖（副会長）

笹村 正三（山陽小野田市中学校長会会長）

梶谷 真未（下関公共職業安定所厚生労働事務官）

藤井 勲（下関市連合自治会会長）

佐藤 倫弘（下関商工会議所総務部長）

濱本 誠治（下関市教育支援教室「かんせい」教育相談員）

担当教職員：関谷慶子（学校長） 関谷豊（理事長） 田中（教員） 山田（教員）

奥村（教員） 福田（教員） 秋本（教員） 松本（事務職）

（計21名）

○議題・報告内容（抜粋）

#### 1) 開会 理事長挨拶

今年下関市の校長会で、文科省作成の資料「未来をひらく高等専修学校」の説明をさせていただいた。来年は宇部市、山陽小野田市の校長会でも説明をさせていただきたい。

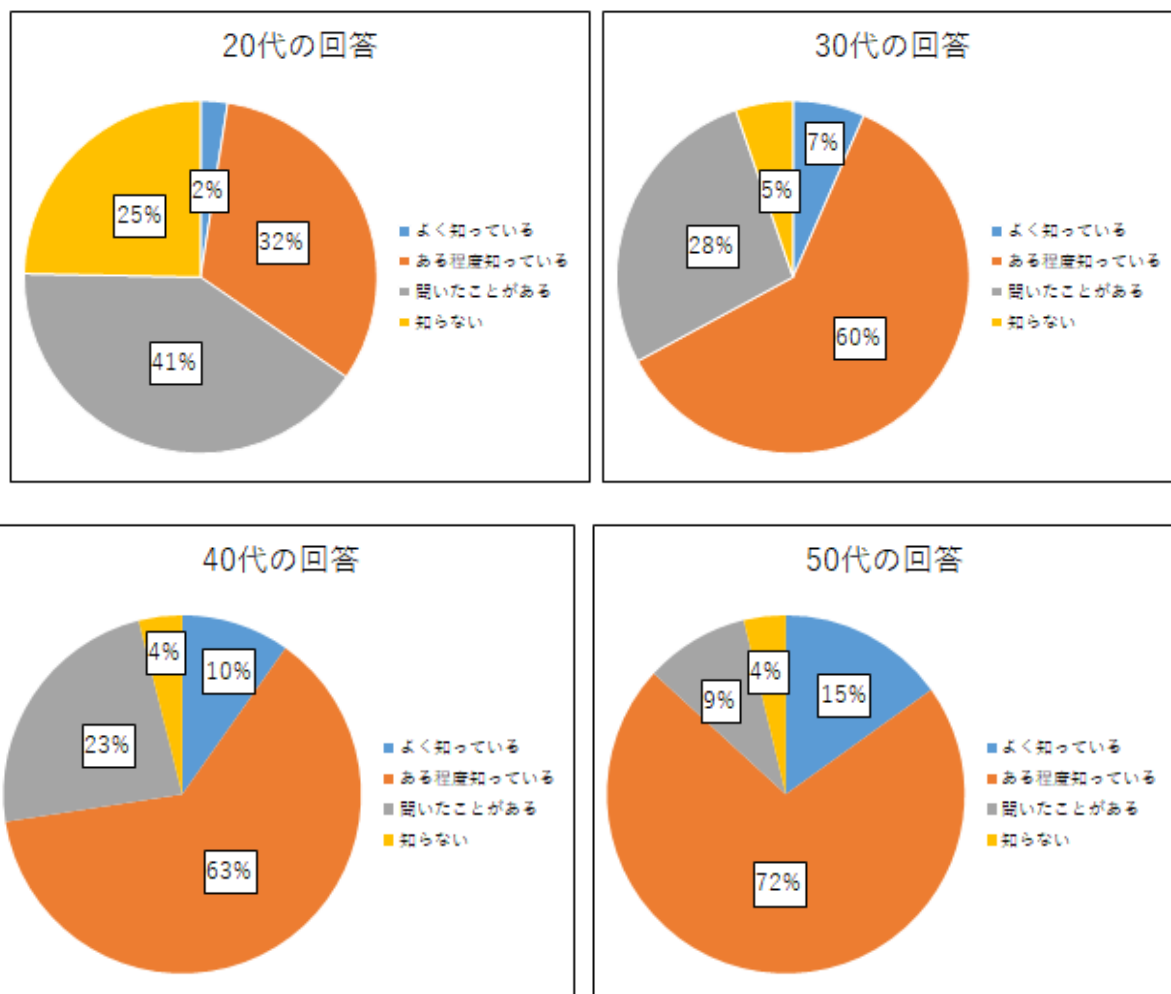
#### 2) アンケート結果報告（資料配布）

①下関市、山陽小野田市、宇部市の中学校別・年代別の回答状況（各校10人）

②アンケートQ3の年代別の回答結果

Q 3

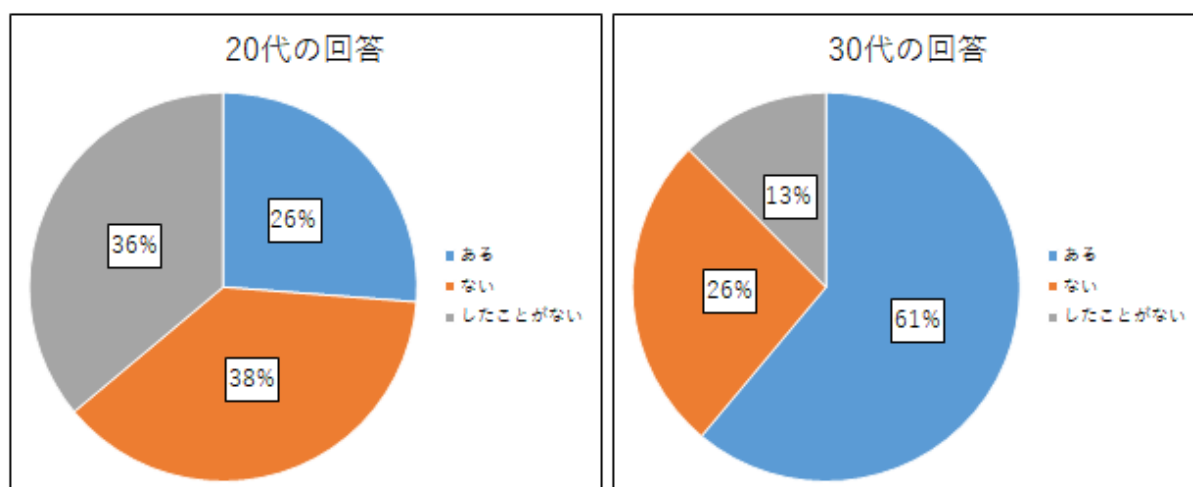
高等専修学校について、どの程度ご存知ですか。



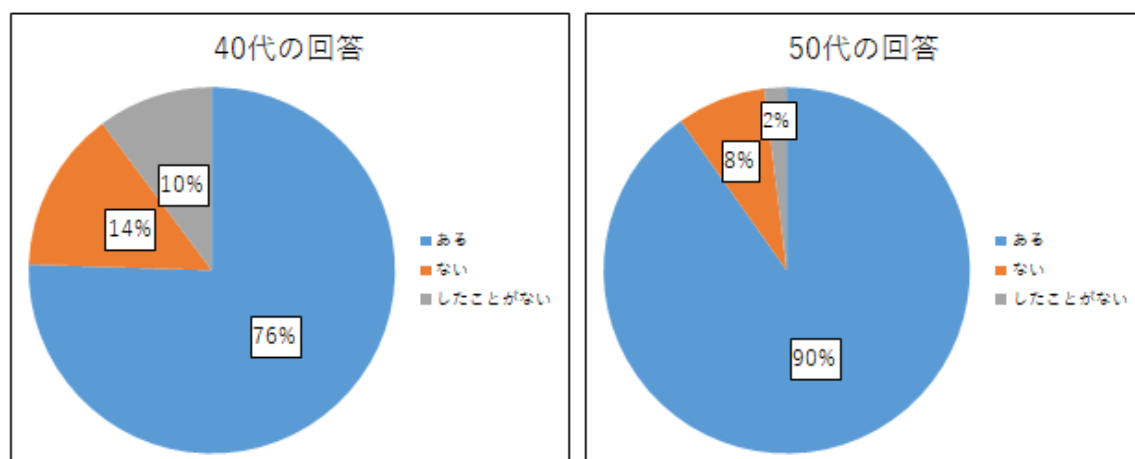
③アンケートQ6の年代別の集計結果

Q 6

進路指導や進路相談で、生徒・保護者に高等専修学校を紹介した事がありますか。

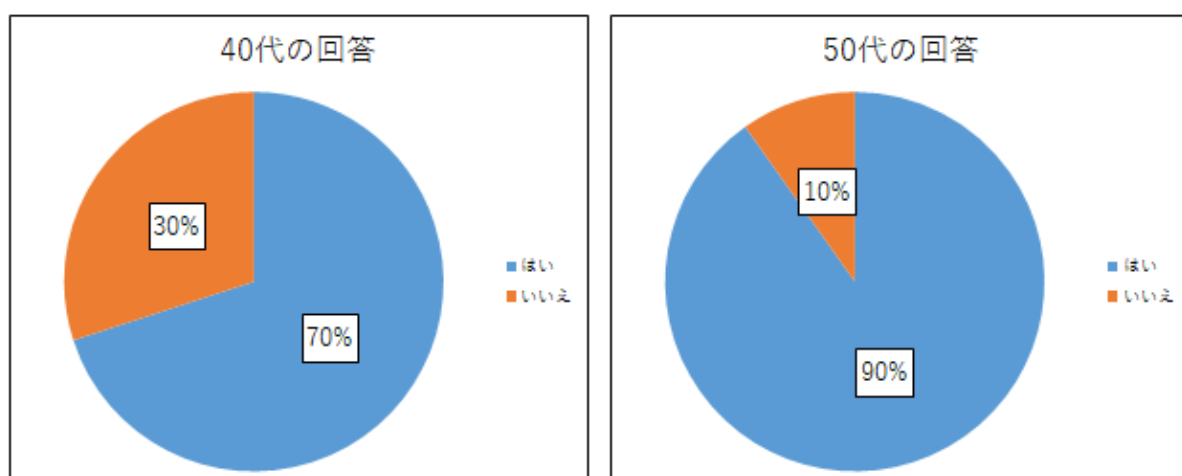
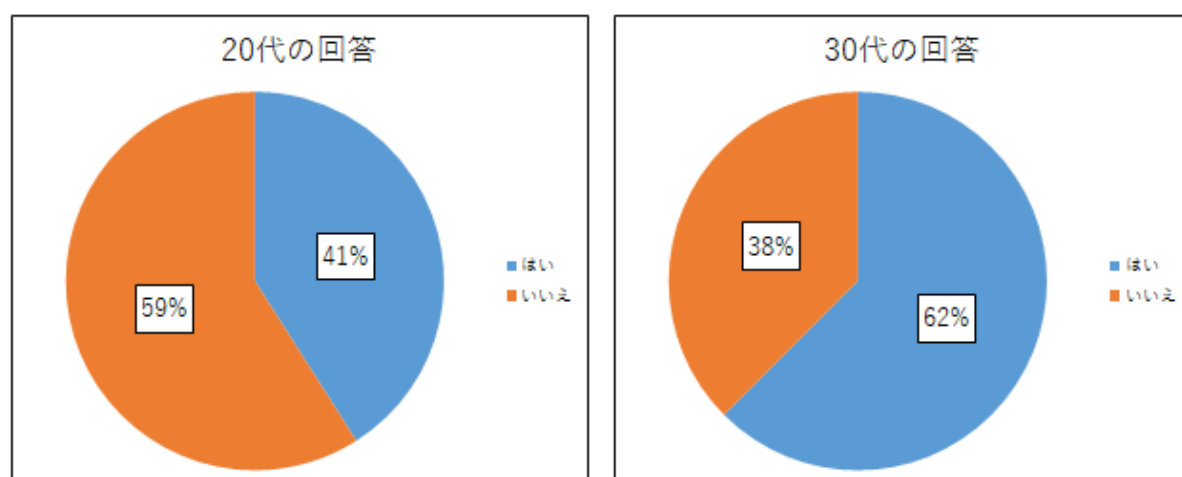


Q 6  
進路指導や進路相談で、生徒・保護者に高等専修学校を紹介した事がありますか。



④アンケートQ7の年代別の集計結果

Q 7  
高等専修学校は「大学や短大に進学でき、就職なども高校と同様の扱いであり、高等学校の就学支援金対象校である」ということを知っていますか。



## ⑤アンケートQ5の年代別の回答結果

Q5

高等専修学校についてどのようなイメージをお持ちですか。

### 【20代の回答】

- 学科やコースが複数あり、生徒のニーズに応じた指導を行う。
- 不登校生徒を受け入れてくれる。
- 自由な校風。
- 学費が高い。
- 少人数で、より専門的な授業を行う。
- 詳しくは知らない、よくわからない。
- 就職が有利、手に職が付けられる。
- 高校卒業と同等の扱い。

### 【30代の回答】

- なかなか入れない、学力が高い。
- 他の高校と変わらない。
- 様々な問題を抱える生徒を受け入れてくれる。
- 校則が緩やかで融通が利く。
- 自分の興味のある分野を中心に学べる。
- 資格を取得でき、大学にも進学できる。
- 学費が高い。
- 少人数教育。

### 【50代の回答】

- 公立高校にはない学科がある。
- 面倒見がよく、特別支援教育に慣れている。
- 興味のあることを楽しく学べる。
- 普通高校へ進学できない生徒の受け皿。
- 専門的スキルが身につく高卒の資格も取れるが、学費が高い。
- 型にはまらない自由な校風。
- 学習につまづきを持つ生徒の進路選択のひとつ。
- 普通高校と何が違うのかな程度のあいまいなイメージ。

⑥共通して多かったイメージ。誤ったイメージ（学費が高い）への補正説明。

共通して多かった意見

- 不登校生徒を受け入れてくれる
- 専門教育に強い
- 学費が高い

高等学校就学支援金・授業料減免制度の対象校。  
(他の私立高校と同じ扱い)

オープンキャンパスに参加すると特待生の対象に。

## 3) 事例紹介 (パワーポイント)

本校の生徒が、入学してからどのように変わったかを紹介 (2名)

### ① S君 (経理情報科3年)

- 家庭環境      • 中学校時代：社交不安症の診断を受けた。支援学級に在籍。
- 高1：部活入部、標語の選出。
- 高2：修学旅行で藍染の作品が好評を得た。父親との面談で息子の活躍に驚かれた。
- 高3：周囲に関わりを持つようになり、大学進学も考えるようになる。      • 自己肯定感

### ② Fさん (福祉科卒)

- 家庭環境      • 小学校時代：不登校気味になる。
- 中学校時代：特別支援教室、摂食障害、自傷行為。
- 高1：学習活動は問題なし。大正琴部に入部し、地域への関わりを持つようになる。
- 高2：福祉活動により積極的になる、自傷行為が見られなくなる。
- 高3：性格が明るくなり、福祉の専門学校への進学を決める。      • 自己有用感

#### 4) 講評および意見交換

中崎委員	義務教育修了後の進路選択のひとつとして、高等専修学校は重要な位置づけにあると思う。立修館高等専修学校は県西部の中学校にとってはとてもありがたい存在である。学校教育法 124 条の学校に区分されるので、1 条校とは違う学校ではあるが、中学校の先生方には、定時制高校を考えている生徒にぜひ立修館高等専修学校を勧めてもらいたい。アンケートに対する質問だが、Q7の質問は、Q3で「高等専修学校を知っている」と回答した人だけが回答する項目なのか？それによって数字が違ってくるので、そのことも報告内容に入れてもらいたかった。
三木委員	前回の分科会で専修学校の存在は知っていたが、この度さらに詳しく知ることができた。生徒の将来を考える上で若い教員が高等専修を理解することはとても大切。このような会を繰り返してやっていくべき。この事業が今後の学校現場にどう生かされていくのか注視していきたい。アンケートについて、せっかく市別に集計したのであれば、年代別だけでなく市ごとの周知度合いも報告いただければより分かりやすかったと思う。県庁に帰ったらうちの課の職員にも伝えようと思う。
関谷 理事長	特別なことはしていない。現在の入学生のほとんどは不登校の生徒だが、20年～30年前までは、どの高校にも行けないような問題のある生徒を大量に採っていた。そして大量に辞めていく。ところが20年前からそういう生徒は入学できません、という方針に変えた。他人に迷惑をかけない生徒だけを採るようになると、その生徒同士で馬が合って仲良くなる。だから学校が楽しくなって卒業に行きつく。もう一つは、やりたい事がある・得意なことがあるから生き生きしてくる。簿記やPCができるから企業も欲しがると、だから本人も自信が持てる。さきほどもあったが、自己肯定感・自己有用感が芽生えるから、自信につながって卒業していく。
三原委員	私は専修学校のことがわからなかったので、ここへ来る前に、課の職員に専修学校のことを訊いたら、正確に教えてくれた人は誰もいなかった。やはり周知が必要であると感じた。今日の話を知っていると、生きる力を育てていただいているなと思った。ネットも拝見するとしっかりICTも使われていて、こういう活動も今後の学院の発展につながると思う。
下瀬委員	保護者とのかかわりについて教えていただきたい。
関谷 理事長	年2回、保護者会総会と授業参観を行い、保護者と定期的にコンタクトを取っている。このほかにも問題がある生徒の保護者とは日常的に連絡をとり、場合によっては来校してもらうなど、関係が希薄にならないようにしている。また、生徒よりも保護者のほうに問題があるのも事実。ある保護者を呼ぶと「このくらいのことで呼ぶな」と怒鳴られるケースがあった。
宇野委員	中学校で支えきれない生徒を受け入れてくれ、大切な学びのセーフティネットになっていることを感じた。中学校は、小中連携があり中高連携もある。立修館は中高連携の中に入っているのか？
関谷 理事長	入っていない。なのでこのたび下関の校長会にお願いして、専修学校が進路の一つであることを言わせていただいた。今後もこの活動を続けていく。昔は県内に高等専修学校協会があり、高等専修は4校あったが、3校がなくなってしまい、なかなか中学校との連携がとれない時期があった。
宇野委員	生徒指導部長に質問だが、いろいろな生徒を見られて大変だろうと思うが、どういったことに留意して指導を行っているのか？
山田委員	本校は生徒の半数以上が不登校経験者であるので、生徒指導として注意する事はあまりない。むしろする必要のあるのは生活指導。身なりや姿勢、習慣性などが身につけていないので、担任をはじめ教員全員で細かい注意をしている。生徒指導に関しては、本校は4つの校則があり、これを破ると処分の対象になる。しかし、数字や生徒名だけでなく処分ということはず、



	まずは話を聞くことから始まる。それに対して教員の意見を述べたり保護者を呼んだりする。しかし一番大事なのは、やって良いことと悪いことの区別をはっきりさせる事。
森永委員	中学校の段階で手のかかる子どもや保護者に対して、出口を作っていて非常に感謝している。事例を見て、「あの子に似ているな」と頭の中に別の似た生徒が浮かんできた。校長会でも立修館高等専修学校を理解していない人もいるので、校長会にお越しいただいて、先ほどの事例のプレゼンを観させると立修館のイメージが湧きやすく、理解が深まると思う。
海頭委員	立修館の生徒がうちの中学校に来て立修館の話をしてくれる。この前来た生徒は小学校の校長をしていたころの教え子だった。そういう生徒を見ると立修館はありがたい学校だなと感じる。立修館は学費が高いイメージを持っていた。しかし今日話を聞いて、無償化の対象にもなるしオープンキャンパスに参加すると特待生の対象になる事も分かったので、学費がネックで進学をあきらめようと考えている保護者には、その誤解を解いていきたいと思う。子どもたちのニーズに合わせたカリキュラムを組み、それにより声優コースやeスポーツ部ができていくということだが、今後の見通しとして、予想され得る新しい学科や授業なんかがあれば教えていただきたい。
関谷 理事長	来年度からできる声優コースを、将来的には声優演劇コースにしようと考えている。講師の先生は基本的に演劇もやっている。本校の演劇部の生徒はみな不登校だったが、その生徒達が人前で堂々と役になりきり演劇をしている。あんなにしゃべらない生徒が役になりきるとしゃべるようになる。
海頭委員	年明けに本校の生徒が入試を受けに来ますのでまた宜しく申し上げます。
関谷 理事長	(海頭先生の) 藤山中学校は説明会に呼んでくれるので、学生の前で立修館の説明をさせていただくことができる。宇部と小野田の中学校は呼んでくれるが、下関はなかなか呼んでくれないので、生徒に直接話ができる機会を設けていただきたいと思う。
笹村委員	アンケート未提出の中学校がある事は大変申し訳ない。アンケート集計を見てみると、年齢が上がるにつれて理解度も上がる。それでもやはり固定概念があり、立修館の現状とは違うイメージを持っている教員もいる。やはり周知が大事だなと感じたので、校長会にも参加して頂けたらと思う。中学校で進路指導をする時に、生徒にとって第一志望ではないが、いざ受験しようと思う時にはもう定員がいっぱいで入るのが難しいというイメージを持っていた。しかし先ほどの無償化のことも含めると、これから第一志望の学校になりうると思う。あれだけ個々の対応に追われていて、経営が成り立つのかという疑問を持った。
関谷 理事長	経営は厳しい。県の私立高校は30数万円の補助金が出るが高等専修は数万円の補助金。2年後に新山口駅に新しい3部制の定時制の県立高校を何十億円もかけて造るなら、なぜもっと高等専修に補助金をくれないのか、と県に申し立てている。なので本校の教員の給料は安い。先生方が苦勞しながらでも長く勤務してくれるのは、この仕事が楽しいから。特に卒業式はとても感動する。あとは姉妹校の専門学校収入でなんとか経営が成り立っている。
梶谷委員	授業料の無償化など知らないことを知ることができた。下関市内の学生求人の話をさせていただくと、今年は求人が増え、例年より早く内定が決まる傾向がある。大学生は例年並み。中学生は昨日の時点で先生から3件の相談があった。1人は中卒の求人で東京の企業に応募して受けに行く。1人は明日保護者と先生と来られて話をする予定。1人は保護者の意向で進学になり保留状態。市内の求人数は現在0。中学生が在学中に内定をもらうのはほぼ不可能。なのでそういう学生は立修館高等専修学校を選択肢として勧めたいと思う。中学生も高校生も保護者の意向がかなり強い。私は本人の意向を聞きたいのだが保護者が前に出てくる。私どもの窓口では生徒さんの意向をしっかりと聞いて、必要であれば立修館高等専修学校を勧めたい。山

	田先生から先ほど、内定がなかなか決まらなかった生徒の内定がやっと決まった、という話を聞いてうれしくなった。
藤井委員	立修館高等専修学校は学校の理想像である。他の学校ではできないことをこの学校では堂々としてできる。生徒の再生させられることに頭が下がる。子どもにとって大事なものは、自分が求められていると感じる事。そういう教育を公立高校は何故しないのかと思っているが立修館はしっかりとしている。そういう意味で学校の理想像である。先ほどロコミの話が出たが、PRの方法としてロコミはとても効果的。ロコミを活かしてどんどん売り込んでほしい。そのためには、OBや在校生が、立修館は良いよと言えることが大切。先日ある企業の人事担当者と話をする機会があり、今どんな生徒を採るのかと訊いたら、昔は成績重視だったが今はそうじゃない。個性や面白いアイデアを持っていること。例えば小論文は昔と全く違う内容を出題する。「あなたが市長になったらどういった街づくりをしますか?」「あなたが社長になったらまずどんなことをしますか?」など。成績が一番じゃない時代だからこそ立修館の出番じゃないかと思う。
佐藤委員	いい授業というのは人を育てている、その共通点は声掛けをしている。例えば点数が60点から63点になったら声掛けをして褒める。不登校生徒は中学校の時から声掛けをしてもらっていない。そういう生徒にこそ声掛けをしていけば自己肯定感を育むことができる。立修館は特別なことはしていないとおっしゃったが、一日の中で生徒と向き合う時間を多くとり、その成果がこの学校の良さとして自然に表れていると思う。
濱本委員	下関市の中学校は説明会に呼んでくれないという話があったが、来年は是非とも私どもの「かんせい」で説明会をしていただきたい。他にも、進路指導部会に来ていただくとか、なんらかの形で中学校と接する機会ができればと思う。双葉高校ができたため、そちらに目を向ける生徒や、北九州、博多へ足をのばす生徒もいる。選択肢が増えるのもいいが、昔からあるこの学校の良さを私は分かっているので、この学校に目を向ける呼びかけをしていこうと思う。
関谷 理事長	来年はこの事業の最終年で、一度会議を開く予定でいる。ぜひ各校長会でこういった機会を設けていただけたらと思う。また来年は「かんせい」でも説明会をさせていただきたい。宇部・小野田みたいに中学校の訪問をし、生徒に理解してもらおうのが一番ではないかと思う。

### 3-9 佐賀県【担当校：佐賀星生学園】

○実施日時：令和2年1月31日（金）15：00～17：00

○実施場所：学校法人佐賀星生学園 佐賀星生学園202教室

○構成委員：内田 祐美（佐賀県総務部法務私学課私立中高・専修学校支援室 室長）

鳥井 真由美（佐賀県教育庁学校教育課 参事/課長 野田 亮 代理）

江口 英樹（佐賀県政策部企画課 副課長）

中島 裕二（佐賀市立成章中学校 校長）

丹野 到（唐津市立馬渡中学校 校長）

堤 葉月（佐賀県教育センター研究課生徒指導担当 係長）

香月 務（株式会社北島 取締役マネージメントサービス部長）

前嶋 登頼（社会福祉法人西九福社会 事務長）

田崎 裕子（佐賀公共職業安定所 学卒ジョブサポーター）

塩崎 瞳（佐賀公共職業安定所 就職支援ナビゲーター）

峰松 藤一郎（学校法人永原学園 西九大学佐賀調理製菓専門学校 校長）

加藤 雅世子（学校法人星生学園 佐賀星生学園校長）・・・・・議長  
安部 和也（学校法人星生学園 佐賀星生学園教務部長）・・・・・司会  
竹下 善史（学校法人星生学園 佐賀星生学園教務部）・・・・・記録員  
中谷 桃華（学校法人星生学園 佐賀星生学園教務部）・・・・・記録員

（計14名）

## ○議題報告内容（抜粋）

### 1) 佐賀星生学園校長挨拶

本日は、文部科学省の委託事業である「学びのセーフティーネット機能の充実化」というテーマで集まっていた。

本来高等専修学校というのは高等学校の枠に収まらない多様な教育を行う学校として昭和51年に新しい学校制度としてつくられた学校。看護・商業・理美容・調理・自動車など専門的な学校もたくさんある。20年程度前から不登校や発達障害者が増えてきて義務教育等の受け皿になったというのが今高等専修学校の役割の一つとなっている。その役割の充実強化として、このような調査研究がなされている。本校もその中の受け皿の一つとして教育支援を行っている。不登校や発達障害の問題に適切な教育がなされないとそのままひきこもりになり社会に適應できないことが予想される。今や全国のひきこもりが100万を越えている。そういった社会的な問題に対して私たちが子どもたちにできること、本来持っている能力を引き出して社会に戻るエネルギーを取り戻す。そして自立して生きていけるようになることを目指して教育支援を行っている。さまざまな教育活動に取り組んでおり、今では生徒達が主体的に動ける学校として成長してきた。その成果をいろいろな所で紹介させていただいているが、その一つとして「SDGsアクションブック佐賀」というのがNPOから2月に発行される。佐賀県で実施されている活動をSDGsの15個の活動にひもづけて記載されている。その目標4の「質の高い教育をみんなに」のモデル校として本校の取り組みが紹介されている。本校の生徒達の様子を見ていただくと「普通ですね」とよく言われる。しかし、入学前の彼らは、外にも出ない、人と話せない、情緒が不安定で不適應行動を起こす等、中学校では大変な苦勞だったと思う。そういった子どもたちに関わることはとてもエネルギーが必要。厳しい経営環境の中でかぎられた人材でかかわっていかねばいけない。これは全国的に高等専修学校が抱える問題。お金が無い中、質の高い教育をとという矛盾に長年苦しんできた。幸い昨年法務私学課私立中高・専修学校支援室ができて高等専修学校への運営費補助金が見直された。そのことが私たちの教育活動に活力を与えてくれた。

そしてその期待に応え、効果を証明しなければいけないという責任をも同時に感じた。子どもたちのためにもっとできることがあるはず。高等専修学校の認知の問題、教育環境や生徒の出口といった問題がある。本日はそれぞれの立場での気持ちや思い、アイデアをいただいて子どもたちにとってよりよい環境を作り、顔の見えるつながりをしていきたい。

### 2) 出席者自己紹介

【内田委員】法務私学課のなかに私立中高・専修学校支援室という組織が設置されて2年が経過しようとしている。右も左もわからないなか、先生方に現状を伺いながら県政としてどうあるべきかということすすめている。

【鳥井委員】代理出席。県立学校の教科指導・進路指導・生徒指導などを担当している。

【江口委員】よく分からない仕事をする部署。非常に多くの方が不登校で悩まれている。学びの多様化という点で、学校以外の学びとして役所として取り組めることが無いのかということに取り組み始めている所。

【中島委員】佐賀市立成章中学校はクレーム0件。本校のミッションは学力向上と不登校対策。国の学力調査が始まって今年が一番良かった。全国の平均に比べて国語は6ポイント、数学は4ポイント

上。県内5番目。来年度から女子で選択制の制服を導入する。課題は多様な子どもたちの中でどのような教育活動を行っていくか。まだ意識がついていない段階。

【丹野委員】行政畑が長く、教育情報課で学習パソコンの担当をしていた。馬渡島の小・中学校では、児童養護施設から8名登校しているが、補助金が打ち切れ運営ができないため来年度で閉鎖される。現在小中合わせて34名。本校は純粋な島民15名、他は児童養護施設、教員と駐在所の子ども、そして離島留学の児童生徒7名。学校の魅力化として島の方と交流している。

【堤委員】保護者・生徒が来所して相談を受ける部署。佐賀県適応指導教室「しいの木」に携わっている。数か月かけて「しいの木」に通級している子どももいる。今年も中学3年生が5名通級している。来年度も4名星生に入学予定。子どもたちの出口に関しては課題としている。

【香月委員】星生学園とは、障害者雇用枠による採用というところから3年前からの御縁。星生の卒業生を雇用している。今は職場に慣れ一生懸命頑張っている。

【前嶋委員】生活支援員の指導をしており大和町にA・B型事業所の施設をもっている。現在60名が在所。知的障害9割で1割は引きこもりや精神の障害を抱えている。平成12年に開所。裏に大和特別支援学校がありサポーター企業登録をして実習などを受け入れている。

【田崎委員】若者支援7年目。リーマンショックから立ち直り景気も良くなり求人も増え就職が簡単に見えるが、若者を見ると引きこもりや発達障害などの人が増え、就職活動への支援が以前より大変になっている。星生からも生徒が来たことがある。普通の方で就職もできた。

【塩崎委員】精神保健福祉士。発達障害の診断を受けた方、その可能性がある方の就労支援をしている。引きこもりだったり、初めて就職される方だったり、就職したけれどもなじめず退職した方など支援の方法も多様化している。

【峰松委員】専門学校の広報部会により佐賀県の専門学校もまとまりをもてるようになった。専門学校としてどのような手伝いができるか。本人の特性など知っていれば調理が好きという気持ちだけで就職まで頑張れる。

【安部】2011年に開校したがその構想はさらに5年前にあった。校長の解決へ向かう意思に惹かれ職員間の連携など運営に携わっている。

### 3) 高等専修学校とは【安部から説明】

#### ①高等専修学校の現状と役割

高等専修学校の法的な位置づけと付加機能（技能連携制度、大学入学資格付与指定等）の説明。

- ・全国の高等専修学校数及び、在籍者数の全国データを紹介。
- ・「文部科学省学校基本調査2017」では、『目的意識の強い子や不登校などの問題を抱える生徒、あるいは高校中退者や再就職を望む者の成長の場として、高等専修学校は不可欠の、そして独自の役割を担っている』ということを書いており、国が教育の多様化の解決に高等専修学校の重要性にも注目している。
- ・高等専修学校の生徒の約2割が不登校経験者であるという文科省の分析に異議を唱えたい。

佐賀星生学園の場合、平成30年度の実態報告において中退経験者まで含めた在籍者の約88%が不登校経験者であり、高等専修学校の地域差や運営方針の差によりまちまちであること、国のデータの中に始めから入学目的が明確である看護などが含まれていることが乖離している理由の一つではないかと推測している。また、佐賀星生学園に在籍する生徒の約63%が発達障害・身体障害をもっており、不登校要因にも関連していることを現場指導者として感じている。

#### ②佐賀星生学園の取組み

- ・生徒の未来構築を目指す教育現場としての取組みを紹介する。

本校の教育支援の中心軸である「解決志向アプローチ」を導入したカリキュラムによる生徒たちが大きな

変化をしている。学校適応感アンケートを毎年2回実施しているが、4つの因子に分けた適応感では平均値の12を全ての因子で上回っている。教師との信頼関係因子は特に高い。

また、毎年4月に行っている知能検査の結果では、生徒の知能が、学年が上がるごとに向上している。解決志向アプローチによる数々の心理変化、行動変化が多くの子供に有益に働いていることがわかってきた。しかしながら、3年後には次のステップである就職・進学にはまだまだ多くの課題があることも事実である。平成30年度の本校の実態報告書の内、卒業者状況のデータから約20%の生徒が卒業時までに進路未決定である。さらに、進学や就職した生徒が年度途中で挫折するケースもある。学校から社会へ出たときの『ヒートショック』という比喩表現を使うと、学びの回復だけでは不十分で、今後の課題でもあると思っている。

#### 4) 学びのセーフティネット機能の充実に向けた各分野の現状と役割

【加藤】高等専修学校に求められることとして各分野からご意見をいただきたい。まずは中学校の大変さから生徒を引き継ぐときの要望についてお伺いしたい。また、出口の問題について自由にご意見をいただきたい。さらに行政から見た思いなど自由にご発言いただきたい。

【丹野委員】昨年講師として加藤先生に来ていただいて研修会を開いたが、教職員や保護者が星生学園のことをほとんど知らないということが課題。昨年の卒業生で不登校のため島へ来て登校もできるようになったが普通高校に進学しても続かないだろうと思い星生を紹介したが、地理的に難しい、また高等専修学校という概念が知られていないため断念し現在もそれが続いているので星生のことを周知させたい。唐津にもモードリゲルさんがあるが認知が低かったり昔のイメージがあったりしてイメージの刷新が高等専修学校には唐津地区においては必要だと考える。

【中島委員】認知能力と非認知能力があり、非認知能力は伸ばすことができないと言われているが、星生では非認知がのびているので適応ができています。非認知能力の成長が今後の学校の課題となっている。学校では対人恐怖症、統合失調症、起立性調節障害、ゲーム依存症の生徒がいる。特にゲーム依存は昼夜逆転などを併発し今後非常に大変になる。また、ゲーム依存に他の症状も合わさり不登校につながることも考えられる。

発達障害については認知が進んできて学校職員も対応ができるようになりつつある。愛着障害、子供の軽度うつもある。保護者が鬱である場合に子どもが軽度の鬱になることもある。10年前からある不登校の問題も未だ存在している。教員が専門性が低いと対応できない症状が増えてきている。不登校の要因そのものが10年前と比べるとだいぶ変わっていることを理解いただきたい

【加藤】そういった要因の変化があるが、出口の方ではどのように感じられているか。

【前嶋委員】保護者と本人の意見が違う。保護者は障害を隠したがる。理由は障害認知・手帳取得をしたら就職ができなくなる、結婚に不利になるのではないかと考えているが本人は認知をすることで楽になる。障害福祉サービスを受けられる支援があることを言いたいが、まだ保護者の考えの方が強い。そういった場合苦労する。入社してから障害を持っていることを知ることもあった。以前、星生より受け入れたときは入社後も（星生学園の）先生が何度も訪ねてくれたり、さらに本人の心のよりどころとして星生学園があった。そのことは、ヒートショックの解決、対人関係の解決につながった。

【香月委員】保護者は毎日長い時間一緒に過ごしていると変化に気づきにくい。保護者は気づきたくても気づけないことを悩んでいる。A型・B型ではない企業としては生産性をあげないといけない。その人のためだけの仕事は無い。仕事をマスターしてもらわないといけない。企業が持っている可能性としては居場所づくりが必要だと感じる。新しい環境ということだけでも高いハードルだが、一人でも多くの人にあいさつをすることから安心できる場所、空間、人間関係をつくることができる。星生学園側の支援もあったので定着ができた。

- 【中島委員】通常は障害を隠される。保護者の中で勉強をされた方もいらっしゃるがその場合は支援の内容などの話をして理解をしていただくことができる。保護者の障害に対する認知や知識にもよる。
- 【安部】ハローワークではどうか？認知の部分での質問等はあるか？
- 【安部】ハローワークでは、子どものことを心配して保護者が来所されたりすると思うのですが、認知の部分をどのように聞かれるのでしょうか？
- 【田崎委員】障害に関して認知をした上で来られる場合もあるが、場合によっては「親御さんの考えすぎなのでは？」と思えるような家庭もある。こちらとしては、思い切って勇気を出して来ていただいた方を逃がさないように、また次回も来てもらえるようにと失敗しないようなやり方を模索しながら対応をしている。
- 【安部】すごい、次も来てもらえるようにという言葉に感動した。ハローワークの従来のイメージは、「自らが動かないとうまくいかないもの」だと思っていたので。生徒たちにも卒業後はそういう場所にも自分の足で行かないといけないと教えていたが、田崎さんの言葉のように「また次も来てもらえるように」というような想いで取り組んでいると聞いて嬉しい気持ちになっている。
- 【峰松委員】うちは専門学校なので、教育に関することが基本ベースになる。11か月で専門分野を身に付けていく。また、それ以外のところで、例えば「朝が起きられない」ということに関しても、そこを意識して訓練をさせる。これは就職をするために必要な社会性だということを理解してもらえない。もうひとつは、興味を持っていることや好きなことに向かうことで変わる子もいる。逆に変わらない子もいる。そういう場合に星生学園でなされているような取り組みは良いと思うし、さらにそういう子に関してはこうですよ、という引き継ぎができれば上手くいくのでは、と思う。その子と色々な関わり合いをしていって自信をつけさせる。佐賀県の専門学校は小さいが、小さいからこそ関わりあいができて上手くいくこともある。
- 【香月委員】今規模の話が出たが、ある一定の規模を超えると、「普通」という言葉がでてくるんですね。私は「普通」という言葉が教育を妨げていると思う。「普通学級」ってなんなのだろうか。特徴がない？標準的？私は佐賀県から「普通学級」「普通教育」という言葉を失くすべきだと考えている。個人の趣味・思考がある中で「自分は普通じゃない」と思うタイミングをたくさん作ってしまう。それが学校に行きたくないということに繋がるのでは。特別支援、特進、それらを剥いでいった残りが普通になってしまっている。「普通学級」という言葉をなにかいい言葉に変えたらそれだけで不登校が減るのではと真剣に思っている。
- 【中島委員】近年は「普通学級」とは言わず「通常学級」という言葉のほうが一般的にはなってきた。しかし、そうやって昔からある言葉に疑問を持つという感覚は大事にしていかないといけない。特別支援という言い方も他にふさわしい言い方があるのではと思う。
- 【香月委員】どうしても行政は、言葉である程度ひとくくりにしないといけない。一口に知的障害といっても、種類によってはアプローチが違う。でも一括りに知的障害とされてしまう。そこをいかに一人一人の特徴を明らかにしていくかが大事だと思うが、今の話を聞くと親御さんのほうから言ってもらえないと厳しいかなと思う。
- 【前嶋委員】入口のほうでは、最初は保護者が勧められてなのか、それとも本人の意思なのか？
- 【中島委員】紹介する場合もある。体験をさせて進路決定をする。昔と違って今は家庭での判断が最終決定となる。情報の提供をしっかりとっていくことが大事になってくる。
- 子どもたちがこういうふうになっていくんだと思うと勧めたくなりますね。今日案内をしてくれた子たちを見ていても生き生きしているなと思った。
- 【堤委員】質問も兼ねてですが、子どもと親御さんの認識のズレというものに関して、です。
- 星生学園で過ごし、子どもたちの心が育って自信もついて3年間でものすごく成長しているなと

思う。その裏で保護者が子どもの成長に追いついていないのかなとも思う。星生学園ではキャリア教育とか、保護者も含めて一緒に考えていこう、みたいな取組はなにかされているのか？

【加藤】保護者にも、保護者勉強会や保護者交流会を行っている。保護者にも、うちで実践している「解決志向アプローチの学校づくり」というのはこういうものなのですよっていうことを伝える機会を作っている。

【安部】保護者はどうしても思考が固まっている。子供が生まれてから愛情もって一緒に育ててきているので、自分の育て方が間違っていると言われるのに一番苦しむ。なので、そこを間違っているかいないかという目線で我々が会話をすると追いつめてしまう。そうすると子どもの成長がどれだけ伸びたとしても保護者は伸びにくくなってしまう。最初のうちは我々も気付かなかった。なので、保護者の育て方を一切否定せず、その保護者が持っているリソースを使おうと思った。保護者のやり方の良い部分、そこを「なんでできたのですか？どこでその言葉を見つけてきたのですか？」という言葉で肯定していくと、それをまた子供に与えようとする。そうすると子どもも悪い気はしない。やはり、大事なのは言葉だと思う。私達も保護者とはよく話をする。

【堤委員】適応指導教室「しいの木」で保護者と面談をすると「普通の高校に行ってほしい」と言われる。しかし、以前、安部先生と加藤校長先生が「しいの木」にいらして保護者と子供の前で説明をして頂いたときに、子どもが自分からいろいろ質問をしていたと思う。その姿を保護者が見て考えを変えられたというのが、自分の中でもすごく印象に残っている。やはり、言葉を拾っていくというのも私たちの役目だなあと感じた。

【中島委員】保護者が子供を育ててこられて一番いろんな情報を持っている。その保護者から情報を得るといのが一番大事だと思っている。しかし、なかなか時間を取れない。それが学校としても心苦しいなと感じている。対話の場というのももっと大事にしていけないなと思う。

【安部】私も先ほどよく話しますとお伝えしたが、毎日毎日1学級分の保護者とタイムテーブルを作って話しているかということそんなことはとてもできていない。ただ、保護者がなにか話を聞いてほしいなということを感じさせるようにアンテナだけは張っておき、ピンポイントを逃がさないというぐらいしかできないところではありますね。また、保護者が話したいと思うように仕向けるには、子どもに学校のことを話したくなるように仕向けないといけないなと思っている。子供が学校のことを保護者に話すようになるっていうのは、保護者にとってはなによりの安心感をもたれるようだ。

【中島委員】それと、チャンスっていうのはたくさんある。来られたときには部屋に通して、用件が済んだあとに、話を聞く。そういう丁寧さが大事かと思う。しかし我々も、まだ十分でないところがあるのでそういったところを変えていけないといけないかなと考えている。そうすると良い話を聞いたりすることができるのではと思う。

【丹野委員】やはり私も、保護者への啓発というのは大事だと思う。自分の子供に限界を引いている保護者は伸びが低いなと感じる。今うちの学校に、佐賀市内から離島留学をしている子供がいるが、その子は登校できるのが週3日、あとの2日はICTを使って対応をしておりそれを出席扱いにしている。しかし唐津市はまだその認可が遅く、今私のほうで規約を作って対応をしている。うちに関しては、なかなか保護者が学校に来づらいというのもある。しかし勉強熱心な保護者もいて、来校されたときにはお茶をするような感覚で話しをしている。特に島の方は資格を取るのが難しいので、通信教育の勉強を図書館でしませんか、という呼びかけで集まり、学校の魅力化で「ワールドカフェ」のように、お茶を飲みながらディスカッションをする。保護者の勉強したいという気持ちやいろんな情報を見つけるのはできたかなと思う。

【塩崎委員】資格を取るためにという話が出たのですが、ハローワークでもお仕事の相談に来る方の中には、資格を取りたいという明確な目的を持って来る方もいれば、働かないといけが、自分が何

に興味があるか、何をしたいのかわからないという若者も来ている。その前段階として、在学中に資格取得や卒業後の進路実現のための進路教育はどのようにされているのか？来所者と話をしている中で、「自分の長所がわからない」「どうアピールしたらいいのかわからない」というようなことを言われるので、「いろんなことをできるようにしていきましょうね」というアドバイスはしているが…

【加藤】若者というと何歳くらいの方が来られるのか？

【塩崎委員】20代の方も、1度就職して離職した後何をしたいかわからないという方がいる。

【中島委員】キャリア教育として進路に関わる授業は学年で10時間程度。職場体験も長時間企業に受け入れていただいている。進路に関わる学習は10年前と比べるとかなりよくなっている。今の問題の根底にあるのは体験の不足が考えられる。考える力の大きなものになるのは体験によるものである。体験によっていろんなことを感じ取ることができているから状況の判断もできる。体験が不足していると判断できない。中学校はキャリア教育が大事ということで国も力を入れてキャリアパスポートというものをもっている。小学生1年生からずっと記入したものをもっている。昔に比べるとキャリア教育は充実している。

【香月委員】就職に対してどうしていいかわからないということは学力が低い学校であれ、進学校であれ一定数いる。それは自分に適度な自信がない生徒がそうなると考えられる。どの学校にも一定数いる。適度な自信は社会では必要。高等専修学校は適度な自信を身に付けるために最適な場所だと考える。人間というのは、7割は経験から学ぶと言われている。達成感＝エンジョイ（喜び）の部分は次の目標につながりさらに達成感を感じられる。そのような好循環が考えられる。また、適度な距離感も大切。高等専修学校は適度な距離感をもって、つかず離れずという環境にある。大学は放任主義の大学もあり、高等専修学校ならではのつかず離れずの関係は適度な自信をつけるためには良い環境であると思う。

【中島委員】キャリア発達段階として小学1年生のキャリアはこういうことができるという指標があるが、キャリア発達が十分でないという側面もある。

【内田委員】佐賀県行政としては、高等専修学校は位置づけに非常に迷う存在。高等専修学校の生徒は700人、高校生世代を扱っている学校の生徒は180人程度。高等課程の星生学園が期待されている役割があると思うが、行政としてはどのような位置づけをすべきか非常に難しい。文科省も実態はわかっているが研究結果などが出ていない。学びのセーフティネットという言葉は国も県も使用している。学びのセーフティネットが機能している学校を支援しますというスタンス。ただ学びのセーフティネットにはドロップアウト感や特別感がまだある。こぼれ落ちた人の最後の進学先ではなくその人の特性にあった進学先であってほしい。学校ではできるようになっても外でうまくつながらないケースもある。認知度であったり高等専修学校生の多様性であったり高めることが必要。社会で活躍する子がこんなにいるということを発信することが必要。

【鳥井委員】今日駐車場から星生に歩いてきているとき非常にこやかに帰っている生徒達の姿があった。玄関で元気に案内をしてくれる姿も微笑ましかった。行政としては原因追及をして考えることがあるが、星生では原因ではなく解決に目を向けてされていることがうまくいっている要因ではないか。県立学校で言うと通信制とか定時制とかがあって学力が高い子もいる。こうでなければならないということがなくなって選択肢ができればいいなど考える。

【竹下】3年生が自分から「お手伝いしないですか？」ということで自主的にしてくれた。

【中島委員】役に立ちたいという気持ちがあるから。そもそもこの学校でもそういう子を目指して教育をしている。



【香月委員】引け目という言葉がでたが、どこでも聞かれる言葉。学校や地域でそのような言葉を聞くことがある。違いがあれば引け目と考えられる。逆に言うと、そこ以外のところで頑張ればいい。引け目を感じるということは、同じレベルに到達していると考えているから引け目とを感じる。昔は総合職を目指す世の中だったが、スペシャリストになることがカッコいい世の中。一つのことを突き詰めていくこと昔でいう寡黙な職人。コミュニケーションが重要視されているから寡黙な職人がいなくなっている。寡黙でもいい。今はルールに則らせてしまっている。

【香月委員】普通という言葉。あまり使わないということだが普通高校という言い方はある。色んなものを外したものを普通という。普通以外の言葉で表現できればいいのでは。

【内田委員】以前は普通高校に進学できなければ偏差値的に工業や商業など実業高校にという考え方だったが、最近はそのようになってきている。早くから資格や目標に向けて実業高校を選択している生徒が増えていてそれが認められるような世の中。適性を伸ばすための選択肢でもある。

【香月委員】高校で講話をすることがあるが、その時によくツナマヨのおにぎりの話をする。ツナマヨのおにぎりに携わっている人に今日会ったかと聞いたら誰も手を挙げない。フィルムをつくる人、店に並べる人、燃料を運ぶ人、機械の部品を作る人などたくさんの人が携わっているのに。そこは想像力の欠如である。仕事の内容は非常に多くの可能性を秘めているが、想像力が無いので仕事内容が分からない。仕事を細かく見ていくと自分の可能性に気づくこともできる。作ることはできないけど並べることはできる。接客はできないけど検品はできる。

【丹野委員】子どもたちには成功体験をさせたい。解決志向を取り入れられているので成功体験を味わいやすい。

#### 5) 高等専修学校のさらなる充実に向けた各分野からのアイデアと検討

【加藤】中学校から預かっている生徒に関しては責任を持って教育支援をしている。卒業するときにはきちんと卒業させたい。受け取る側にもその気持ちを汲み取って受け入れていただくと良い連携になる。そのためにはどのような取り組みが考えられるか。

【中島委員】出口に責任を持つことはしっかりとしてほしい。高校の先生と話をするときには出口のことを聞く。

【中島委員】星生学園を訪問して子どもたちの様子を見て驚いている。それらを知ってもらうために動画を各学校に配布して見てもらうことが必要。動画が効果的で言葉より伝わる。

【丹野委員】星生学園は次の進路への橋渡し役を担っているにもかかわらず、中学校への学校説明会への参加がされていない。高等専修学校とはどのような学校なのか高等専修学校がどのようなことをしているのかを教職員・保護者に伝えることが大事。

【安部】各学校からの依頼があれば3年担当の先生に話をさせていただいている。

【中島委員】高等専修学校の存在価値はさらに高まってくると思う。

【堤 委員】送り出す側として3年間でここまで変わるということを目の当たりにして、学びは人間の欲求の最上位にあると感じる。その前段階を星生学園ではなされている。やりたいことを見つける、仕事をしなければいけないからではなく、自分の可能性に挑戦する気持ちを大切にしている部分を感じた。星生学園の広報をすることが魅力を伝えることにつながる。規模的にさらに需要に応えられるようにサテライト校などで対応いただけたら助かる。

【香月委員】星生学園では非常に苦しい体験をした生徒が、達成した経験・喜びをもてたことで生き生きとした表情をしているのではないかと考える。達成感というのは教職員のやりがいの一つでもあるのではないかと。職場で達成感を提供し続けるための課題をもらえた。

【前嶋委員】できるところを伸ばしてあげることが一番。星生学園は到達点ではなく通過点にして社会に出て行けるような場所だと思う。ここにしか行けないという学校ではなく同じ境遇の人がいるか



**【参考資料】東京都 高等専修学校認知度アンケート集計結果報告**

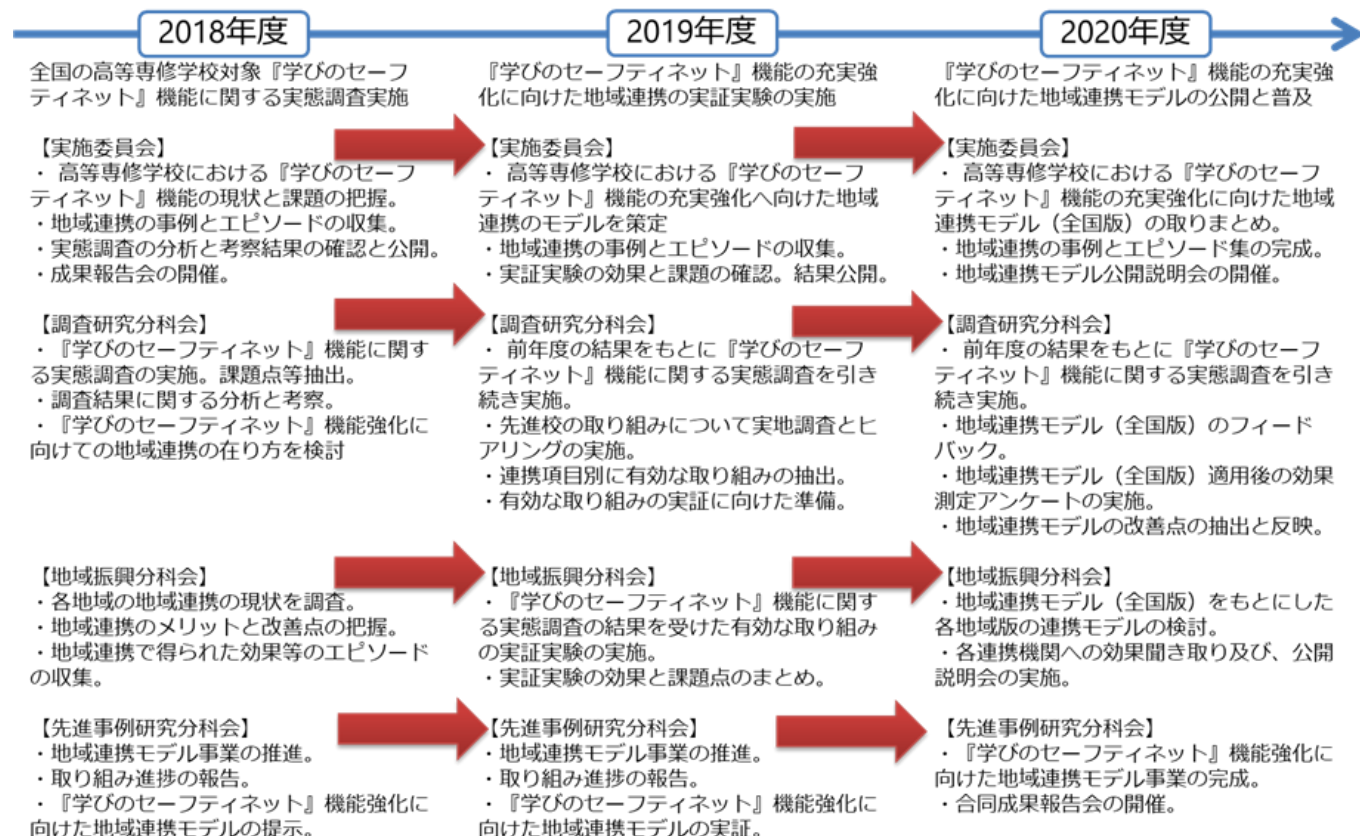
## 第4章 まとめと最終年度へ向けて

昨年度より3か年の期間で実施されている本事業は、高等専修学校を取り巻く環境、教育内容、卒業後の進路、各地域での活動実態などを網羅的に把握する初めての試みである。事業を通じて、それぞれの地域でのさまざまな連携を深める一方で、「チーム高等専修学校」として、各地・各校での活動を情報開示し、共有し、課題抽出を的確に行うことにより、具体的な改善諸施策を検討することを目標の一つとしている。

昨年度よりの継続調査として実施した今年度の『高等専修学校の実態に関するアンケート調査』では、『不登校を経験した生徒』の改善傾向や『インクルーシブ教育』への取り組み、『カウンセラー』の配置や連携状況など、高等専修学校での取り組みが注目されているキーワードについて実態調査を行った。その結果からインクルーシブ教育の取り組み数が多いほど、不登校改善率が高い傾向にあることが分かり、中でも個別指導の充実がより効果的であるという傾向も見られた。しかし、個別指導を行う教職員にカウンセリングに関する研修を受けさせる、或いは外部カウンセラーを配置するための支援や補助制度などは、都道府県によって認識や対応が異なるため、思うように進んでない現状も明らかである。本報告を高等専修学校の特色のひとつとして提示し、支援や補助の充実を今後訴えていくことも必要となってくる。

地域振興分科会による『地域連携委員会』は、昨年度実施の7地域から8地域に増え、回数も2回実施が5地域もあった。実施報告からは、より具体的な事例や、これまで把握していなかった高等専修学校における『学びのセーフティネット』機能に関する実態や、高等専修学校と地域との連携の形が見えてきた。一方で、地域内の高等専修学校の認知度、地域によっては特に中学校の若い先生方の認知度が低いというアンケート結果も出ており、今まで明らかではなかった課題の抽出とその対策を考えるきっかけともなった。

引き続き具体的な実態を把握する中で、より効果的な取り組みや共通した課題等を共有し、高等専修学校全体の共通認識として捉えながら、共通した課題には最終年度にどう取り組み改善していくか、地域連携による課題解決のモデルを提示し、高等専修学校らしい地域連携の形を打ち出す方針についての検討を加えていくこととしたい。



文部科学省委託事業  
2019年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」  
学びのセーフティネット機能の充実強化  
高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

### 事業実績報告書

学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校  
令和2年2月

連絡先：〒668-0065 兵庫県豊岡市戸牧 500  
学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校  
TEL：0796-22-3786 FAX：0796-24-2282

●本書の内容を無断で転記、記載することは禁じます

本報告書は、文部科学省の生涯学習振興事業委託費による委託事業として、学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校が実施した2019年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。